

おとこの秘図

上

池波正太郎

新潮文庫

池波正太郎
Ikenami Shôtarô
(1923―1990)



東京・浅草生れ。下谷・西町小学校を卒業後、茅場町の株式仲買店に勤める。戦後、東京都の職員となり、下谷区役所等に勤務。長谷川伸の門下に入り、新国劇の脚本・演出を担当。1960(昭和35)年、「錯乱」で直木賞受賞。「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人・藤枝梅安」の3大シリーズをはじめとする膨大な作品群が絶大な人気を博しているなか、急性白血病で永眠。

カバー　池波正太郎



おとこの秘図(上)
池波正太郎
い
16
16
新潮文庫
¥743

9784101156163
1920193007435
定価：本体743円(税別)

時は元禄――旗本の息・徳山五兵衛(幼名・権十郎)は、妾腹の子ゆえに父から疎まれていた。剣の修行に明け暮れる十四歳の初夏、侍女への無謀な振舞いがもとで、父子の不和は決定的となった。四年後、道場主の他界を機に、一介の剣士として生きようと同門の浪人剣客・佐和口忠蔵を慕って江戸を出た。父はこの出奔を利用して、執拗なまでにわが子廃嫡の策謀をつづけていた。

ISBN4-10-115616-6
C0193 ¥743E

新潮文庫

池波正太郎の本

カバー印刷　錦明印刷　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

おとこの秘図

上巻

池波正太郎著

新潮社

おとこの秘図(上)

池波正太郎著

新潮文庫

新潮文庫

おとこの秘図

上巻

池波正太郎著

新潮社版

3061

おとこの秘図

上巻

追想

筆者が数え年五歳の夏。亡父・富治郎と共に撮った一枚の写真が、いまも残っている。

そのころの父は、日本橋小網町の綿糸問屋・小出商店の通い番頭で、白い麻の背広に白靴。ストロー・ハットという姿で、私は子供服に白い帽子だ。

このときの情景を、いまも私は、微かにおもい起すことができる。

日本橋の高島屋に近い写真屋の中で、凝としていない私を、父があやなしてくれながら、写真機の前にすわらせた。

撮影が終り、外へ出て、電車に乗った。

大きな駅（上野駅）に着き、父が売店で、キャラメルを買ってくれた。

それから汽車に乗り、田舎の家へ帰った。

関東大震災で、浅草の家を焼かれた父母は、一時、埼玉県・浦和へ移り住み、父は汽車で東京の店へ通っていたのである。

私の、もっとも古い記憶は、およそ、このころからはじまっているようだ。

現代の浦和市からは、まるで想像もつかぬ田園風景の中で生まれた年から六年間をすごした、その生活は五十をこえた現在の私へ微妙に作用していることを、何かにつけて感じることができる。

人間の記憶が、およそ四、五歳のころからはじまるように、この年齢における生活は、その人の一生にぬきさしならぬ影響をおよぼすということだ。

そういえば……。

これから私が語りついで行く、この小説の主人公徳山五兵衛秀栄（とくのやまごへえひでいえ）の生涯にも、同じことがいえるような気がしてならぬ。

徳山五兵衛の若いころの名は、権十郎（ごんじゅうろう）である。

しばらくは、この名をもって、彼をよぶことにしたい。

一

徳山権十郎の記憶は、先（ま）ず、あたたかい女の躰（からだ）からはじまる。

それは、母の躰ではない。

母は、権十郎を生むや、たちまちに亡くなってしまったのだ。

このため、権十郎は、乳母の千（せん）によって育てられた。

権十郎が成長してのち、幼時の追憶として、先ず脳裡（のうり）に浮かんでくるのは、幼なかった自分の顔や唇（くち）や、鼻や、裸の躰の其処此処（そこここ）を這（は）いまわる千のくちびるや舌の感触なのであった。

五、六歳になっても、千は権十郎の添い寝をやめなかった。

じっとりと汗ばんだ、そのぬめやかな肌の感触のこころよさと、なまあたたかくて甘酸っぱい千の体臭も忘れきれるものではない。

それは、後年の千とは、まったく別の女体だとしかおもわれぬ。

「若さま……ああ、可愛ゆい、可愛ゆい」

昂（たか）ぶったささやきを権十郎の耳へふきこみ、自分の熱くて肥えた太股（ふともも）の中へ、細くて小さな権十郎の脚をはさみこみ、身をふるわせつつ、

「ああ、可愛ゆいこと。千は一生、若さまのおそばから、はなれませぬぞえ」

毎夜のごとく手指と口唇（こうしん）による執拗（しつよう）な愛撫（あいぶ）をつづけ、それが終ってのち、ようやく、子守唄で権十郎をねむらせてくれたものだ。

後年になって、権十郎がおもうに、そのころの千は、女として、男そのものへの飢渇と、失ったわが子への愛のすべてを若さまの自分へ投げこんだとしか考えられぬ。

いずれにせよ、徳山権十郎の肉体は、女の生身（なまみ）というものを……女体の肌の感触や匂いや、口唇の味わいなどを赤児のときから六年もの間、絶えず吸収しつづけてきたことになる。

このため、彼の女体への官能は常人の二倍も三倍も早く、

「熟してしまった……」

のではあるまいか。

乳母といっても、権十郎が生まれたときの千は、二十歳の若さであった。
もっとも、昭和五十年のいまからさかのぼって二百八十余年も前の時代の女としては、二人三人の子を生んでいてもふしぎはなかった。
千は、二千二百四十石の大身旗本・徳山重俊の用人をつとめる柴田宗兵衛のむすめであった。
十八歳の春に、千は、旗本・梶川兵庫の家来で、江原平三郎という者に嫁いだ。
ところが、夫の平三郎が病死した後に生まれた子を、さらにつづいて疫病で死なせてしまった。
まことに、不幸な女ではある。
その悲歎を背負って、千は、徳山屋敷内の長屋に住む父のもとへ帰って来た。
折しも……。
柴田父娘の主家である徳山家にも、大事が起った。
徳山重俊の側妾・お静が権十郎を生み落すや、激しい産褥熱で亡くなった。
千は、このとき、
「若さまは、わたくしが、お育ていたします」
いい出て、そのはち切れんばかりの乳房を権十郎にふくませたのであった。
千の乳房からは、あふれるように母乳が出た。
生まれ落ちたときは、見るからに、

「ひ弱そうな……」
権十郎だったが、それがのちに、外神田で心貫流の剣術道場を構えていた窪田甚五郎安照の門へ入り、その四天王なぞとよばれるほどの腕前になれたのも、千の母乳と、ひたむきな育みによるものといってよい。
ところで……。
徳山権十郎の幼時の記憶の中で、千と同様に……というよりも、もっと別の強烈さで脳裡にやきついている〔一日〕がある。
まさに、その〔一日〕であった。
その一日の、その男の記憶である。
その男とは、その後も何度か会ってもい、言葉をかわしたこともあるが、何といっても、権十郎が五歳の早春の、あの一日のその男は、
「生涯忘れ得ぬ……」
ほどの印象をもって、権十郎の胸底へ、深くきざみこまれた。
ときに、元禄七年（一六九四年）二月十一日であった。
そして、その男の最後の顔を見たのは、八年後の元禄十五年の早春の或日である。
以前は、中山安兵衛武庸と名乗っていたその男は、
「堀部安兵衛武庸」
となっていた。

二

元禄七年二月十日のことを、権十郎も、はっきりとおぼえてはいない。

千の父で、徳山家の用人をつとめている柴田宗兵衛が、

「明日は、よいところへ御供をいたし、よいものをごらんにいれますゆえ、たのしみにしておいでなされますよう」

と、いい、うれしがる五歳の権十郎へ、

「なれど若様。このことは、私めが、そっとお連れいたすのでござります。なれば、かまえて口外なされてはなりませぬぞ」

念を入れたというのだが、それは、のちになって柴田用人から聞いたことだ。

おそらく権十郎は、無条件でうなずいたのであろう。

だれにもいわずに、

（爺と、よいところへ、何か見物に行く……）

というのだから、幼い権十郎にとって、たのしくないはずがない。

しかも、乳母が、

「千も、いっしょでござりますよ」

というではないか。

柴田宗兵衛は、出もどりのむすめが夢中になって育てている若様を、

「もったいないことだが、まるで、わが孫のように可愛ゆくてならぬ」

むすめの千に、洩らしたそうな。

柴田父娘が権十郎へかける愛情には、生母を失った妾腹の幼児への憐憫（れんびん）が、ないまざっている。

権十郎は、妾腹の子である。

父の徳山重俊は、正妻との間に一男二女をもうけていた。

そのうちの一女は早世したが、徳山家の跡つぎは、正妻が生んだ長男の右近（うこん）と決まっている。

右近は、権十郎より十九の年長だし、二千二百四十石の跡をつぐべき身だという自負が、その言動にいちじるしい。

のちに、権十郎がこういっている。

「……あのころの義兄上（あにうえ）が、おれを見る目つきは、まるで、捨猫でも見るようであった」

旗本の家に、側妾の一人や二人いることは、すこしもめずらしくない。

けれども、正妻が生んだ男子と、妾腹の男子とでは、おのずから差別がある。

まして、父の徳山重俊は、権十郎の母に子を生ませたことを、悔いていたふしがあった。

権十郎の生母・お静は、日本橋本石町（ほんごくちょう）の扇問屋・駿河屋（するがや）又兵衛（またべえ）の次女に生まれ、徳山家へ侍女奉公に来ていた。

当時、商家のむすめが、しかるべき武家の屋敷へ、いわゆる行儀見習のため奉公に出るということは、のちのちの嫁入りのためにも、

「箔がつく……」
ことにもなるのだ。

さ、そこで、徳山重俊が侍女・お静へ手をつけたについては、

「もののはずみで……」
と、重俊自身が洩らしたそうな。

なるほど、男と女が情をかわすことが、もののはずみでないことはない。

それにしても重俊の、この言葉には、唾を吐いて捨てるような忌いましさがふくまれていた。

徳山重俊は、それこそ、

「謹厳剛正を絵に描いたような……」
人物だったというが、そのくせ保身の術には長じていたらしく、貞享三年（一六八六年）に家督して以来、幕府のおぼえもめでたく、御使番・御目付・盗賊改方などの諸役を歴任した。

わが屋敷にいるときは、笑顔ひとつ見せず、苦虫を嚙みつぶしたような厳めしい顔をくずさず、

（いったい、何がおもしろくて、父上は生きておられるのか……？）

権十郎は、ふしぎでならなかったものだ。

もっとも、老中・若年寄などという幕府・最高閣僚の前へ出たときの徳山重俊は、

「何事にも温厚篤実にして、しかも機敏に物事を察知し……」
と、評判が高かった。

（あの父上が……？）

権十郎は、呆気にとられた。

屋敷にいるときのような父であったなら、到底、目上の人びとの気に入られるわけはないにしても、若いころの権十郎にとっては、実に想像もつかぬことだったのである。

そうした父が、もののはずみで、母に手をつけ、母が妊娠をしたので、

「やむなく……」

これを正式の側妾として屋敷内に部屋をあたえた。

（何故、母上はこのような父上のいいなりになったのだ）

それが、たまらなく口惜しかった。

何しろ、自分が生まれるやいなやに亡くなってしまった母へ、そのことを問いただすことはできない。

おそらく父・重俊が、勝手きわまる一瞬の欲情のままに、ちからずくで、母を屈服させたにちがいない。

侍女だった母が、一躍、主の側妾となって一年そこそこの月日を、どのように送ったかは、権十郎にもおよそおもいあたる。

徳山重俊は、はじめの妻が子を生まぬままに病歿したのち、三千石の旗本・神尾守勝のむ

すめ・滝子を後妻に迎えた。

　長男の右近を生んだ正妻の滝子が、側妾・お静に対し、どのようなあつかいをしたか……。

　それは、滝子が病歿したのち、権十郎へ乳母の千が洩らした言葉によっても察しられる。

「……それはもう、泪のかわかぬ間とて、なかったそうでございますよ」

と、千はいった。

　お静については、

「……まるで、いずこかのお姫さまのように上品な、人形のように可愛ゆらしく、お美しいお方でございました」

　とても、町家のむすめとはおもわれなかったという。

　お静が亡くなったのち、徳山権十郎が、父の重俊にも、義理の兄や母にも、

「疎まれつくして……」

　育ったことは、事実である。

　主人たちが、そうした目で妾腹の子を見るからには、必然、家来たちもこれにならう。

　用人の柴田宗兵衛父娘のみが、

「若さまは、おかわいそうに……」

と、権十郎への愛情が、さらに切実なものとなったのは、そうした事情があったからだ。

　はなしをもどそう。

　柴田用人が、

「若様に、明日はよいものをごらんにいれましょう」

　といった二月十日のことだが、柴田宗兵衛は前もって徳山重俊へ、十日から十一日にかけて、

「お暇をいただきたく……」

　と、願い出た。

　早稲田馬場下町に屋敷がある高岩小左衛門の用人・井口半蔵の妻は、柴田宗兵衛の叔母にあたる。

　この叔母が、かねてから宗兵衛に会いたいといってよこしているので、

「叔母を見舞いがてら、権十郎様の御供をいたして、翌日は雑司ヶ谷の鬼子母神などを、お見せ申したいと存じまする」

　柴田用人は、このように申し出たのである。

　井口半蔵夫妻の長屋へ一泊してのことだ。

　徳山重俊は、まるで関心がないように、

「好きにいたせ」

　こういったのみだ。

　権十郎など、どこへ行こうと「知ったことではない」とでも、いいたげな口調であった。

「さ、おゆるしが出まいた。明日は、きっと、よいものをお見せいたしますぞ」

「よいものとは、なに？」

「さむらいの子なれば、ぜひとも、見ておかねばならぬものでござります。右近様には内証(ないしょう)にて、あなたさまへのみ、お見せするのでござりますぞ」

「爺。よいものは、どこにある?」

「高田(たかだ)の馬場と申すところにござります」

「そこは、どこじゃ?」

「ま、明朝をお待ちなされませ。明朝、その人(じん)のはたらきをごらんに入れたいと爺がおもいますのも、ひとえに、あなたさまが右近様に負けぬ立派な武士となられますよう、千とふたりで念願いたしおるからでござりますぞ」

三

二月十日の朝。

柴田宗兵衛と千の父娘は、権十郎をつれて本所・石原町の徳山屋敷を出た。

当時の二月十日は、現代の三月中旬にあたる。

きびしい江戸の冬の名残りが、曇り空の冷え冷えとした大気にあって、

「明朝、雨が降らねばよいのだが……」

つぶやいた宗兵衛へ、

「ほんに……」

千が、妙に緊張した顔つきでうなずいた。

もともと、千に対しては、

「ついて来るな」

といった宗兵衛であったが、

「若さまをおつれするからには、千もまいります。千は、若さまの乳母でございますよ」

達(たっ)て父のゆるしを得た千であったが、明日の朝のことを想うと、女だけに胸がとどろく。

怖かった。好んで行きたくはなかった。

(そのようなもの、見たくはない……)

千なのだ。

しかし、父・宗兵衛が、

「これは、千載一遇の機会なのだから、ぜひとも、権十郎様のお目にかけたい」

という気もちも、わからぬではない。

「なれど、若さまは、まだ五歳のお子でございますよ」

「なればこそ、お見せするのだ。お前も、いまにおもいあたることだろうが、幼い折に見聞きしたことは、終生、忘れることがない。それは、おもいもおよばぬほどに人の一生を左右すると申すぞ。なれば、いまの権十郎様に、ぜひとも見せたいのじゃ」

「ようわかりました。千も、おつれ下さいますなら……」

「仕方もない。ついてまいれ」

このとき、むすめの千は二十四歳になっていた。

宗兵衛は五年前に妻を亡くしており、わが子は千ひとりきりになってしまった。

千の弟で宗太郎という長男がいたのだが、実は、徳山権十郎が生まれた翌年に病歿している。

柴田宗兵衛は、父の代から徳山家の用人をつとめていた。

用人といえば、主家の庶務から出納のいっさいをおこなう重職である。

徳山重俊も、そこはよく考えていて、出もどりの千を再婚させ、その養子をもって、

「そちの跡をつがせたらどうか？」

と、いってくれているのだが、これは、千が承知をせぬ。

いまの千は、

（一生を、権十郎さまのおそばにいて送りたい）

おもいきわめている。それほどに権十郎への愛情が通常のものではなくなってきていたのだ。

そこで柴田宗兵衛は、今夜、その長屋で一泊する井口半蔵夫婦の次男で、今年十八歳になる勝四郎を養子にもらおうかと、考慮をしているところだ。

「さ、若様。爺の背中へお乗りなされませ」

徳山屋敷を出て、両国橋をわたるや、すぐに宗兵衛は権十郎を背負った。

たとえ妾腹にせよ、主の子にまぎれもない権十郎が外出をしようというのに、家来も侍女も、だれ一人、見送りもせぬ。

もっとも、それだけ、権十郎には、

「見はなされた自由……」

があるといってもよい。

柴田宗兵衛は、先ず、日本橋本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方へ、権十郎を連れて行った。

駿河屋又兵衛は六十七歳になるが、まだ元気で、隠居もしていない。

又兵衛にとって権十郎は、わがむすめが生んだ子であった。

可愛ゆくないはずがない。

ことに、あわれな短い生涯を終えてしまったむすめの忘れがたみなのである。

「決して、それと名乗り出るようなことはいたしませぬゆえ……なにとぞ御用人様。年に二、三度……いや、一度でもよろしゅうございます。若さまのお顔を見せて下さいませ」

と、駿河屋又兵衛に掻き口説かれて、人の善い柴田宗兵衛は、年に何度か、権十郎を駿河屋へ連れて来て、又兵衛に会わせている。

むろん、その当時の権十郎にとっては、駿河屋又兵衛と自分との関係を、まったく知らなかった。

当時をかえりみて、権十郎が、

「いや、駿河屋又兵衛が、自分の祖父だとはおもわなんだが、それにしても、妙な爺さまだとおもっていたことはたしかだ。柴田宗兵衛に連れられて駿河屋へ行くと、それはもう、石原の屋敷では到底、口にすることができぬような、うまいものを食べさせてくれるし、おれも、だから駿河屋へ行くのがたのしみになってきて、今度は、いつ行く、いつ行くのだと、

宗兵衛にせがんだものよ。

そして、おれが夢中になり、出された膳の物を食べているのを、駿河屋の祖父が凝と見つめていたが……その両眼が見る見る泪ぐんできたものだ。そこで、ふと、柴田宗兵衛を見やると、可笑(おか)しや、こやつも泣いてござる。

子供ごころにも、この二人の爺さまが、おれの顔を見ては、何で泪をこぼしているのだろうかと、ふしぎでならなかった……」

と、語っている。

で、二月十日のこの日にも、同じような場面が展開されたに相違なかった。

ただ、この日は、柴田用人がいつもより早めに、

「これにて、おいとまいたす」

と、いい出したのが、駿河屋又兵衛には不服であった。

「今日はまた、何故、このように早く……?」

「いや、ちと、他に用事もあれば……」

すると、権十郎が又兵衛に、

「明日、よいものを見に行く」

と、口出しをした。

「若様。他言御無用と申しあげたはずでござりますぞ」

「これは、聞き捨てになりませぬな、御用人様。その、よいものとやらは、いったい何でございます?」

と、駿河屋。

「いや、のちのちに、ゆるりとおはなしいたす。それよりも駿河屋殿。町駕籠(まちかご)をたのんでくれぬか」

柴田宗兵衛と千は、権十郎を急(せ)き立てるようにして、近くの駕籠屋から来た町駕籠へ権十郎を乗せてしまった。

「御用人様。今度は、いつ、お見え下さいましょうか?」

「近いうちに、近いうちに……」

「きっとでございますよ」

「心得ています」

権十郎の乗った町駕籠につきそって歩みながら、柴田宗兵衛が、

「のう、千。便利な世の中になったものだ。駕籠屋へたのむと、すぐさま、町駕籠が商家の軒先にまで来てくれるようになったのだからな」

「ほんに……」

宗兵衛が若かったころ、町人たちが人目をはばからずに駕籠へ乗って市中を行くことは、お上(かみ)から禁じられていたものだ。

駕籠屋もないわけではなかったが、ほとんど武家方へ出入りのものばかりで、これを、

「注文駕籠」

などと、よんだりした。
武家が、忍びで外出をするときに用いたのである。
「宗兵衛。宗兵衛……」
駕籠の中から、権十郎が大声によんだ。
「何でございます？」
「駿河屋へ、今度は、いつ来る？」
「若様。駿河屋へ立ち寄りまいたことを、御屋敷へもどられてから、口にお出しなされますな。よろしゅうございますか？」
「いわぬ」
「なれば、そのうちに、また、宗兵衛が御供いたしまする」
「うん」
駿河屋又兵衛には、権十郎の亡母の姉がいて、これに養子を迎えてあるので、後つぎの心配はなかった。
孫も、二人いる。
だが、その孫たちよりも権十郎のほうが、
「可愛ゆくてなりませぬ」
と、又兵衛は柴田用人に洩らしたことがあった。
三人は、日が暮れぬうちに、早稲田馬場下町の高岩小左衛門屋敷へ到着した。

四

早稲田馬場下町は、現・東京都新宿区馬場下町で、早稲田大学の南方三百メートルほどの地点だ。
そのころの早稲田といえば、江戸の郊外といってもよい。
武家屋敷や大名の下(しも)屋敷（別邸）や寺院ばかりで、その背景は、まったくの田園風景であった。
三千五百石の旗本・高岩小左衛門は、権十郎の父・徳山重俊よりも家禄が上であるし、御(ご)書院番頭(しょいんばんがしら)をつとめ、幕府での羽振りもよい。
その用人をつとめる井口半蔵は、屋敷内の四間(よま)から成る〔御用人長屋〕に住み暮していた。
柴田宗兵衛の長屋は三間である。
「おお、宗兵衛どの。よう、まいられたな」
と、井口用人の妻・梅(うめ)が、よろこんで三人を迎えてくれた。
宗兵衛の叔母にあたる梅は、五十歳になり、宗兵衛とあまり年齢がひらいていないが、病身であることはたしかだ。
だからといって、寝込んでいるわけでもない。
「この、お方は？」
と、梅が権十郎を指し、千に尋(き)いた。

「権十郎さまでございます」
「まあ……」
梅は、おどろいた。
うわさには聞いているが、徳山権十郎を見るのは、はじめての梅だったのである。
すると、このとき、権十郎が両手をつかえて、
「おせわになりまする」
と、いったではないか。
「まあ、まあ……」
おどろく梅よりも、柴田宗兵衛父娘(おやこ)のほうが瞠目(どうもく)した。
そのように、あいさつをせよと教えたおぼえはない。
権十郎は主家の若様なのだ。
「今夜は、爺の親類の家へ厄介になりまする」
とは、いっておいた。
それを聞いただけで、わずか五歳の権十郎が、このようなあいさつをしてのけるとは、おもいもよらなかった。
町家の子ではない。
二千何百石の大身(たいしん)旗本の屋敷に暮していて、たとえ、疎まれていようとも、若様は若様なのだ。

他人からあいさつを受けることはあっても、身分の下の者へ、こちらから手をつかえてあいさつをすることなど、だれも教えはせぬ。
また、おぼえるはずもない。
「いや、おれは、そのときのことを、よくおぼえていない。のちになって、宗兵衛や千から聞いたことなのだが……よく考えてみると、おもいあたらぬことでもない。もしも、五歳のおれが、そうしたあいさつをしてのけたとすれば、それはきっと、駿河屋へ遊びに行ったとき、見聞きしていて、知らず知らず、おぼえこんでしまったのではあるまいか……。おもうても見るがよい。武家の屋敷と商家とでは、人びとの生態(ありさま)も口のききようも、まったくちがう。
それがきっと、おれには、おもしろくてたまらなかったのであろうよ。おせわになります、というあいさつを、どういうときにするものか、それをおれは駿河屋で見ていて、いつか、やってみようとおもっていたのやも知れぬな。あは、はは……」
と、これも権十郎の述懐である。
日が暮れると、井口半蔵が長屋へ帰って来た。
これにも、権十郎が、
「おせわになります」
と、やった。
「う……」

声をつまらせた井口半蔵が、泪ぐんで、
「うちの若様とは大ちがいじゃ。いや、御利発、御利発」
と、いった。
うちの若様とは、主人・高岩小左衛門の子息のことであろう。
千が、声をあげて泣いた。
それから、夕餉の膳についた。
井口半蔵の次男・勝四郎も同席した。
長男の主計は、主人の御用をつとめるようになってい、折しも高岩家の領地である三河へ出張していた。
膳の上には、豆腐を焼いて、熱々の味噌をかけたものなどが出た。
権十郎は大よろこびだ。このような食物を屋敷では口にすることがない。
あとのことは、よく、おぼえていない。
食事が終って間もなく、権十郎は千につき従われ、御用人長屋の奥の間へ入り、床についた。
この夜は、さすがに千も、添い臥してはくれぬ。
「さ、しずかに、おやすみなされませ。ぐっすりと、おやすみなされませ。明日の朝は、早うございますよ」
ささやいた千が、権十郎へ頬ずりをし、熱いくちびるを権十郎の口へ押しつけるや、また、

大人たちが語り合っている場所へ去った。
それが、権十郎には物足りなかった。
(千は、どうして、いつものようにしてくれないのか……?)
であった。
けれども、たちまちのうちに、権十郎は眠りに落ちた。
本所から日本橋を経て早稲田に至る一日の道中は、電車も自動車もない当時にあって、五歳の子供には一つの旅であったといってもよい。
疲れ果てていたのであろう。
ともかくも、その前後のことは、よくおぼえていない。
はっきりとおぼえているのは、翌朝のことだ。
「若さま……もし、若さま……」
ゆり起す千の声に、権十郎は目ざめた。
部屋の中は、まだ、夜のように暗く、行燈が灯っている。
柴田宗兵衛も千も、すでに身仕度を終えていた。
権十郎は、
「ねむい。ねむい……」
起きるのを、しぶった。
「若様。いよいよ、これより、よいものを見にまいるのでござりますぞ」

「あ……よいもの……」

「さよう」

「起きる」

「おお。えらい、えらい」

身仕度をさせられ、熱い味噌粥を食べてから、井口家の人びとに見送られ、三人は、高岩屋敷の裏門から外へ出た。

まだ、暁闇が残っている。

高岩家の人びとに何といったか知らぬが、外へ出て、権十郎を背負ったとき、柴田宗兵衛が、

「これより、男の戦を見にまいります。男と男の斬り合いを、若様にお見せいたすのでござりますぞ」

と、いいはなった。

五

その朝。

高岩屋敷を出たとき、乳母の千が提灯を持っていたことを、権十郎は、はっきりとおぼえている。

いかに、早い時刻だったかが知れよう。

暁闇であるから、それは薄紙を剥ぐように明るみを増し、三人が高田の馬場へ着いたとき

に、千の手の提灯の灯りは消えていた。

いや、その前に権十郎は、どこかの神社の境内へ入り、柴田父娘と共に拝礼をしたことが記憶に残っている。

のちに、柴田宗兵衛から聞かされてわかったのだが、それは牛込の総鎮守・高田八幡で、俗に〔穴八幡〕とよばれている神社であった。

三代将軍・家光のころ、ここに的山を築き、射術練習の場としたことから、この地に弓矢の守護神を勧請し、小祠を営んだのが、その起りだそうな。

穴八幡参詣を終えてから、三人は高田の馬場へ向った。

高田の馬場は南北三十余間（約六十メートル）、東西六町（約六百メートル）という細長い馬場で、戸塚村の台地の上にあり、ここも三代将軍が、

「弓馬調練のために……」

つくらせたものである。

むかしむかし、このあたりで、源頼朝が出陣の勢揃えをしたなどといういいつたえもある。

〔追まわし〕と称して中央に堤が築かれてい、二筋にわかれた高田の馬場の北側に美しい松並木があった。

穴八幡や、雑司ヶ谷の鬼子母神の祭礼には、数かずの行事があるし、流鏑馬の式もおこなわれ、たくさんの見物があつまる。

高処(たかみ)にあるだけに見はらしもすばらしく、ひろびろとした田地の彼方(かなた)には、富士山ものぞまれた。

馬場のまわりには茶店もあり、平常でも散策におとずれる人びとが絶えぬ。

馬場には、靄(もや)がたちこめていた。

「さ、こちらへ……」

と、柴田宗兵衛は竹矢来(たけやらい)に沿って馬場の中を一町ほども行くと、そこに藁(わら)屋根の見所(けんぞ)が建てられてあるのを見て、

「先(ま)ず、あれへ……」

背中から下した権十郎と千を、みちびいた。

この見所は、馬場で馬術や弓術の試合がおこなわれるとき、参観の席となるものだ。

柴田宗兵衛は、この場所で、権十郎によいものを見せようというのである。

「さて、若様……」

と、宗兵衛が顔色(がんしょく)をあらため、

「やがて、この場において、斬り合いがはじまりまする。そのうちの一人は、中山安兵衛応庸(まさつね)と申し、以前は、御屋敷に御奉公をいたしおりました」

語りはじめた宗兵衛の言葉を、五歳だった権十郎が、どの程度まで理解したかはうたがわしい。

しかし、子供は子供なりに、わかったのであろう。

のちに権十郎は中山安兵衛と会っているし、柴田父娘から、この朝のことを何度も聞かされているので、安兵衛については、前後の印象が、一つになってしまった感じがするのだ。

中山安兵衛は、越後(えちご)・新発田(しばた)五万石、溝口信濃守(みぞぐちしなののかみ)の家来で中山弥次右衛門(やじえもん)の子に生まれた。

安兵衛十四歳のとき、父は、切腹して果てた。

御城の櫓(やぐら)で失火さわぎが起り、その責任を問われたからだという。

このため、中山家は断絶となり、安兵衛は祖父であり、新発田藩の重臣でもあった溝口四郎兵衛の手許(てもと)へ引き取られたが、二年後に新発田城下を出奔し、江戸へ出て来た。

江戸には、姉のさちがいる。

さちは、旗本・溝口修理(しゅり)の家来で、町田新五左衛門という者に嫁いでいた。

そこへ、先ず身を寄せた中山安兵衛は、貞享四年の春、徳山家へ奉公をすることになった。

「それは、さよう、若様がお生まれになる三年前のことでござりました。中山安兵衛は十八歳でござりましたから、いまは、たしか、二十五歳になっているはず」

柴田宗兵衛が、そういうのを、権十郎は千の双腕(もろうで)に抱えこまれ、聞いていたのであろう。

中山安兵衛は、せっかく徳山重俊の家来になったのに、一年ほど後に、またしても出奔した。

出奔というよりも、

「御屋敷へ帰るに帰れなくなった……」

らしいのだ。

「何やら、悪い友達がついておりまいて、そやつどもが悪い遊びに中山安兵衛を引きずり込んだらしく、ある日のこと、殿の御使いに出ましたきり、御屋敷へ立ちもどりませなんだ」

その後、中山安兵衛は諸方を放浪するうち、菅野六郎左衛門兼清という侍に救われ、その庇護をうけるようになった。

菅野は、松平左京太夫（伊予・西条三万石）の家来で、江戸屋敷に奉公をしている。

菅野六郎左衛門によって、安兵衛は生き返った。

すなわち、小石川・立慶橋に一刀流の道場をひらいている堀内源左衛門の門人となって剣をまなび、相当の腕前となり、千三百石の旗本・稲生七郎右衛門の家来になった。

稲生から、中山安兵衛について、徳山重俊へ丁重なあいさつがあったので、重俊も、

「以前のことを気にかけず、たまさかには、わが屋敷へも顔を見せるよう、安兵衛へおつたえくだされ」

こころよく、安兵衛の失敗をゆるしたのであった。

そこで、中山安兵衛が徳山屋敷へ来て、重俊に詫びたのであるが、

「見ちがえるばかりの男になったわ」

と、めったに人を誉めぬ徳山重俊が、ひどく感心をしたそうな。

それからも安兵衛は、三度ほど、徳山屋敷へ顔を見せている。

それは、旧主の徳山重俊のきげんうかがいに来るというよりも、柴田宗兵衛に会いたいからだ。

徳山屋敷にいたころ、何事にも未熟だった十八歳の中山安兵衛を、柴田用人は親切に引きまわしてやり、不幸な、この若者の面倒をよく見てやった。

当時、お千は十七歳で、安兵衛が出奔するすこし前に嫁いでしまったから、それほど強い印象が残っていないらしい。

そこで、四日前のことだが……。

中山安兵衛が徳山屋敷へあらわれ、柴田宗兵衛の長屋へ来て、ひそかに、

「永の別れになるやも知れませぬので、これまでの御懇情に対し、一言、御礼を申しのべたく、まかり出まいた」

というではないか。

「永の別れとは、何のことじゃ、安兵衛殿」

「他言は御無用にねがいます」

「む……わかった」

「実は……」

と、安兵衛が語るには、自分の庇護者であり、大恩をうけた菅野六郎左衛門が、来る二月十一日の卯の上刻（午前六時）に、戸塚の高田の馬場で果し合いをすることになった。その相手は、同じ松平家の家来で、村上庄左衛門・三郎右衛門兄弟である。

老齢の菅野が、若い村上兄弟を相手に、何故、一命をかけて闘わねばならなかったのか、そのことについて、安兵衛はくわしく語らなかった。

いずれにせよ、恩人であり、いまは義理の叔父と甥のかための盃をかわしている菅野六郎左衛門の助太刀をつとめようという中山安兵衛なのだ。

村上兄弟には、義弟の武芸者で中津川祐見という者と、家来二名が助太刀をする。

こちらは安兵衛と、菅野の家来で大場一平という中年の者が助太刀で、五対三の決闘ということらしい。

恩義を忘れず、これからの自分の将来を投げうち、菅野に助太刀をしようという中山安兵衛に、柴田宗兵衛は感動をした。

中山安兵衛は、こういったそうである。

「二十五年で一生を終えようとも、六十年で終えようとも、人の一生は同じことでござる。大恩あるお人のために死ぬるは、安兵衛のよろこびでござる」

そこで、宗兵衛が、

「このことを、稲生様は御承知か？」

「はい。殿のおゆるしをいただきまして、今日より浪人の身となりました」

稲生七郎右衛門は、

「こころおきなくいたせ」

と、安兵衛をはげまし、井上和泉守国貞が鍛えた二尺四寸八分の大刀を、

「新刀ながら、充分に役立つであろう」

こういって中山安兵衛へ、はなむけにしてくれた。

六

その、五対三の決闘が、いま、はじまろうとしている。

「そうじゃ。あちらへ行こう」

あたりを見まわしていた柴田宗兵衛が、いきなり、権十郎を抱きあげ、見所のうしろへ向った。

そこは築山になっており、その高処が、馬場の東の入口のあたりまでつらなっている。

築山には、大きな椎の木も残ってい、松も植えられていた。おそらく、馬場を設けるときに切り崩した崖の一部を、わざと残しておいたものであろう。

築山へのぼると、馬場の全貌がほとんど目に入る。

「さ、若様。これへ……」

柴田用人は、椎の木蔭へ権十郎をすわらせ、

「千よ。若様からはなれるな」

「はい。なれど、大丈夫でございましょうか？」

「なに、此処ならば、だれの目にもつくまい」

そういわれて、千の顔に、いくらか生色がよみがえってきたようだ。いかに侍のむすめとはいえ、目の前で男たちの斬り合いをながめるのは、よい心もちではなかったろう。

権十郎は、柴田宗兵衛のいうままになっていたのだが、

「何しろ、五つの童のことで、何から何まで、おぼえているはずもない。怖かったかといわれてもわからぬし、では、勇み立って見物をしていたのかといわれても困るのだ。
ただ、おれを抱きしめている千の口から、何やら奇妙な音が洩れてきたので、ふと見返ると、千の口の中で、歯が鳴っている。それを、いまもよくおぼえているのだ。たしかに、千は怖がっていたのであろうよ」

のちになって、そういっている。

早春の朝のことで、冷気に身が引きしまるようであった。

微風がながれはじめ、すこしずつ、濃い靄がはれつつあった。

暁闇は消え、あたりの様子も、よく見えてきた。

乳白色の靄がゆれうごく中から、馬場の堤や、松並木が幻のように浮きあがってくる。

「あ……見えたぞ」

柴田宗兵衛が、呻くようにいった。

馬場の東の方から三つの人影が、こちらへ近づいて来るのを見たのだ。

三人のうち、二人は塗笠をかぶり、一人は二人のうしろからつき従うかたちでであった。

「まさに……」

「中山さまでございますな」

「うむ、うむ……」

笠をかぶっていても、中山安兵衛の六尺に近い堂々たる体軀を、柴田父娘が見誤るはずも

なかった。

三人は、見所の近くまで来て何かささやき合い、笠をかぶらぬ中年の侍が小脇に抱えていた包みの布を外し、床几を出した。

この侍が、菅野六郎左衛門の家来・大場一平にちがいない。

菅野と中山安兵衛が塗笠をぬぎ、これを大場が受け取る。

三人とも、落ちつきはらってい、いささかも昂奮の様子が見えなかった。

「さすがじゃ」

つぶやいた柴田宗兵衛が、千の腕の中から権十郎を抱き取り、

「若様。よう、ごらんなされ。よろしゅうござりますか？」

権十郎は、うなずいた。

子供のことで、宗兵衛と千の父娘がついているかぎり、すこしの不安も感じなかったらしい。

菅野六郎左衛門は、六十に近い老齢だと聞いている。

中肉中背の、よく均整のとれた躰つきの菅野は、大場一平が差し出す鉢巻を受けて白髪の頭へしめ、野袴の股立をとった。

「ふうむ……」

柴田宗兵衛が感嘆をした。

菅野の、そうした仕ぐさの一つ一つが少しのむだなく運ばれ、しかも、老人とはおもえぬ

闘志にあふれているのを看てとったからだ。

宗兵衛も若いころ、剣術の修行をしてきている。

中山安兵衛も袴をつけていたが、このとき何をおもったか、差し添えの脇差をぬき、袴の裾からひざの上へかけて切り除ってしまった。

これを見て、菅野が微笑し、大きくうなずいた。

斬り合いの最中に、袴が脚にからむようなことがあっては……と、安兵衛は考えたのであろう。

靄は、いよいよはれて、まだ、日はのぼらぬが朝の光りが高田の馬場にゆきわたり、木立に雀の囀りが起った。

仕度を終えた菅野六郎左衛門は床几にかけ、ゆったりとした姿勢で、何か安兵衛へ語りかけている。

安兵衛は立ったまま、菅野の側につきそい、襷をかけまわしていた。

大場一平も鉢巻をしめている。

権十郎を抱き、これを築山の木蔭から見下している柴田宗兵衛の額が、じっとりと脂汗にぬれていた。

「いまだにおぼえているのは、そのとき、おれを抱いていた柴田の爺の息づかいが荒かったことよ。おれの躰へつたわってくる爺の腕にも大層なちからがこもっていてな……ふと、見やると、爺の二つの眼の球が外へ飛び出してきそうな……そりゃもう、すさまじい面つきになっていてな。いやはや、おれにとって怖かったのは、これからはじまる斬り合いよりも、柴田宗兵衛の、いまにも嚙みつきそうな面がまえであった」

と、これも徳山権十郎の述懐である。

「来た……千、来たぞ」

宗兵衛が、あわただしくささやいたので、千は視線を転じた。

これも東の方から、人影が五つ。

まさに、相手の村上兄弟と、その家来二名。義弟の中津川祐見であった。

これを見た菅野六郎左衛門が、床几から立ちあがり、

「一と一との果し合いなれば、手を出すな」

と、中山安兵衛と大場一平にも、近づいて来る相手の五人の耳へも聞こえるような大声でいい、しずかに、すすみ出て行った。

七

菅野が「一と一との果し合い……」と、いったことから察すると、相手の村上兄弟のうちの一人を、菅野は目ざしているにちがいない。

とすれば、村上方の他の四名は立合人という名目で、つきそっているのであろう。

それは、こちらも同じことだ。

だが、立合人ならば、双方に一人ずつ附いていればよい。

しかし、相手は四人もの屈強の男たちが、早くも襷鉢巻の身仕度でつきそっている。

これは、あきらかに、立合人なぞではなく、

「助太刀……」

をするためのものであった。

それと看ていながら、菅野六郎左衛門が、一と一との果し合いゆえ、

「手を出すな」

と、よびかけたのは、果し合いの正義をつらぬく姿勢をしめしたのである。

それでも尚(なお)、相手が聞き入れずに立ち向って来るときは、

「やむを得ない」

ことになる。

菅野のよびかけに応じて、村上三郎右衛門が、兄の庄左衛門以下四人の男たちをうしろへ残し、つかつかと進み寄って来た。

村上弟は、老人の菅野と闘って、負けるとはおもっていなかったらしい。

村上弟を迎え、菅野が、しずかに何かいった。

徳山権十郎が後年、用人の柴田宗兵衛に聞いたところによると、このとき、菅野は、

「村上三郎右衛殿。正々堂々の立ち合い、菅野六郎左、満足に存ずる」

と、いったのだそうな。

同時に、二人の腰間(ようかん)から、二すじの光芒(こうぼう)が疾(はし)り出た。

五歳の権十郎の脳裡(のうり)にも、このときの恐ろしいまでの緊迫感が、強烈にきざみつけられている。

「……あのとき、両人が抜き合せたときの、二つの刀の光りだけは、いまもって忘れぬ。何しろ、そのとき、おれは生まれてはじめて、鞘(さや)から飛び出した刃(やいば)を見たのだものな」

と、これは、権十郎の述懐である。

つづいて起った菅野と村上の凄(すさ)まじい気合声(きあいごえ)も、権十郎は忘れていない。

「人の声ともおもわれなんだ……」

という印象がある。

何か得体の知れぬ獣の咆哮(ほうこう)のように感じられた。

先ず、猛然と攻撃に出たのは、老いた菅野六郎左衛門のほうであった。

六十に近い老人とはおもえぬ充実した気力をもって、菅野は村上弟を圧迫し、

「や、やあっ‼」

二、三合して、双方が飛びはなれたときには、

「村上の足が、もつれておりました」

と、柴田用人がいったし、千も、

「村上は、まるで火鉢の灰のような顔色(がんしょく)になっておりましたよ」

などといったものだが、あのときの千が、そこまでよく見とどけていたかどうか、あやしいことではある。

と……。
飛びはなれたかと見る間に、菅野六郎左衛門が一呼吸を入れることなく、
「鋭!!」
またしても、村上弟へ斬りつけて行った。
老人にしては、端倪すべからざる盛んな闘志であった。
この斬り込みで、村上三郎右衛門の顔面から血がふき出した。
浅手ではあったが、
「う……」
村上弟は闘志をうしない、よろめきながら、必死に何か叫んだ。
兄たちの助勢を、もとめたのであろう。
かまわずに菅野は、たたみかけて斬り込む。
馬場の、水のように冷え冷えと張りつめた大気を割って、数人の叫び声が乱れ飛んだ。
村上方の四人が、村上弟の助太刀に駈け寄るのを見て、菅野方の中山安兵衛と大場一平も大刀を抜きはなって駈け寄ったのである。
幼い権十郎の目は、そのときの状況を正確にとらえていない。
権十郎は乳母の千の躰にしがみついていたし、千は千で、女ともおもえぬ強いちからを双腕にこめ、
「若様を抱きしめていた……」

のであった。
「若様……さ、若様。しかと、お目を開けてごらんなされ」
と、柴田宗兵衛が千の腕から権十郎の躰を捥ぎ取るようにして、自分の膝の上へ抱えあげ、
「宗兵衛が、こうしてついておりまするゆえ、いささかも怖いことはござりませぬぞ。さ、若様。ごらんなされ、しかと、その目にきざみつけておくがようござります」
権十郎の躰を正面へ向け、うしろから、しっかりと抱きかかえてくれた。
権十郎の目は、依然、築山の下で二人の敵と闘っている菅野老人の姿をとらえた。
その向うの、追まわしの堤のあたりで、中山安兵衛が二人の敵を相手に斬り合ってい、大場一平は別の敵と闘っていたのだが、これは見所の蔭になっており、見えなかった。
「あっ……」
と、柴田宗兵衛が、
「み、見事、見事」
大声でいった。
「み、見よ、千。安兵衛殿が、ひとり、斬ったぞ」
堤のあたりで、敵のひとりがくたくたと倒れ伏すのを、権十郎も、
「たしかに、見たおぼえがあるような……」
と、いっている。
中山安兵衛は、村上兄弟の家来を斬って殪し、今度は中津川祐見との決闘になった。

中津川は、村上兄弟の妹を妻にしている武芸者であったそうな。

のちに、このときのことを根掘り葉掘り尋く権十郎へ、中山安兵衛あらため堀部安兵衛が、こういっている。

「……中津川祐見は、まことに手強き相手にて、それがし、中津川を殪さぬうちは菅野の叔父の助勢は、到底かなわぬとおもいきわめておりました。菅野がことは、たしかに気がかりではありましたなれど……そこへ、気を向けている余裕とてござりませなんだ。ともかくも中津川を殪さぬうちは、どうにもならぬ、と……」

菅野六郎左衛門は、村上兄弟を相手に闘っていた。

当初の烈しい攻撃を、菅野はうしなっていた。

おもうに菅野は、わが老体の限度をわきまえていて、決闘開始となるや、全力をかたむけて当の相手の村上弟を仕とめようとしたのであろう。

だが、仕とめきれなかった。

村上弟は、兄の庄左衛門の助勢を得て、顔面を血みどろにしながらも、菅野へ斬りつけている。

菅野六郎左衛門の顔も躰も、血に染まっていた。

けれども、闘志だけはうしなっていない。

このときの老いた菅野の白髪の頭と、よろめきながらも必死に、若い村上兄弟と闘っている姿を、徳山権十郎は終生忘れなかった。

妙なことなのだが……。

後年に、父の重俊へ反抗をし、重俊に叱りつけられ、折檻を受けるたびに、高田の馬場での菅野六郎左衛門の、すばらしい武士ぶりが目に浮かんできて、それがまた父・重俊を軽侮する一因ともなったのであった。

（いかに、えらそうなことをいうてみても、父上は武士でありながら、真剣をもって敵と闘うたことなど、一度もないではないか……）

このことである。

八

高田の馬場の決闘は、始まってから終るまで、

「およそ、半刻（一時間）はかかり申した」

と、柴田宗兵衛がいっている。

権十郎の記憶では、それこそ、

「あっという間の……」

出来事だったようにおもわれてならぬ。

幼時の記憶は、断片にすぎぬ。

断片と断片との間に存在していた日時が消えてしまっているものなのだ。

いずれにせよ半刻もの間、菅野六郎左衛門が気魄ひとつで、その老体をもちこたえ、村上

兄弟と闘いぬいたことは、

「若年の折の鍛練のほどがしのばれまする」

と、柴田宗兵衛がいったとおりだ。

この間……。

中山安兵衛も、中津川祐見と闘いつづけていたし、大場一平も村上兄弟の家来と切りむすんでいた。

しかし、前者が、すぐれた剣士どうしの決闘であり、後者は剣術の力量からすれば、はるかに劣った者どうしの、いわば、

「息もあがり、刀をつかんでいる腕は萎え、眼はくらみ、足許もあやしげに……」

という闘いぶりであった。

菅野も村上兄弟も、体力が限度にきており、長い間をにらみ合っているだけとなった。

中山安兵衛と中津川祐見の決闘は堤の向うへ移動し、築山の上にいる権十郎や柴田父娘の目にもとらえることができなくなった。

「いっそ、それがしが出て行って、菅野殿の助勢をいたそうかと、何度おもうたか知れませぬ」

柴田宗兵衛は、そういったが、これは放言でもなかったろう。むすめの千によると、

「父は、私が幼いころまで、まだ牛込の道場へ通い、稽古にはげんでおりました」

とのことである。

そして、ついに……。

中山安兵衛が強敵を殪した。

その場面は見えなかったが、

「うおぉっ!!」

何ともいえぬ声を発しつつ、堤の向うからあらわれた安兵衛が大刀を振りかざして、こちらへ駈け寄って来る姿を、権十郎はおぼえている。

それは、両翼をひろげて飛翔して来る大鷲のように感じられた。

安兵衛は側面から走り寄りざま、躍りあがるようにして、

「やあっ!!」

村上庄左衛門の頸部へ切りつけた。

村上兄が絶叫を発し、権十郎は恐ろしさにたまりかねて、柴田用人の胸へ齧りついた。

「なりませぬ」

宗兵衛は、権十郎の躰をまたしても正面へ向け、

「よう、ごらんなされ。ごらんなされませい!!」

叱りつけるように、いった。

千は、土の上へ突伏している。

村上兄が転倒し、起きあがらなくなった。

安兵衛は、左腕に菅野六郎左衛門の躰を抱え、右手に大刀を構え、

「叔父上。しっかりとなされ。残るは村上三郎右衛門ただ一人でござる」

はげましの声をかけながら、じりじりと、村上弟へせまる。

村上三郎右衛門は、水の中の金魚のように、ぱくぱくと口を開け、大刀を打ち振り、接近して来る安兵衛と菅野を牽制しながら後退した。

打ち振るといっても、当人がそうしているつもりだけのことで、村上弟の大刀は胸元から上へあがりもせず、躰は左右にぐらぐらとゆれうごき、子供の手で押しても打ち倒れてしまったろう。

菅野六郎左衛門は大刀を両手につかみ、柄頭をわが胸下へしっかりと当て、安兵衛にたすけられつつ、確実に一歩一歩を踏みしめ、村上弟へせまって行く。

そして、ついに、安兵衛の腕からはなれた菅野の躰が真一文字に村上弟へ突きすすんだ。

村上三郎右衛門の悲鳴が起った。

胸下へ菅野の刃を深ぶかと突き通された村上弟は仰向けに転倒した。

その上から、菅野がのしかかるようにして、共に倒れた。

中山安兵衛が走り寄り、菅野の躰を、息絶えた村上三郎右衛門の躰から引きはなした。

築山の上から、これを見ていた柴田宗兵衛は、抱いていた権十郎をほうり出し、両腕を高くさしあげ、しきりに何か、わめきつづけた。

彼方の中山安兵衛は、このとき、はじめて、築山の上にいる人影に気づいたらしい。

それが、柴田宗兵衛だとわかったらしく、安兵衛は一礼を送ってよこしたものだ。

大場一平が、見所の建物の蔭から這い出して来たのは、このときである。

大場も、ようやくに相手を仕とめたのであった。

中山安兵衛が大場を呼び、大場は大刀を杖にして、主人の菅野の傍へ近寄って行く。

菅野六郎左衛門は安兵衛の腕に抱かれ、瞑目していたが、まだ息が絶えていたわけではない。

刀身をぬぐい、鞘へおさめた中山安兵衛は、菅野を背負った。

菅野の大刀は鞘へおさめてから、大場一平が持った。

このころになると、馬場の其処此処に、人影がうごきはじめている。

半刻あまりの斬り合いであっただけに、馬場外にある茶店の者や、近辺の人びとがあつまって来たのだ。

中山安兵衛は二度と築山の方を見なかった。

柴田宗兵衛は感嘆のうめき声を発し、立ちつくしたまま、しばらくは権十郎のことも忘れていたようだ。

疲労困憊の極に達していただろう大場一平をはげましながら、菅野六郎左衛門を背負った安兵衛は、しずかに決闘の場から引きあげて行ったのである。

「ああ……」

「そのときに、な……」

徳山権十郎はのちのち、おもい出し笑いをしては、何度も語ったことがある。

「おれは、土の上へ坐って、ぼんやりとしていたらしいのだ。すると……すると、妙なに

おいがただよってくる。いやもう、臭い臭い。臭いも当然。それは、子供のおれにも、嗅ぎなれたにおいよ。何だとおもう。千の躰からにおってくるのだ。千がな、小水をもらしてしもうたのだ。あは、はは……」

　緊張と怖さのあまり、千が放心状態となり、尿をもらしてしまった。

　後年、千は口やかましい老女となるのだが、権十郎に、このときのことをいわれると、一言もなかった。

「あのときの不覚は、千にも似合わぬことでござりました。くやしゅうて、くやしゅうて……」

　千は亡くなるまで、そのことを気にかけていたようである。

　ところで、中山安兵衛は菅野六郎左衛門を戸塚の林光寺という寺まで運んだ。

　この寺の和尚は、安兵衛の知り合いであったそうな。

　菅野は、林光寺で息が絶えた。

　身に八ヶ所の傷を負うていたという。

　菅野が亡くなったあとで、中山安兵衛は顔や手足についた血を洗い、用意の着替えをして、何と、ふたたび高田の馬場へ引き返して来た。

九

　権十郎も柴田父娘も、高田の馬場へ引き返して来た中山安兵衛の姿を見てはいない。

　瀕死の重傷を負った菅野六郎左衛門を介抱しつつ、安兵衛と大場一平が馬場を去るのを見とどけるや、

「さ、若様。われらも御屋敷へもどらねばなりませぬ」

　という柴田宗兵衛を見て、権十郎は、

（まるで、宗兵衛ではない老人が其処にいるようなおもいがした）

　そうである。

　親しい中山安兵衛が必死の決闘ぶりを見ているだけで、宗兵衛は渾身の精力をかたむけつくしてしまったらしく、十歳は老けて見えた。

「自分が刀を把って斬り合うよりも疲れてしまった……」

　と、宗兵衛が千に洩らしたそうだが、五歳の権十郎にしてからが、屋敷へ帰ると熱を発し、五日ほどは床についてしまったのだ。

　高田の馬場で粗相をしてしまった千は、その場で父の宗兵衛から、

「だらしのないやつめ!!」

　さんざんに叱りつけられたというが、権十郎はおぼえていない。

　さて……。

　中山安兵衛は知り合いの林光寺で菅野が息絶えるや、その死体を白布におおい、林光寺の庭へ安置した。

　林光寺に、菅野の若党・向井佐次兵衛が小者と共に待機をしていたので、すぐさま安兵衛

は佐次兵衛を松平屋敷へ走らせ、決闘の始末を報告させた。

松平左京太夫の江戸藩邸は、四谷の喰違御門外にある。

禄高二百石の菅野六郎左衛門の役目は広敷用人というもので、松平家の奥御殿の内務と総女中の支配をおこなう。

佐次兵衛の知らせを受けた松平屋敷では、大さわぎとなった。

そして、藩士たちの監察に任じている目付役の中根権太夫に藩士五名、足軽・小者十五名がつきそい、林光寺へ駈けつけて来た。

中山安兵衛は、

「義理の叔父・菅野六郎左衛門と村上三郎右衛門殿との果し合いは相すみましてござる。両人とも一と一、ちからをつくして闘いましてござる」

と、中根権太夫に告げ、村上兄・中津川祐見など、村上方の助勢は、すべて、

「それがし、中山安兵衛一人にて討ち果しました」

と、いいきった。

菅野の家来・大場一平の名を、あくまでも表に出さなかったのは、村上兄弟の遺族たちの恨みが大場一平へかかることをおそれたからで、自分の功を誇るためではない。

つまり、その意味合いでの相手方の遺族や知己の者が仕返しをするつもりなら、これよりは菅野にも大場にも関わり合いはなく、

「自分ひとりが相手である」

ことを、安兵衛は強調したのであった。

菅野六郎左衛門の遺体は、松平屋敷へ運ばれることになった。

高田の馬場へも、松平家中の人びとが出張り、村上兄弟などの遺体を引き取ったわけだが、中山安兵衛は菅野の遺体を林光寺から送り出したのち、

「井戸端で全身を洗い、髪をととのえ、傷の手当もいたし、着替えをして、高田の馬場へおもむいた……」

のだそうな。

そして、村上兄弟の老父が、松平家の人びとと共に駈けつけて来て、兄弟の死体を見るや、たまりかねて泣きくずれる姿をも、安兵衛は編笠の内から見ている。

こうして、決闘の後始末がすべて終るのを見とどけてから、中山安兵衛は引きあげて行った。

行先は、江戸の東郊・柳島村の名主・渋江次郎左衛門方である。

柳島は、現代の江東区亀戸町にふくまれているが、元禄の当時は草ぶかい田舎であった。

名主の渋江家は、中庭に能舞台もあるほどの大きな屋敷構えで、何代もつづいた柳島の名家だ。

中山安兵衛が決闘の直前まで奉公をしていた旗本・稲生七郎右衛門と、この渋江家とは、

「三代つづきの親交がある……」

そうだから、おそらく、稲生七郎右衛門の配慮によって、

「よろしゅうございます。私が中山様を、おかくまいいたしましょう」
と、渋江家の当主が引き受けてくれたものであろう。
安兵衛は、のちに権十郎へ、こう語っている。
「さよう、渋江家へ入りました翌朝のことでありましたが……朝餉(あさげ)をしたためておりますと、この額から頰のあたりにかけて、何やらちくちくと痛んでなりませぬ」
「いかがして?」
「されば、おのれにも、ようわかりませなんだ。そこで渋江家の女中どのに手鏡を持って来てもらい、わが顔を鏡にうつしてみまするると……」
「どうなされた?」
「顔いちめんに、粟粒(あわつぶ)をふりまいたかのように、血が浮いて見えてござる」
昨日の返り血は、すでに洗いながしたはずだし、このときまでは痛みもおぼえなかったのである。
(あ、これか……)
と、安兵衛は、おもい当った。
凝(じっ)と、鏡の中の自分の顔を見ているうちに、
以前に、剣をまなんだ堀内源左衛門から、真剣の勝負について聞かされたことをおもい起したのだ。
つまり、双方の刃(やいば)と刃が打ち合うとき、ほとばしる鉄火と共に、刃の微細な破片(かけら)が飛び散り、双方の顔面へ突き刺さるということなのだ。
「おそらく、中津川祐見の面(おもて)も、それがしと同様、刃の破片が埋め込まれていたことでござりましょう」
「で、それから、いかがなされた?」
と、権十郎。
「縫針をもらい、これを酒で洗いましてな。手鏡でわが面をうつしつつ、針で破片をいちいち穿(ほじ)り出してござる」
「ふむ、ふむ……」
権十郎は両の拳(こぶし)をにぎりしめ、夢中になり、安兵衛のはなしに聞き入ったものである。
そのころの徳山権十郎は十歳になっていたし、五年前の高田の馬場のときとは別の昂奮(こうふん)をもって、中山安兵衛という武士を再確認することができた。
なんといっても権十郎は、
「安兵衛殿が高田の馬場にて斬り合う姿を見た!!」
のである。
嘘いつわりではないのだ。
その折の、敏感な幼時の生理的昂奮の記憶が、当の中山安兵衛によって、いちいち裏づけられてゆくことは、
「実に、たまらぬ……」

ものであったといえよう。

それほどに、あの高田の馬場の決闘は、江戸中を、

「沸き返らせた……」

ものであった。

権十郎の父・徳山重俊も、のちになって、用人の柴田宗兵衛が権十郎を連れて行き、決闘を見物したことを知るや、

「何故、わしに知らせなんだぞ!!」

ひどく、宗兵衛を叱りつけ、

「権十郎めに見せたところで、どうしようもないことではないか、おろかものめ!!」

とまで、ののしった。

宗兵衛は平伏しながらも、

「腹の中では、殿様へ舌を出していたのじゃ」

と、千へ洩らした。

そうだ。

権十郎が十歳になったとき、中山安兵衛は、すでに、堀部弥兵衛の養子となっていたのである。

堀部弥兵衛は、播州・赤穂五万三千石の大名・浅野内匠頭長矩の家臣である。

浅野家の江戸藩邸で留守居役をつとめていた堀部弥兵衛の俸禄は三百石。

ここに、中山安兵衛は、

「堀部安兵衛武庸」

となったわけだ。

十

安兵衛を堀部弥兵衛へ引き合せたのは、これも浅野家の臣・奥田孫太夫であった。

奥田は、安兵衛と同じく、堀内道場にまなんでいる。

「何しろ、安兵衛殿は、越後の新発田浪人でも、中山の家をつぐべき身なので、堀部弥兵衛殿の養子縁組を、はじめのうちは、どうしても承知をせなんだと聞いております」

と、柴田宗兵衛は、権十郎に、

「なれど、弥兵衛殿はあきらめませぬ。これほどの男を取り逃してなろうかというので、ことわられてもことわられても、いっかな怯むことなく……」

というのだから弥兵衛老人の熱情は、執拗をきわめたらしい。

堀部弥兵衛の最後の切札は、つぎのようなものであった。

「……なれば、養子となっても、中山姓のままでよろしい。中山安兵衛のままで、わしのせがれになって下され」

それならば、安兵衛が養子となる理由もない。

だから安兵衛は、

「ならば、このままにて、生涯を親しくおつきあいねがいとうござる。それにて充分ではござらぬか」
と、いった。
「いいや、それはちがいますぞ」
「何故……?」
「それがしは安兵衛殿を、どうあっても、わが子にいたしたい。父と子のちぎりをむすびたいのでござる」
安兵衛は、困り果てた。
堀部弥兵衛の決意は嘘いつわりのないもので、中山姓のままの安兵衛と、
「養子縁組をしたい……」
ことを、何と、ご主君の浅野内匠頭へまで申し出て、内匠頭に叱られたという。
こうしたことを同門の奥田孫太夫から聞くにつれて、徐々に、安兵衛の拒否の鍵がゆるみはじめた。
女の深情もおよばぬ堀部弥兵衛の執心ではないか。
ついに……。
安兵衛は陥落した。
そしていさぎよく、中山姓を捨てて、弥兵衛の子になった。
この挿話も、そのころの武家たちの評判となったものだ。

堀部安兵衛となり、浅野家の臣となったときも、
「かように相なりました」
と、安兵衛は、徳山家へあいさつにあらわれた。
徳山重俊は、
「義理がたい男じゃ」
安兵衛を、ほめたたえた。
ところで、そのころになると、徳山重俊の権十郎へ対する気もちが、大分にちがってきていた。
重俊の跡つぎであった右近が病死してしまったからである。
右近は二十五歳になり、徳山一学と名乗っていたけれども、生来、ひ弱な体質であったという。
それにしても父の重俊の落胆は大きかった。
このとき、重俊は五十八歳である。
この後、たとえ側妾をもうけたとしても、子が生まれる可能性はない。
重俊は、
（あまり、可愛ゆくはない……）
ただひとり残された男子の権十郎を、跡つぎにさだめる決意をせぬわけにはいかなかった。
重俊が、堀部安兵衛に、

「おぬしの剣術の師・堀内源左衛門殿へ、権十郎をあずけたいのじゃが、いかがであろう。おぬしより、とりもちをしてくれぬか」

たのんだのも、権十郎を自分の跡つぎとしてはずかしくない武士に育てなくてはならぬと、おもいはじめていたからだ。

安兵衛は、

「心得まいた」

こころよく引き受け、権十郎の堀内道場入門のことをとりはからってくれた。

堀内道場へ通うようになってから、権十郎は月のうち三度ほどは、道場へ姿を見せる堀部安兵衛に教導を受けたものだ。

権十郎の生涯には、これからもさまざまな人びとが搦み合ってくるし、おもいもかけなかった人生が展開してきて、

「われながら、おどろくほかはない」

ことになるのだが、

「剣術を、もしも、まなばなかったら、おれの一生は、また別の道へ逸れたやも知れぬと、おもうことがある。剣をまなんで、はじめておれは、おれのちからを信ずることができた。よきにつけ、悪しきにつけ、そのことがおれの生涯を定めたようにおもわれる。もし、剣をまなばなかったら、徳山家の当主として一生を終えることに変りはなかったろうが……おれは、もっと別の男になっていたろうよ」

と、権十郎は述懐しているほどだ。

剣術をはじめて見ると、十歳の権十郎には意外な展望がひらけてきたのである。

権十郎は、剣術の、

「すじがよかった」

のである。

剣士に向いていた。

しだいに、剣術が好きでたまらなくなってくる。

すじがよいから好むことにもなるのだ。

もっとも、はじめの一年間は、

「道場の内へ、一歩も入れてはもらえなかった……」

そうである。

〔振棒〕とよばれる太くて長い棒を、裏庭の土の上で揮うことだけで、一年が暮れたのだが、権十郎は倦むことを知らなかった。

長さ四尺ほどの、ひとにぎりもある樫の棒には、びっしりと鉄条が埋めこまれてい、相当な重量だが、月日を経て、一つの振棒を充分に揮えるようになると、重量が増えた別の振棒へすすむ。

ただ、振りまわしているのではない。

腰を据え、姿勢を正し、その正しさを崩すことなく、振って振って振りぬくのだ。

夏の暑さにも冬の寒さにも、雑念を去って振る。振ることのみへ心身を溶けこませることを体得する。

傍目（はため）には、単調な修行なのだが、

「ふしぎなことに、振棒がおもしろくておもしろくて、たまらなかった」

と、権十郎はいう。

腕や股（もも）や、胸の筋肉が、少年ながら見る見るたくましさを増し、自分の肉体が、そのように変化し、発達してゆくさまが権十郎の目にも判然としてきた。

十一

堀部安兵衛は、小石川の堀内道場へあらわれると、かならず裏庭へ来て、権十郎と共に振棒を揮った。

安兵衛がつかう振棒は長さ六尺余。目方が五貫目もある物で、少年の権十郎の目には、

「棒というよりも、むしろ、材木に見えた」

ということだ。

それだけの重い振棒を、軽がると、たちまちのうちに百回も振ってしまう。

両腕に摑（つか）みしめた振棒を大上段に振りかぶり、

「む!!」

腹の底から発する唸（うな）り声と共に、真向（まっこう）へ打ち落し、晴眼（せいがん）の構えになったところで振棒をぴ、たりと静止させる。

木刀や真剣とは、くらべものにならぬ重い振棒で、これを百回、二百回と振りぬいて姿勢を乱さぬということが、いかに至難の業であるかを、権十郎は知った。

権十郎と前後して入門した旗本の子弟たちが、すでに道場へ入り、木太刀（きだち）をもって一刀流の型をまなびはじめるようになっても、堀内源左衛門は依然、権十郎を振棒から解放しなかった。

「それは、権十郎殿に堀内先生が、御目をかけられているからでござるぞ」

と、堀部安兵衛が、ひそかにいってくれた。

だからといって、堀内先生が権十郎を、

「依怙（えこ）ひいきにしている……」

のではない。

入門した者の性格も素質も、それは千差万別であって、堀内源左衛門は、それぞれに適した教え方をするのだ。

「それ、腰を、もそっと落しなされ!!」

とか、

「もそっと気合をこめて!!」

とか、堀部安兵衛もなかなかにきびしかった。

半年を経ても、まだ、振棒を振りつづけていると権十郎から聞いた徳山重俊が、

「おのれは、すじがよくないのじゃ。それにきまっておる!!」
きめつけたり、叱りつけたりした。
以前の権十郎ならば、父に叱りつけられたりすると、ただもう怖々としてしまい、うなだれて唇を噛みしめているだけだったのが、そのころになると、平然として、しずかに、だまったまま父の顔を見つめていられるようになった。
それがまた、重俊には小憎くおもわれた。
徳山重俊は、いよいよ、将軍のおぼえもめでたく、幕閣の評判もよく、御目付の役目をうけたまわり、布衣をゆるされた。
布衣とは狩衣のことで、これを着る資格を得たというのは、徳山重俊の地位が上ったことになるのである。
それだけに重俊は、
「わしの跡目をついで、はずかしからぬ……」
息子にしようというので、大童だったらしい。
乳母の千は、前々からの習慣で、権十郎が入浴するときも、つききりで世話をやいていた。
あるとき、権十郎の背中をながしていて、突然、千がたまりかねたように権十郎を背後から抱きしめてきたことがある。
ねむるとき、千が添い寝をしなくなってから数年を経ていたし、権十郎はおどろいて、
「千。何とした?」

尋くと、千は何やら物狂わしげに、
「ああ……若さまが、このように、たくましくおなりあそばして……」
あえぎあえぎ、いいさしたかとみる間に、わが唇を、ひたと権十郎の肩のあたりへ押しつけてきた。
徳山権十郎が、性的な衝動をおぼえたのは、このときがはじめてであった。
自分の肩口へ押しつけられ、強く吸われた千の唇の感触を、権十郎は生涯、忘れ得なかった。
しかし、このときの権十郎の性器が勃起したわけではない。
ただ、何となく、全身に妙な衝動をおぼえた。
こそばゆいような、何か一瞬、目眩めくような感じがして、背すじが寒くなった。
ときに権十郎は十一歳になっていたから、千は三十歳であったはずだ。
現代の三十歳は女盛りであるが、当時の三十をこえた女は、現代の中年女といってもよかったろう。
権十郎が千によって、わが性器を勃起させられたのは、その翌年であった。
そのことへふれる前に、堀部安兵衛の身に、おもいもかけぬ異変が起り、安兵衛が永久に、権十郎と別れを告げたことをのべておかなくてはなるまい。

十二

徳山権十郎は、腹ちがいの兄右近の病歿後、五年目の元禄十三年七月十二日に江戸城へ上

り、五代将軍・徳川綱吉に拝謁した。

　これで、権十郎が徳山家の跡つぎであることを、将軍も幕府もみとめたことになる。

江戸城中の大広間の、はるか彼方の御簾の内に将軍・綱吉がいたというのだが、権十郎はひれ伏したままでいて、それをたしかめたわけではない。

とき、権十郎は十一歳になっており、すでに、堀内道場へ入門をしていた。

そして、天下泰平の元禄の世を謳歌していた人びとに異常な衝撃をあたえた事件が起ったのは、翌元禄十四年の春で、そのときから堀部安兵衛は堀内道場へ姿を見せなくなった。

したがって、道場における権十郎と安兵衛との交渉は、まる一年ほどにすぎない。

堀部安兵衛が、否応もなく、その異変へ巻き込まれたからである。

すなわち安兵衛の主君である浅野内匠頭長矩が、江戸城中・松の廊下において、高家筆頭の吉良上野介義央へ刃傷におよび、内匠頭は即日切腹を命じられ、五万三千石の浅野家が取り潰された。

それに引きかえ、相手の吉良上野介へは、何のお咎めもなかったということから、この事件は後世にいたるまで、日本人には忘れられれぬ展開を見せてゆくことになるのだ。

　この年の三月。

京都から江戸へ下った勅使の接待役をつとめていた浅野内匠頭と、接待の指導にあたっていた高家の吉良上野介との間に、どのような確執があったものか……それは、はっきりとわかっていない。

　高家というのは、幕府の儀式・典礼をはじめ、朝廷との間の諸礼式をつかさどる役目で、室町時代以来の名家がこれに任ぜられている。

吉良家も足利将軍の一族であり、禄高は四千石の幕臣ながら、四位少将に任ぜられており、その権威も非常なものである。

われわれには〔忠臣蔵〕として知られる、この事件について、くわしく書きのべることは、この小説にはあまり必要ではあるまい。

また、いちいち書きのべなくとも、事件の、およその経緯は読者もよく御承知であろう。

三月十四日は江戸城中において、将軍が勅使へ答礼するための儀式がおこなわれる。

刃傷は、この当日に起った。

その場に居合せた者の筆記によれば、

「……御使の刻限早相なり候儀を、一言二言申し候ところ、誰やらん、吉良殿のうしろより……」

　つまり、浅野内匠頭が、吉良上野介の背後から、

「この間よりの遺恨おぼえたか!!」

と叫び、走り寄って小刀をぬきざま、吉良へ切りつけたのである。

負傷した吉良は逃げ、浅野は、その場に取り押えられた。

これは、武士と武士の〔喧嘩〕である。

浅野内匠頭は、あくまでも、その立場をくずさず、

「このたびのことについて一言も申しひらくことはござりませぬ。将軍家に対して、いささかのうらみとてなく、まったく自分一人(いちにん)の宿意をもって刃傷へおよび申した。この上は、いかようのおとがめをおおせつけられましょうともかまいませぬ。よろしく御処分をねがいたい」

と、取り調べにあたった幕府の目付・多門伝八郎(おかどでんぱちろう)へこたえたのみである。

「男の喧嘩に、いいわけは無用」

という態度であった。

相手の吉良上野介は、

「浅野にうらみを受けるおぼえは、毛頭ござらぬ」

と、いう。

とすれば、浅野の気が狂ったとでもいうのか……。

目付役としても、また幕府としても、もっとくわしく両人を取り調べなくてはならぬことになった。

ところが、その取り調べも待たずに、将軍・綱吉から、

「浅野は、この大事の日に、場所柄をもわきまえず、自分一個の宿意をもって刃傷におよんだのは、ふとどきしごくである。すぐさま、田村右京太夫(うきょうだゆう)へ御預けの上、切腹おおせつける」

と、命が下った。

一方、吉良へは、

「時節をわきまえ、場所柄をつつしみ、手向いをいたさなかったことは、まことに神妙である。よって何のおかまいもなし。城を下って傷の養生をいたすように」

これは叱られることもなく、かえって、ほめられてしまったのである。

目付たちは、おどろいた。

幕府には、

「喧嘩は両成敗」

という定法がある。

その定法を、幕府の主宰者たる将軍みずからが、

「破った……」

ことになる。

これでは、幕府の権威も何もあったものではない。

目付・多門伝八郎は懸命に、将軍と幕府へ、

「考え直していただきたい」

と、せまったが、将軍の側用人(そばようにん)をつとめ、権力絶大な柳沢出羽守(でわのかみ)は、これをはねつけてしまった。

老中・若年寄などという幕府最高の閣僚たちも、将軍と側用人の権力に、

「手も足も出なかった……」

といってよい。

浅野内匠頭が切腹し、五万三千石の家が、その日のうちに取り潰されたとなって、世上の同情は浅野家へ集中したのである。

徳山重俊が、このとき、幕府の目付役をつとめていたら、この事件にどのような関(かか)わり合いをもったことだろうか……。

重俊は、その前年に、役目を退(の)いていたのだ。

権十郎は、

「父上が、もしも、あの事件(こと)の取り調べに当ったとしたら、とてもとても、多門伝八郎のごとき硬骨ぶりを見せるどころではなかったろうよ。何事も将軍様(うえ)や柳沢侯のいうままに、要領よく立ちまわったにちがいない」

苦笑まじりに語ったことがある。

徳山重俊は、事件については一言も口にのぼせなかったし、屋敷の家来や侍女たちへも、

「いささかも、口にのぼせてはならぬ」

と、柴田用人を通じて申しわたした。

実に、慎重である。

典型的な官僚であるといってよい。

あれほどに、

「たのもしき男じゃ」

と評していた堀部安兵衛についても、徳山重俊はふれようともしなかった。

しかし家来たちは……いや、柴田宗兵衛や権十郎の胸の内は、おさまるものではない。

「安兵衛殿ほどの武士(もののふ)だ。ただ一人にても吉良屋敷へ乗り込み、上野介の首を討ち取って、主君のうらみをはらすにちがいない」

などと、昂奮のままにいい出す家来もいたようである。

浅野家が取り潰され、藩士たちが浪人となって諸方へ散ってからは、

「赤穂浪士が吉良屋敷へ討ち入るのは、いつだろうか？」

世上のうわさは、このことでもちきりとなった。

堀部安兵衛は、ふっつりと消息を絶った。

「江戸におられるらしい」

と、家来たちがささやき合っているのを、権十郎は耳にはさんだことがある。

堀内道場の門人たちの中にも、

「外神田で、堀部殿を見かけた」

という者がいた。

そういえば……。

堀内道場の門人の中に、吉良上野介の家来が一人いたのである。

名を、清水一学(いちがく)という。

一学は剣のすじもよく、堀内先生も行末をたのしみにしていた若者だが、彼も安兵衛と歩調を合せたかのように、道場から姿を消した。

あまりに、主人の吉良上野介の評判が悪いので、

「居たたまれなくなったのだろう」

という者もいた。

吉良上野介は、長男を妻の実家である上杉家へ送りこみ、出羽の国・米沢十五万石の当主に据えている。これが上杉綱憲だ。

その綱憲の正室を、徳川御三家の一である紀州家から迎えたので、現将軍とも縁つづきということになる。

その他にも吉良は、陸奥の国・弘前四万七千石の城主・津軽信政の親類（旗本・津軽政兕）へも次女を妻合せている。

このような背景をもつ吉良上野介だけに、将軍・綱吉の性急な裁決は、

「たしかに、よくなかった……」

のである。

どうしても、吉良が、

「将軍や権力者たちの依怙ひいきによって、難をまぬがれた……」

ことに看られたし、また、看られても仕方がなかった。

江戸では、武家よりも、むしろ町民たちのほうが将軍と幕府と吉良へ対する非難を率直にあらわしはじめ、落首を諸方に貼りつけたりして、町中のうわさにも怒りがこもっている。

これは、前々からつづいている将軍・綱吉の独裁政治への怒りが、今度の事件をきっかけにして、たまりかねたかのように爆発したといってもよかった。

年が明けて、元禄十五年となった早春の或日に、徳山権十郎は偶然、堀部安兵衛と路上に出合うことになる。

権十郎は、十三歳になっていた。

別離

一

そのとき徳山権十郎は、小石川の堀内道場での稽古をすませて帰途につき、わが屋敷にも近い両国橋へさしかかった。

十三歳となった権十郎は、若党の小沼治作ひとりを供に、毎日たゆむことなく堀内道場へ通っていたのだ。

ことのほかに寒さがきびしかった今年の冬も、ようやくに、去ろうとしている。

うす曇りの一日であったが、歩いていると汗ばむほどの暖かさで、冬の間は顔をうつ向け、せかせかと往来する橋上の人のながれも、何やらゆったりとして見えた。

寒中の両国橋は、大川（隅田川）を吹きぬけて来る北風の強さ冷たさに、橋をわたる人び

とが、
「実に、たまらぬ……」
おもいをするという。
権十郎が両手を振り、胸を張って、橋の中程までやって来たとき、
「もし……」
左側の、橋の欄干にもたれた侍が振り向きざまに声をかけてよこした。
侍は、塗笠をかぶっている。
「…………？」
見返した権十郎へ、侍が塗笠をあげて、顔を見せた。
「あ……堀部どの」
まさに、堀部安兵衛であった。
権十郎は、なつかしさにおもわず、
「江戸におられましたのか……」
身を、すり寄せるようにした。
「はい」
安兵衛は塗笠を除(と)ろうとはしなかった。
礼儀正しい安兵衛に、似合わぬことといってよい。
堀部安兵衛にとって、徳山重俊は旧主人のひとりである。

その子息の権十郎へ対し、安兵衛は相応の礼儀をもって、これまでにも接してきている。
だが権十郎は、笠を除らぬ安兵衛の意中を、すぐさま察知した。
すこしはなれて、二人を見まもっている若党の小沼治作の傍へ行き、権十郎が、
「先へ帰るがよい」
と、いった。
「は……？」
小沼は、半年ほど前に、新しく徳山家へ雇い入れられた若党ゆえ、堀部安兵衛を見知っていない。
「よいから、先へもどれ」
「はい」
屋敷も近いことだし、心配をするほどのこともないとおもいはしたが、若様を呼びとめた侍が塗笠を除らぬのを、小沼は不審におもったらしい。
「あのお人は、堀内先生の御門下なのだ」
権十郎に、そういわれて、小沼治作は、
「なれば御屋敷へもどり、そのよしを申しあげまする」
「うん。そうしてくれ」
「では、ごめん下されましょう」
小沼は、二、三度、こちらを振り向きつつ、橋を東へわたって行った。

「御迷惑をおかけいたしましたかな?」
笠の内で、安兵衛が笑顔になっている。
「いいえ、堀部どの……」
「それがし、権十郎様に声をかけることを、ためろうておりまいたが……お姿が、こなたへ近くなるにつれ、なつかしさのあまり、ついつい、声をかけてしまいました」
「うれしゅうござる。堀部どの。権十郎、うれしく存ずる」
期せずして二人は欄干にもたれ、大川の川面へ視線を落しながら、語りはじめていた。
橋上を行く人びとに、二人とも背中を向けていることになる。
高田の馬場の決闘から、八年の歳月がすぎ去っていた。
すでに三十をこえた堀部安兵衛を、このときの少年の目でとらえた権十郎の印象としては、
「まるで、四十にも五十にも、おもえたものよ。落ちつきはらった物腰といい、言葉づかいといい、わが父上より、よほどにたのもしく見えた」
とのことだ。
浅野内匠頭の刃傷以来、一年が経過しており、五万三千石の主家を幕府に取り潰された浅野の家来たちは浪々の身となり、それぞれ、諸方へ散って行ったという。
けれども、江戸はもとより、京・大坂でも、
「赤穂浪士たちが、江戸へあつまり、吉良上野介の屋敷へ討ち入って、亡き主人の恨みをはらすのも、間近いことにちがいない」

との風評が、しきりである。
去年の八月十九日に、幕府は吉良上野介へ、
「本所・松坂町の、松平登之助屋敷へ引き移るべし」
と、申しわたしている。
それまでの吉良邸は、江戸城の曲輪内ともいうべき呉服橋門内にあった。
これは、徳川将軍の家臣として、最高級地に屋敷をたまわっていたことであり、それは取りも直さず、吉良上野介の威勢をものがたることにもなるのだ。
それを前ぶれもなく、いきなり、本所へ移れと幕府が、命じてきた。
本所は数年前まで江戸の府内ではなかったほどで、大川を東へわたれば、そこはもう、江戸の郊外という感じが、まだ色濃く残っている。
いわゆる新開地であって、近年は武家や大名の屋敷も増えはじめたが、高家筆頭として大仰にいうならば、
「飛ぶ鳥を落す勢い……」
の、吉良上野介が屋敷を構える土地ではないのだ。
しかし、吉良上野介は、幕命を受けるや、ひっそりと本所・松坂町の旧松平屋敷へ引き移って行った。
これは幕府が、赤穂浪士の討ち入りにそなえて、わざと吉良を本所へ移したのだという評判が、権十郎などの耳へも聞こえている。

赤穂浪士が乱入して来た場合、吉良邸が江戸城の内といってもよい場所にあっては、幕府も見すごしてはいられぬ。

当然、兵をさし向けて、赤穂浪士と戦わねばなるまい。

幕府は、これを未然に避けた、というのだ。

吉良を遠くへ移しておいて、赤穂浪士に、その首を討たせようということにもなる。

「幕府(こうぎ)も将軍家も、浅野内匠頭へあたえた処罰と、不公平な裁決を後悔しているのだ。だからこそ、吉良を遠くへ追いやって、赤穂の旧臣たちに本望をとげさせてやるつもりなのだ」

堀内道場の門人たちの間でも、そうした声がしている。

少年ながら権十郎も、いまの堀部安兵衛の立場を察しているつもりであった。

それだけに、いま、両国橋で堀部安兵衛と出合ったことは、

（いよいよ、吉良屋敷へ討ち入る日も近いのか……）

と、おもわざるを得ない。

権十郎の胸は、高鳴った。

しかも、両国橋から吉良屋敷は、

「目と鼻の先……」

といってよいほどの、近距離ではないか。

「堀内先生は、すこやかにおわしますか？」

と、堀部安兵衛が尋(き)いてよこした。

「はい」

「権十郎様も、日々、出精のようですな」

「はげんでいます」

「うむ。何より、何より……」

うなずいた安兵衛が、

「それがしに、ついておいでなされ」

こういって、橋上を東へ歩みはじめた。

二

両国橋の東詰は広場になってい、これを町屋が囲むかたちになっている。

南面は、大川から東へ向って掘り割られた竪川(たてかわ)がながれてい、その河岸地には茶店や麦茶を売る屋台がならび、道をへだてた北側は本所・元町の町屋であった。

その元町の角に〔原治(はらじ)〕という蕎麦屋(そばや)がある。

構えも大きく、東両国の〔原治〕といえば、江戸に住み暮しているものならば、

「知らぬものはない」

といってもよい。

当時の江戸には、後年のように種々多彩な飲食店があったわけではない。

ために、蕎麦切(きり)の流行は大変なもので、ちかごろは市中の諸方に蕎麦屋が増えるばかりだ。

その中でも、古いのれんをもつ東両国の〔原治〕は、日本橋・北詰の〔日野伝〕と共に評判が高かった。

堀部安兵衛は〔原治〕の前まで来て、権十郎へ、

「権十郎様は、蕎麦切を口になされたことがありますかな？」

「いえ……」

権十郎は、かぶりを振った。

生母の実家である日本橋本石町の駿河屋又兵衛方へおもむいた折にも、ついぞ蕎麦切だけは出してもらったことがない。

かねてから権十郎は、

（蕎麦切を食べてみたい……）

と、考えていた。

いたがしかし、二千二百石の大身旗本の子息が、ぶらりと蕎麦屋へ入ることなど許されることではなかったし、権十郎もまた、おもってみたことがない。

堀内道場への往き帰りに〔原治〕の前を通る。

そのたびに、

（食べてみたい）

と、おもいはしても、そのころの権十郎は、店の中へ入ることを、むしろ、おもいつかなかったといったほうがよいだろう。

そのように仕つけられてきたし、格別に不自由ともおもわれなかったが、後年になってから権十郎は、つくづくと、

「旗本の家になぞ、生まれるものではない」

と、こぼしぬいている。

ともかくも、そのとき、

「では、蕎麦切を馳走いたしましょう」

こういって堀部安兵衛が先に立ち、〔原治〕の大きな障子戸を引き開け、中へ入って行くのを見たときには、

「まさに、胸が躍るような……」

おもいがした。

町中の店屋へ入って蕎麦切を食べるという一事が、まるで夢の中の出来事のようにおもわれた。

それほどに、身分のある武家の生活はきびしくて、やかましくて、うるさいものだったのである。

土間へ入ると、そこは入れこみの大座敷であった。

さいわいに客も少なかったが、これが時分どきともなれば、

「割れ返るように……」

混み合うとのことだ。

蕎麦切も、ずっと以前は、ふとく打った黒いそばを箸でちぎるようにして口へ運び、

「よくよく噛みしめたもの……」

だったというが、近年は調理の仕方も工夫されてきて、たとえば、いま、堀部安兵衛が〔原治〕の奥座敷へ入って注文をした〔蒸切そば〕なども、その一であろう。

打ちあげたそばを、蒸籠に入れて熱く蒸しあげ、これを柚子の香りのする汁につけて食べる。

「これは、ふむ……ふむ、ふむ、ふむ……」

と、鼻を鳴らしつつ、蒸切そばを口にした徳山権十郎、そこは少年らしい率直さで、

「うまい!!」

大声を発した。

安兵衛は、ゆっくりと酒をのみながら、

「よろしければ、いくらでもあがって下され」

「よろしいのか?」

「かまいませぬとも」

ついに権十郎は、三度、おかわりをしたものだ。

六畳の奥座敷には二人きりであった。

堀部安兵衛は、水か茶でものむように酒をのんでいる。

安兵衛の大好物が酒だということは耳にしていた権十郎だが、このように、事もなげにのむありさまを見たのは、はじめてである。

「躰つきが、見ちがえるようになられまいたな」

「私の?」

「はい。よほどに、御修行を積んだようにお見うけいたす」

「いや、なに……」

権十郎は、はにかんだ。

「安兵衛、かまえて嘘は申しませぬ。御立派になられた……」

「いや、なに……」

「ときに、御屋敷内のみなみな様に、お変りはありませぬか?」

「はい」

こたえて、権十郎の顔つきがあらたまった。

去年の事件以来、堀部安兵衛の身の上にこそ異変・転変が起ったのだ。その安兵衛が何事もなかったように、徳山家へ気づかいをしてくれているのである。

「堀部どの……」

気負いこみ、おもいきっていいかけた権十郎へ、安兵衛が、

「あなた様へ、酒をすすめるわけにもまいりませぬな」

「いえ……ちょうだいする」

いいざま、権十郎が安兵衛の盃を手にとって、

「いただきます」
「ほう……」
うれしげに安兵衛が笑って、
「なれど、いけませぬ」
「いただきたい」
「それは、なりませぬ」
「ぜひとも……」
「おいくつになられました？」
「十三歳」
「まだ、早い」
「では、やめます」
「それがよろしい」
「そのかわりに、おねがいがあります」
「ほう……何のことですかな？」
「聞きいれて下さるか？」
「はて……」
「ならば、酒をいただきたい」
「あは、はは……」

安兵衛も、少年の権十郎が懸命に駆け引きをする様子がおかしくもあり、また、不審にもおもったらしい。
「いったい、この安兵衛に何をせよとおおせある？」
「おうかがいいたすことがあります」
「何を……？」
権十郎が素早く、あたりの気配をうかがってから、
「私、かまえて他言はいたしませぬ」
「ふむ……」
「なれば、ぜひとも、お聞かせ下さい。亡き御主君の敵の首、討ち取るおつもりですか？」
堀部安兵衛は眉毛一筋うごかすこともなく、
「それ聞いて、何となさる？」
酒盃を口にふくみ、権十郎を見やった。その眼が微笑をふくんでいる。
権十郎は低声ながら、ほとばしるように、こういった。
「さわがしい世上のうわさに関わることなく、安兵衛どの、おひとりの決心を、権十郎うけたまわりたいのです」

三

「男には……いや、武士には、初一念と申すものがござる」

これが、権十郎の問いに対する堀部安兵衛のこたえであった。
「初一念……」
「さよう」
「それは、……?」
おぼろげながら、感覚としてはわかるような気もするが、まだ十三歳の権十郎にとっては、その意味合いが、しかとはつかみきれなかったといってよい。
「おわかりになりませぬか?」
初一念とは、
「最初から強い決心をもって志した念願……」
を、さす。
堀部安兵衛武庸（たけつね）の場合、その初一念は、去年の三月十四日の異変が起り、将軍と幕府の下命によって、主家が断絶、主人が切腹となった瞬間に生じたものである。
他人の意見を聞いた上でとか、ぐずぐずと考えぬいた末に、とかいうのではない。
その瞬間に、
「これから、一個の武士として自分が為（な）すべきことは、この一事のみ……」
という初一念が、安兵衛の胸底に凝固した。
それを、
「つらぬき通すまででござる」

と、安兵衛は徳山権十郎にこたえたのである。
事件以来、数百におよぶ浅野の家臣たちは、それぞれに散って行き、一年の歳月がながれた。
この間には、家臣たちの意見や主張がさまざまに別れ、事態の移り変りにも、
「おもいおよばぬ……」
ことが起ったにちがいない。
だが、堀部安兵衛の初一念は、少しも変らぬということだ。
「では、その初一念とは……?」
おもいきって、権十郎が尋いた。
すると、堀部安兵衛は、
「吉良上野介の首を討つこと。この一事でござる。余人は知らず、それがしの初一念はこの一事でござる」
事もなげに、いうではないか。
少年ながら、権十郎は瞠目（どうもく）した。
「いや、あのように、はっきりとしたこたえを聞こうとはおもわなんだ」
のちのち、権十郎は、
「感に耐えず……」
といった面持ちで、そう語っている。
このような大事を少年の自分に向って、ことさら秘密めいた口調でもなく、いわば当然の

ことして安兵衛がこたえてくれた。

うわさによると、吉良屋敷では、赤穂浪士の討ち入りに備え、親類にあたる上杉家からも屈強の侍たちが派遣され、上野介を護衛しているそうな。

徳山家と吉良邸とは同じ本所に在って、さしわたしにすれば五町（約五百メートル）ほどの近間（ちかま）なのだ。

ゆえに、権十郎などの耳へ入るうわさは、

「はなし半分……」

に聞いたとしても、容易ならぬことだと感得された。

こうした状態にあるならば、当然、堀部安兵衛は自分の初一念を人に洩らすべきではないはずであった。

ましてや、

「子供の、おれごときに……」

である。

はじめは、安兵衛にからかわれているのだろうとおもったが、子供の自分に、これほどの重大事を打ちあけてくれたのは、自分を深く信頼してのことにちがいないとおもい直し、感動せぬわけにはいかなかった。

安兵衛は、こういった。

「権十郎様。男の進退は自分一人（おのれいちにん）にて決するものでござる。余人の意見は、それぞれに違う

ものにて、また、世間のうわさ、評判などというものも千差万別でござる。そうしたものに、いちいち耳を貸していたのでは、ついに、自分が消え失せてしまいまする」

教えさとすというのでもなく、気負いこんでいるのでもなく、あくまでも安兵衛は物静かに権十郎へ語りかけている。

吉良の首を討つという初一念については、それ以上、安兵衛は語ろうとしなかったし、権十郎も深く尋きただすだけの心構えを、

「まだ、もち合せてはいなかった……」

ことになる。

しばらくして、二人は〔原治〕を出たが、その前に、堀部安兵衛がいったことは、権十郎にするどい衝撃をあたえた。

「権十郎様。人と申すものは、かならず死ぬるものでござります」

「……………?」

「ちがいますかな?」

「そうです」

「あなた様の御母上も、あなた様を生み落されるや否や、たちまちに亡くなられたと耳にいたしおります」

「はい……」

「まだ、お若かったとか……」

「はい……」
「なれど、その短い母上の御生涯も、長命のお人が死ぬときと同じものなのでござる。十年二十年をふり返って見れば、たった一日ほどにしかおもえませぬ」
「はあ……?」
「よろしいか。人は、かならず、死ぬるものでござる」
あらためて一語一語を権十郎の脳裡（のうり）へきざみつけるように、安兵衛がいった。
「このことを、絶えず、胸におもい浮かべなされ。さすれば……」
いいさして堀部安兵衛が、にっこりと笑った。
晴れ晴れとして、何ともいえぬ笑顔なのである。
「さすれば、おのれが生くる道が、しかと、おわかりになりましょう」
この言葉を、権十郎は生涯忘れなかった。
「……忘れはしなかったが、おれはだめな男よ。若いうちは、堀部安兵衛殿の言葉を、あらぬ方に試し、好き勝手に解釈をしてしまい、いやはや、とんでもない男になってしもうた……」
と、これは権十郎の述懐だが、
「いま一つ、安兵衛殿に、よいことを教えていただいた」
これは、剣術に関わる事だ。
「これが権十郎様にふさわしいことかどうか、それはわかりませぬが……」

と、前置きして安兵衛がいうには、剣士にとって先（ま）ずたいせつなものは、
「眼力（がんりき）を養うことにある」
このことであった。
剣を把（と）って敵に勝つためには、敵を見極めなくてはならぬこと、申すまでもない。
その眼力は、闘いの最中にも失わぬ沈着と冷静から生まれるものにちがいはないが、さらには、人間という動物の器官としての眼のちからを養っておかねばなるまい。
堀部安兵衛は若いころに、つぎのような修行をしたそうな。
友人にたのみ、大刀を構えた自分の顔や躰に、椎（しい）の木の実を投げつけてもらう。
これを切る。
「何と申されます……?」
これには、権十郎も呆気（あっけ）にとられた。
飛んで来る小さな椎の実を、刀で切りはらうことができるものか、どうか……。
「安兵衛殿には、飛んで来る椎の実が切れますのか?」
「十粒のうち、三粒ほどなれば……」
「はあ……」
それほどに、至難のことだ。
「なれど、切れずともたゆまずにおつづけなされ。さすれば、かならず、得るところがありましょう」

「はい……」

なるほど、わが躰へ疾(はし)って来る小さな木の実を見切れなくては、これを切断することができぬ。たしかにこれは、眼力を養うことへつながると、権十郎はおもった。

帰邸して、このことを用人・柴田宗兵衛に告げるや、

「ふうむ。なるほど、なるほど」

宗兵衛は感服して、

「このようなことを、どなたに教えていただきましたか？」

「道場へ、時折、お見えになるお方で、名は知らぬ。なんでも堀内先生の古いお知り合いじゃそうな」

「さようでございましたか」

宗兵衛は、権十郎の嘘に、まったく気づかなかったようである。

四

徳山権十郎は、以後ふたたび、堀部安兵衛の顔を見ることがなかった。

「なれど、十一月の末ごろであったか……柴田宗兵衛が父上の御用事で外神田まで行き、帰って来ると、編笠をかぶった安兵衛殿と大川沿いの道で、出合ったそうな。のちに宗兵衛が申すには、偶然の出合いではなく、安兵衛殿が其処(そこ)に待ちうけていたようであったとか……」

と、権十郎がいっているように、この日、堀部安兵衛は自分が若いころ、世話になった柴

田宗兵衛へ、

「永の別れを告げに……」

あらわれたものと看てよい。

安兵衛は、そのとき、

「これは、これは、御用人殿」

笠をとって、さも偶然の出合いのごとく呼びかけ、

「無沙汰のままにて、何とぞ、おゆるしを……」

「なんの……」

「徳山様御屋敷内に、お変りはありませぬか？」

「おかげにて……」

「権十郎様にも、日々、出精にて……？」

「雨の日も欠かさず、堀内先生道場へお通いでござる」

「それは何より」

そこで柴田宗兵衛が、

「堀内先生の許(もと)へまいらるる御仁(ごじん)よりお教えいただいたとかで、実は、それがしが椎の実を……」

と、語るや、安兵衛は、

「ほう……なるほど、なるほど」

さも、うれしげにうなずきつつ、聞き入っていたという。

のちに権十郎が、

「実はな、宗兵衛。椎の実がことは堀部殿から教えていただいたのだ」

「な、何と……」

「ゆるせ。あの折、堀部殿に出合うたことは、たとえ父上にても……いや、千にも申さぬつもりであった。そのこころは、わかってくれるとおもうが、どうじゃ？」

「は……」

宗兵衛も、返す言葉がなかった。

このとき、すでに堀部安兵衛は、この世の人でなかった。

この年の十二月十四日の夜。

浅野の旧臣四十七名が本所・松坂町の吉良邸へ討ち入り、吉良上野介の首を討ち取った。

討ち入りの指揮をとったのは、浅野家の城代家老だった大石内蔵助（くらのすけ）である。

堀部安兵衛は、むろん、参加をしていた。初一念をつらぬいたわけだ。

十四日から十五日の未明にかけての討ち入りは、積雪の中でおこなわれた。

「十四日の雪は、おれが眠るころに、もう熄（や）んでいたようにおもう。翌朝、柴田宗兵衛が狂人のごとく廊下を走って来て、おれの寝間へ飛び込んだ」

宗兵衛は、権十郎をゆり起し、

「討ち入りまいたぞ。赤穂の方々が、吉良上野介の首級（みしるし）を、みごと、あげられまいたぞ」

昂奮（こうふん）にふるえる声でいった。

「まことか？」

「吉良屋敷の周辺（まわり）は、大変なさわぎだとか……」

「よし、行く」

「なりませぬ」

「なぜ？」

「殿様が、おゆるしになりませぬ」

徳山重俊は、赤穂浪士討ち入りの事を耳にするや、

「堅く門を閉ざし、かまえて外へ出てはならぬ。また、余人を入れてはならぬ」

厳命を下した。

「父上の、気の小さなことよ」

このことであった。

練達の幕吏として、この事件に対する公（おおやけ）の評価が決まるまでは、

（うかつにはうごけぬ）

というところなのであろう。

のちに、将軍までが身を乗り出し、

「なんとしても、忠義な赤穂浪士たちの一命を助けてとらせたい」

などというにおよんで、俄然（がぜん）、徳山重俊は、

「討ち入りの人数の中に、堀部安兵衛が加わっていたことは、徳山家にとっても名誉のことである」

などと、いい出したものだ。

権十郎には、

「いささかなりとも、安兵衛を見ならうがよい」

家来たちや来訪者には、

「むかし、安兵衛が、わしの許へ奉公いたせし折に、わしは、武士の忠義について、よくよく教え聞かせたことがあった」

と、得意満面なのである。

来訪者はさておき、権十郎も家来たちも、徳山重俊の言葉を信じたものはいなかったろう。

権十郎は、乳母の千にだけ、感想をのべたものである。

「わが父ながら、つくづくと愛想がつきた」

権十郎は夜な夜な、寝所で一人きりになると、手文庫の奥深く隠してある秘密の品を取り出し、飽かずにながめ入った。

それは、一振の短刀であった。

あの日、

〔原治〕で、生まれてはじめて蕎麦切を馳走になり、堀部安兵衛と永別をしたとき、

「これを、差しあげます」

安兵衛が、前にたばさんでいた短刀を取り、権十郎へ贈ってくれた。

これは、美濃の国の名工・蜂屋兼貞が鍛えた刃長七寸四分。無反の短刀で、鋭くて優美な姿といい、刃文の美しさといい、実に見事なものだ。

「安兵衛殿のことどもをおもいつつ、兼貞の短刀に見入っていると、その青白い光りの中へ、少年のおれの躰が吸い込まれてしまい、呼吸をしているのだか、いないのだか、それもわからぬほどになってしまったものだ」

権十郎が、この短刀を隠しておいたのは、父に見せると、

「取りあげられてしまうとおもったからだし、その、おれの見こみは、おそらく間ちがってはいなかったろうよ」

とのことだ。

「父上は、そうしたお人……」

なのだと、権十郎はいう。

赤穂浪士たちは本望を達し、吉良邸を引きあげるや、これを幕府へ届け出て、その裁決を待った。

幕府は、とりあえず、浪士たちを分けて四人の大名へあずけることにした。

堀部安兵衛は、大石内蔵助の息・主税以下十名と共に、松平隠岐守（伊予・松山城主）の中屋敷（現・港区三田）へあずけられた。

こうして、元禄十五年も暮れ、新しい年が明けた。

その初春。

徳山権十郎は、わが身にせまりつつある一種の〔異変〕について、いささかも気づいてはいなかったのである。

五

その〔異変〕なるものも、のちになってみれば、

「さしたることもないような……」

ものであったともいえよう。

しかし、徳山権十郎にとっては、まさに一つの〔異変〕であったし、父・重俊にとっては、それこそ、

「驚天動地……」

の〔大異変〕だったにちがいない。

その事件へふれる前に、いま一つ、権十郎にとって忘れがたい〔小異変〕を記しておかねばなるまい。

それは、元禄十四年の初夏のことであったから、浅野内匠頭の刃傷事件が起り、赤穂の浅野家が断絶し、堀部安兵衛や奥田孫太夫が堀内道場へ姿を見せなくなって間もなくのことだ。

めずらしく、権十郎が高熱を発し、病床に臥した。

ときに権十郎は、十二歳である。

いまでいう肺炎か何かではなかったか……。

ともかくも一時は、徳山重俊の請いによって診察をしてくれた表御番医師の遊佐良仙が、

「はて、これは……」

くびをかしげたほどの重態だったそうな。

道場の帰途、驟雨となり、供をしていた若党の小沼治作が、あわてて近くの傘屋へ走り込み、買いもとめた傘をさしかけるのへ、

「よい。いらぬ」

と、権十郎は拒絶し、肩をそびやかして雨に打たれるまま、わざとゆっくり足を運び、ずぶ濡れになって帰邸した。

そして、その夜から発熱したのだ。

何故、このようなまねをしたかというと……。

去年の秋。まだ、権十郎が堀内道場に残っていたとき、驟雨となった。

そのとき、道場の主・堀内源左衛門が外出先から道場へ帰って来る姿を、権十郎が見たのである。

堀内源左衛門は、驟雨の中をいささかもあわてず、雨に打たれるまま悠然として、常に変らぬゆったりとした歩みぶりで門を入って来た。

その落ちつきはらった姿のよろしさは、少年の権十郎の目に、しっかりと灼きついてしまったものだ。

いかにも男らしい。

雨が降ろうが槍が降ろうが、

「おれの歩みぶりは、いささかも変らぬ」

とでもいいたげな師の姿であった。

権十郎は唸った。

(おれも、やってみたい!!)

このことである。

朝、屋敷を出るときに雨が降っているなら、これは当然、傘をささねばならぬ。

それでなくては、

「虚け者に、なってしまう……」

からだ。

だが、おもいもかけぬ驟雨であったから、権十郎としては、この機会を逃してはならぬ心境であったのだ。

「寄るな。はなれてついてまいれ!!」

と、若党を叱りつけ、いまこそとばかり、濡れて歩いた。

実に、よい心もちであった。

そのかわり、重病にかかってしまったのだから、

「おろか者めが!!」

と、父・重俊に叱りつけられても、返す言葉はない。

このときの、乳母の千の看病ぶりについては、口やかましい徳山重俊が、

「ようも看病をしてくれた」

と、千に礼をいい、

「金三両を賜わった……」

ことを見ても、およそ知れよう。

奉公人に礼をいうような重俊ではない。

幕府から二百俵の扶持をもらい、名医の評判も高かった遊佐良仙を招くことができたのも、幕臣としての徳山重俊の羽振りをものがたるものだし、良仙の手当もよかったのであろうが、千の必死の看病も、たしかに、

「ものをいった……」

のである。

三十をこえて、躰の肉置きがゆたかになり、

「千は肥えたな」

権十郎がいうや、さも口惜しげな眼の色になったほどの千の躰が、権十郎にいわせると、

「おれの目には、半分になって見えた……」

ほどに憔悴してしまったことから見ても、千はそれこそ我身にかえても、若様の病気を癒したいとおもっていたのであろう。

ともかくも、権十郎は危機を脱した。

あまりに剣術へ打ちこみ、師の堀内源左衛門へ傾倒するのあまり、ついには無我夢中となって稽古にはげみ、まだまだ大人になりきらぬ躰を、

「知らず知らず、痛めていたのでありましょう」

遊佐良仙が、徳山重俊へ、そういったという。

いったんは生死の境をさ迷った……というと大仰だが、病患に衰弱しきった自分の躰が、徐々に回復してゆくときのこころよさ、うれしさは、それこそ、

「たとえようもないほど……」

であった。

食欲も出て、それが、たちまち旺盛（おうせい）になったときの、口にする物のうまさも、またこれ

「たとえようもない……」ものなのである。

「あのときのことをおもい起してみると、いま一度、死病に取りつかれたいものよ」

などと、後年の権十郎が或る女に語っている。

「乳母であった千と申すものが、韮（にら）の雑炊を煮てくれ、これに、ふわりと卵をかけまわしたものを、内証で、よくこしらえてきてくれた。いや、そのうまいこと、うまいこと。まったくもって、たまったものではなかった……」

と、これも〔或る女〕への述懐である。

それに、権十郎は昼となく夜となく、実に、よくねむった。ねむりこけた。

「喰（くろ）うてはねむり、喰うてはねむり……というは、あのときのことよ」

であった。

そして、あの夜が来た。

六

回復しつつあるといっても、遊佐良仙は、

「まだまだ、起きあがってはなりませぬ。権十郎殿の年齢で、こうした大病にかかったときは、老人の病と同じく、どこまでも大事をとらねばなりませぬ。若い元気にまかせ、もはや大丈夫と起きあがってむりをいたすと、……それは、いまはよろしくとも、かならず、のちのちにおもい知らされることになるのでござる。人の持病と申すものは、およそ、こうしたことから起るもので」

と、いった。

「なるほど」

うなずいた徳山重俊は、わざわざ、千をよびよせて、遊佐良仙の言葉をつたえ、

「かまえて、良仙先生の申さるるごとく、大事をとって権十郎に養生をいたさせるよう、屹（きっ）と申しつけたぞ」

いいわたしたものである。

いまや、千に対する重俊の信頼ぶりは大変なものであって、良仙もまた、しみじみと、

「乳母どのの看病あればこそ、わしの薬も効いたのじゃよ」
ほめてくれたそうな。
権十郎もまた、うつらうつらと臥床(ふしど)の中ですごす日々が、まるで夢の中で暮しているようなたのしさであって、
「おれの怠けごころは、あのときに生じたものよ」
と、よくいったものだ。
その日の夕暮れに、食事をすませた権十郎へ、
「すぐに、おねむりあそばしては、お躰に毒でございますよ」
千が枕もとへ来て、いろいろと世話をやきながら、
「それにしても、堀部安兵衛様は、いまごろ何処(いずこ)におられましょうな……?」
とか、
「主家を失うた浅野家の方がたが、お気の毒でございます」
とか、
「若様は、いかがおもわれます?」
「何を?」
「世間のうわさのように、赤穂の浪士方は、吉良様御屋敷へ討ち入るつもりなのでございましょうか?」
「申すまでもない」

「では、堀部様も?」
「安兵衛殿が他の方がたに遅れをとるものか。千も、おれと共に高田の馬場での安兵衛殿を見たではないか」
「ほんに……」
千は、つとめて、権十郎の興味をそそる話題をもち出す。
だが、そのうちに、権十郎はねむくてたまらなくなった。
いつものことである。
「うむ、うむ……」
千の声に生返事をあたえているうち、いつの間にか、権十郎はねむりに落ちていった。
その前に、
「さ、すこし、おみ足をおさすりいたしましょう」
そういった千の声をおぼえている。
これも、このごろの毎夜のならわしのようになっていた。
寝たきりの権十郎の躰は知覚がおとろえてしまい、床擦れのようなものもできていたし、その手足をもみほぐし摩擦することは、遊佐良仙が千にいいつけたことであった。
申すまでもなく、千のやわらかな、厚味のある掌(て)で、手足を撫(な)でさすってもらうことは、これまた、たとえようもなくこころよいのである。
どれほどの時間をねむっていたろうか……。

権十郎は、わが顔の上へ蛞蝓が這いまわっている夢を見ていた。
幼いころに、裏門のあたりで、この小さな軟体動物を権十郎は何度か見ている。
蛞蝓は、顔の上を自由自在に這いまわったあげく、権十郎の口の中へぬるぬると這い込んできた。
(うわ……汚ないやつめ……)
息苦しくなり、踠いた権十郎が、はっと目ざめた。
「あっ……」
すぐ耳もとで、うろたえたような千の声がして、
「わ、若様。いかがなさいました?」
「う……」
「わ、若様……」
なんと、千が着の儘の姿で臥床へ身を横たえ、自分に添い寝をしているではないか。
「千か……」
「は、はい」
乳母の千が権十郎の添い寝をしなくなってから、七年ほどがすぎているだけに、権十郎は不審におもった。
「千。何としたぞ?」
「はい……あの……あの、若様が、何やら魘されておいであそばして……あの、身を震わせ

ておいでになりましたので、千は、おどろいて、おもわず……」
しどろもどろにいいながらも、千は臥床から出ようとはせぬ。
「夢で、蛞蝓が出てまいった……」
「まあ、なめくじらがでございますか?」
「うん。あいつ、ぬるぬるして、気色のわるいやつだ」
「はあ……」
「おれの、口の中へ這い込んでまいった」
「まあ……」
「気色がわるうて、おもわず、目がさめた」
「わるいわるい、なめくじらでございますこと」
「なに、夢のことよ」
いつの間にか、千の右手が伸びてきて、権十郎の肩から胸のあたりをさすりはじめた。
「ああ、気もちがよい」
「落ちつかれましたか?」
「うん……」
権十郎は幼いころ、千に添い寝をされたときのことが、おぼろげに脳裡へ浮かんできて、何やら甘えた気分になってきた。
千の息づかいが、妙に荒いようであった。

病間の障子も襖も閉ざされてい、行燈も権十郎の傍から離れた場所へ移されてい、添い寝してくれている千の表情は定かでない。

初夏の夜の生温い闇が、重くたれこめていた。

それにしても熱い。

千の躰の熱さに、権十郎はびっくりした。

衣裳の下の体温が、直につたわってくるようなのだ。

千の躰から、これまでに嗅いだこともないような匂いが濃厚にただよってきて、それが闇の中に蒸れこもっている。

何ともなしに、権十郎は息苦しさをおぼえてきた。

肩を腕を、胸を撫でさする千の掌のうごきは熄むことを知らない。

「う……」

「若様。いかがなされました?」

「暑い」

「まあ……」

「喉が、かわいた……」

「はい。いま、お水を……」

ようやくに、千が臥床から出た。

(このまま、千は、添い寝をせずに引き下るのか……?)

そうおもうと、さびしくなった。

千が、枕もとの水差しから茶わんへ水を移している。

権十郎は、半身を起しかけた。

「あ……なりませぬ」

「何故じゃ?」

「若様。御病体でございます。千が、水を、さしあげまする」

ささやくようにいう千の声が、上擦っていた。

(病は、もう癒えたというのに、千は、おかしなことをいう)

と、権十郎はおもった。

現に、夕餉をしたためたときは、臥床から出て、膳に向って坐り、千の給仕を受けたのである。

だが、権十郎は千のいうままにすることにした。

たしかに、喉はかわいていた。

すると、突然、千の顔が仰向いている権十郎の顔へおおいかぶさってきた。

「あっ……」

と、いう間もなかった。

千の、ぼってりとしたくちびるが、権十郎のそれへ密着し、千の口中から水がながれこんできた。

水をのみこんだ権十郎が、
「せ、千……」
「若様。み、み、水が、こぼれるといけませぬゆえ……」
何をいうことか。
これまでにも千は、茶わんの水を器用にのませてくれたではないか……。
「の、喉のかわきは……あの、もう、よろしゅうございますか?」
「うん……」
「では……」
いうや、またしても千が、臥床の中へ入ってきた。
それは権十郎にとり、決して、
(嫌なことではなかった……)
のである。
「若様……若様……」
「うん?」
「いますこし……いますこし……」
「何じゃ?」
「お躰を、おさすりいたしましょうか?」
「うん」

七

千の掌が、権十郎の胸をさすりはじめた。
今度は、こころよいというよりも、何やら妙な気分になってきた。
千が口うつしの水をのませてくれたときから、権十郎の官能は変化をみせてきている。
喉が、また、かわいてきた。
ぴたりと寄りそっている千の息づかいが、火のごとく熱かった。
千は、もはや、口をきかぬ。
「せ、千……」
かすれ声で権十郎がささやいたけれども、千はこたえぬ。
千の掌は、権十郎の胸から腹のあたりへ移ってきた。
「せ、せ、千……」
「………」
権十郎は、自分の心ノ臓が、胸を突き破って転げ出そうな気がしてきた。
(あ……?)
突然、権十郎は気づいた。
股間が、引き攣れるように痛むのである。
性器がふくらみ、硬直している。

これまでにも、こうしたことがないではなかった。
そして、それは、朝の目ざめのときばかりであった。
(小水(しょうすい)がたまっているのだな……)
そう感じて、事実、厠(かわや)へ行けば勃起(ぼっき)は消えたのである。
だが、いまは、朝の目ざめではなかった。
権十郎は、わが性器がふくれあがる前から目ざめていたのだ。
そして、千の掌が自分の肌をさすり撫でるうちに、権十郎の躰が、
(妙なことに……)
なってきたのである。
(こ、これは……これは何だ。どうしたことなのか……?)
尚(なお)も、千は権十郎の腹を撫でさすることをやめぬ。
千は、おのれの顔をひたと権十郎の頰のあたりへ押しつけてきた。
権十郎も、言葉をうしなっている。
腹をさする千の手の、その指の先がちらちらと権十郎の膨脹したものへ触れてくる。
目が暗み、頭が痺(しび)れてきた。
「若様……」
急に、千がささやきかけてきた。
「う……」

「あの、むかしのように……むかしの若様と乳母のように……」
「あ……」
権十郎は、おどろいた。
いつの間にやら、千が、胸もとを開(はだ)けているではないか……。
こんもりとした千の乳房が、権十郎の顔へ押しつけられた。
「う……」
うす汗に濡れた千の乳房から、得もいわれぬ匂いがする。
幼児のころ、亡母のかわりになって、懸命に自分を育ててくれた千の乳房を、権十郎はたしかに吸ったのであろうが、むろん、記憶はない。
権十郎の口へ、わが乳首を押しこむようにしたとき、
「ああっ……」
千は、何ともいえぬ声を発したものである。
千の左腕は、しっかりと権十郎の頭を抱えこんでいる。
そして右手には、にわかにちからがこもり、権十郎の股間へさし入れられてきたのである。
権十郎は呻(うめ)いた。
背中の下から腰のあたりにかけて、するどい衝動が起り、
「たまりかねたような……」
おとこのちからが迸(ほとばし)った。

「ああっ……」
またしても千が、低く叫んだ。
権十郎は、息絶えたかのように、ぐったりとしている。
「わ、若様……」
千が周章して、はね起きた。
「若様。若様……」
「せ、千……」
「あ、お気が……お気がつかれましたか……」
「む……」
すると、千が身をもみ、狂おしげに、
「おゆるし下されませ、おゆるしを……千が……千がいけなかったのでござります。若様、何とぞ千を、おゆるし……」
と、泣き噎(むせ)んだ。
（何故、千は泣くのか……?）
権十郎にはわからぬ。
格別に、千が自分へ、
（いけないことをしたとは、おもわれぬ……）
のであった。

頭の中が、まだ、痺れている。
千が、病間から走り出て行った。
何も彼も気怠(けだる)くなってきて、ぼんやりと、権十郎は臥床の中で横たわっていた。
しばらくして、千が、ひっそりともどって来た。
熱い湯をみたした塗桶(ぬりおけ)を枕もとへ置き、木綿布を湯にひたしてしぼり、千は権十郎の躰をぬぐいはじめた。
一言も、千は口をきかなかった。
躰をぬぐわれながら、権十郎は深いねむりへ落ちこんでいった。

八

権十郎が、ひどい羞恥(しゅうち)の念におそわれたのは翌日になってからだ。
前夜のことを、いちいちおもい出すたびに、われ知らず顔を赧(あか)らめた。
そしてまた、発熱したのである。
急ぎ、遊佐良仙邸へ使いが走った。
駈けつけて来た良仙は、権十郎の診察を終えるや、
「昨日は、密(ひそ)かに起きあがられ、夜の庭を歩かれたのでしょうな?」
と、いった。
良仙の口もとに微笑が浮いていた。

「はい」

権十郎が、うなずいた。

「ならぬと、申しあげましたぞ」

「はい」

「ま、よろしゅうござる。父上には内証にしてさしあげましょう」

「かたじけなく……」

権十郎は、しおらしげに礼をのべた。

良仙のうしろに、千がひかえていた。

千も、うつむいている。

うつむきながらも、不安でたまらぬような視線を、診察する良仙の手もとへ向けて、

「あの……大事ないのでございましょうか？」

「千どの。気をつけてもらわねばならぬ。おぬしにも似合わぬことではないか」

「おそれ、いりましてございます」

「ま、よろしい。間もなく元気になられようし……」

「ま、まことでございますか……」

「権十郎殿の躰に、ちからがついてきたところゆえ、まず、よかった」

遊佐良仙が帰ったあと、千は病間へもどって来なかった。

夕餉のときも給仕も、別の侍女がした。

「千は、いかがした？」

「何やら、お熱が出ましたそうでございます」

「千も、か……」

「はい」

「ふうん……」

権十郎は憮然となった。

そして、

（嘘だ）

と、直感した。

千は四日ほど、父・柴田宗兵衛の用人長屋へ引きこもったきり、一歩も外へ出なかった。

そのことを告げに、柴田宗兵衛があらわれたとき、権十郎は、

「おれの看病で、千も躰を損ねたのだろう」

「おそれいりまする」

「おれも、もう大丈夫ゆえ、ゆるりと躰をやすませるよう、千に申しつたえてくれ」

「かたじけなく……」

「ずっと、寝ているのか？」

「はい。ろくに物も食べませぬ」

「いかぬな」

「困りました」
「医者に……そうだ、遊佐良仙先生に診ていただこう」
「とんでもないこと。もったいのうございます」
「いや、おれから父上へ、お願いしてみる」
「いえ、大事ございませぬ。それに千は、どうしても医薬の手を拒んでおりますので」
「ほう……そうか……」
やがて千は、ふたたび、権十郎の病間へあらわれるようになった。
千は、さらに痩(や)せおとろえて見え、権十郎は息をのんだが、あえて、その理由を問おうとはしなかった。はっきりとはせぬまでも、いまの千の心境が何となくわかったからである。
千も権十郎も、顔をそむけ合い、ぎごちなく、必要なだけの会話をかわした。
以後も二人は、二人だけの秘密を決して他に洩らしたことがない。
このことについてだけは、徳山権十郎の述懐が聞けない。
権十郎は全快した。
堀内道場へも、ふたたび通うようになったし、めきめきと体力を回復したが、
「当分、むりはならぬぞ」
と、徳山重俊がいいわたした。
重俊も、いまは、ただ一人の跡取りとなった権十郎に、この上、万一のことあってはとおもったのであろう。

それは権十郎へ対する父としての愛情から出たものではない。
どこまでも、徳山の家名を、
「絶やしてはならぬ」
という一事から出たものであって、そうした父の胸の内は、権十郎自身がもっともよく、わきまえていたのである。
ところで千は、これからのち、以前の豊満さを取りもどすことがなかった。
それでいて病身に変ったというのでもない。千は長寿をたもって世を去ることになる。
口数も少なくなったし、忠実に権十郎へ仕えることは従来のままであったが、以前のごとく親しげに笑いかけることもなくなり、冗談もいわなくなった。
そのくせ、他の侍女たちへは口やかましくなり、評判がわるくなったようだ。
主家の若様に対して、
(あまりにも、はしたないことをしてのけてしまった……)
激しい後悔と、自分(おのれ)への屈辱とに、千は苛(さいな)まれつくし、
(別人のような……)
千になってしまったのであろうか。
「千の躰には、別条ないのか?」
とか、
「一度、遊佐先生に診ていただいたらどうか?」

などと、権十郎もさすがに心配になり、柴田宗兵衛へすすめたことも何度かあった。

だが、権十郎もまた、以前の権十郎ではなくなっていたのである。

(あのころから、おれは、少年(こども)ではなくなったような……)

おもいがしてならぬ。

千とのあの夜のことが、折にふれて、権十郎の脳裡へ浮かぶと、どうしようもなくなり、自分の手が自分の股間へ伸びてゆくのを、とどめることができなくなってくる。

それまでは、屋敷にいる若い侍女などを見ても、格別な気もちになったわけではない。

それなのに、侍女たちのみではなく、道場の行き帰りに路上で見かける女たちが、急に、美しく見えはじめた。

寝所の闇に目を閉じ、あの夜のことをおもい起しているとき、千のかわりに、そうした女たちがあらわれてくることになった。

夏がすぎ、秋になるころ、千は十歳も老けこんだような顔つきになってしまい、いたく、権十郎の夢想に幻滅を感じさせたのである。

権十郎は、清らかだった自分の躰が、にわかに汚ならしく、生ぐさい匂いを発散するように感じ、何も彼も忘れようとして、ただもう一心不乱に剣術へはげみはじめたものだ。

自分の剣術が急速に上達したのも、

(あのころからだ……)

と、権十郎はおもっている。

屋敷へ帰って、父の前では何くわぬ顔をしていたが、堀内道場での修行ぶりは発病以前よりも激しくなってきた。

「何によらず、芸の事は……」

と、権十郎は剣術のことをいった。

「人の躰、人の手足をもってする芸の事は、おそくとも十歳までに始めなくてはならぬものよ。十歳を境に三、四年ほどで、すべてが定まってしまうものだ。いやなに、芸の事のみではない。人の一生も同じことよ」

人の一生は、それぞれの十歳前後の生活によって、

「定まってしまうといってよい」

と、いうわけである。

「おれも、そうであった」

いずれにせよ、徳山権十郎の女性(にょしょう)への興味は、好むと好まざるとにかかわらず、ぬきさしならぬものとなっていた。

それを自分でも、もてあますかたちになり、権十郎は我身を苛(いじ)めるかのように、剣術にはげんだ。

去年から、本郷の春木町三丁目に住む儒者・堀本平太夫のもとへ通い、読書と習字の指導を受けるようにもなっていた権十郎である。

堀本先生宅は、堀内道場への道すじでもあり、便利であった。

権十郎は、だれの目にも、

「大人びて……」

見えるようになり、

「まことにもって、たのもしいかぎりではないか」

「御病気の後、にわかに、お変りになられた……」

などという家来たちの声を、千は複雑なおもいで聞いていたことであろう。

権十郎の躰は、さらに、たくましさを増した。

こうして……

元禄十五年の年が来て、権十郎は堀部安兵衛と両国橋で出合うことになる。

相変らず、父・重俊は口やかましかった。

「徳山家の跡取りとして、はずかしからぬ武士に仕立てあげねばならぬ」

というわけだが、それこそ、

「箸の上げ下しに……」

権十郎へ注意をあたえなくては、気がすまぬらしい。

いかに注意を受けようとも、叱りつけられようとも、権十郎は以前のような反抗の表情を見せなくなった。

だまって、父の声を聞き、父の顔を見まもっている。

それでいて、父のいうことに屈従するかというと、そうではない。興のおもむくまま、夜

に入るまで道場へ居残ることもあって、そのたびに重俊から叱責されたが、平然としていた。

徳山重俊は、元禄十五年を迎えて六十五歳になり、この年の四月九日をもって、幕府から、

「盗賊追捕の役目」

を、おおせつけられたのである。

重俊は、にわかに多忙となった。

この役目は、自邸が〔役宅〕を兼ねることになってい、屋敷内の大改造をおこなわねばならぬ。大きな出費であった。

徳山重俊は、毎日、不機嫌をきわめていた。

この役目は重俊のみならず、どの幕臣も「損な役目」として、忌みきらっていたものなのだ。

九

盗賊追捕の役目というのは、

「盗賊改方」

とも、よばれている。

いま一つ、

「火附改方」

という役目があって、これは、放火犯を取り締るものだ。

後年に、この二つの役目を合せて「火附盗賊改方」という役職になるわけだが、権十郎の

父・徳山重俊が元禄十五年に就任したときは、まだ一つの役職になっていない。

徳川幕府の本拠である江戸には町奉行所という市役所と警察を兼ねた官庁がある。

盗賊や放火の犯行を、町奉行が取り締ることはいうまでもない。

しかし、そこは何といっても官庁であるから、諸般の手つづきも定まっており、咄嗟の場合におもいきったことができぬ。

たとえば、盗賊なり放火犯人なりが、寺院や神社の内へ逃げ込んだとする。

すると、寺院や神社は〔寺社奉行所〕の管轄に入るから、そちらへ連絡をつけておかぬと、みだりに踏み込むこともできぬ。

また、犯人が江戸を脱出し、他国へ逃げた場合も、町奉行所の役人がこれを追跡するについて、しかるべき手つづきが必要となる。

そうしたことで、みすみす、兇悪の犯人を取り逃してしまいかねない。

そこで幕府は〔火附〕と〔盗賊〕の改方という一種の特別警察を設置した。

「この御役目は、無頼の徒を相手に、細ごましく面倒な手つづきもいらず、おもうさま刑事にはたらく、いわば軍政の名残りをとどめた荒々しい御役目である」

これが、そのねらいであった。

日本に戦乱が絶え、徳川将軍の威風のもとに、平和な時代を迎えてより約八十年がすぎている。

いまは五代将軍・徳川綱吉の治政であるが、江戸・大坂などの大都市は、華美で贅沢な風

潮が人心を浮き立たせ、あまりにも長かった戦国の世の、戦役のために費やされていたエネルギーが、人それぞれの欲望にそそがれることになった。

これまでには、人びとが必要としなかった嗜好品が多種多様に生産されるようになり、農村はさておき、町の暮しのすべてが便利になった。

その便利のための道具や人の職業が、さまざまなかたちをとって増える。

いくらでも、

「金がほしい……」

世の中になってきたのである。

戦場へ出ることもなくなった武士たちは半ば官僚化しつつあった。

官僚となれば、何をするにも制度と形式を重んずることになる。

手つづきを増やし、役職を増やし、彼らのすることを増やさなくては、俸給・俸禄をもらう理由が立たぬからだ。

体裁や見栄が重んじられてきて、いきおい、出費が多くなる。

そのくせ武士は、みずから生産をしないのだから、しだいに勝手元が苦しくなる。

いつであったか徳山重俊が、用人の柴田宗兵衛へ、

「年々に、このように出費が増えては、武家も立ち行かなくなるわ」

苦にがしげにいったのを、権十郎はおぼえている。

ともかくも、ふところへ金銀がころげこむのは町人ばかりといってよい。

その一方では、人口が増えるし、したがって、食いはぐれた者が故郷を出て浮浪の徒となる。
赤穂の浅野家のように、幕府が取り潰（つぶ）した大名たちの家来が浪人となって、江戸や大坂へあつまって来る。
浮浪の者たちも、農村や地方の町にいては、とても食べてはいけず、大都市へ群れあつまる。
地方は、主として諸大名の領国であり、見知らぬ浮浪人が住みつくことをゆるさぬ。
しかし、江戸・大坂のような大都市は別であって、金さえあれば、どこにでも潜りこめ、目立つこともないのだ。これは、いまもむかしも同じなのである。
江戸に種々の犯罪が増えるのも、当然の成り行きといわねばなるまい。
さて……。
幕府が〔盗賊改方〕をもうけたのは、寛文五年（一六六五年）のことであった。
この役目は、幕府の先手組（さきてぐみ）の頭（かしら）が兼務することになっている。
ところが幕府は、それから三十余年を経た元禄十二年に両改方を廃止した。
そして、三年後のいまになって、
「やはり、あったほうがよい」
ということになり、このたび、徳山重俊が任命されたのである。
ゆえに重俊は、このとき先手組の頭をつとめていたことになる。
与力八名、同心三十五名が徳山重俊の配下であった。
盗賊改方に役扶持が支配されるのは後年になってからで、いまの時点では、徳山重俊がすべてをまかなわなくてはならぬ。

先（ま）ず、千五百坪におよぶ自邸の内へ、犯人を押し込める牢屋（ろうや）を造り、取り調べをおこなう白州を設けなくてはならない。
配下の者の詰所や長屋も新設することになる。
それのみか、市中見廻りや犯人探索のための費用を、長官みずからが支出せねばならぬ。
御役についた徳山重俊が不機嫌になったのも、こうした事情による。
それに、重俊にとっては、
「おもしろくない……」
ことが、まだあった。
整然たる法規と威力によって将軍ひざもとの大江戸を治める町奉行所にくらべると、盗賊改方は一段も二段も、
「下った御役目」
に、見られているのだ。
自意識も虚栄も人一倍に強い徳山重俊としては、たしかに、この役目につくことが不愉快なことであったろう。
「あは、はは……」
と、当時をおもい起して、徳山権十郎がよく笑ったものだ。
「父上はな、盗賊追捕の御役目をおおせつけられるのと同時に、早くも、御役御免の事を考

え、諸方へはたらきかけておられたようだ」

　いかにも、能吏をもって自認する徳山重俊らしい。

　けれども、重俊の希望がかなえられるまでには、あと五年を待たねばならない。

　盗賊改方の長官に就任したとき、徳山重俊は六十五歳になっていた。

　屋敷内では謹厳そのものだが、幕府への猟官運動にも長けていた重俊は、数々の役職を歴任しており、

（幕臣として、わしは、やれるだけのことはやった……）

　みずから、なぐさめていたようだ。

　五十へかかる年齢までの重俊は、立身出世の階段の、もっと先の先まで、

（のぼりつめてくれよう）

　ひそかに、そうおもっていたにちがいないが、六十をこえてしまっては、

（もはや、これまで……）

　あきらめざるを得なかったろう。

　人の生涯が五十年までと、いわれていた時代なのだ。

　気力にも躰力にも限界をおぼえていただけに、盗賊改方などという、盗賊や無頼の徒を相手にいそがしくはたらくような御役目ならば、

（むしろ、つとめぬほうがよい）

と、おもったにちがいない。

　先祖以来、蓄積した財産を減らすばかりで、自分と徳山家の将来にとっては、

「何の益もない……」

　御役目なのである。

　盗賊改方になってからの徳山重俊の評判は、よくなかった。

「ともあれ、あのころの父上は、何もしなかった」

と、権十郎がいっている。

　長官がこれなのだから、配下の与力・同心たちも、いきおい、役目に熱がこもらぬ。

　たまさかに、悪漢どもを捕えて来ても、重俊は、そうしたことに関わることさえ、

「汚らわしい……」

というわけで、取り調べも、ほとんど配下の者たちへまかせていたようだ。

　したがって、盗賊どもが跋扈することになる。

「盗賊改方は、何をいたしておるのじゃ?」

「徳山重俊も、老いぼれ果てたような……」

「いや、むりもないわえ。あの御役目ではのう」

　などと、うわさがしきりであったが、そのうち、徳山重俊の存在は日に日に、うすくなってしまった。

　これで、盗賊どもを何人も捕えるとか、勇ましい活躍を見せるとかすれば重俊の名もあがったろうが、

「何もしない……」
のでは、影がうすくなるのも仕方がない。

十

このあたりで、はなしをもどしたい。
で、徳山権十郎の身に起った、つぎなる〔異変〕へふれる前に、堀部安兵衛の死について書きのべておかねばなるまい。
赤穂浪士の吉良邸討ち入りのことは、江戸のみか、諸国の人心をも昂奮せしめた。
五代将軍・綱吉の治政は、いわゆる〔元禄時代〕の文化・風俗に新鮮華麗な花を咲かせたけれども、将軍みずからが率先して贅沢な風潮をまねいたのであるから、そのしわよせは、当然、貨幣の改鋳や年貢の増徴などになってあらわれる。
町人のふところはあたたかくなっても、かんじんの生産者が、いつまでたってもめぐまれぬという放漫財政になってしまった。
初代将軍・徳川家康などは、寒中の江戸城内を、いつも素足で歩いていたそうな。
その大きな足は、ひびやあかぎれで血がにじんでいたそうである。
そうした剛健の気風が、いささかでも残っていたのが、五代将軍の独裁政治によって、ほとんど消え去ったといっていえぬこともない。
浅野内匠頭の刃傷事件なども、その一つのあらわれといってもよいのではないか……。

浅野内匠頭という大名は、つぎはぎだらけの足袋を、
「もう、どうにも、つぎはぎができぬ……」
ほどになるまで、はきつづけていたそうである。
こういう人柄であるから、例年の勅使供応の形式や内容が年ごとに派手やかになり、むだな出費が際限もなくふくれあがる事実に、眉をひそめていたにちがいない。
浅野と吉良との確執が、どのような実体をもっていたか、それはいまも不明である。
しかし、人びとの感覚としては、それぞれに納得できたのではあるまいか。
事実を見きわめもせず、即日のうちに片手落ちの裁決を下し、浅野家を断絶させた将軍・綱吉への非難は大きい。
将軍も、若いころは英才をうたわれたほどの人物であったから、こうした世上の非難を、敏感に受けとめたといってよい。
それが証拠に、事件後の、将軍と幕府の、吉良上野介へ対する態度は、まことに冷たかったのである。
元禄十六年の年が明けると、幕府は、諸家へあずけてある赤穂浪士の処分につき、本腰を入れて評議を重ねた。
将軍の側用人・柳沢吉保は沈黙していた。
世論は、あげて、赤穂浪士たちへ同情をよせ、その義烈をほめたたえている。
将軍・綱吉も、今度は、うかつに口をさしはさまぬ。

だが綱吉は、
「何ともして、大法を曲げずに、浪士たちの一命をたすけてとらせる道はないものか?」
と、老中へもらしたそうな。
このことをもれ聞いた徳山重俊は、
「さすがに上様じゃ」
などと、もっともらしくうなずいて見せたりしたが、権十郎は少年ながらも、
(妙なことも、あればあるもの……)
と、おもった。
そうではないか。
将軍みずから大法を曲げて、激怒のあまり、浅野内匠頭を処罰しておきながら、今度は世論をおそれるというよりも、
「あっぱれ、忠義の者どもである」
と、赤穂浪士たちを称讃しているのである。
柴田宗兵衛が或日、権十郎に、
「若様は、何とおもわれますな?」
「赤穂の方がたの始末についてか……」
「はい」
「さて……」

「浪士の方がたの一命が、たすかりましょうかな?」
「わからぬ」
「若様は、たすかったほうがよいとおもわれますかな?」
「そりゃ、申すまでもないこと。さすれば、堀部安兵衛殿に、また会える」
「いかさま」
「宗兵衛。その顔つきは何としたぞ?」
「いえ、別に……」
「浮かぬ顔ではないか。宗兵衛は、赤穂の方がたの切腹をのぞんでいるのか?」
すると柴田宗兵衛は、泣き出しそうな顔つきになりながらも、
「はい」
はっきりと、うなずいたではないか。
「そ、宗兵衛……」
「いえ。私も、若様と同じく、赤穂の方がたを死なせとうはございませぬ」
「ならば、何として切腹をのぞむか?」
「大きな声では申されませぬが……」
「ふむ……?」
「ここで、赤穂の方がたの一命をたすけたりいたしますと、もはや、徳川将軍の威風も何も、あったものではございませぬ。さすれば、世の中の乱れがいよいよ、ひどく相なりましょう」

「そうか、な……?」

「おもうてもごらんなされ。赤穂の方々は、将軍家おひざもとの御府内において、ことわりもなく武器をたずさえ、吉良屋敷へ乱入いたしたのでござる」

「ふむ……」

「これは、まさに大罪人。いささかも、ゆるしてはおけますまい」

権十郎が押しだまり、白い眼で宗兵衛をにらんだ。

「爺が申すこと、まだ、おわかりなりませぬかな?」

「知らぬ」

「ここが大事のときでござる。将軍家も幕府も、今度こそは、片手落ちのお裁きをなされてはなりますまい」

柴田宗兵衛は、自分の胸に、いいきかせるように一語一語、ちからをこめていったのである。

十一

そのときの徳山権十郎は、

「理も非もない。ただもう、おれは、堀部安兵衛殿を死なせたくはない。安兵衛殿が死なずにおられるなら、かならず、また、会うことができる。その一念しかなかったのだ。おもえば、むりもないことよ。おれはあのとき、まだまだ少年(こども)だったのだから……」

また、

「他の赤穂の方がたについては、念頭になかった。安兵衛殿さえたすかればよいという……いやはや、まったく身勝手な念願であったわけだ。それでいて、将軍(うえさま)や幕府(こうぎ)のなされ方というものが、いかに考えても、妙なものにおもえてならなんだ」

そしてまた、

「それにしても柴田宗兵衛は、いまになってみると、まことに、よくできた人物であった。いや、おれなど、くらべものにならぬし、ましてや父上の用人としては、できすぎた男で、もったいないほどの家来であった」

さて……。

大目付、寺社・町奉行・勘定奉行などから成る幕府閣僚が構成している〔評定所(ひょうじょうしょ)〕の意見がまとまり、将軍・綱吉のもとへ差し出された。

その大意は、つぎのごとくであった。

一　吉良上野介の養子・左兵衛(さひょうえ)は、義父・上野介が首をとられたというのに、自分だけが生き残っているのは、ふとどきである。切腹を申しつけられたい。

一　上杉綱憲は、実父の上野介の首を取った赤穂浪士たちに対し、手をつかねて見のがしている。これは、武士道の風上にもおけぬふるまいであるから、その領国を取りあげるべきである。

一　赤穂浪士の行動に誤りはあるが、いちがいに徒党と見なすことはできまい。

一　浪士一同は現在、四家におあずけとなっているのだから、しばらく、このままにしておき、おもむろに処分をきめたほうがよろしかろう。

吉良方は、さんざんなものだ。
それに引きかえ、赤穂浪士への贔屓(ひいき)は歴然としている。
これは幕府閣僚が、世論に、
(おもねている……)
と、権十郎でさえおもったことだ。
それでいて尚(なお)、
「おれは、安兵衛殿を死なせたくはなかった……」
のである。
「まことに、人間と申すものは勝手なものよ」
であった。
さらに、幕府閣僚は、
「何ともして、赤穂浪士の一命をたすけたい」
という将軍・綱吉にも、媚(こ)びているのである。
将軍は、当時の有名な学者たちの意見も聞いた。
学者たちは、さすがに、赤穂浪士の、

「やむにやまれぬ……」
行動をみとめながらも、
「今度こそは、天下の大法を乱してはならぬ」
という冷静な意見が多い。
学問に淫し、学者を重んじる将軍・綱吉だけに、これを無下(むげ)に、しりぞけるわけにはまいらぬ。
綱吉も、今度は、
(後世に指さされるようなことをしてはならぬ)
と、自戒しているだけに、迷いぬいた。
おもいあまったあげく、江戸城へあらわれた上野寛永寺の輪王寺宮(りんのうじのみや)・公弁法親王をつかまえて、
「……何ともいたして、赤穂の者どもの一命をたすけつかわしたく……」
もちかけると、法親王は無言で将軍を見つめたままである。
綱吉は、仕方なく、
「なれど、彼らの一命をたすけては天下の政道が立たず、いかんとも詮(せん)なきことにて、まことに、ふびんに存ずる」
と、今度は法親王の同情をさそおうとした。
このとき、法親王が、

「たすけておやりなされ」
といえば、綱吉は、その一言をたよりに方法をめぐらすつもりでいたらしい。
しかし、輪王寺宮は、
「天下御政道につき、いろいろと御苦心のほど、お察し申しあげる」
と、いったのみである。
この言葉で、将軍・綱吉の肚も決まった。
「いたしかたもない。いまは喧嘩両成敗の掟を、あやまりなく用いることだ」
と、決心をしたのであろう。
輪王寺宮は、この日、江戸城から寛永寺へもどり、側近の者に、こうもらしたそうな。
「将軍家は今日、赤穂の浪士たちの処分について謎をかけてまいられた。自分も、浪士たちを、この法衣の袖の下に隠してつかわしたい気もちにいつわりはないが……なれど、浪士たちの中には、まだ年齢の若い、血気ざかりの者も多いそうな。さすれば、万一、いのちをたすけつかわしたがために、将来をあやまる者もないとはいえぬ。そうなっては、せっかくのこたびの義挙を汚すことにもなろう。心苦しゅうはあったが、これこそ弥陀の大慈悲とおもい、将軍家の謎を、わざと解かずに帰ってまいった」
こうして、二月三日になると、赤穂浪士切腹の内命が発せられたのである。
二月四日の午後。
四家にあずけられている浪士たちへ、切腹の申しわたしがあった。

申しわたしの同日に、切腹がおこなわれた。
堀部安兵衛が、大石内蔵助の息・主税ほか九名の同志たちと共にあずけられていた松平隠岐守の中屋敷で切腹の申しわたしをうけ、切腹までの間に、
「何ぞ、お申しつけられますことのござれば……」
との、松平家の家臣の言葉に、
「いや、別に……」
いいさした堀部安兵衛が、ふと、おもいついたように、
「では、おねがい申そうか……」
「何なりと……」
「これを……」
と、安兵衛は、松平家から贈られた蒔絵の硯箱を、自分が使用した筆・墨と共に差し出して、
「この品を、本所石原の徳山重俊様の御子息・権十郎様へ、安兵衛が形見というて、おとどけ下されたい」
と、いった。
「承知つかまつった」
硯箱は、安兵衛の言葉と共に徳山屋敷へとどけられたが、
「よし。この品は、わしが手許に置こう」
徳山重俊が取りあげてしまったものである。

以来、重俊は来客があったりすると、さも自慢そうに件の硯箱を出して見せ、
「ごらんなされ。これは、かの堀部安兵衛が旧主の自分に形見としてとどけまいったものでござる」
と、いった。
権十郎は、くやしくてくやしくて、夜もねむられぬほどであった。
（なんという父上なのだ……）
反感は、つのるばかりとなった。
それにつけても、去年の、あの日に、両国橋で出合った堀部安兵衛が、
「差しあげます」
と、贈ってくれた蜂屋兼貞の短刀を、父に見せずに隠しておいたのは、いまにして、
（よかった!!）
と、おもわざるを得ない。
俗な言葉でいうならば、
「ざまを見ろ、というところだ」
であった。
しかし、いずれにせよ、
「父上は、おれより先に亡くなるのだから、そうすれば安兵衛殿の硯箱も、おれのものになると、そうおもったなれど、その後、おれは徳山家の跡取りにはなれぬとおもいきわめることになるのだが……」

権十郎は、さらに、つぎのような述懐をしている。
「……申すまでもないことだが、おれは、堀部安兵衛殿が松平屋敷で切腹なさるところを、この目で見たわけではない。両国の原治で蕎麦切を馳走になり、別れたのが最後であった。ゆえなれば、おれのこの胸には、生きている安兵衛殿の姿、顔しかおもい浮かんではこぬ。ゆえに、いまもって、安兵衛殿が死んだとはおもえぬのだ。安兵衛殿のことをおもうとき、人の生死は、まこと、仮の姿としか考えられぬときがある。その後も、おれはな。この胸の中に、いつまでも生きていてもらいたいとおもう人の死目には、わざと立ち合わぬことにしてきた。ために、生きた姿のままで、おれの胸の中にしまいこまれている人びとも何人かいるのだ」
さらに破顔して、
「だが、父上の死ざまだけは、しかと見とどけてやった」

十二

赤穂浪士の処分も終り、春もたけなわとなったけれども、徳山権十郎は、
（どうも、こころたのしくない……）
のである。
幕府は、吉良上野介の養子・左兵衛を、信州・高島の諏訪安芸守のもとへあずけて謹慎させ、吉良家を取り潰してしまった。

その一方で、赤穂浪士を切腹させたのであるから、今度は、あやまりなく、
「喧嘩両成敗」
の掟が適用されたことになる。
「先ず、これにて安堵いたしました」
と、柴田宗兵衛が権十郎にいった。
「安兵衛殿が切腹してしまわれたことが、爺は、さほどにうれしいのか」
権十郎は、わざと皮肉にいってやった。
「何を、おおせられます」
宗兵衛は屹となり、
「若様は、まことに、爺をそのような男とおもうておられますのか」
叱りつけるようにいった。
一言もない。
宗兵衛の胸の内は、権十郎にも、おぼろげながらわかっている。
二年前の政治のあやまちを、今度は将軍と幕府が、
「正したことになった……」
ことに、柴田宗兵衛は安堵をしたのであった。
将軍も幕府も、天下に前非をみとめたことになる。
これこそ、頭領・大石内蔵助をはじめ、赤穂浪士の望むところであったにちがいない。

堀部安兵衛の初一念は、まさに、そこへ通じていたことになるのだ。
それにしても、この元禄十六年という年は、権十郎にとって、
「何やら、落ちつかぬ……」
年になったようだ。
権十郎は十四歳になった。
安兵衛の死も、権十郎に衝撃をあたえたが、父の徳山重俊への反感もつのるばかりとなった。
重俊は、盗賊改方の御役目には一向に身を入れぬくせに、以前にも増して、口やかましくなった。
晩年になってから、このような、損な御役目に就任させせられたことが、くやしくてたまらぬらしい。
いつも苛々として、家来や侍女たちを叱りつけるし、権十郎への風当りも強い。
何かにつけて、権十郎の前で、
「右近が生きていてくれればのう……」
などと、正妻の腹から生まれた長男・右近の死をなげくかとおもうと、
「これ、権十郎」
白い眼を向けて、
「おのれに、この二千二百四十石の徳山家をゆずりわたすことになろうとは、おもいもよらぬことであった。なれば、文武に出精して、徳山家の当主として、はずかしからぬ男になら

ねばならぬぞ。このことを、寝てもさめても忘れるでない」

さも、

「ありがたいこととおもえ」

と、いわぬばかりに恩着せがましい口調で、執拗(しつよう)に、何度も何度もいい立てるのである。

(いったい、おれの生みの母親とは、どのようなひとであったのか……?)

ようやく、このころになると、権十郎は自分の出生(しゅっしょう)の秘密について、

(もっと、くわしいことを知りたい)

と、おもうようになった。

正腹の子でないことは、すでに知っている。

だが、自分の母の身もとについては、一度も聞かされていない。

徳山重俊は、権十郎の生母のことを知っている古い家来や奉公人たちへ、きびしく緘口(かんこう)のことを命じていたのだ。

(柴田宗兵衛や、千ならば、おれの生母のことを存じていよう)

そうおもってはいるが、一面、真実を耳にすることは何やら、おそろしい気もしないではないのだ。

(おれの母は、おれを生んで間もなく亡くなったというが……まことなのだろうか?)

信じきれぬおもいもする。

(母は、どこかに生きているのではあるまいか……?)

そのおもいが萌(きざ)すと、居ても立ってもいられぬおもいがした。

これまでに二度ほど、権十郎は千をひそかによんで、

「おれの母のことを知っておるか?」

尋ねたことがある。

「存じませぬ」

千のこたえは、いつも同じであった。

「私は、そのころ、江原の家へ嫁いでおりましたゆえ……」

「なれど、宗兵衛から聞いていよう」

「いえ、父は何も申しませぬ。私が御屋敷へもどりましたときは、すでに、若様の御生母さまは、お亡くなりになっておられたのでございますよ」

これ以上のことは、いかに尋ねてもむだなのである。

いまも権十郎は、柴田宗兵衛の案内で、年に一度は、日本橋本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方を訪れる。

駿河屋が、以前は徳山家へ出入りしていたということを、権十郎はすこしもうたがっていなかった。

幼少のころから見知っている駿河屋又兵衛の温顔と親切の底にかくれた祖父の愛情に、まったく気づいてはいない。

駿河屋又兵衛は、もはや八十に近い年齢となっていたが、依然、当主であった。

駿河屋では現当主が亡くなるまで、跡をつがぬという家風になっているそうな。

年に一度、柴田宗兵衛は何気なく権十郎をさそい出し、駿河屋へ立ち寄るのである。

「どうにも、胸の中が、もやもやとしてまいってな。ま、そうした年ごろでもあったのだろうが……何につけておもしろくない。そのくせ、道場の往き帰りに、道で出合う女どもの姿に、目をうばわれて仕方もなく……」

というのが、当時の権十郎の心境であった。

春がすぎて、江戸の町々は、まばゆい初夏の陽光につつまれた。

そして、権十郎の身に第二の〔異変〕が起ったのである。いや、起ったというよりも、権十郎みずから異変を起したのだ。

十三

それは、江戸の町が梅雨へ入る前の、或日の午後であった。

これからやって来る長い梅雨の埋め合せにというわけでもないだろうが、毎日、さわやかな好晴がつづいた。

風が光り、燕が飛び交い、堀内道場での激しい稽古を終えて、裏手の石井戸の水をかぶるのが、

「実に、たまらぬ……」

ほどに、こころよい季節となったのである。

その日。

徳山権十郎は早朝に屋敷を出て、小石川の堀内道場へおもむき、稽古をすませたが、いつもよりは早目に帰途についた。

千五百坪ほどある徳山屋敷は、表門が南に設けられ、裏門は西側にある。

この裏門は、本所・石原町の通りから、すこし引き込んだところにあり、すなわち、巾三間の通路が町屋の間にあって裏門へ達する。通路の両側は高い板塀であった。

権十郎は、いつも裏門をつかっていた。

そのほうが、自分の居室にも近いし、表門からだと、父の重俊と顔を合せる機会も多くなるので、

「あの顔、見るのもいやだ」

と、権十郎は裏門から出入りしている。

裏門を入ると、両側に足軽たちの長屋があり、屋敷内の通路をへだてて正面に内塀がめぐってい、そこに潜門がある。

裏門から権十郎が帰って来ると、

「お帰りなされませ」

門番が駈けて行き、潜門の扉を開けてくれる。

「今日も、よい天気だな」

権十郎は気さくに声をかける。

父・重俊の身近く仕えている家来たちはさておき、門番などには、このごろの権十郎、まことに評判がよい。

重俊側近の家来たちは、まだ、権十郎を、

（名もなき女の腹から生まれた子……）

という意識がある。

権十郎の生母は、重俊の側妾(そくしょう)であったのだから、その腹から生まれた権十郎が徳山家の跡つぎになったことは、何ら怪しむべきことではない。

しかし、徳山重俊は、正妻の腹から生まれ、せっかくに二十五歳の青年となったとき病死してしまった長男・右近のことを、

「右近が生きておればのう……」

などと、いまもって口にのぼせることがあるのだ。

屋敷内では、あくまで謹厳な姿勢をくずそうともせず、口やかましく、いかめしい主人だけに、用人の柴田宗兵衛をのぞいた側近の家来たちは、徳山重俊の機嫌を損ねてはならぬとおもい、したがって権十郎にいわせると、

「やつどもは、父上に媚びへつらっている……」

ということになるわけだ。

また、そうした追従者の家来たちの前で、

「右近が生きてあれば、いつにても隠居ができるものを……」

と、嘆いたりするものだから、追従者たちは尚さらに、権十郎を、

「軽(かろ)んずる……」

ことにもなるのである。

権十郎の乳母の千が、たまりかねて、父の柴田宗兵衛へ、

「殿さまも殿さまでございます。あれでは若様の面目が立ちませぬ」

うったえると、宗兵衛は、

「放っておけ、放っておけ」

「なれど、父上は、御当家の御用人をつとめる身ではございませんか。このようなことは、きっちりとしておかぬと、他の奉公人へのしめしがつきませぬ」

「ふ、ふふ……」

宗兵衛が苦笑というよりも、何やら、あわれむかのように笑って、

「おろかなやつどもよ」

と、いった。

「だれが、おろかなのでございますか？」

「申すまでもない。殿に媚びへつらうやつどもが、よ」

「なれば、それを……」

「放っておけ、放っておけ」

「父上……」

「これ、千。よう考えてもみよ」
「は……?」
「わがむすめのお前ゆえ、腹を打ち割って申すのじゃが……殿は、もはや六十六歳になられた」
「それが、どうかいたしましたか?」
「まだ、わからぬか……」
「わかりませぬ」
「余命、いくばくもないということじゃ。ちがうか、どうじゃ?」
「はあ……」
まさに、そのとおりだ。
徳山重俊は、ことに、盗賊改方に就任してからは気力も体力も急速におとろえはじめてきている。
それは、だれの目にもあきらかであった。
「それなのに、おろかなやつどもじゃ」
と、柴田宗兵衛は憫笑するのだ。
「殿はな、おとなしゅうて、やさしげな、亡き右近様のことを偲ばれては、取るに足らぬ家来どもへ愚痴をこぼされる。わしにも一度、申されたことがあるぞ」
「ま……何とでございますか?」

「権十郎は、わが血を分けた子ともおもえぬ。いまだ年端も行かぬ子供のくせに、わしが叱りつけると詫びもせず、頭も下げず、さも憎さげに、わしをにらみ返すのじゃ……と、かように申されたことがある」
「それは、殿さまが権十郎さまを憎さげにおもっておられますからこそ、そのおもいが権十郎さまへ映るのでございます」
「そのとおりじゃ」
「もってのほかのこととおもいます。権十郎さまは、やがて、徳山家の御当主になられます御方では……」
「なれば、よ」
「は……?」
「その日も遠くはない。よいか、わしが、もし、あのおろかな追従者だとしたら、殿へ媚びへつらうよりも、いまのうちに権十郎様へ媚びへつらっておくわい。たとえ、殿の御不興を買うてもよい。疎んじられてもよい。つぎの御当主の気に入られておくほうがずっとよいではないか。ちがうか、千。そうであろうが……権十郎様は、まだ十四歳におわす。これより先、何十年も御当家のあるじとなられる御方じゃ。おもうても見よ。これほどの算盤は、町家の子供でも弾けることじゃ」
「はあ……」
「それが、やつどもにはわからぬ。な、おもしろいではないか。目下の御主人の機嫌取りに

夢中となり、つぎの主人となるべき人を軽んずる。ところがさて、これで明日にも殿様が亡くなられ、権十郎様が御当主となってみよ。今度は、たちまちに、やつどもは人が変ったかのごとく、追従笑いを浮かべ、揉(も)み手なぞをしながら権十郎様に媚びへつらうことになる」

「それで、権十郎さまが、納得をなさいましょうか?」

「まあな、御大家の若様なぞというものは、およそ、まるめこまれてしまうものじゃよ。若者にとって、他人の追従ほど、こころよいものはないのだ」

「まあ……」

「ところが、権十郎様は、いささかちがうぞ」

「やはり……」

千の双眸(りょうめ)が、かがやいた。

「おお。ちがう。若様は、おろかな家来どもが、自分をどのような目で見ていたかを、忘れるような御方ではない」

「はい……はい」

「そこで、今度は、あの追従者たちが、権十郎様からひどい目に会うということよ。それがわからぬゆえ、おろかなやつどもと申したのじゃ」

「父上……」

「うむ?」

「それ聞いて、安心をいたしました」

「わしは、疾(と)うに安心をしているわい」

十四

潜門を入ると、そこは、奥庭の一角であった。

蓑垣(みのがき)に沿った通路が、南へ廻っている。

垣の向うは、奥庭の裏側に植え込まれた松の木や自然木がのぞまれた。

権十郎の居室は、この奥庭の裏側にある。

腹ちがいの亡兄・右近の部屋は、父の重俊の居室にも近く、奥庭を正面からのぞむ場所にあった。

すでに、将軍家へも拝謁をすませ、徳山重俊の正式の嗣子(しし)となった権十郎なのだから、以前に右近がいた部屋へ移ってもよいのである。

実は、つい先ごろに柴田宗兵衛が、そのことについて、重俊へ言上したことがある。

すると、

「だまれ、だまれ!!」

たちまちに目を怒らした徳山重俊が、

「そのようなことは、汝(われ)の口さしはさむところではない!!」

柴田用人を、叱りつけたものだ。

それにしても、

「汝……」
とは、いかにも見下げた呼び様ではないか。
いやしくも、柴田宗兵衛は用人である。
用人は、大身の家ならば〔家老職〕同様の重味をもっているのだ。
宗兵衛は、のちに、
「あのときばかりは、殿のお頭(つむり)を叩いてやりたいほどにおもうた」
ひそかに、千へ洩らしたそうな。
さて……。
権十郎は、庭づたいに自分の居室へ入った。
「若様が、お帰りになられた……」
ことは、裏門の門番から表門の門番へ、すぐさま知らせることになっている。
もしも勝手に、権十郎が裏門から帰って来たことが徳山重俊の耳へ入ったなら、
「当家の跡つぎたる者が、何とて裏門より出入りをするのじゃ‼」
などと、
「雷が落ちる……」
に、きまっているからだ。
権十郎の言動について、いちいち重俊へ告げ口をする家来も少なくないのである。
居室へ入ると、権十郎の供をして来た若党の小沼治作が手つだって、着替えをすます。

ほんらいならば、それから、父の居室へおもむき、
「父上。ただいま、もどりました」
と、あいさつをせねばならぬ。
権十郎も、はじめはそうしていたのだが、このごろはやめてしまった。
むろん、重俊は何度も叱りつけたのだが、例のごとく無表情な顔つきで父を見つめ、微動もせぬ権十郎のふてぶてしさに、
（な、何というやつじゃ……）
重俊は、むしろ、うす気味が悪くなったらしい。
そのためか、屋敷の出入りについて、重俊は何もいわなくなった。
それをよいことに権十郎は、よほどのことがないかぎり、父の居間へは足を運ばぬのだ。
「御苦労。やすんでくれ」
と、権十郎が小沼にいった。
下の者に、すこしでも何かさせたときは、かならず権十郎は、ねぎらいの言葉をかける。
だれが教えたのでもないことなのだ。
強いていうならば、子供のころ、柴田宗兵衛にともなわれ、駿河屋又兵衛を訪れた折、あるじの又兵衛が奉公人のすることなすことに対して、
「ごくろうさま」
とか、

「ありがとうよ」
とか、かならず、やさしい声でねぎらう態を見ていたからだと、いえぬこともない。
ともかくも、子供のころの権十郎は、駿河屋を訪れるたびに、わが屋敷とはあまりにもちがう町家の暮しぶりを好奇の目をもってながめていたものだ。

「ああ……」
小沼治作が去ると、権十郎は、こころよげな声を発し、はき替えたばかりの袴と足袋をぬぎ捨て、畳の上へ寝そべった。
稽古のあとの、ほどよい疲れが、躰を軽く痺れさせている。
そのまま、とろとろと、まどろみかけたが、人の気配に権十郎は目ざめた。
すぐ前に、茶と菓子が置かれてある。
廊下を去って行く足音がした。
女の足音である。
千であった。
あのことがあって以来、千には、こうした振まいが多くなった。
部屋の中に、微かに、女のにおいがただよっていた。
(千のにおい……)
だと、権十郎は知った。
このとき、乳母の千は三十三歳であった。

現代の女性ならば、まさに、女ざかりだったのである。
「ううむ……」
権十郎は低く唸って半身を起し、菓子を取り、無造作に口へ入れた。
そのまま、凝と、奥庭に見入っている。障子は開け放してあった。
この部屋は北向きで、まことに日当りが悪いのだ。
千の残して行ったにおいが、まだ、権十郎の鼻腔にたゆたっている。
そのときであった。
庭の向うの柴垣のあたりへ、侍女がひとりあらわれた。
若い侍女である。名を鶴といい、半年ほど前に屋敷へ奉公にあがったむすめで、年齢は十七歳。親許は麴町四丁目の文房具舗・京屋彦兵衛であった。
鶴は、柴垣の向うに見える御文庫蔵へ入って行った。
いまごろは、ほとんど毎日、文庫蔵の扉を開けて風を通しているのだ。
鶴は、このとき、文庫蔵の中の品物を出して来るように、いいつけられたのであろう。
と……。
権十郎が、すっと立ちあがった。
両眼が、異様に光っている。
唇を引きむすび、むずかしい顔つきの権十郎が素足のまま、庭へ下り、文庫蔵へ向って歩みはじめた。

十五

そのときのことを、のちになって、
「……いや、どうしたわけで、あのようなまねをしたものか、いまだにわからぬ。おのれがしてのけたことを、おのれで納得ができぬのだ」
権十郎は、若笑まじりにいいわけをしている。
ともかくも、勃然となったことだけは、たしかである。
躰も顔も、頭も熱しきって、何やら強い酒を呷ったかのように満面に血がのぼった権十郎は、それでいて音もなく、文庫蔵へ入った。
文庫蔵は二階造りで、階下には徳山重俊の書物、絵画や書の軸物などが収蔵されてい、二階には器物や道具類が収められてあった。
鶴は、階下にいた。
蔵の中へ入って来た権十郎が、蔵の扉を閉めた音に振り向いた鶴の顔から、見る見る血の気が失せた。
それほどに、
「おれの形相も、凄まじくなっていたのであろうよ」
と、権十郎は笑いながらも、
「ともあれ、鶴は一語も発しなかった。おれは近づいて、鶴の肩をつかんだ……」

つかんだ肩のやわらかさに、
「目眩がした……」
そうである。
鶴は、へなへなと崩れるように其処へすわりこんだ。
文庫蔵の小窓から射し込む日の光りはあっても、蔵の中はうす暗く、書物や道具類にしみついた匂いが、妙に黴くさく蒸れこもっている。
必死に両股を合せつつ、鶴が烈しくかぶりを振って見せた。
十四歳の少年ともおもえぬ、むしろふてぶてしい態度で、権十郎は鶴の前へ屈み込み、鶴の目を凝視した。
と……。
鶴の、おびえきった両眼が伏せられ、かぶりの振り方が弱々しくなってゆくではないか。
権十郎の両腕が伸びた。
その腕は鶴の躰を巻きしめ、ゆっくりと押し倒した。
わが顔を鶴のそれへ押しつけた権十郎の鼻腔へ、なんともいえぬにおいがながれ入ってきた。
「いまだに、あのときの、鶴の躰のにおいを忘れぬ……」
そうな。
「何やら、天竺の珍果から発するにおいのような……」

などと、大仰に、権十郎は告白している。

まだ、一人の男の指もゆるさなかった十七歳の処女(むすめ)の肌身が、緊張のあまり汗ばみ、発散するにおいなのだ。

鶴は唇(くち)をかみしめ、両眼を閉じ、半ば放心の状態となりながらも、ゆるくかぶりを振りつづけている。

その、えりもとを、権十郎の手が押しひろげた。

白い……まるで練絹のような肌であった。

衣裳(いしょう)の上から見たのでは、細くて小さな鶴の肌身が意外にふっくらとしており、はだけたえりもとからこぼれかけている乳房のふくらみへ、権十郎は顔を押しつけた。

「あ……」

わずかに、鶴がうめいた。

乳母の千の乳房の、かたちも感触も、熱く汗ばんだ体臭も、権十郎は熟知していたが、鶴の肌身のすべてが、まったくちがっているようにおもえた。

南天の実のような乳首へ、権十郎の口が吸いつき、ちからをこめて吸った。

「う……う、う……」

苦痛とも、惑乱ともつかぬうめきが鶴の唇(くちびる)から洩れた。

それでいて鶴は、狼(おおかみ)に押し倒された白兎のように、権十郎のなすがままにまかせているようにも見えたのである。

いかに、当時の男の成長の度合が現代よりも早かったとはいえ、このときの徳山権十郎は十四歳であった。

鶴の躰への愛撫(あいぶ)といおうか、好奇のあまりの弄(まさぐ)りというか、無我夢中の行動というか……それにしてはあまりにも、つぎの段階へ行動を移しつつある権十郎の仕ぐさが堂に入っているではないか。

「すでに、そのとき……」

と、権十郎はいう。

「おれは、女の躰のありさまを、大分に心得ていた」

それは、幼児のころから、乳母の千によって、あまりにも肉体的に密着した保育と愛撫を受けて育ったからという意味なのであろうか……。

鶴の両股が固く締めつけている裾を割って、権十郎の手が差し込まれたとき、鶴が目を見ひらき、懸命にかぶりを振りはじめた。

「わ、わ、若さま……」

必死の声が、鶴の口から洩れた。

「ひ、人に……」

「…………」

「あの、人に、見られまする」

十七歳のむすめにしては、この場合、まさに、適切な言葉であったといえよう。

けれども、その一言で、権十郎の所業が熄むものではなかった。
鶴の言葉が耳に入らなかったのではない。
入ったが、
(ええ、だれに見られても、かまうものか……)
このことである。
夏のことで、女の衣裳の着つけも薄かった。
「あ……」
裾が割れ、鶴の股がむき出しにされた。
急に、鶴が身を踠きはじめたが、少年ながら、堀内道場の修行に鍛えられた権十郎の腕力におよぶものではない。
権十郎の手が、なめらかな鶴の腹へ差しこまれ、
「うっ……」
息がつまるような圧迫感をもって、権十郎の少年のものとはおもえぬたくましい体軀が鶴へおおいかぶさってきた。
徳山重俊の家来で、側近く仕えている大野郁太郎という者が、このとき、文庫蔵の前の通路へあらわれた。
大野は、主から命じられた書物数巻を、文庫蔵へ取りに来たのである。
鶴は鶴で、奥向きの座敷の床の間へ掛ける書幅を取りに来た。

これは、用人の柴田宗兵衛からいいつけられたのだ。
鶴は文字も読めるし、利発で温順なので、宗兵衛がたいへんに気に入っており、奥向きへ来て、いろいろ指図をするときは、何事にも、
「鶴をよんでもらいたい」
という。
徳山重俊の妻は、すでに亡い。
そこで、奥向きの用事にも、
「いちいち、わしが口をさしはさまねばならぬ」
宗兵衛は、千に零している。
各座敷の床の間の書画を、月のうち二度は取り替えねばならぬ。
重俊は、こうしたことにも、実に口やかましいのだ。
柴田宗兵衛は、鶴に書幅を取って来ることを命じてから、主の居間へおもむいた。
徳山重俊から、
「すぐにまいれ」
と、いってよこしたからである。

十六

大野郁太郎が通路を文庫蔵の小窓の下へ来たとき、蔵の中から、女の叫び声が聞こえた。

単なる叫び声ではない。
高く叫んだのではないが、その声の中には、一種名状しがたい要素がふくまれている。
(な、何事か……?)
大野は通路を曲がって、文庫蔵の戸口へ走った。
夕刻まで、開け放ったままになっているはずの扉が閉まっている。
ためらうことなく、大野は扉を引き開け、一歩踏み込んで見て、
「あっ……」
色をうしなった。
大野の目に、先ず飛び込んできたものは何であったか……。
露出した若様の……権十郎の浅ぐろい臀部であった。
その両わきへ、白い女の脚が押しひろげられていた。
扉が開く音に、権十郎が振り向き、大野をにらみつけた。
その眼光たるや、まったくもって物凄いもので、
「権十郎様の目の玉が顔から飛び出し、自分の目の中へ突き刺さってくるようなおもいがした」
と、大野郁太郎は、のちに語っている。
大野は、権十郎の一睨みで、わなわなとふるえ出した。
「去れ!!」

と、権十郎が一喝した。
「う……」
「行け!!」
「は……」
たまりかねた大野は、身をひるがえして逃げた。
むろん、このまま、そ知らぬ顔をしている大野郁太郎ではない。
かねてから主の徳山重俊へ媚びへつらい、権十郎について、
「あること、ないこと……」
を、重俊へ告げ口をするのは、大野の、もっとも得意とするところなのだ。
逃げながら、
(少年のくせに、何ということを……)
大野は、まるで、自分が徳山重俊にでもなったかのように激怒した。
その足で、居間へあらわれた大野郁太郎を見た徳山重俊が、
「何としたぞ?」
「は……」
「顔色を変えて、何とした?」
「実は、ただいま、権十郎様が……」
「また、何ぞ、しでかしたのか?」

「は、はい」
「何をいたしたのじゃ?」
「御文庫蔵の中にて……」
「な、何……?」
「鶴を……」
「つる……?」
咄嗟に、それが何を意味するのか、重俊にはわからなかったようだ。
「奥向きの女中でござります」
「おお……鶴が何とした?」
「手ごめに合うて……」
「鶴がか?」
「は……」
「たれが、鶴を手ごめに……?」
「権十郎様が……」
「な、な、何じゃと……」
徳山重俊の老顔が、火鉢の灰のような色に変じ、ついで今度は怒りの血がのぼってきて、真赤になった。
「つづけ!!」

次の間へ走り込んだ徳山重俊は、長押へ掛けわたしてあった槍をつかみ取ったものである。
「おのれ、成敗してくれる!!」
槍を小脇にかいこみ、文庫蔵へ駈け向った重俊の後から、大野をはじめ三人の家来がつづいた。
そのとき、用人・柴田宗兵衛は、重俊との用談がすみ、いったん、邸内の自分の長屋へもどったところであった。
そこへ、若党の小沼治作が急を告げた。
「えっ……」
物に動じない柴田宗兵衛も、このときばかりはおどろいた。
「まことか?」
「殿様が、いま、槍をお持ちなされまして、御文庫蔵へ……」
「ま、まさか、若様が、そのようなことを……なさるはずがない」
「はあ……」
「まだ、若様は少年じゃ」
しかし小沼治作は、日々に権十郎の供をし、堀内道場へおもむいているので、権十郎の激烈な稽古の模様も、そのあとの裏手で水を浴びるときの裸体も見ている。
とても、少年の躰とはおもえぬのだ。
「ついてまいれ」

宗兵衛が、あたふたと長屋を飛び出した。

そのとき、千は、権十郎の好きな茶巾餅を、浅草御蔵前の菓子舗・高砂屋まで買いに出ており、屋敷にはいなかった。

たとえ、どのような些細なことにせよ、ことが権十郎に関するかぎり、千は他人の手をわずらわそうとはしなかったのである。

徳山重俊が家来三名と共に御文庫蔵へ駈けつけたとき、権十郎の姿は消えていた。

鶴は、全身を硬直させてうずくまっている。

鶴がどのような目にあったかは、だれの目にもあきらかであった。

「鶴を、此処より出すな」

と、重俊が大野郁太郎に命じた。

「心得てござります」

「権十郎は何処じゃ？」

よばわりつつ、重俊が奥庭の裏側へ出て、

「ううむ……」

おもわず、唸り声を発した。

向うの、権十郎の部屋の縁側に、わが子を見出したのである。

権十郎が下帯ひとつの裸身を平然と縁側に横たえ、肘枕をして、こちらを見ているのだ。

その不逞きわまる姿は、大身旗本の跡つぎともおもわれぬ。

町家の子供でも、このように疎放な恰好はすまい。

「おのれ……おのれ……」

走り寄った徳山重俊が、

「これ、起きよ!!」

と、叫んだ。

権十郎は上眼で、父を見やったきり、こたえようともせぬ。

「せ、成敗してくれる!!」

ついに、重俊が槍を構えた。

槍身が日射しを受けて煌めき、権十郎の胸元へぴたりとつけられた。

権十郎の姿勢は変らぬが、その両眼は閉ざされている。

「う……ううむ……」

さすがに二千二百余石の〔殿様〕だけに、槍を構えた徳山重俊の姿は立派なものであったが、その老顔は狼狽の極に達していたといえよう。

「権十郎!!」

「…………」

「これ、姿をあらためよ!!」

「…………」

「それが、徳山家の跡つぎの為すことか!!」

すると、権十郎が薄眼をあけて、にやりと笑った。

「おのれ!!」

またしても、権十郎は目を閉じた。

家来たちは息をのんで、この親子を見まもっている。

「ううむ……ううむ……」

しだいに徳山重俊は、構えている槍先のもって行きどころに困り、

「ええい!!」

槍の柄を返し、いきなり、権十郎の肩のあたりを叩きつけた。

十七

徳山重俊が、どれほどのちからをこめて打擲したものか、それはわからぬ。

だが、槍の柄に叩き打たれた権十郎は、びくともしなかった。

「おのれ、文庫蔵において、何をいたしていたのじゃ?」

「…………」

「申せ。申さぬか」

すると権十郎が、ひょいと身を起し、すわり直したかとおもうと、

「何をとは、何でございます?」

と、反問するではないか。

重俊は昂奮の極に達した。

「おのれは、女中の鶴をとらえ、怪しからぬまねをいたしおったな」

「怪しからぬまね……?」

「いやしくも……」

と、何かいいかける重俊を権十郎が手をあげて制し、

「あ、父上」

「な、何じゃ」

「私は、父上のまねをいたしたまででございます」

「な、何じゃと……」

「父上も、むかし、私の亡き母に、あのようなまねをなされたのではございませんか。そして生まれたのが私でございましょう」

権十郎が臆面もなくいいはなったときには、大野郁太郎以下三名の家来たちが、ついに、

「居たたまれなくなって……」

垣根のあたりまで、後退してしまった。

徳山重俊の老顔が、蒼白になった。

槍を摑んだ手が、ぶるぶるとふるえている。

重俊は、年少のころに、剣も槍も相当に修行をしたなどと、みずから自慢げに語ることがあるけれども、

「そのときの父上を見て、おれは、父上の申されることが嘘だとわかった」
権十郎は、そう語っている。
「槍のあつかい方ひとつを見ても、まったく、見てはいられぬほどのもので……」
十四歳の我子のふてぶてしい言動に逆上しきってしまった徳山重俊は、それだけでも、
「武芸を齧ったとは申せぬ」
というわけだが、権十郎も咄嗟に自分の口から出てしまった言葉が、これほどに父を狼狽させようとは、おもってもみなかったことなのだ。
同時に……。
（そうなのか……）
と、おもいあたった。
（そうであったのか……父上は、おれが母を、やはり、あの文庫蔵で手ごめにしたのか……それにちがいない。ちがいない）
このことである。
権十郎は、憎悪と軽蔑をこめた笑い声を父にあたえ、立ちあがって、部屋の中へ入って行こうとした。
徳山重俊が怪鳥のような叫びを発し、我子の背後から、またしても槍の柄を揮って打ちかかった。
権十郎の顔から肩から胴、脚と……めったやたらに重俊は打ち据えた。

「槍の柄が、二つに折れて飛んでしもうて、な……」
などと、後年の権十郎がいっているが、これはいささか大仰であろう。
しかし、柴田宗兵衛が、この場へ駈けつけたとき、徳山重俊は、
「むぅん……」
唸り声をあげて、槍を手放し、よろよろと倒れかかった。これは事実だ。
「と、殿……」
「う、うう……」
重俊は、心ノ臓のあたりを手で押え、
「い、医者を、早う……」
苦しげにいった。
柴田用人は、駈け寄って来た三人の家来に主の躰をゆだねて、
「早く、早く……」
「はっ……」
「すぐさま、遊佐良仙先生を、お迎えに……」
「心得ました」
家来たちが、重俊の躰を運び去るのを見送った柴田宗兵衛が、伏し倒れている権十郎の傍へ走り寄った。
権十郎は、気をうしなっていた。

鼻と口から、血がながれている。
「わ、若様」
宗兵衛は、主のことよりも、権十郎の介抱が先に立った。
しばらくして、帰邸した千が、駈けつけて来た。
「千。と、とんだことになったぞ」
「な、何が……どうしたのでございますか？」
「よく、わ、わからぬ。良仙先生が、殿の御部屋にいるゆえ、手当がすみしだい、早く、此処へ……」
「ま……ひどい血……」
「なに、これしきのことで……」
と、宗兵衛は力み返っていたそうである。
その翌朝……。
権十郎は、いつもと同じ時刻に起きあがり、身仕度をして堀内道場へ出向いた。
若党の小沼治作が、
「若様。それでは、あまりに……」
いいさして、声をのんだ。
権十郎の顔も頭も、西瓜のように腫れあがっている。
「かまわぬ」

「な、なれど……」
「ついてまいれ」
権十郎が裏門へさしかかると、門番の足軽たちが目をみはった。彼らも、昨日の事件を耳にはさんでいたにちがいない。
「門を開けろ!!」
と、権十郎が大声にいった。
実のところ、この日は堀内道場への道のりが二倍にも三倍にも感じられた権十郎なのである。
それでも、ついに、道場へ到着した。
権十郎の凄まじい面相を見るや、門人たちがどよめいたものである。
堀内源左衛門は、権十郎を見るや、
「まいれ」
と、わが居間へみちびいた。
「これ、権十郎……」
「は……」
「なんとしたぞ？」
「父上に、折檻を受けまして……」
うつ向いたまま、辛うじて権十郎がこたえると、

「ほう……さようか……」
堀内先生が、なんともいえぬ優しげな、やわらかい声音で、
「それもよし、それもよし」
と、いってくれた。
その声を聞いた瞬間に、わけもわからぬ烈しい感情が胸につきあげてきて、権十郎が大声に泣き伏したのだ。
「泣け、泣け」
いつもはきびしい堀内源左衛門が、権十郎の肩を軽く撫でさすってやりながら、
「男と申すものはな、大声に泣ける生きものでなくてはならぬ。もっと泣け、もっと泣け」
と、いってくれた。

十八

この事件があったのち、徳山重俊に媚びへつらう家来たちの、権十郎に対する態度が大分に変ってきた。
彼らが、依然として、重俊に追従していることに変りはないのだが、ひとくちにいうと、
「権十郎様は、恐ろしいお方だ……」
「これからも、何を仕出かされるか、知れたものではない」
という恐怖を、おぼえたのであろう。

下帯一つの「あるまじき姿……」でもって、父・重俊へ捨身の反抗をした権十郎を見て、それが十四歳の少年のしてのけたことだけに、層倍の凄まじさを感じたのであろう。
大野郁太郎ですら、邸内で権十郎に出合うと、目を伏せ、丁重に頭を下げるようになった。
徳山重俊は、夏が過ぎるまで、病間に引きこもったまま、喘ぎつづけていた。
一時は、遊佐良仙も、
（はて……?）
と、くびをかしげるほどの容態だったそうな。
おもえば、このときが、重俊の発作のはじまりだったといえよう。
これまでの重俊は、ほとんど病気をしたことがなかったが、権十郎を打ち据えたときの激烈な昂奮によって、おとろえていた心ノ臓の発作が、はじめてあらわれたのである。
病臥中、重俊は、
「おそろしい……おそろしいやつ……」
天井へ目を据え、つぶやいているのを、柴田宗兵衛は何度も見た。
いうまでもなく、重俊は、妾腹のわが子・権十郎を「おそろしい……」と、看たのだ。
おそらく、この病臥中に、徳山重俊は、
（わが家を権十郎へゆずりわたすことは、取りも直さず、徳山家を断絶させてしまうことになりかねぬ）
と、おもいはじめたのではなかろうか……。

将軍と幕府のおぼえもめでたく、旗本としては諸役を歴任して能吏のきこえが高かった重俊から看ると、権十郎が徳山家の当主となったあかつきには、かならず、何やらの失敗を重ね、幕府の忌諱にふれるような事件を引き起すにちがいないとおもったのである。

（たれぞ、親類の中より、新しく養子を迎え、これを、わしの跡つぎに……）

このことを、重俊は考えはじめるようになった。

けれども、おもいきって踏み切れぬところもある。

何となれば、そのようなことをすれば、自分の失態を親類中に、

（われから知らしめる……）

ことになるからであった。

病患に苦しみながらも徳山重俊は、柴田宗兵衛のみへ、

「このたびのことは、かならず……かならず外へ洩れぬようにいたせ。奉公人どもの口を、かたく、かたく、かたく封じておくように……」

必死の面もちで、いいつけたのであった。

いかにも、見栄に凝りかたまった重俊らしい。

ところで……。

侍女の鶴は、どうしたろうか。

鶴への尋問は、柴田宗兵衛がひとりで当った。

はじめは泣きじゃくるばかりであった鶴なのだが、そのうちに、意外にはっきりと、そのときの様子を語りはじめた。

鶴のほうから権十郎へはたらきかけたのではない。これは、はっきりしている。

権十郎が鶴に襲いかかり、これをはずかしめたとわかったが、

（ふうむ……？）

宗兵衛には、尚も、わかりかねるところがあった。

十四歳の少年に、そうしたことが可能なものかどうか、宗兵衛の体験からすると、ふしぎにおもえてならぬ。

剣術の修行によって、躰だけは、たしかに、

（少年のものとはおもえぬ……）

のだが、それだけで、男女のいとなみができ得るものか、どうかである。もっとも、これより先、権十郎が他の女によって、そうしたことを教えられていたというなら、これはわかる。

（そうしたことが、あるわけがない）

と、宗兵衛はおもった。

道場の往復には、若党がつききりであるし、他の女に近づく機会があったとはおもわれぬ。

しかし、どうやら鶴は、権十郎の男のちからを、その肉体に受けたようなのだ。鶴も三日ほど、一間に寝たきりでいたのだが、意外なことに、今度の事件を実家へ、

「内証にしておいて下さりませ」

と、自ら宗兵衛にたのんだものである。

「かまわぬのか?」
「はい」
赫らめた顔を、はずかしげに夏夜着の襟に埋めた鶴を見て、宗兵衛のほうがどぎまぎしてしまい、
「では……では、このまま、何事もなかったことにして、当御屋敷に御奉公をつづけてくれると申す?」
鶴が、こっくりとうなずく。
「さようか……」
ここで宗兵衛も、ようやく、ほっとした。
鶴は、あきらかに、権十郎へ好意を抱いている。
それが前々からなのか、権十郎に犯されてのちに、そうなったのか、……それは宗兵衛にもわからぬことであったが、鶴が権十郎の所業を庇おうとしていることだけは、はっきりと看てとれた。
「鶴。なれば、すべてを、このわしにまかせてくれると申すのじゃな?」
鶴が、うなずいた。
「よし」
それならばまた、何とでも仕様があると宗兵衛は考えた。
一方、権十郎のほうは黙々と、堀内道場へ通いつづけている。

以前にも増して、彼は無口になっていた。
毎日、権十郎につきそって行く小沼治作にいわせると、
「このごろの若様は、五つ六つも年をとられた……」
ように、見えてきたのだそうな。
事実、権十郎も、あの事件以来、自分がまったく別の男になったようなおもいがしている。
「申すまでもない。おれにとって、まさに鶴は初めての女だ。うむ、それはな……こどものおれがそのようなまねをようしてのけたと、余所目にはおもえようが、女の躰の仕くみというものを、おりゃ、うすうす知っていたのだ。何となれば、乳母の千に、あれほどに可愛ゆがられて育ったゆえ……いや、それはちがう。まさかにおれが、千と怪しきふるまいをするはずがないではないか。それに、人も獣よ。躰ができあがれば、教えられなくともできるものだ。それにしても……」
それにしても、いざ、女とのまじわりを行なって見て、権十郎が、失望をおぼえたのも、たしかだ。
むしろ、鶴を押えつけてしまうまでの昂奮が鮮明な印象として残され、肝心のことは、
「あっ……」
という間に、すんでしまったのである。
(大人どものすることは、このようなものだったのか……)
であった。

いまや、権十郎は何物をも畏(おそ)れぬという心境になっている。
それは彼が、少年の時代と別離したことにほかならなかった。

襲撃

一

それから、三年の歳月が過ぎ去った。
この間に、徳山権十郎は、ひたすら、堀内源左衛門道場での修行に没頭していたといってよい。
鶴との事件があってからは、
「権十郎から、目をはなしてはならぬぞ」
と、父の重俊が柴田宗兵衛はじめ家来たちへ厳命を下した。
「血は、あらそえぬものじゃ」
重俊は、用人の柴田宗兵衛のみへ、
「下賤(げせん)の血は、あらそえぬ……」
ためいきまじりにこぼしたそうな。

つまり、権十郎を生んだ静が、扇問屋・駿河屋又兵衛のむすめだからというわけなのだ。
武家のむすめの腹から生まれたものではないから、
「血は、あらそえぬ」
という。
なればこそ、少年(こども)の身で、屋敷の侍女を襲ったり、裸体のままで父へ反抗したりする。このようにふしだらな行為を平然としてのけるのは、やはり、血統の正しい武家のむすめではなく、重俊から見れば身分の低い町家の女の腹から生まれたからなのだ。
これが徳山重俊の一方的な考え方なので、まるで、子というものは女が何もせずに生まれるとでもおもっているかのようなのだ。
町家のむすめに権十郎を生ませたのは、重俊自身なのであり、したがって自分の血も権十郎につたわっていることを忘れている。
柴田宗兵衛が、可笑(おか)しさをこらえつつ、そのことを匂わせたとき、徳山重俊は断固として、
「いや、男子の血は母親から受けつぐものじゃ」
いいはなったものである。
「なれど、駿河屋又兵衛の先祖をたどりますると、三河の歴(れっき)とした武士であったそうにござります」
と、宗兵衛が、やんわりといった。
これは事実である。

すると、重俊は、
「むかしのことはむかしのことじゃ。いまはいまである」
絶対に承服せず、またしても、
「ああ……右近が生きて在ればのう……」
亡き長男を偲んでは、泪ぐむのであった。
(殿も、老いた……)
と、柴田宗兵衛は感じた。
権十郎を折檻したとき、激怒のあまり、心ノ臓の発作をまねき、数ヶ月を病床にすごしてより、徳山重俊の気力と体力は、急激におとろえたようだ。
このことは、だれの目にもあきらかであった。
そうなると、重俊の威厳に畏れ、追従していた家来たちが、
「殿の御寿命にも先が見えたような……」
と、おもいはじめるのも、当然といえよう。
となれば、つぎの徳山家の主となるものは権十郎にきまっている。
「それ、見よ」
と、宗兵衛が憫笑していったように、家来たちは権十郎へ取り入ることに努めはじめたのである。
相変らず、権十郎は裏門から出入りをしているのだが、朝、堀内道場へおもむく権十郎を見送るべく、家来たちは先を争って、裏門へ駈けあつまって来る。

そして、門を出て行く権十郎へ、彼らはいっせいに頭を下げる。
大野郁太郎などは、権十郎へ擦り寄って、
「お気をつけられまして……」
などと口をそえるのだが、権十郎は返事もせぬし、うなずきもせぬ。
さりとて、じろりと白い眼で大野を見ることもせぬ。
まるで、彼らが其処に居並んでいることを知らぬかのように……目にも入らぬかのように、門を出て行く。
得意げに、家来たちへ一瞥をくれるのは、供をする若党・小沼治作であった。
そのうちに、徳山重俊が、
「これはやはり、たれぞ、他家から養子を迎えずばなるまい」
柴田宗兵衛に、そう洩らしたといううわさがつたわってきた。
「殿は、御親類の中から、御養子をお選びなさるそうな」
「まことか?」
「まことらしい」
そうなると、権十郎の送り迎えがぴたりと熄んだ。
熄んだからといって、権十郎の日常に少しも変りはない。
ひそかに怒っているのは、小沼治作である。

「他家から御養子と申しますのは、まことなのでしょうか？」
たまりかねて、千が父の宗兵衛に尋いた。
宗兵衛は、こたえなかった。
その老顔が、いささか冴えていないのを見て、千は、
（これは……）
胸を衝かれた。
たしかに、徳山重俊は、養子縁組の事を真剣に考えはじめていたのだ。
宗兵衛にも、そのことを洩らして、権十郎贔屓の用人の意中をたしかめたらしい。
いうまでもなく、宗兵衛は反対をした。
このときばかりは、
「おもいきって、申しあげた……」
そうである。
すると、重俊は怒るどころか、薄笑いを浮かべ、ひとり、うなずいていたという。
それが却って、柴田宗兵衛には、
（気味のわるい……）
ことのようにおもわれた。
なんといっても、徳川幕府という天下の政柄の能吏として、諸役を歴任して来た徳山重俊なのだ。

これは、たしかに或る意味において、
「なまなかの人材ではない……」
と、いってよい。
御役につくための運動や、それに必要な出費が莫大なものであったことを、徳山家の家宰をつとめる宗兵衛は知っている。
また、御役につくことによって得る利益についても同様であった。
「よき御役につくためには……」
他の旗本を蹴落すための計りごとをめぐらしたこともあった。
そうしたことにかけては、徳山重俊の駆け引きが、実に、
「端倪すべからざる……」
ものであることも、宗兵衛は、よくわきまえている。
重俊は、これまで、権十郎を厭悪しながらも、自分の跡つぎに決めたのは、それが順当の事であり、わが血を分けた子であったからといえよう。
けれども、いざ、他家から養子を迎えようと決意したあかつきには、
（権十郎様を、この屋敷から追い退けることなど、殿にとっては、わけもないこと……）
のようにおもわれる。
さいわい、いまの権十郎は妙に大人びてきて、粗暴の言動は全く消えている。
しかし、父・重俊へ朝夕の挨拶をすることなどは断じてない。あの事件の前までは、気が

向くと父の居間へ出向き、挨拶をした権十郎なのだが、事件以来、ぴたりとやめた。
これが父への軽蔑(けいべつ)でなくてなんであろうか。
重俊の胸の内は、怒りで煮え滾(たぎ)っているにちがいなかった。
(困ったものじゃ……)
柴田宗兵衛の苦悩は、意外に深刻であった。
宗兵衛は、すでに、叔母が嫁いでいる井口半蔵の次男・勝四郎を養子に迎えることに決め、井口家とも誓約を交してある。
叔母の子であるから、宗兵衛の従弟(いとこ)に当る勝四郎は、早くも三十歳に近くなっていた。
それでいて、正式に、自分の手許(てもと)へ引き取るこころになれないのは、
(権十郎様が御当家の主となられてから……)
と、考えているからだ。
(もしも、権十郎様が跡をつげぬことにでもなれば、わしは、御当家から暇をいただく)
ひそかに、おもいきわめている宗兵衛であった。
その宗兵衛の意中を勝四郎の父・井口半蔵は、よく察してくれていて、
「なに大丈夫じゃ。わしも、高岩家の用人をつとめおる身ゆえ、勝四郎には、いろいろと、いまのうちから仕込んでおく。安心をなされ」
と、いってくれている。
しかし、物には限度というものがある。いつまでも引きのばしてはおけぬ上に、この養子

縁組については、主・徳山重俊のゆるしを得てもいる。
ために、重俊から、
「何をためろうておるのじゃ。そのほうの跡つぎがなくては、徳山家の行末にもかかわることではないか」
しきりにすすめられては、どうしようもなかった。
そこで、三年前に元禄の世も終った宝永(ほうえい)三年(一七〇六年)三月十八日。
井口勝四郎は徳山屋敷内の柴田家へ入り、ここに柴田勝四郎となった。ときに三十歳である。
この年、徳山重俊は六十九歳。
権十郎は十七歳。
乳母の千は三十六歳。

二

柴田宗兵衛は、自分が勝四郎を迎え入れるに先立ち、徳山重俊に権十郎の元服のことを願い出た。
元服は、男子の成人式ともいうべきものだ。
前髪を落し、大人の衣服を身につけ、武家の元服の式がおこなわれたとき、徳山重俊は、
「苦虫を噛(か)みつぶしたような……」

渋面をつくり、権十郎をにらみつけていた。

権十郎は平然たるもので、眉毛ひとすじ、うごかさなかった。

(なれど、まだ、油断はならぬ)

と、宗兵衛はおもっている。

ちかごろ、徳山重俊は用向きの事を宗兵衛にも語らず、親類の屋敷を訪問することが多い。

たとえば、いまは亡き後妻の滝子の実家である神尾宮内少輔（かんおくないしょうゆう）の屋敷とか、前妻の実家の溝口邸とかへ、しばしば足を運び、何やら密談をして来るらしい。

また、分家をしている弟の徳山重一（しげかず）を本所の自邸へ招き、人ばらいをしては何やら語り合ったりするのだ。

(どうも、くさい……)

のである。

徳山重一には、跡つぎの長男のほかに男子が二人もいるし、女子もいる。

男子でなくとも、女子を養女にし、聟（むこ）を迎え入れたとしても、辛うじて徳山家の血が、

「つながる……」

ことにもなるのであった。

ところで……。

侍女の鶴は、どうしたろう。

鶴は、前年の宝永二年の秋に、徳山屋敷を去っていた。

あれから、鶴は、しきりに権十郎の許へ近づきたい様子を見せもし、用事もないのに奥庭から文庫蔵のあたりへ出て来たりした。

けれども、権十郎は見向きもせぬ。

「女の肌身を抱いて、あのようなことをするなど、そのときのおれは一度で懲りてしもうたのだ。なんと、曲もないことなのか、と、おりゃ、がっかりとしてしもうてな……」

なのだそうである。

まことにもって、人の行末などというものはわからぬ。

後年の徳山権十郎から見ると、これほどに、

「わけのわからぬ……」

言葉はないといってよいであろう。

「父上は、おれの生母を、おそらく文庫蔵ではずかしめたにちがいない。そして、あのようなまねをしたおかげで、おれが生まれたとおもうと、何やら莫迦（ばか）らしゅうてな。女なぞ、見るも嫌になってしまったのだ」

また、権十郎は、

「おそらく、父上も同じようなおもいをしておられたのではないかな。おのれの莫迦らしいふるまいによって、余計な男の子が生まれてしまい、それが余計なままに終ってしまえば、まだよかったのであろうが……可愛ゆい長男が病死したために、その余計者に大事な大事な我家をつがせることになってしもうた。それがもう、まったく、たまらぬことであったのだ

ろうよ」

　とも、述懐している。

　鶴は、それでも凝と辛抱をしていた。

　正室になろうなどとは、夢にもおもわぬが、権十郎が徳山家の主となったあかつきには、側室にでもなれたら……と、のぞみを抱いていたのであろうか。

　だが、権十郎がまったく無視している上に、乳母の千の監視がきびしかった。

　千は、鶴を一歩も権十郎の部屋へ近づけまいとした。

　遠くから、近くから、千の眼が、いつも鶴を見まもっている。

　これでは、どうしようもない。

　そのうちに、鶴の実家の京屋彦兵衛から、

「お暇をいただきたく……」

　と、願い出てきた。

　鶴の縁談がととのいかけたからだ。

　それでも、鶴は一年引きのばした。

　そして、ついに、あきらめ、実家へ帰って行ったのである。

　鶴と権十郎との〔不祥事〕について、京屋方ではまったく知らなかった。

　柴田宗兵衛は、渋い顔をする徳山重俊を説得し、鶴の婚礼の祝い金を多分に贈ったものだから、京屋彦兵衛がひどく恐縮をしたということだ。

　さて……。

　ここにまた、権十郎の身に〔異変〕が起るのだ。

　今度は、いうところの〔女出入〕どころのさわぎではない異変であった。

　宝永三年の秋ごろから、権十郎は若党の小沼治作へ、

「供をせぬでもよい」

　と、いいわたし、一人で堀内道場へ通っている。

　異変は、道場からの帰途に起った。

三

　それは、宝永三年の霜月（陰暦十一月）半ばの或日のことであった。

　例によって、徳山権十郎は、早朝に屋敷を出て、堀内道場へ向った。

　すでに、若党の小沼治作は権十郎の供をしていない。

　だが、この朝にかぎり、裏門を出て行く権十郎を見送った小沼が、急に走り寄って来た。

「若様……」

「何だ?」

「あの……私、御供を……」

「供はよい。いまさら何を申すのだ?」

「なれど、あの……」

「なれど、あの……？」
「今日にかぎって、御供をいたしたく存じます」
「妙なことを申す……」
　不審そうに権十郎が、
「何ぞ、わけがあってか？」
「いえ、別に……」
「ならば供をせずともよい。おれも、もう元服を終えている。年が明くれば十八歳になるのだ。それで、ひとり歩きができぬでは仕方がないと、前もってはなしたではないか」
「承知いたしておりますが……何としても今日は、御供をいたしたく……」
　権十郎は、真面目顔でせがむ小沼治作を見て笑い出した。
「まあ、よい。まあ、よい」
「いえ、ぜひとも……」
「ならば、理由（わけ）を申せ」
「何ともなしに、その……胸さわぎがいたしますので」
「胸さわぎだと……古風なことを申すではないか」
「いえ、たったいま、若様をお見送りいたしましたるとき、妙に、この、胸がさわぎました」
「おれの身に変事でも起るというのか？」
「いえ、そのような……」

　いつになく小沼が執拗（しつよう）なので、権十郎は面倒になり、
「ならぬ。屋敷へもどっておれ!!」
目をむいて叱りつけ、さっさと石原町の通りへ出た。
　しばらく行って振り向くと、小沼の姿は見えない。
「ばかものめ……」
　つぶやいたが、その声には小沼治作への愛情がこもっている。
　小沼もまた、権十郎が年少のころから附（つ）きそっているだけに、逆境にある〔若様〕のためならば、
（なんでもしてのけてくれる!!）
と、おもいきわめているところがあった。
　その小沼の胸の内は当然、権十郎の胸へも通ったのである。
　権十郎は、朝靄（あさもや）にけむる両国橋を西へわたり、神田川沿いの柳原土手を西へすすみ、神田の昌平橋（しょうへいばし）を北へわたり、湯島の聖堂を右手に見てお茶の水へかかる。
　これから水道橋を経て、牛込御門の手前を北へ折れ、江戸川沿いに行くと立慶橋の東詰へ出る。
　橋をわたれば、堀内源左衛門道場が目の前に在る。
　本所の屋敷から道場まで、およそ一里半の道程（みちのり）であった。
　いまの権十郎は、学問のことなど、念頭にない。

ただもう、剣術がおもしろくておもしろくてたまらない。

自分の稽古も、他の門人の二倍三倍ほどやり、稽古が終って帰るのかとおもうとそうではない。

ともかくも、道場内に門人の姿が絶えるまで、居残って稽古を見ている。

他人の稽古を見ていることもまた、

「たまらなく、おもしろい……」

のである。

堀内源左衛門も、権十郎の熱心をよろこび、たまさかには、

「相手をせい」

夕餉の膳に、最後まで居残った権十郎をよんでくれることもあった。

堀内源左衛門には、子がない。

十年ほど前に妻女が病歿してより、独り身のままで通し、身のまわりは老僕の治兵衛と、治兵衛の姪にあたるお滝という四十がらみの女の二人で世話をしている。

堀内源左衛門が、どのような経歴のもちぬしか、それは権十郎も他の門人たちも、

「よく、わからぬ……」

ことなのだ。

流儀は、かの伊藤一刀斎が創始したという一刀流なのだが、門人たちは勝手に、

「堀内流」

と、称している。

年齢も、不詳である。

権十郎は、七年前に自分が入門したころから、

(堀内先生は、すこしも、お変りがない)

と、おもっている。

いつも、きれいに梳きあげた総髪は黒ぐろとしていたし、稽古にも、まったくおとろえを見せぬ。

堀部安兵衛が、まだ堀内道場へ通って来ていたころ、権十郎にこう洩らしたことがあった。

「自分が若いころ、奈良の御寺で拝した梵天王の像に、堀内先生はよう似ておわす」

梵天王は、三界の一である〔色界〕の主で、娑婆の世界をつかさどる神だそうな。

そしてまた、帝釈天と共に御仏の傍に侍し、仏法をまもる〔守護神〕でもある。

権十郎は、まだ、梵天の像を見たこともないが、それでいて、安兵衛の言葉が感覚的に納得できるようなおもいがした。

背丈は尋常ながら、足の下に根が生えたような端正な姿勢が、いつ、いかなるときもくずれない。厚く円味をおびた両肩から胸のあたりから、わずかに張って出た腹部。のびのびとした下肢。

堀内源左衛門の姿のやわらか味は、とても武芸者のものとはおもわれぬ。まだ権十郎は見たことがないけれども、裸体となれば、源左衛門の筋肉は見事に引き締っているにちがいない。

真夏の稽古中にも、堀内源左衛門は肌をぬぐことなど、決してしなかった。

眉毛は、男にめずらしい地蔵眉で、その下の切長の両眼は、いつも、やさしげな光りをたたえていた。

門人を相手に稽古をつけるときでも、堀内源左衛門の顔貌が昂奮の色を見せるときは、ほとんどないといってよい。

大声を発するわけでもなく、相手を強打することもない。

門人どうしの稽古の激烈さはさておき、源左衛門が木太刀を把って教導するときは、まったく言葉をかけなかった。

むろん、門人たちのだれひとりとして打ち込むことはできぬ。

門人たちの木太刀は、源左衛門のまわりの空気を叩き、切り裂いているのみなのだ。

「えい、おう!!」

凄まじい気合声を発して打ち込む門人の太刀をかわし、軽く払いのけ、源左衛門は、

「む!!」

わずかに、ちからのこもった低い声を発し、門人たちに間合の機微を悟らせようとする。

それがまた、ふしぎによく、のみこめるのだ。のみこめても、躰でおぼえこむまでには長い時間を必要とするわけだが、源左衛門に稽古をつけてもらうと、

（たしかに、昨日までの自分ではなくなっている……）

という充実感を、権十郎はおぼえた。

堀内源左衛門が何もいわなくとも、門人たちはよく稽古をし、その合間には初心にもどって重い振棒に挑んだ。

何も語らず、何も命ずることなく、みずからの言動……というよりも、日常の生活そのものをもって門人たちに悟らせるというのが、源左衛門の仕方であった。

四

堀内源左衛門は、どうしたわけか〔源太左衛門〕の名をもってよばれている。門人たちも、そのようにおもっているらしい。源左衛門自身も面倒なのかして、手紙にも源太左衛門と書きしるすこともあるようだが、

「いや、師の御名は源左衛門が真なのでござる」

と、堀部安兵衛が権十郎にいったことがある。

安兵衛は、師の過去についても、いくらかは知っていたらしいのだ。

いまになって残念におもうのだが、少年のころの権十郎としては、そうしたことを詮索する気もなかったのだ。

ともかくも二十余年前、飄然と江戸にあらわれ、この地へ道場を構えた堀内源左衛門は、数年のうちに、将軍家ひざもとの江戸府内における名流の剣客と肩をならべるほどになった。

格別に、はなばなしい試合をおこなったわけでもない。

社交をもって諸家へ取り入り、その勢力を利用したわけでもない。

わが剣を、わが名を売り込むようなまねをしたこともない。

ただ、黙々として、道場の門人たちを教導するうちに、その声望は高まり、ゆるぎないものとなったのである。

以後、諸大名からの招きも多いのだが、いっさい応じなかったし、源左衛門はまた、わが門人たちの技量がいかに進歩しても、これに昇格のしるしをあたえない。

いわゆる〔切紙〕をあたえるとか、奥儀をつたえて〔免許〕をあたえるとかいうことを、いっさいしないのだ。

これを不満として道場を去る門人も多かったのだが、それでいて、総数百二、三十の門人の数は、いつも平均しており、増えもしなければ減りもせぬ。

「まことにもって、ふしぎなことであった」

と、権十郎も述懐しているほどだ。

さて……。

その日も、徳山権十郎は七ツ半（午後五時）ごろまで、堀内道場にいた。

道場は、朝から日暮れまで、

「稽古は、いつにてもよし」

ということになっている。

門人の中には、午後おそくなってからでないと躰があかぬ者もいるからだ。

大名家の家来もいれば、大身旗本の子弟もおり、浪人の子も、その中にまじっている。

堀内源左衛門は、門人の身分の上下を問わぬ。

伊勢の桑名の浪人で、佐和口忠蔵という門人と二人きりになり、権十郎は二度目の稽古を一刻（二時間）もつづけたのである。

この日、堀内源左衛門は所用あって外出をしており、日が暮れても帰って来なかった。

「今日は、気が入りましたなあ……」

と、佐和口がいった。

権十郎の家柄をわきまえているので、佐和口は言葉づかいがあらたまっている。

けれども稽古中は、いささかも容赦することなく、乱暴な口調で、

「さあ来い。もっと来い!!」

とか、

「今日はひとつ、その弱腰が抜けるまで叩き伏せてやるぞ!!」

とか叫んで、権十郎を追いまくり、息もつかせぬ。

三十をこえて見える佐和口忠蔵は、四年ほど前から堀内道場へあらわれるようになった。

体軀堂々たる剣士であって、道場の中で、佐和口を打ち負かすほどのものは十人といまい。

堀内源左衛門は、佐和口を、はじめて門人たちへ引き合せたとき、

「この人は、わしの古い古い朋友の倅どのじゃ」

と、いった。

時折は、稽古が終ってからも堀内家へ泊り込むこともあるらしい。

佐和口は、特に権十郎へ目をかけて、

「さ、おいでなされ」

はじめは、ていねいに声をかけるが、木太刀を構えて立ち合うや否や、がらりと口調が変り、稽古が終った途端に、また、はじめの言葉づかいにもどるのである。

「かたじけなく……」

稽古が終ると、権十郎は、佐和口に両手をつき、頭を下げる。

「いやいや……」

佐和口忠蔵が、夕闇がたちこめている道場にすわったまま、

「そろそろ、組太刀を……」

つぶやいたのを、権十郎は聞いた。

「は……？」

「いや、なに……さ、水を浴びておいでなされ」

「はい」

裏手の井戸端で、権十郎は水を浴びた。

これは、厳寒の季節にも、かならずやる。稽古の後の水浴びが権十郎はたまらなく好きであった。

石井戸の周囲が、かなりひろい石畳になってい、低い塀(へい)を立てまわしてあるのは、門人たちの汗をながさせるためであった。

水を浴び、着替えをすました権十郎が門へあらわれると、老僕・治兵衛が提灯(ちょうちん)へあかりを入れたのを、

いつものように、権十郎へわたしてくれた。

「お気をつけなされまして……」

「ありがとう」

門を出た権十郎が、立慶橋をわたり切るまで、治兵衛は道場の門前へ出て来て、見送ってくれる。

権十郎もまた、橋をわたり切ったところで、かならず振り返る。

すると、治兵衛が頭を下げる。

権十郎が提灯をかざして、二度三度と軽く振って見せる。

これも、いまは二人の間の習慣(ならわし)となってしまった。

提灯には、丸に桔梗(ききょう)の徳山家の定紋がついている。

すでに、冬が来ていた。

夕闇が夜の闇に移ろうとしており、武家屋敷が立ちならぶこの辺りを歩む人影とてない。

昼すぎから雲が空をおおいはじめて、底冷えもきびしくなり、今日は道場でも、

「夜に入って雪になるかな……」

などという声もきこえた。

しかし、稽古の後の水浴びで、権十郎の全身は火照り、それが筆舌につくせぬこころよさであった。

（佐和口忠蔵殿が、稽古を終えたとき、そろそろ組太刀を、といわれたようだが……？）

おもいながら、いつしか権十郎は神田川沿いの道へ出ていた。

異様な感覚が権十郎をとらえたのは、このときである。

（だれかが、おれの後をつけている……）

五

だからといって権十郎は、その尾行者の姿も影も見たわけではない。

見たわけではないが、

（おれをつけている者がいる……）

という実感は、どうしようもないものであった。

武芸の鍛練を重ねるにしたがい、人間の感能は常人のはかり知れぬほどに研ぎ澄まされてくる。

理屈も何もない。

ただもう、勘のはたらきが鋭くなるばかりで、ことに、自分（おのれ）の手並が昇りつつあるときは尚更（なおさら）のことであって、場合によっては、自分で自分の勘のはたらきの強さ鋭さを、

「もてあます……」

ことさえあるのだ。

堀内源左衛門は、そのことについて、

「そうしたときの勘のはたらきが、すべて正しきものとおもいこむと、取り返しがつかぬことになる。人間（ひと）の勘のはたらきは、天地のうごき、その移り変りの影響（かかわりあい）を、あまりにもするどく感じ取るがために、かえって間ちがいを起しやすいものである。おのれの勘のはたらきをたのむということについては仕方もないことではあるが……その中（うち）にも一分（いちぶ）の余裕（ゆとり）をもっていなくてはならぬ」

と、いっている。

その師の言葉を、このときの徳山権十郎がおもい起したか、どうか……。

いずれにせよ、水戸中納言の宏大な江戸藩邸の、長い長い塀に沿って歩むうち、

（やはり、後をつけられている……）

このことが、ぬきさしならぬものになってきた。

それならば、

（何者が……何故に、おれの後をつけてくるのか……？）

であった。

闇にまぎれて、ひそかに尾行して来るからには、それだけの理由があるにちがいない。

権十郎に敵意を抱き、これを害せんとするからこそその尾行でなくて、何であろう。

（はて……？）

まったく、尾行などをされるおぼえがなかった。

水道橋をすぎると、左手にひろがる武家屋敷やら組屋敷やらへ出入りする者の提灯が、ちらほらと見えた。

まだ、夜に入ったばかりのことで、この時刻に、まさか自分を襲う者があろうとは、権十郎にとっておもいおよばぬことである。

（これは、おれの、おもいちがいやも知れぬ……）

いくらか、ほっとしてお茶の水のあたりへさしかかったとき、左側の武家屋敷の間の細い道から、すっと出て来た男が権十郎を振り向いて見て、そのまま、急ぎ足で湯島聖堂の方へ去った。

提灯も持たぬ男は、たちまち、闇にのまれてしまったが、あきらかにこれは浪人の姿（いでたち）だったのを権十郎は見逃さなかった。

（彼奴（きゃつ）め。おれの顔をたしかめた……）

このことである。

そして、

（おれの先まわりをした……）

のではないか。

とすれば、尚、権十郎の尾行をつづけている者があるはずだ。

相手は一人ではない。すくなくとも二人以上ということになる。

権十郎の全身は緊張した。

まだ人通りのある町すじをえらんで帰ろうかともおもった。

（なれど、おれを襲うつもりなら、これを避けることはできまい）

たとえば、両国橋をわたって本所の地へ入れば、石原町のわが屋敷へ到着するまでに、いくらも機会があるはずだ。

いやでも物さびしい道を通りぬけなくては、屋敷へはもどれぬのである。

（よし。何か知らぬが……来るなら来い!!）

と、権十郎は烈しく身震いをした。

（これが、武者振いというやつか……）

不敵に、笑ってみた。

笑うことによって、権十郎は落ちつきをとりもどした。

身震いが熄（や）んだのが、ふしぎなほどである。

（こうしたときには、笑うてみるがよいらしい……）

そうおもったとき、知らず知らず、また笑った。

（よし。死んでしもうても、かまわぬぞ……）

である。

（あれほどに、父上から嫌われているおれだし、おれもまた父上が嫌いだ。徳山家の主（あるじ）になったところで、父上のなされた事を、いやいやながら擦（なぞ）っているうちに、わけもなく生涯が

終ってしまう。いまここで、わけもわからぬ奴どもに襲われて、ちからいっぱいに闘い、それで斬られて死ぬるのなら、それでもよい……）

なのである。

相手は物盗りか……ともおもったが、選りに選って、剣術の稽古帰りの若者のふところから、金品を奪い取ろうなどというのは、酔狂にすぎる。

右手は、神田川の仙台堀の崖であった。

対岸は神田・駿河台の武家地ゆえ、灯火も洩れず、このあたりへ来ると人通りがまったく途絶えてしまった。

前方の道巾が、ひろがってきた。

そこは、定火消の御役屋敷外の、小さな広場になっているからだ。

広場に人の気配はなかったが、あきらかに自分の背後へせまる者のあることを、権十郎は知った。

ゆっくりと歩む速度を変えず、権十郎は大刀の鯉口を切った。

そのとき、

（あ……）

ふと、おもい出したことがある。

それは今朝、屋敷を出て来るときに、若党の小沼治作が、

「何とぞ、今日だけでも……」

と、権十郎の供をすることに執心していたことであった。

「何やら、胸さわぎがいたします」

と、小沼はいった。

それは単なる予感にすぎぬものだったのか……。

それとも小沼治作は、何らかの根拠あって、

（いい出たものか……？）

それはわからぬにしても、小沼治作の予感は、まさに適中したといってよい。

御役屋敷の広場をすぎると、左側は、むかし、慶安のころに、かの由井正雪の謀叛を幕府へ訴え出た四人の者へ賜わった土地だが、いまは名のみの町屋であって、相当にひろい草地を柵で囲い、この近くの武士たちが乗馬の稽古に使っているらしい。

後年になって幕府は、ここを本格的な馬場にした。すなわち〔桜ノ馬場〕である。

草地をすぎれば、湯島聖堂の長い練り塀がつづき、道は坂の下りとなる。

権十郎は提灯のあかりも消さぬまま、前方の闇を見据えて、さらに歩みをゆるめた。

冷たいものが、権十郎の頬にふれた。

雪が落ちて来たのだ。

六

〔聖堂〕の起りは、寛永七年（一六三〇年）に三代将軍・家光が、幕府儒官・林家の祖であっ

た林信勝(羅山)へ上野の山内に宅地をたまわり、ここを、

「興学の地」

としたことによる。

林羅山は、もと、京都の建仁寺の僧であったが、早くから朱子学をまなび、のちに初代将軍・徳川家康に仕え、以後四代の将軍の侍講から諸法度、外交文書におよぶ草案をつくり、上野へ居をかまえてからは論語、大学など多数の漢籍の出版、講授などにあたった。

いえば、上野・忍ヶ岡の林家は、天下を治める幕府の、学問の〔聖堂〕であって、図書館や祭器の庫が建ちならんでいたという。

現・五代将軍の徳川綱吉が、この聖堂を外神田の湯島へ移したのは、元禄三年の夏である。

その、およそ六千坪におよぶ宏大な敷地を、

「ここは、学問の聖郷である」

と、綱吉はいい、その呼び名に擬して、この地を〔昌平〕と唱えることになった。

ところが、元禄十六年に、新聖堂は類焼してしまった。

学問に執心する将軍・綱吉は、ただちに再建を命じ、細部はともかく、大聖殿をはじめ、装束所や諸門は、ほとんど完成している。

聖堂の練り塀と神田川にはさまれた道巾は、相当にひろい。

江戸市中の、大事な往還であるからだ。

この広い坂道を、後年になって〔昌平坂〕と呼ぶようになるわけだが、権十郎が生きていた時代の昌平坂は、湯島聖堂の北側にある神田明神社の鳥居前の道が聖堂の東側の塀沿いに下る、その坂をさす。

いま、徳山権十郎が下っている坂道と、昌平坂が出合うところには番所もあるし、茶店などもある。

(まさか、ここでは……?)

と、おもったが、いささかも油断はならぬ。

足の運びをゆるめるにつれて、権十郎は呼吸をととのえた。

手にした提灯のあかりが照らす路上へ、雪片がはらはらと吸い込まれて行く。

湯島聖堂の練り塀は長い、長い……このときの権十郎にとっては、まさに長すぎるおもいであったろう。

しかし、権十郎は足の運びを決して速めなかった。

いまここで、足を速めれば、せっかくにととのえた呼吸が乱れる。

また、足を速めることによって、こころの動揺が掻き立てられることにもなる。

人間の行動と心理とは、たがいに密着し、たがいに、たがいの変化を呼びもとめているものなのだ。

あきらかに、いまは、背後にせまりつつある者の気配を権十郎は感じていたのだが、その気配は、はっきりとした足音となり、ひたひたと距離をせばめてきた。

と、急に……。

足音が高くなった。

いや、猛然といってもよいほどの勢いで、権十郎の背後に迫って来た。

当然、権十郎は振り向いてこれに備えねばならぬ。

ところが権十郎は、振り向きもせず、はじめて小走りになって前方へ突き進んだのである。

依然、提灯は手からはなさぬ。

そして、ななめに道を横切り、神田川を眼下にのぞむ崖の淵へ走り寄った。

前方の、練り塀の裾に伏せていた黒い影が権十郎目がけて駈け寄ったのは、このときであった。

男が、二人である。

二人とも覆面をしており、一人は大刀を引きぬき、一人は手槍をつかみ、物もいわずに権十郎へ殺到して来た。

おそらく、彼らの計画は狂ったにちがいない。

権十郎の前方に二人が待ち伏せてい、後方の仲間が、わざと足音を荒らげて接近すれば、権十郎がこれに気づき、振り向いてそちらへ立ち向うことになる。

そこを、前方の二人が、今度は逆に権十郎の背後から襲いかかり、一瞬のうちにこの若者をほうむってしまうつもりだったのであろう。

しかるに、権十郎は一度も振り向くことなく、しかも道を横切り、わざわざ危険な崖の淵へ走った。

曲者どもにとって、これは予想のうちに入っていなかったことだ。

だが、権十郎に気づかれたからには猶予もならぬ。

権十郎が手にしている提灯のあかりを目ざして、彼らは襲いかかった。

「む!!」

先ず、一人が手槍を突き入れて来た。

権十郎の手を離れた提灯が燃える間もなく、崖下の神田川へ落ちて行った。

「ええい!!」

崖の淵で、徳山権十郎の凄まじい気合声が起った。

提灯の後を追うようにして、手槍を突きかけた曲者が神田川の暗い川面へ真逆様に落ち込んで行った。

提灯を投げ捨てると同時に、手槍をかわし、槍の螻首をつかんだ権十郎が腰を沈め、ぐいと手もとに引きつつ反転すると、曲者の躰が入れかわって崖の淵になった。

そこを、そのまま、槍を押し込むと、槍を手放さぬ曲者が今度は権十郎によって槍の石突を突き込まれたかたちとなり、足をすべらせて崖から落ちたのである。

「ああっ……」

曲者の叫びが尾を引いて神田川へ消えたときには、早くも権十郎は飛び退き、腰の大刀を抜きはらった。

「う……」

曲者が打ち込みかねた大刀を振りかぶったまま、
「は、早く、早く……」
低く叫んだ。
権十郎の背後から肉薄して来た曲者が走り寄って来たのは、このときであった。
これも二人。合せて三人だ。
「何者だ!!」
闇が張り裂けるばかりの大声で、
「おれを、徳山権十郎と知ってのことか!!」
と、権十郎がいった。
返事はない。
覆面の三人の曲者どもは、一気に権十郎を押し包もうとしている。
囲まれて不利なことは、充分にわきまえていたから、
「やあっ!!」
権十郎は、またも裂帛の気合声を発し、うごきかけている三人の右端の曲者へ刀を打ち込んだ。
「ややあっ!!」
曲者は、権十郎の刀を打ち払って飛び退いたが、足もとがもつれ、よろめいた。
またまた、大声をあげる権十郎に、曲者どもは困ったようだ。

このような大声なら、昌平坂の番所までとどいてしまうにちがいない。
気合声で曲者どもを牽制しつつ、じりじりと後退する権十郎の、闇になれた眼が、聖堂の練り塀のあたりにうごいた人影をとらえた。

七

その人影は、いま、権十郎へ立ち向っている三人とは別のものであった。
(新手か……)
と、看た。
人影は、一つである。
聖堂の練り塀の裾に屈み込んでいたのが立ちあがって、三人の曲者どもの後方へ逃げるようにして消えた。
闇を透かして、ちらりと見ただけのことだが、その人影を権十郎は、
(どこかで、見たような……)
と、感じた。
それも、一瞬のことで、
「たあっ!!」
正面の曲者が、間合をつめて来て、いきなり大上段に振りかぶった。
同時に、別の一人が権十郎の左側面へまわり込んだ。

さすがに、権十郎の呼吸が切迫してきた。
何といっても、生まれてはじめて、真剣をまじえたのだ。
権十郎が飛び退った。
大上段の敵は、じりじりと肉薄しつつ、
「それっ」
と、声をかけた。
権十郎の左から背後へまわりつつあった敵が、身をひねるようにして切りつけて来た。
この打ち込みをかわすとなれば、またしても崖の淵へ身を転じなくてはならぬ。
仕方もない。
転げるように、権十郎は敵の打ち込みをかわし、崖の淵へ逃げた。
そこへ、大上段の右脇にいた曲者が、
「待っていた!!」
とばかりに、刀を突き入れてきたのである。
「夜でなかったら、おれは殺られていたろうよ」
のちに、権十郎はそういっている。
足がもつれて、横ざまに倒れつつ、咄嗟に権十郎が片手なぐりに打ちはらった一刀が、もろに相手の脚を切った。
刀が脚の骨へ当ったらしく、柄をにぎりしめた権十郎の手へ衝撃があった。

そやつは叫び声をあげ、崖の向うへのめり込み、見えなくなった。
またしても、神田川へ落ち込んだのだ。
「さ、それがな、ばかなことよ。おれも、もっと早く、神田川へ身を投げていたほうが安心だったのだ。川の中までは追いかけて来なかったろう。おれの水練もまんざらのものではなかったしな」
と、権十郎は苦笑と共に述懐している。
しかし、そのときは川へ飛び込むなどという分別さえもなかったのであろう。
あとは、無我夢中であった。
ただ、助けをよぶかわりに、
「やあ、おう!!」
大声を張りあげ、刀を振りまわしながら、敵のいない闇の中へ闇の中へと逃げたのだ。
二人の曲者の黒い姿と、刃の光芒とが、そのうちに権十郎の前から消えた。
それでも逃げた。
呼吸のつづくかぎり、権十郎は逃げたのである。
それにも、限度があった。
すっと意識がなくなり、権十郎は倒れ伏した。
意識をうしなっていたのは、ごく短い間であったろう。
顔へあたる雪片の冷たさに、権十郎は意識を取りもどした。

喉（のど）が痛むほどに乾き切っている。権十郎は、降り落ち来る雪片を口中に受けた。
そこは、せまい道であった。
道というよりも、大きな旗本屋敷にはさまれた間隙（かんげき）ともいうべきもので、巾一間ほどの隙間が別の武家屋敷の裏塀までつづいていたのだ。
それをたしかめてから、権十郎に新たな恐怖がわきあがってきた。
出口は一つである。
敵が待ち構えているやも知れぬではないか……。
恐る恐る塀と塀の隙間から路上をうかがったが、人の気配はない。
抜身をひっさげたまま、権十郎は路上へ出た。
まだ、夜が更けたわけでもない。
向うから二人連れの町人らしいのが傘をさし、提灯を手にして、
「積もらなけりゃあ、いいがの」
「なあに、積もったら、向うへ泊ればいい」
語り合いながらやって来たのへ、大刀を懐紙でぬぐって鞘（さや）へおさめた徳山権十郎が、
「おい、おい……」
声をかけた。
「へ……？」
「ここは、どの辺りだ？」

「へ……？」
「ここは、どこだ？」
「ここはあの、湯島の裏坂の……」
いいかけた町人が、
「きゃあっ……」
悲鳴をあげて二人とも、狂人のごとく逃げ去った。
「ばかもの!!」
と、権十郎が声を投げた。
なんで逃げたのか、よくわからぬ。
ともかくも、いま自分が立っている場所がわかったので、
（聖堂の前から、このようなところまで逃げて来たのか……）
われながら、おどろいたものである。
（さて、どうしよう……？）
まっすぐに本所の屋敷へ向っては、危険である。
残る二人の曲者が、どこに待ち構えているか知れたものではない。
それに、いま一人、聖堂の練り塀のあたりにうごめいた人影のことが気にかかってならぬ。
その人影は、曲者に襲われた少年の権十郎を目撃していた。これに間ちがいはない。
それなのに、

（おれを助けようともしなかった……）

のである。

だからといって、曲者どもと共に、こちらへ襲いかかって来たわけでもなかった。

つまり人影は、権十郎と曲者どもの斬り合いを、だまって見ていたことになる。

（妙な……？）

人影は、たしかに侍であった。

覆面をしていたようにもおもえる。

なにぶん、闇の中で見ただけであるから、はっきりしたことはわからぬが、

（なれど、どこかで見たような……？）

おもいが、いまもしている権十郎であった。

権十郎は、下谷広小路へ出た。

広小路へ出ると、さすがに、まだ人通りはあるし、新黒門町から広小路の両側に立ちならぶ商舗の灯りも洩れていた。

意を決した権十郎が、山城の国・淀六万石の城主・石川主殿頭憲之の江戸屋敷の塀外に設けられた辻番所へ、つかつかと歩み寄って行った。

大名屋敷の辻番所は、その大名家が担当している。

「ごめん下され」

と、辻番所へあらわれた権十郎を台提灯のあかりに見た二人の番人が、瞠目して、

「いかが、なされた？」

「は……私は、盗賊改方をつとめております徳山五兵衛重俊が次男にて、権十郎秀栄と申します」

「はあ……」

「すこし前に、湯島聖堂の坂にて、四人の曲者に襲われました」

幕府の盗賊改方の息と聞き、番人たちの態度があらたまった。

「お怪我を……」

息をのんだ番人が、

いいざま、権十郎の腕を取って番所へすわらせた。

権十郎は、はじめて自分の姿を見て、

（なるほど。これでは、あの町人たちが逃げて行ったのもむりはない）

と、おもった。

むろん、髪は乱れに乱れているだろうし、着物にも袴にも、泥と血がこびりついている。

ここへ来てわかったことだが、曲者の返り血のほかに、権十郎自身も手傷を負っていたのだ。軽傷だが、左肩先と脇腹のあたりと、二ヶ所である。

「まことに、おそれ入るが……本所・石原町の、父の屋敷まで、連絡を取っていただけませぬか。曲者どもが、まだ、何処かに待ち伏せているやも知れませぬゆえ……」

いい終えたとき、さすがに安堵したのであろう。権十郎は全身のちからというちからが、

すべて脱け落ちてしまったかのように、
「水か、湯を……」
　いいさして、ぐったりと、その場へ倒れ伏した。

八

　それから一刻ほど後になって、徳山屋敷から迎えが来た。
　屋敷へ出入りをしている本所・相生町の駕籠屋から駕籠をたのみ、これに柴田宗兵衛と小沼治作がつきそい、盗賊改方の与力一名、同心三名が加わり、すでに、石川屋敷内へ運び込まれ、傷の手当と介抱を受けていた〔若様〕を引き取って行った。
「いずれ、あらためまいて、われら主人より御挨拶をつかまつります。おかげをもちまして、危急を救われましたること、かたじけなく存じまする」
　と、柴田宗兵衛は石川家の家来へ丁重に礼をのべた。
　石川家でも、盗賊改方の子息が曲者に襲われ、保護を受けにあらわれたというので、すべてに遺漏なく取りはからってくれた。
　すぐさま、徳山屋敷へ使いの者を走らせると共に、湯島聖堂前の現場へ藩士数名が駈けつけたらしいが、いうまでもなく曲者どもの姿はなく、遺棄された物も見当らなかったという。
「わ、若様……若様……」
　よびかけながら小沼治作は、権十郎の躰を門外の駕籠の中へ抱え入れつつ、泪声になり、

「なればこそ、御供をと申しましたに……」
　と、いった。
「治作は、おれが、このような目に会うことを知っておったのか……」
「いえ、知るはずはございませぬ。ただもう、何ともなしに、今朝は胸がさわぎましたので……」
　それは、権十郎がよく知っている。
　小沼のいうことに、嘘いつわりはない。
「治作……」
「はい。はい……?」
「お前が供をしていたら……」
「何とでござります?」
「供をしていたら、いまごろは、あの世へ行っていたろうよ」
「わ、若様……」
「相手は、四人であった……」
「げえっ……」
　小沼治作が、おどろき、
「そやつどもは、何のうらみあって若様へ……?」
「知らぬ」

小沼治作のみではない。

柴田宗兵衛も、知らせをうけたときに、

「これはきっと、権十郎様が道場への往き帰りに、巷の無頼者とでも争い事を起したに相違ない」

と、千にいったそうな。

権十郎を乗せた駕籠を護って、柴田用人以下六名が、雪の中を本所の屋敷へ、無事に帰り着いた。

帰り途には柴田宗兵衛たちが、合羽の下の着物へ襷をかけまわし、大刀の鯉口を切り、いざというときは、すぐさま応戦の構えをととのえていたのである。

与力の飯田七郎右衛門は、宗兵衛に、

「これは御用人殿。どこかの盗賊どもが、若様と知って害を為したのではあるまいか……?」

と、いったそうな。

屋敷へ入り、わが部屋へ運び込まれた権十郎が、そのことを柴田宗兵衛から聞くや、

一笑に付して、

「何を申すことか……」

「悪者どものうらみを買うほどに、父上が御役目におはたらきなされたか。おもうても見ろ。屋敷内に設けた牢屋には、ほとんど人影を見たこともないではないか」

「若様。すぐに医者を……」

「傷は浅い。千に手当をさせればよい」

と、権十郎が、傍でおろおろしている乳母の千へ、

「たのむぞ、千」

「は、はい……」

千と小沼が、あわてて部屋を出て行った。

「宗兵衛……」

「はい?」

「石川屋敷から知らせがとどいたとき、父上へはお知らせしたのか?」

「申すまでもありませぬ」

「ふうむ……で、そのとき、父上は何といわれた?」

「はい。すぐさま、権十郎様をお迎えに、と……」

「それだけか?」

「はい……」

宗兵衛は、おもわず目を伏せた。

知らせを受けた柴田宗兵衛が、顔色を変え、徳山重俊の居間へ走って行き、

「実は、ただいま……」

と、事の次第を告げるや、折しも書見をしていた徳山重俊が、おどろきもせず、じろりと宗兵衛を見やって、

「迎えを出すがよい」
と、いったのみである。
妾腹（しょうふく）とはいえ、血をわけた跡つぎの権十郎が曲者に襲撃されたというのに、重俊は腰を浮かせようともせぬ。
重俊が権十郎を疎んじていることは、よくよくわきまえている宗兵衛であったが、このときばかりは、
（あまりといえば……）
怒りがこみあげてきて、おぼえず主人をにらみつけると、徳山重俊は書見台の書物に目を転じたままで、
「何をしておるのじゃ。早う、迎えを出さぬか……」
と、いった。
狼狽（ろうばい）も不安もない、まことにしずかな、冷ややかな声音なのだ。
「は……」
足音も荒くなるのを、かまわずに宗兵衛は廊下を走りもどり、急ぎ、手配をととのえたのであった。
そのときの徳山重俊の姿を、声を、そのままに権十郎へ告げることは、なんとしてもできぬ。
「ま、よいわ……」

困惑している宗兵衛を、うすく笑って見た権十郎が、
「父上は、あわてもせず、さわぎもせず……な、そうだったのだな、宗兵衛……」

九

柴田宗兵衛は、うつ向いたまま、こたえなかった。
こたえぬことによって、権十郎の問いかけを肯定したのである。
そこへ、千と小沼が傷の手当の仕度をして、もどって来た。
「よし。たのむ」
権十郎は、仰向けに寝た。
小沼と千が、傷の手当にかかった。
すでに、石川屋敷で応急の手当を受けているので、血も止っていたし、縫合の必要もないほどの傷である。
「宗兵衛。曲者は四人だった……」
「よ、四人……」
石川屋敷の門外で、小沼治作へ権十郎が、そのことを洩らしたとき、宗兵衛は、まだ門内にいて石川家の家来に挨拶をしていたのだ。
「四人と、申されまいたか？」
「うん」

「では、権十郎様と知ってのことではございますまい。余人と間ちがえたのでございましょう。そうとしかおもえませぬ」
「いや、斬り合う前に、おれは名乗ったぞ。それにもかかわらず、斬ってかかってまいったのだ」
「斬り合いを、なされまいた……?」
「うん」
「よ、四人を相手に?」
「きまっているではないか」
宗兵衛が、小沼や千と顔を見合せ、共に唖然となった。
すぐには言葉も出ぬ。
いかに、堀内源左衛門の愛弟子であっても、十七歳の徳山権十郎が生まれてはじめて真剣をもって四人もの曲者と闘い、軽傷を負っただけですんだとは、三人とも信じられなかったのであろう。
さらに、
「そのうちの二人を、神田川へ斬って落した」
と、権十郎がいったものだから、三人のおどろきは層倍のものとなった。
「それは、まことでございますか?」
「まことだ。死んではおるまいが、川へ落ちたことに間ちがいはない。このむねをとどけて

おけ」
「はい。はい……」
「おれの刀を見よ。血がついているはずだし、刃こぼれもあるだろう」
「はあ……」
「それに、いま一人……」
「いま一人、と、申されますと、別に……?」
「そう、別にひとり……」
「それは?」
「そやつは、刃向って来ずに、どこかへ消えた……」
と、天井へ目を据えたまま、記憶をたどるかのようにつぶやいた権十郎が、急に、
「あ……」
低く、叫んだ。
「どうなされまいた?」
「いや……別に……」
あとは、宗兵衛が何をいっても、権十郎は答えなかった。
「では、権十郎様が御無事でおわしましたることを、殿へ言上してまいりまする」
気がすすまぬ様子で、柴田宗兵衛が出て行ったのちに、権十郎が、
「これ、千」

「はい」

「腹がへった」

「あ……これは、気がつきませなんだ」

あわてて、千が部屋を出て行った。

小沼治作が残り、権十郎の夜具を敷きのべている。

「治作。ここへまいれ」

「は……?」

「早く、早く……」

「何ぞ……?」

「だれにもいうてはならぬぞ、よいか」

「はい……?」

「今日の、日暮れてのちに屋敷へもどった者がおるか、おらぬか、密かに調べてくれ。このことは宗兵衛にも千にも洩らしてはならぬ。よいか、よいな」

「はい」

「先ず、門番たちへ尋け。すくなくとも、この屋敷内で、門番たちはおれの味方らしい」

「は……」

小沼は、蒼ざめていた。

権十郎が何を探ろうとしているかを、おぼろげながら感じたらしい。

(もし、そうだとしたら……これは、大変なこと……)

だからである。

そのようなことが、あっていいはずはない。

(まさかに……?)

これは、

(若様の勘ちがい……)

ではないかと、小沼治作は胸の内で烈しくかぶりを振った。

「わ、若様……」

「叱……千が、もどって来たぞ。さ、行け。行って調べてきてくれ」

「は……」

うなだれて出て行った小沼と入れちがいに、千が部屋へ入って来た。

「どうなされました?」

「何が?」

「小沼が、妙な顔つきをして、私を見ましたけれど……」

「千の知ったことではない」

「あの……殿様は、まだ、御見舞いにお見えあそばしませぬのか?」

「あは、はは……来るはずがない」

「なれど……なれど、若様が曲者どもに襲われて、このようにお怪我をあそばしたのに

「……」
「もうよい。それより飯はまだか?」
「いますこし、お待ち下されませ」
千は、このときとばかり、権十郎の世話をやいた。
昂奮し、上気している千の、三十六歳の躰からただよってくる女のにおいは濃厚をきわめている。
ふと……。
権十郎の躰の芯へ、得体の知れぬ衝動が起りかけた。
これは、三年前のあの日。文庫蔵へ入って行く侍女の鶴を見たときの衝動と、同質のものである。
権十郎は狼狽した。
「若様。もし、若……どうなされました? そのような、むずかしいお顔をなされて……」
「去ね!!」
権十郎が乱暴な言葉づかいになって、
「おれを一人にしておけ」
「ま……」
「去ね。去ねというたら去ね!!」
「は、はい……」

「何をしている。出て行かぬか!!」
千が泣きそうな顔になって、廊下へ走り出て行った。
しばらくして食事の膳を運んで来たのは、小沼治作だ。
給仕をしながら、小沼が、
「いますこし、お待ち下さいますよう……」
「うん」
「傷は、お痛みになりませぬか」
「平気だ。飯がうまい」
「軽い傷にて、ようございました」
「あの、な……」
「はい?」
「おれがねむってしまってからでもよい。そっと来てくれ」
「かしこまりました」
「宗兵衛は、いかがしている?」
「殿様の御居間へまいられましたきり、まだ、おもどりになりませぬ」
「ふうん……」
権十郎は、飯を五杯も平らげた。

十

夜ふけてから、小沼治作が忍んで来て、権十郎をゆり起した。
「治作か……」
「はい。よくおやすみのところを、申しわけもございませぬ」
「何の……おれからたのんだことよ。雪は、まだ降っているのか?」
「大分に、積もりましてございます」
「いま、何刻だ?」
「そろそろ子の刻でございますが……」
「うむ。それで、何か、わかったか?」
「若様……」
さらに声を低めた小沼治作が差し寄せてきた顔は、異常の緊迫をたたえていた。
「わ、わかりましてござります」
「そうか……」
「御用人様と私どもが、若様をお迎えに御屋敷を出るすこし前だったそうでございますが……裏門から、大野郁太郎殿が、もどられたとのことでございます」
「ふうむ……」
さすがに、権十郎は胸がとどろいた。

自分の予測が、どうやら、あやまたずに適中したからであった。
「やはり、な……そうか、やはり、大野郁太郎がな……」
「若様。なれど……なれど……」
「なれど、何だ?」
「早まってはなりませぬ、かと……」
「早いも遅いもない」
いうや、両腕を組んだ徳山権十郎が、
「むう……」
肚の底から、異様な唸り声を発した。
「どうも、見たような人影とおもうたのだ。聖堂の練り塀の裾に屈み込んで、おれが曲者どもに斬りかかられるのを見ていた奴が……」
「はあ……」
と、小沼が息を引き、その喉が鳴った。生つばをのみこんだのだ。
「暗闇を透かしてのことゆえ、しかとはわからなんだが、おれに見られて、あわてて逃げた姿は、やはり、大野……」
「なれど、それは、いったい、どうしたわけなのでございましょうか?」
「結句、主の子であるわしが殺害されようとしているのを、大野郁太郎は見物をしていたのだ。申し合せたかのように、あのとき、あの場所に大野が居合せ、おれに加勢をするでもな

く、助けを呼ぼうともせず、おれに見られて姿を隠し、何くわぬ顔をして屋敷へもどった……つまり、そういうことになる。ちがうか?」

小沼が、かぶりを振った。

「大野めは、おれが襲われることを知っていた……いや、彼奴(きゃっ)めが曲者どもを手引きしたのだろう」

「…………」

「これは、大野の一存ではない。お前も、そうおもうだろう、どうだ?」

こたえるには、あまりにも事が重大すぎる。

小沼は沈黙し、目を伏せてしまった。

権十郎はまた、夜具に横たわったが、神経が昂(たか)ぶり、ねむるどころではなかった。

しかし、柴田宗兵衛が徳山重俊の居間から下って来て、権十郎の様子を見に来たときは、わざと、ねむった振りをしていたのである。

ややあって、小沼治作が権十郎へ告げたところによると、宗兵衛が下ったのを見すますようにして、大野郁太郎が徳山重俊の居間へ入って行き、

「いまも、御用談中でございます」

なのだそうだ。

「よし」

と、何をおもったか権十郎が、ひとりうなずき、

「小沼。もっと近くへ来い」

「は……?」

「よいか、明朝な……」

何事か、小沼の耳へささやいたものである。

それから間もなく、小沼治作は権十郎の部屋を出て行った。

翌朝……といっても、五ツ半(午前九時)すぎになって、大野郁太郎が自分の長屋で外出(そとで)の身仕度をしているところへ、小沼治作がやって来て、

「御用人様が、およびです」

と、いう。

「何、御用人が……」

大野は、露骨に嫌な顔つきになって、

「いま、おれは、殿様の御使いで出かけねばならぬのだ」

「いえ、御用人様も殿様のおいいつけにて、御文庫蔵へまいられましたが、あなたに見ていただかぬと、おわかりにならぬのだそうで……」

「ふむ……」

文庫蔵を管理しているのは大野である。

「仕方もない。よし、いま、行ってみよう」

「おねがい申します」
小沼は、去った。
眩(まぶ)しいばかりの雪晴れであった。
わずかに積もった雪が、奥庭の景色を一変させている。
明るい陽光が、奥庭にみなぎっていた。
奥庭の裏の通路へ出て来た大野郁太郎が、彼方(かなた)の権十郎の部屋を見やると、雨戸は閉じられたままになっている。
大野は、するどい舌打ちを洩らした。
文庫蔵の前まで来ると、扉が開け放したままになっていた。
「御用人。大野でございます。およびでしたか?」
声をかけながら、文庫蔵へ入った大野郁太郎が、おもいきり背中から突き飛ばされた。
「あっ……」
のめり倒れて、
「な、何をなさる……?」
振り向いたとき、文庫蔵の扉が閉まった。
外からではなく、内側にいた者が閉めたのである。
「あっ……」
大野は、悲鳴に近い叫びをあげた。

扉を閉めて、こちらへ振り向いたのは、何と〔若様〕ではないか。
「おい、大野」
よびかけて近寄って来た権十郎が、いきなり、大野の顔面を撲(なぐ)りつけた。
声も出ぬほどの強打であった。
大野は転倒し、それからはじめて呻(うめ)いた。
「おのれは昨夜、おれを殺そうとしたな」
と、権十郎が大野の前へ屈み込んで、そういった。
「う、うう……」
「おい。返事をせぬか」
「ぞ、存じませぬ」
「では昨夜、何処(どこ)へ行った?」
「う……」
「何処へ行ったのだ。その行先を聞いて問い合せてくれる。さ、いえ。申せ」
「し、し、知りませぬ」
「おのれが出た先も知らぬというわけがあるか」
「いえ、あの……」
「おい、大野……」
と、権十郎が大野郁太郎の襟髪(えりがみ)をつかんで引き起し、

「おれは脅しているのではない。場合によっては、おのれをこの場で殺すつもりだ」

「あっ……」

「おのれも昨夜、おれを殺そうとした。なれば、おのれを殺しておかなくては、おれもおちおちねむれぬ」

十一

大野郁太郎の顔は土気色になり、全身が瘧のように震えはじめた。

権十郎の言葉が、単なる威しではないことを知ったからだ。

「おい……」

と、権十郎が文庫蔵の二階へ架けられている梯子段を指し示した。

「は……？」

「あがれ」

「あの……」

「上へ、あがれというのだ」

「は……」

「こやつめ……」

大野は、梯子段を昇りかねている。

蔵の二階へあがれというのは、さらに人目につかぬ場所へ行くことになる。

そこで、権十郎が何をするか知れたものではないのだ。

震えながら、ためらっている大野郁太郎を睨めつけつつ、権十郎の手が腰の脇差へかかった。

かかったかとおもった瞬間に、青白い光芒が疾り、大野は右の耳朶の縁を切り飛ばされた。

「あっ……」

悲鳴を発してよろめく大野の顔面へ、権十郎の左手が飛び、叩き撲った。

大野は仰向けに転倒し、権十郎の、

「声を出すな」

の一声に、竦みあがった。

耳朶のすべてを切り落されたわけではないのだが、ふき出す血汐は、たちまちに大野の頸すじから喉のあたりへしたたり落ち、衣服が見る見る赤く染まった。

「二階へ行け」

大野は弱よわしく、微かに、かぶりを振った。

「嫌なのか？」

大野が、うなずく。

「おれが怖いか？」

大野のうなずきは、あわれみを乞うている。

「では、申せ」

「あ……」

「だれにたのまれて、おれに刺客を放ったのだ?」
「う……」
「先(ま)ず、そのことを申せ」
大野が、かぶりを振る。
同時に、またしても権十郎の脇差が閃(ひら)めいた。
今度は左の耳朶であった。
「お、お助け……」
血まみれになった大野郁太郎が両手を合せ、権十郎を伏し拝むかたちとなった。
「助かりたくば、申せ。だれにたのまれた?」
「う、うう……」
「いえ!!」
「そ、それは……」
いいさした大野へ間髪を入れずに権十郎が、
「父上にか?」
低いが鋭い声で尋いた。
がっくりと、大野郁太郎がうなずいた……ように見えた。
「父上にだな?」
今度は、まさしく、大野がうなずいた。

「よし、わかった。おのれは父上に命じられて、おれの命を絶たんがために刺客を雇い、おれに襲いかからせた。そうだな……」
「う……」
「そうだな!!」
大野が、うなずく。
「刺客は、どこの者だ?」
「…………」
「剣客か、それとも無頼の浪人どもか?」
大野は、うなずいた。
「無頼の者どもなのだな?」
「あ……」
「どうなのだ?」
うなずく、大野郁太郎。
「どこから、駆りあつめたのだ?」
「…………」
「おのれは、あのような者どもと知り合うていたのか?」
返事がない。
大野郁太郎の、辛うじて坐っていた躰(からだ)が前のめりに倒れ伏した。

気をうしなったのである。
　まばゆいばかりの、雪晴れの陽光が蔵の明り窓から射し込んでいる。
　権十郎は、脇差をひっさげて立ちつくしたまま、しばらく、奥庭の雀の囀りに耳をかたむけているかのようであったが、何をおもいついたのか、にやりと笑い、脇差で大野郁太郎の髷を切断した。
　それから脇差の刀身を大野の衣服でぬぐって鞘へおさめた。
　大野の両耳からしたたる血が、蔵の板敷きへつたわりはじめた。
　権十郎は大野の上体を引き起し、その背中へ膝を当てがい、両肩をつかみ、
「む!!」
　活を入れた。
「むうん……」
　唸った大野郁太郎の両脇へ腕を差し込み、
「大野。立て!!」
　耳もとで、権十郎が一喝した。
「ああっ……」
「音をあげるな、莫迦者め!!」
「う……」
「さ、行け」

「あ……」
「外へ出るのだ」
　髷を切られた髪がばらりと顔へたれ下っても、大野はそれと気がつかぬほどに、朦朧となっている。
　権十郎に押され、文庫蔵の外へ出たとたんに、掃除帚を持って生垣の外を通りかかった中間が、これを見て、
「ぎゃあっ……」
　悲鳴を発し、帚を放り捨てて逃げ去った。
「歩け。さ、歩け!!」
「いずこへ……?」
「どこでもよい。まっすぐに行け!!」
「は……」
　両手を宙に泳がすようなかたちで、大野がふらふらと歩み出した。
　何かに取りすがりたい気もちなのであろう。
　奥庭づたいに行く二人を、廊下から見た侍女の悲鳴が聞こえた。
　権十郎は、大野郁太郎を渡り廊下へあげ、父・徳山重俊の居間へ向う。
　大野は、もう、自分がどこへ向っているのだか、どこを歩んでいるのだか、見当もつかなくなっているらしい。

また、別の侍女の叫び声がした。

居間で書見をしていたらしい徳山重俊が、

廊下へあらわれた、その目の前へ、権十郎に背中を突き飛ばされた大野郁太郎がのめり倒れた。

「何事じゃ?」

「権、権十郎。こ、このありさまは、な、何としたぞ?」

重俊の老顔が、火鉢の灰のような色になった。あきらかに脅えている。

大野が這うようにして、重俊の居間へ逃げ込んだ。

廊下にも、畳にも、大野の傷口から血が飛び散り、それは重俊の衣服にも附着した。

廊下の彼方で、

「御用人を……早う、御用人を……」

叫ぶ家来の声がして、あわただしく足音が乱れ走っている。

「父上……」

呼びかけざま、権十郎が重俊の胸のあたりを押すようにして、居間へ突き入れ、後手に障子を閉めた。

「な、何をいたす……?」

と、重俊が書見台の前へすわり、

「この態は何事じゃ!!」

胸を張って威厳を見せ、大声に叱りつけた。

だれに向って叱りつけたかというと、権十郎には顔をそむけ、うずくまっている大野郁太郎を睨みつけているのだから、これは大野を叱りつけていることになるではないか。

「汚らわしい。出て行かぬか!!」

大野が、うったえるように重俊を見あげた。

「何をいたしておる。行け。行けい」

「は……」

ちらりと権十郎を見やった大野が、次の間へ逃げようとするのを、追いすがった権十郎がつかまえて足蹴にした。

耳からの出血は止りかけていたが、乱髪血だらけの大野の姿は見られたものではなかった。

十二

「権十郎。無体をいたすな」

たまりかねたように、徳山重俊が叫んだ。

「無体でございますと?」

「む、無体ではないか……」

「無体は、どちらでございますか?」

「な、な、何じゃと……」

「天下の直参、二千二百四十石の大身であられる父上が、家来をそそのかし、密かに刺客を放って、血を分けた我子を殺害せんとしたことが、無体でなくて何でありましょうか」
「う……」
重俊は、凄まじい目つきで睨んだ。権十郎をではない。権十郎の足が押えつけている大野郁太郎を、である。
「父上。大野郁太郎が、すべてを白状いたしました」
重俊は、こたえぬ。
権十郎の声音は、大きいものではなかった。
むしろ、老人のようにしわがれた声に変ってきている。
「嘘じゃ」
呻くがごとく、徳山重俊がいった。
「嘘……」
「大野は、嘘を申したのじゃ」
すると権十郎が、大野へ、
「文庫蔵で申し立てたことは、嘘だというのか……」
いいざまに、片ひざをついて脇差を引きぬき、大野の頸すじへ当てた。
「ひえっ……」
逃げようとしても、権十郎の左腕が襟髪をつかみしめている。

「や、やめぬか……」
重俊が腰を浮かせた。
「本当だな、おれにいうたことは!……父上が、おれを殺そうとなさったのだな」
「う……」
「いわねば殺す。おれは、この場で、おのれを殺して腹を切る決心なのだ」
不気味にいって、大野の頸へ刀身を当てがいつつ、父・重俊を見た権十郎の両眼から見る見る熱いものがふきこぼれてきたではないか。
「さすれば父上も、さぞ、およろこびなされよう」
重俊が、虚脱したようになり、くずれるように腰を下した。
これが、強盗どもを取り締る盗賊改方の長官だというのだから、どうしようもないのだ。
「大野。いえ。いわぬか!!」
「う……」
「父上が、おのれをあやつり、この権十郎を殺害せしめようとしたのだな……」
観念した大野郁太郎が、がっくりとうなずいた。
「返事をせぬか」
「は、はい……」
「よし」
泪をぬぐおうともせずに、権十郎が、

「父上。お聞きなされましたな……」
と、念を入れた。
重俊は茫然としている。
権十郎が大野を突き放し、立ちあがって脇差を鞘へおさめると、しずかに障子を開け、廊下へ出た。
廊下の彼方に家来たちがかたまって、怖ごわと、こちらを見ている。
「おのれたち……」
と、呼びかけた権十郎が、
「大野郁太郎を介抱してやれ。父上も早う、寝所へ移しまいらせたがよいだろう」
いい捨てて、わが居室へ向った。
権十郎のうしろから、用人・柴田宗兵衛が駈けつけて来た。
このとき、千は外出(そとで)をしていたらしい。
「権十郎様。何といたされまいた？」
「大野郁太郎に尋(き)くがよい」
「大野を折檻(せっかん)なされまいたとか……？」
「おお。耳を二つ切ってやった」
「えっ……」
「もうよい。事はすんだ。それよりも父上の様子を見てさしあげろ」

めずらしいことをいうものだ、というような顔つきになった柴田宗兵衛が、
「のちほど、あらためて、おはなしをうかがいまする」
そこは、二千二百四十石の用人である。
主人の様子が異常だと聞けば、打ち捨てておくわけにもまいらぬ。
宗兵衛は、重俊の居間へ急行した。
そのとき、奥庭に面した障子の外で、
「若様……」
と呼ぶ若党・小沼治作の低い声が聞こえた。
「入れ」
「はい……」
小沼が障子を開けて、
「首尾よう……？」
「うむ。よくやってくれた。礼をいうぞ」
「何の……」
「なれど治作。このことは、かまえて他言いたすな。よいか」
「はい」
小沼は、しっかりとうなずいた。
誓った以上は、口が裂けても他言をするような小沼治作ではない。

「やはり、大野殿が……?」

「ま、そのことは、もうよい。何事もなかったことにいたそう。後の始末は宗兵衛がしてくれよう」

立ちはだかったままの権十郎が、両手を顔へ当てて、強く烈しく擦(こす)り出した。

手をはなすと、顔が真赤になっている。

小沼治作は、

(若様は、泪を擦り取られたのだ……)

と、看て、顔をそむけた。

「小沼。よう晴れたな」

「はい……」

「道場へまいる」

「お仕度を……」

「たのむ。それから、今日は、供をしてもよい」

「まことでございますか?」

「明日も、供をするか?」

「は、はいっ」

間もなく、高下駄を履いた徳山権十郎が小沼治作を供にして、屋敷を出て行った。

何と、今日は表門から出て行ったものである。

表門は、盗賊改方・役宅の門を兼ねている。

詰所から、徳山重俊配下の同心たちが、ひそひそとささやき合いながら、権十郎を見送っていたし、門番たちは、大手を振って表門から出て行く〔若様〕を、うれしげに、たのもしげに見送った。

徳山重俊は、柴田用人とも会わずに寝所へ引きこもってしまい、大野郁太郎も屋敷内の自分の住居(ながや)へ運び込まれ、傷の手当を受けているらしい。

用人屋敷へもどった柴田宗兵衛が、外出から帰ってきた千に、こういった。

「まだ、はっきりとはわからぬが……何やら、とんでもない、おそろしいことが起ったらしい」

十三

柴田宗兵衛が、権十郎の居室から主人の居間へおもむいたとき、すでに徳山重俊は、侍女や家来たちの介抱をうけて寝所へ入っていたのである。

重俊は、

「まるで、死んだように……」

臥床(ふしど)へ横たわっていた。

「殿……殿……」

擦り寄った宗兵衛が声をかけると、重俊は左手を出し、さも、うるさげに振った。

「いかがなされまいたので……?」

かまわずに宗兵衛が、
「徒ならぬことの出来いたしましたように見うけまする。お聞かせ願わしゅう存じまする」
重俊は、こたえようともしなかったが、ようやくに、その顔へ血の色がのぼってきたようだ。
「宗兵衛。御当家の用人職を相つとめますからには、耳にいたすべきことはいたしておかねばなりませぬ」
たとえ、主人の心ノ臓が発作を起したとしても、
(かまうものではない……)
と、宗兵衛は胸の底で怒っていた。
昨夜、権十郎が数名の刺客に襲われたことといい、今日の出来事といい、徳山家の用人として放置してはおけぬことばかりではないか。
そのことについて、徳山重俊は何か身におぼえがあるらしいのに、用人の自分へは一言も洩らそうとはせぬ。
これでは家宰の役目がつとまらぬわけだから、宗兵衛の怒りはもっとものことといってよい。
(ええ、もう、このまま発作を起されて亡くなられたとてかまうものか。御当家には、もはや権十郎秀栄様という立派な跡つぎがおわすのだ)
と、柴田宗兵衛はおもいきわめた。

「殿……殿……」
「うるさい……」
「いえ、申しあげまする。ぜひとも、お聞かせ願わしゅう存じまする」
「後刻に、せよ」
「武士の家の火急の事件に、後刻がござりましょうや?」
「む……」
頸をねじまげるようにして、宗兵衛を見やった重俊が、
「おのれは、わしを殺すつもりなのか?」
忌いましげにいった。
「何とて、そのような……」
「いま、わしは、胸が苦しいのじゃ」
「さほどには、お見うけいたしませぬが……」
「たのむ」
重俊が、うったえるような口調になった。
「たのむ、後刻のことにいたしてくれい」
「なれど、御当家の用人として柴田宗兵衛、すみやかに事件をおさめねばならぬかと存じまする。昨夜、若様が得体の知れぬ曲者どもに襲われましたることといい、先刻の騒ぎといい、徒事とはおもわれませぬ。若様は御文庫蔵において、大野郁太郎をきびしく折檻なされたそ

うでございますな」
「う……」
「御存知でございましたか？」
「む……」
「その大野が血に染まって、御居間へ逃げ込みましたそうな」
「………」
「何ゆえ大野は、そのように汚れたる姿を御居間に……」
「も、もうよい。さ、さがれ」
「さがりませぬ」
「ぶ、無礼者め。あ、あるじに逆ろうのか……」
「は……」
両手をつき、頭を下げた柴田宗兵衛が、
「私めは、御当家に仕える者のつとめとして、事の次第をおうかがいいたしております。なれど、あるじに逆ろうのかとまでおおせられましては、引き下るよりほかに、いたしかたもござりませぬ」
「さ、さがれ……さ、さが……」
「はい。引き下ります。なれど、昨夜来のことを、このまま捨て置くわけにもまいりませぬ」

「な、何……？」
重俊が、不気味そうに宗兵衛を見た。
宗兵衛は、かまわずに、
「殿は、盗賊改方という重き御役目をおつとめあそばす。このことをもってしても、昨夜、若様を無き者にと襲いかかりし曲者どもについては、なんとしても、その正体を発(あば)き、彼奴(きやつ)どもを捕えねばなりませぬ」
うつ向いたまま、そういってから、じろりと主人の顔を見上げると、徳山重俊は顔をそむけてしまったではないか。
「昨夜のことは、すでに、石川主殿頭(とのものかみ)様御家中の方がたの目にも耳にも入っておりまする」
「う……」
「殿は、組下の与力・同心たちへ、曲者探索の御指図をなされましたのでございますか？おうかがい申しあげます」
重俊は、跡つぎの息子を襲った曲者どもに対し、何の関心もしめさず、したがって、一つの指令も発してはいないが、与力や同心たちの一部は、すでに出動し、お茶の水界隈(かいわい)の探索をおこなっているはずだ。
「町奉行所においても、だまってはおられますまい。いかが……？」
仰向けに寝たまま、天井を見上げている重俊の眼は、何やら脅えているようであった。
「殿。石川主殿頭様御屋敷へも、すぐさま、御挨拶にあがらねばなりますまい。いかが取り

はからいましょうや?」

「か、代りに……」

「は?」

「主人、急病ゆえ、そちが代りに、石川様御屋敷へ……?」

「うむ……」

「うけたまわりました。いま一つ、申しあげまする」

「な、何じゃ?」

「これより、私めが、大野郁太郎を糾明いたしても、よろしゅうございますか?」

「ま、待て」

あきらかに、徳山重俊は狼狽し、半身を起した。

「大野は、わしが、みずから糾明いたす」

主人に、こういわれては、柴田宗兵衛も逆らうわけにはまいらぬ。

(しまった……)

と、宗兵衛はおもった。

(殿に、おことわり申さず、わしの独断をもって、大野を調べればよかった……)

このことである。

俄然、徳山重俊の様子が変った。

「すぐさま、石川主殿頭屋敷へ、挨拶に出向くがよい」

叱りつけるように、宗兵衛へ命じた。

「は……」

「贈物にも、遺漏なきようにいたせ」

「心得ましてござります」

胸の内で舌打ちをしながら、柴田宗兵衛は主人の寝所から引きさがって来たのだ。

すると、そのすぐあとから、徳山重俊も起き出し、着替えをし、居間へあらわれた。

「大野郁太郎を取り調べる。此処へ連れてまいれ」

と、いい出したのである。

傷の手当を終えて、自分の長屋に寝ていた大野は、その主人の言葉がつたえられると、

「さようか……」

救われたような顔つきになり、重俊の居間へ入って行った。

「千。奥の事に気をつけていてくれ。よいか、よいな……」

千にいい残し、柴田宗兵衛は、あわただしく石川屋敷訪問の仕度に取りかかった。

十四

午後になって、石川屋敷への挨拶をすませた柴田宗兵衛が、急ぎ屋敷へもどって来ると、

出迎えた千が、

「父上。大野郁太郎が何処かへ出て行きましてございます」
「な、何じゃと?」
「裏門からそっと……殿様が、わざわざ駕籠を呼んでおやりになったそうでございます」
「ふうむ……」
「私も、うかつに、奥へ入れなくなりました」
「何としてじゃ?」
徳山家のように、二千石もの大身旗本の屋敷になると、屋敷内が〔表〕と〔奥〕と別れてい、表では主人の公務がおこなわれ、奥は、いわゆるくつろぎの住居区となる。
侍女たちがいるのも奥であるし、妻子もまた〔奥向き〕に暮していることになるのだ。
ところが、千が〔奥〕へ入ろうとすると、家来たちが境の廊下口にいて、
「お取り込みゆえ、お入りはかないませぬ」
と、いい、通してくれぬのだそうな。
(殿が、大野を逃しなされた……)
宗兵衛は直感した。
しかし、さすがの柴田宗兵衛も、まさかに主人が家来の大野をつかって、刺客をあつめ、跡取り息子を暗殺せしめようとしたとは、おもいおよばぬことであった。
後年にいたって、そのことをはじめて知ったとき、
(何という愚かなことを……)

宗兵衛は茫然としたものだ。
「わが主を、それほどの愚か者じゃとは、おもうてもみなんだわえ」
と、これは、むすめの千にのみいったのである。
おそらく、徳山重俊は、権十郎を毒殺することも考えたにちがいない。
だが、屋敷内で毒を盛るためには、いろいろと手数がかかることだし、毒薬を入手することだけでも証拠が残ることになる。
そこで、この秘密を腹心の大野郁太郎一人の胸におさめさせ、どこからか、大野が刺客をあつめ、これに金子をあたえ、権十郎を襲撃させたのであろう。
おそらく刺客どもは、殺害しようとした相手の名も身分も知らなかったにちがいない。
夕暮れになって……。
権十郎が小沼治作を従え、堀内道場から帰邸した。
帰る時刻が、いつもより早い。
柴田宗兵衛が重俊の寝所へ行っている間に、権十郎は屋敷を出てしまったので、
「何という無茶なまねをなさる……」
宗兵衛は盗賊改方の与力・橋本為之助に、
「ひそかに、若様の御身をまもっていただきたい」
と、たのんだ。
「えっ……お出かけなされたのか?」

「さよう。いつものごとく道場へ……」
「それは危うい。すぐに手配を……このことは、御頭様も御承知なのでしょうな?」
「それは、それがしより申しあげておきます」
「では……」
　すぐさま、橋本が手配をした。
　このため、権十郎が道場を出るとき、すでに立慶橋のたもとに盗賊改方の同心二人がつめていて、後からついて来たし、お茶の水附近へさしかかると、
「あちらにもこちらにも、知っている顔がうろうろしていて、まったく困ったぞ」
　と、帰邸した権十郎が、宗兵衛にいった。
「御冗談を申されますな」
「ほう……怒ったのか?」
「困ったのは、この宗兵衛でござる。昨夜の事をお忘れなされまいたか……」
「忘れはせぬとも。生涯、おれは昨夜の事を忘れまいよ」
「なれば何故……?」
「今日、道場へ出かけたのかと申すのか?」
「途中、どのようなことが起るやも知れませぬのに……」
「なあに……いかに避けようとも、殺されるものは殺されるのだ」
　いいはなった権十郎の面に、一抹の哀しみの色がただよった。

「何ということを申されますことか……」
「父上は、いかがじゃ?」
「おやすみになっておられます」
「ふうん……で、大野郁太郎は?」
「それが、実は……」
　と、柴田宗兵衛が語るのを、権十郎は顔色も変えずに聞き終えて、
　事もなげに、うなずいたのみである。
「さようか」
「権十郎様……」
「うむ?」
「大野郁太郎めを、御文庫蔵において折檻なされまいたとか……」
「うん」
「何ぞ、理由あってのことでございますか?」
「爺。腹がへった。早う、千に仕度をさせてくれ」
「何ぞ、理由があって、大野をお責めなされましたか?」
「腹がへった」
「大野のことを、おはなし下され」
「別に……」

と、権十郎が微笑をうかべ、
「何ということもない」
「何を、お隠しなされます？」
「隠してはおらぬ」
「いいえ、隠しておられますぞ」
「大野めの面つき目つきが気にくわぬゆえ、いじめてやったのだ」
「何を申されます。この宗兵衛に隠し事をなさるとは、あまりにも……」
「下世話に申す、水くさいというわけか」
「いかにも……」
「これ、そう力み返らずとも、よいではないか」
「お聞かせ下され、その隠し事を……」
つめ寄る宗兵衛を見まもった権十郎が、
「これ、よう聞けよ」
「は……？」
「おれがな、この隠し事を打ちあけたなら、お前は腹を切らねばならぬぞ」
「かまいませぬ。切りまする」
言下に、宗兵衛がこたえた。
「ふうむ……」

まじまじと柴田宗兵衛を見やった権十郎が、
「父上は、身にあまる用人どのを持ったものだ」
「な、何を、いまさらに……」
「では尋こう」
「これ、宗兵衛……」
今度は、権十郎が屹(きっ)となって、
「は？」
「おれの生みの母の名は、何というぞ？」
宗兵衛が、鉄の塊でものみこんだような顔つきになった。
「いえ。知っていようが……」
「そ、それは……」
「何故、隠す」
「は……」
「名は何という。そして、出自(しゅつじ)は何処(いずこ)なのだ？」
「ぞ、存じませぬ」
「嘘を申せ」
「いえ、それは、まことにもって……」
「その、お前の顔には、知っていると書いてあるぞ」

「う……」
「目を白黒させるな」
「いえ、別に……」
「申せ」
「存じませぬ」

十五

「宗兵衛が、知らぬはずはない」
「な、なれど、それは、まったく……」
「ま、よいわ」
と、権十郎が、大人びた笑顔を見せて、
「おれはな、いまさらとなって、生みの母親のことを知ろうともおもわぬ」
「は……」
宗兵衛は、ひれ伏してしまった。
権十郎が本心から、そういっているのではないことを、柴田宗兵衛は、よくわかっていた。
「な、宗兵衛……」
「はい?」
「何も彼も知りつくしている宗兵衛が、何も知らぬという。それは父上に、堅く堅く口止め

をされているからだろう。それが徳山家に仕える者の身として、まもりぬかねばならぬことだからだろう。ちがうか、どうだ?」
咄嗟(とっさ)に、宗兵衛は、声が出てこなかった。
「おれとても、同じことよ。いま、おれが此処で、何も彼も打ち明けてしもうたら、お前が腹を切らねばならぬ。これは、決して大仰に申しているのではない。お前は、この事を耳にした以上、徳山家の用人として責任(せめ)を負わねばならぬ」
「か、かまいませぬ。この、しわ腹を切って、権十郎様の御役に立つことなれば、よろこんで宗兵衛は……」
「いや、待て。あわてるな。そうではないのだ」
「いえ、宗兵衛は……」
「お前に死なれたら、このおれはどうなる?」
「は……」
「お前ひとりを、たよりにして、ともかくも今日まで、生きぬいて来たおれの身はどうなる?」
たまりかねた柴田宗兵衛は、十七歳の〔若様〕の前で、声をあげて泣き伏した。
声をあげて泣いたのは、何十年ぶりのことであったろう。
いや、そのようなおぼえは宗兵衛に、かつて無かったといってよいほどだ。
「お前ひとりを、たよりにして……」

という、その一言に、柴田宗兵衛の涙腺が堪えきれなかった。

「おれにとっての、真の父親は、お前ひとりだ」

「わ、若様……」

またしても、宗兵衛にとっては、たまりかねることをいわれた。

「ゆえにこそ、お前に死なれては困る。それにまた、いまさら、何も彼も、さらけ出したところではじまらぬのだ。このようなつまらぬ事は口にせぬほうがよい。口の汚れよ」

ここまで権十郎にいわれては、さすがに宗兵衛も、この上の要請ができかねた。

「もう、よい。長屋へもどり、千を安心させてやれ。千は、さぞ気をもんでいるだろう」

「は……」

「さ、早く、もどってやれ」

「では……」

涙をぬぐい、腰をあげた柴田宗兵衛へ、

「ときに、養子の勝四郎は、この屋敷の暮しに馴染んでいるようか、どうじゃ?」

「は……おかげさまにて……」

「柴田家の人となって早々に、このような主家の騒ぎを見て、勝四郎もびっくりしていよう」

「いえ、何をもって……」

「二度と、かようなことは起らぬ。いや、起るまいと、勝四郎に申しておけ。主家に愛想をつかされ、出て行かれてしまっては、お前に申しわけがない」

せっかくにおさまった宗兵衛の泪が、またも、あふれ出してきた。

間もなく、用人長屋へもどって来た宗兵衛を、

「いかがでございました?」

飛び立つようにして、千が出迎えた。

「いや、別に……」

「どうなされました?」

「どうもせぬ」

「なれど、目を泣き腫らしておいでに……」

「だまれ、だまれ!!」

と、宗兵衛が、むすめに大声をあげた。

「女なぞの口さしはさむことではないわえ。しずかにしておれ」

千は蒼ざめて、勝四郎を見やった。

宗兵衛の叔母の子である勝四郎は、実家の井口家にいたときから、徳山家の内情を或る程度はわきまえている。

それだけに、今日の騒ぎを知っても驚愕をしないのだと、いってしまえばそれまでなのだが、それにしても、

（勝四郎どのは、いささか、鈍いのではあるまいか……?）

そうおもえるほどに、勝四郎は落ちつきはらっていた。

三十歳になって、まだ妻を迎えていない所為もあろうが、小肥りの躰をゆったりとかまえ、養父の宗兵衛から用事をいいつけられぬかぎり、自分の部屋にすわりこみ、何が起ろうとも眉の毛一すじうごかさぬ。

いま、勝四郎に二、三の縁談もあって、徳山重俊ですら、

「急ぎ、事をすすめるがよい」

と、いっているほどなのに、勝四郎は、

「何事も養父上の、おこころのままに……」

というだけで、さして乗気になっている様子もない。

三十の男が、さして女を……いや、妻がほしいともおもわぬのか。

居間へ入った柴田宗兵衛が、

「殿は、いかがしておわす?」

千に尋くと、

「さあ……何分、奥へは入れませぬゆえ……」

当惑してこたえた千のうしろへ、勝四郎がひょいと童顔をのぞかせて、

「先程、御寝所へお入りになったそうです」

と、いったものだ。

千は、おどろいて勝四郎を振り返った。

長屋から出た様子もないのに、何故、知っているのであろう。

さらに勝四郎は、

「遊佐良仙先生へ、お迎えの使者が出たようで……」

と、いう。

「そりゃ、まことか?」

「はい」

その言葉のとおりに、やがて夜の道を、迎えの駕籠に乗った遊佐良仙が、徳山屋敷へやって来て、重俊の診察をおこなった。

診察を終えて帰る良仙を見送りに出た柴田宗兵衛へ、

「何か、異変でもござってか?」

と、良仙が、むずかしい顔つきになって尋ねた。

「別に、さようなことはござりませぬ」

「ともかくも、大変によろしくない。御容態がな……」

「さようで……」

「じゅうぶんに、こころをつけられよ」

「かしこまりました」

「わしも、また明日、診にまいる」

「御願い申しあげます」

道の闇へ消えて行く遊佐良仙の駕籠を、門前に出て見送った宗兵衛は、しばらく其処をう

ごかなかった。

（このようなことで、騒ぎがおさまってくれようか……？）

何ともいえぬ不安が胸にこみあげてくるのを、宗兵衛はどうしようもなかったのである。

十六

その後、外見には何事もない明け暮れがつづいた。

年が明けて宝永四年（一七〇七年）となり、徳山権十郎は十八歳になった。

父・重俊は、ついに七十歳に達した。

あの事件以来、重俊は、ほとんど寝所へ引きこもったきりになっている。

事実、病状はよくないらしい。

将軍・綱吉も、すでに六十をこえ、心身がおとろえて来たようだが、次代の将軍は、綱吉の兄・綱重（つなしげ）の子の綱豊（つなとよ）に決定しているといってよい。

将軍・綱吉は、徳松という男子をもうけたのだが、五歳の折に病歿（びょうぼつ）してしまった。

ために綱吉は、自分のむすめの鶴姫（つるひめ）が夫人となっている紀州家の徳川綱教（つなのり）を次代将軍の座に据えようとしたところ、その鶴姫も三年前に亡くなってしまい、ついに、兄の子の綱豊を迎えることになった。

この間、次代将軍をめぐっての、幕閣や大奥での、各派閥の暗闘は、

「実にもって凄（すさ）まじきもの……」

であったそうな。

それも、いまは一応、落ちついた。

幕府も、徳山重俊が盗賊改方の長官として、何らの実績をあげていないことをよくわきまえていたし、重俊からも、

「病身ゆえ、御役目がつとまりかねます」

と、たびたびの申し出を受けている。

その上、今度は重俊の病気が重いということで、年が明けるや、幕府は、徳山重俊を御役目から解任せしめることにした。

こうして、重俊は、

〔寄合組（よりあいぐみ）〕

に、列することとなったのである。

〔寄合〕は五組に別れてい、つまり、御役目についていない、三千石以上の大身（たいしん）旗本が此処（ここ）に席を置くことになっている。

三千石以下の幕臣で、無役のものは〔小普請組〕というのへ席を置く。

徳山重俊は二千二百四十石の旗本であるから、当然、小普請入りとなるところを、格が上の〔寄合〕に列せられたのは特別のことであって、これは重俊が長年にわたり、諸役を歴任して遺漏がなかったことを、幕府がみとめたからにほかならない。

三千石以上の旗本でも、何か失敗があって役を免ぜられるときは、小普請組へ下げられて

しまうこともある。
病床にあって、幕府からの申しわたしを受けた徳山重俊は、
「ようやくに、これで一つ、肩の荷が下りた……」
と、つきそっている家来にいったそうである。
盗賊どもを相手にして、勇ましく立ちはたらくというような御役目が、つくづくと嫌だったのであろう。
このごろの重俊は、つとめて、用人の柴田宗兵衛と顔が合うことを避けている。
といっても、用人である以上は、主人と種々の談合をせぬわけにはまいらぬ。
そこで宗兵衛が、重俊の寝所へ出向くと、重俊はかならず、他の家来を側におき、宗兵衛と語ることにしている。
去年の事件以来、この剛直な用人と二人きりになることを、徳山重俊は警戒しているものとみえる。
重俊が気に入りの家来・大野郁太郎は、事件直後、屋敷を出て行ってより、行方も知れない。
(ええ、もう、勝手になされ)
と、柴田宗兵衛は、あえて重俊を問いつめなかった。
大野郁太郎は、美濃の大垣(おおがき)の浪人・大野清左衛門の息(そく)であり、いまは両親ともに亡い。
父親の清左衛門は交際もひろく、小金もあったようだし、郁太郎が十八歳の折に、徳山家へ奉公へあがったときは、五千石の大身旗本・青山備前守(びぜんのかみ)の口ぞえがあったのだ。

おそらく郁太郎は、父親の遺産も受けついでいようし、さしあたって困るようなこともあるまい。
柴田宗兵衛は、
(殿が、大野めの身柄を、何処(どこ)ぞにあずけてあるに相違ない)
と、看ている。
騒ぎが鎮まるのを待ち、折を見て徳山重俊は、ふたたび、大野を屋敷へもどそうと考えているのではないか。
(そのときこそ……)
宗兵衛は、重俊の口から、すべてを尋き取るつもりだ。
(さもなくば、このわしが、大野を御当家へもどさぬ!!)
その決心であった。
さて……。
権十郎は、どのような明け暮れを送っていたろうか。
別に何事もなく、以前のとおりに、小石川の堀内源左衛門道場へ通いつづけていた。
しかし、以前にも増して、権十郎は寡黙となった。
ことに屋敷内では、身のまわりや食事の世話をする千が、
「ちかごろの若様は一言(ひとこと)も口をおききなさらず、何やら怖いような……」
たまりかねたように、父の宗兵衛へうったえた。

「大人になられたのじゃ」
呻くように、柴田宗兵衛がこたえる。
「ま……大人に……?」
「さようさ」
「それは、どのようなことでございますか?」
年が明けてからは、宗兵衛の身辺も、にわかにあわただしくなってきた。
「お前の知ったことではない」
それは、養子の勝四郎の縁談がまとまりかけたからだ。
相手は、かの青山備前守の家来で福沢角之助というもののむすめ・お初である。
この縁談がまとまり、お初が柴田家の女となると、千は用人長屋を出て、屋敷の内に一部屋をもらうことになっている。
なんといっても、徳山家の跡つぎである権十郎を育てた乳母の千だけに、徳山家の女中の中では、格が高い。
千は、この宝永四年を迎えて、三十七歳になった。
主人が盗賊改方を解任されたので、牢屋も白州も取り払われ、屋敷内が元へもどった。
家来たちも侍女たちも、つとめて、静穏にしている。
もはや、権十郎に対しても無礼のふるまいをするような家来は、一人もない。
黙念として、日々を剣術に出精する〔若様〕には、何やら威厳のようなものがそなわって

きたようだ。
あの事件以来、家来たちは権十郎を恐れること、ひととおりではないという。
依然として、権十郎は、寝所にいる父を見舞おうともせぬ。
重俊もまた、権十郎のことについては、つとめて口を噤んでいるようだ。
（大野郁太郎の一件はさておき、これで、御当家も、うまく治まって行くのではあるまいか……）
と、柴田宗兵衛父娘は、いくぶん、安堵のおもいになりかけていたのである。
「おれも、そうおもっていた」
権十郎も、後に、そう語っている。
「後は父上が死ぬるのを待つのみというおもいがしていたのだ。二千二百石の旗本になったところで、別に、うれしくもなかったが、それで徳山家が治まるのなら仕方もないこととおもうていたのだ。ところが、世の中というものは、おもいどおりにさせてくれぬものよ。父上がな、春になると、めきめきと快方に向われた。ま、それはよいのだが……今度は、おれにとって、ぬきさしのならぬ異変が起ってな……」

出奔

一

それは、宝永四年の年が明けて間もなくのことであったが……。

権十郎の師・堀内源左衛門が、五日ほど、道場へ姿を見せぬことがあった。

「先生は、御不快らしい」

「まことか？」

「御風邪(ごふうじゃ)でも？」

「まさか、先生が……」

「何人(なんびと)も、御寝所へ来てはならぬとのことだ」

などと、門人たちがいい合っているのを聞いたので、権十郎は道場から帰るとき、いつものように見送りに出て来てくれた堀内家の老僕・治兵衛に、

「先生が御不快だそうな。医者は、何というておられる？」

「いえ、あの……医者も薬も、先生は要らぬとおっしゃいます」

「何と……？」

「むかしにも、こんなことが一度か二度、ございましたが、医者や薬の世話になったことはございませぬ」

「大丈夫なのか？」

「はい」

治兵衛は落ちつきはらっている。

長い歳月を堀内源左衛門に仕えて来た治兵衛だけに、主人(あるじ)の躰(からだ)のことも健康のことも、ことごとくわきまえているのであろう。

あまりに治兵衛が平然としているものだから、権十郎も先(ま)ず安心をしたといってよい。

だが、帰る途々(みちみち)に、供をしている若党・小沼治作へ、権十郎が、

「あれほどの先生が、御寝所へ引きこもられたまま、道場へ出てまいられぬというのは……やはり、よほどに、お躰のぐあいがよろしくない、と、看てよいのではないか。どうおもう？」

「私も、先刻から、そのようにおもっておりましたので……」

このごろは小沼も、権十郎の稽古ぶりを見ているだけではなく、堀内道場の末席へつらなり、稽古をするようになっていた。

これは、権十郎のすすめに従ったのである。

「いかに天下泰平の世であるとはいえ、おれのようなこともある。おもいもかけぬところから、いのちを狙われることが、お前にもないとはいえぬし……それに、自分(おのれ)の肉体(からだ)を鍛えぬ

くということは、当然、自分の心をも練り鍛えることになる。おれも、堀内先生の御教えを受けなんだら、いまごろは、どうなっていたか知れたものではない」

と、権十郎は小沼にいった。

後年、徳山権十郎は、苦笑と共に述懐をしている。

「いや、あのときは柄にもなく、小倅のぶんざいで、えらそうなことを小沼にいうたものよ」

ともかくも、

「決して、見舞いなどに来てはならぬ。わしも間もなく道場へ出られようから、一同は怠りなく稽古に出精するよう」

との、師の言葉がつたえられたので、門人たちも寝所へ近づけるものではない。

「先生は、いかがじゃ？」

堀内源左衛門が引きこもってから三日目の夕暮れに、道場の門外で、権十郎が治兵衛に尋ねた。

「しずかに、おやすみになっておられます、はい」

つぎの日にも、

「今日は、いかがじゃ？」

「はい。今朝ほど、久しぶりにて湯殿へお入りに……」

「何、湯浴みを……これ、治兵衛。そのようなことをして大丈夫なのか？」

「いくら、おとどめしても、お聞き入れになるものではございませぬ」

治兵衛の顔へ、あきらかに苦笑の色が浮かんだ。

また、つぎの日に、

「湯浴みなどをなされて、お変りもなかったのか？」

「はい、はい」

この日の治兵衛は、満面を笑みくずしていた。

「もう、大丈夫でございますよ」

胸を張ってこたえた。

果して、翌朝になると、堀内源左衛門が道場へあらわれ、以前のごとく門人たちの稽古を見まもった。

さすがに顔色は冴えていなかったけれども、五日、七日とたつうちに血色もよみがえり、みずから木太刀を把って、門人たちへ稽古をつけるようになったのである。

権十郎が、そのころのことをおもいうかべつつ、語るところによれば、

「その後の堀内先生には、おれの目から見て、以前とすこしもお変りがなかった。いや、おればかりではない。他の門人たちも、そうおもっていたのだ。

春になると、柴田宗兵衛のところへ養子に来た勝四郎な。あれの縁談が、はっきりとまとまり、嫁がやって来たものだから、乳母の千は奥に一部屋もらって移り住んで来た。そうなると、何かにつけて、また、おれの世話をやきたがるようになって閉口をしたものだが……それでも、あのことがあって以来、おれと千との間にわだかまっていた妙な気分も除れて、

別段、どうということもなかった。

千は、急に口やかましくなってな。いや、おれにではない。奥向きの女中たちにだ。六、七年前に、奥向きの老女をつとめていた婆（ばば）……これは亡き義母（はは）の実家（さと）から附（つ）きそって来た女（もの）だというが、その婆が亡くなってより、奥向きの女中を束（たば）ねるほどの女もおらなんだので、自然に千が老女同様のつとめをするようになったというわけだ。父上も、これをゆるした。

柴田宗兵衛は、ときに六十五、六歳ではなかったろうか……そうだ。それほどの年齢（とし）になっていたはずじゃ。申すまでもなく矍鑠（かくしゃく）としていたが、勝四郎が妻を迎えたので、用人職をゆずり、隠居をしたいと父上へ申し出たそうな。ところが、これは、ゆるされなかった。

何かにつけて、おれに味方をし、父上へはいささかの斟酌（しんしゃく）もなく、ずけずけとものをいいたて、まことにもって父上には恐者（こわもの）の頑固おやじであったが、それだけに宗兵衛は二千石の用人として、まことによくできた男ゆえ、さすがの父上も、宗兵衛を疎むよりも頼るこころのほうが強かったのであろうよ。

父上から看ると、養子の勝四郎は妙に大様で、気ばたらきが鈍いように感じられたらしい。そこがそれ、父上のあまいところなのだ。幕閣の方々の間をたくみに泳ぎまわり、保身の術に長（た）けているように見えても、人を見る目をもたぬものよ。

そもそも政事向きのことに長けている者は、世の中のことが存外にわからぬものだ。たがいに権力を争い、自分（おの）が権力を維持せんがための謀り事なぞについては、なかなかどうして、

狐にもなれば狸（たぬき）にも狼（おおかみ）にもなろうという……それでいて、あの連中の世界というものは存外にせまいものなのだ。

おれはまだ十八か……そんな少年（こども）だったのだが、勝四郎が宗兵衛の養子になり、おれが屋敷へ来たのを一目見たとき、これなら大丈夫。よい用人どのになろうとおもった。いや、うそではないぞ。千に尋（き）いてみるがよい。千には、そのとき、たしかにおれのおもいをつたえておいたはずだ。何？　千か。千も勝四郎を頼りなくおもっていたろうよ。おれが申すことを鼻で笑うていたようじゃ」

二

春がすぎ、夏が来た。

その梅雨の最中（さなか）に、権十郎にとっては、

「ぬきさしのならぬ……」

異変が起ったのだ。

或朝。

いつものように、七ツ半（午前五時）ごろに起床をした堀内源左衛門は、これも夏になってからのならわしで、先ず、湯殿へ入って、躰を清める。むかしは、冬も夏も水をかぶったそうだが、権十郎が堀内道場へ入門したころには、微温湯（ぬるまゆ）をもって躰をふき清めるようになっていた。これは老僕・治兵衛から聞いたことである。

で、この朝も、治兵衛が用意をした微温湯をつかった源左衛門が湯殿から出て来る気配を知り、
「いつものように、滝が白湯(さゆ)を仕度して、御居間へまいりました」
と、治兵衛が権十郎にいった。
お滝は、治兵衛の姪(めい)にあたり、一度は嫁入ったが夫と子供に死に別れた不幸な身を叔父のもとへ寄せていた四十がらみの、無口だが実によくはたらく女だ。
白湯の入った茶わんを盆に乗せたお滝が、これを源左衛門の前へ置き、一礼して、ひょいと見上げると、
「うむ……」
うなずいて茶わんを手にした堀内源左衛門の顔色が、あきらかに異様であった。
お滝の口を借りれば、
「まるで、死人(しびと)のような……」
ということになる。
おもわず、
「あれ、先生さま……」
目をみはったお滝へ、源左衛門が、
「治兵衛をよべ。早う……」
と、いった。

落ちついた声音であるが、これも、いつもの源左衛門の声ではなかった。乾いた、強いていうなら苦しげな声で、
「早う、よんでまいれ」
重ねていい、正坐した姿勢は微塵(みじん)もくずれなかったけれども、瞑目(めいもく)して茶わんを口へもってゆく様子が、お滝の目にも徒事(ただごと)ではなく感じられた。
お滝は廊下へ出ると、走って行った。
「叔父さまよ。せ、先生がよんでいなさる。早う早う……」
台所にいた治兵衛に、お滝が叫ぶようにいった。
切迫したお滝の様子を見るや、治兵衛が手に持った笊(ざる)を放り出して廊下へ走り出た。
「せ、先生……」
居間の前の、奥庭に面した廊下まで来て呼びかけた治兵衛が、
「あっ……ど、どうなされました?」
堀内源左衛門は、居間の机の前に仰向けに寝ていた。
茶わんが畳へ落ち、白湯がこぼれていた。
このようなことは、かつてなかった。
さすがに治兵衛も、
(これは、大変なことに……)
と、おもった。

「治兵衛……」

「は、はい。すぐに、お医者さまを……」

「ならぬ」

「けれども先生。こ、今度ばかりは……」

「よいと申すに……」

依然、仰臥して両眼を閉じたままの源左衛門が、

「ここへまいれ」

「へ……」

「まいれというに……早う、まいらぬと、わしの息の根が、絶えてしまうぞよ」

「げえっ……」

「早う、早う……」

「は、はい」

擦り寄って来た治兵衛へ、

「せ、先生」

「これより、わしは死ぬる」

「長い間、御苦労、御苦労……」

「そ、そのようなこと、おっしゃらないで下さいまし」

「人が死ぬるは、慣例と申すものじゃ。何も、あわてふためくことはない。これより、わし

が申すことをよく聞いて、いいつけをまもってもらいたい」

「………」

「金は、手文庫に在る。それがすべてじゃ。わかっていような」

「は、はい」

「わしが死んだならば、すぐさま、その金をもち、お滝をつれて故郷へ帰るがよい。わし亡きのちの、この道場のことなど念頭にかけてはならぬぞ。よいか……よいな……」

ここで、源左衛門の声にちからが失せた。

同時に、はじめて、源左衛門が両眼を開け、治兵衛を見やり、

「治兵衛……」

「はい……はい……」

「よう、つとめてくれた。かたじけない……」

と、これが、堀内源左衛門の最期の声であり、言葉であった。

泪があふれてくる両眼をみはって、老僕・治兵衛が主人の顔を見まもったとき、すでに死の静謐が源左衛門の面をおおいつくしていたのである。

この日。

第一番に道場へ到着したのは、堀内源左衛門が、

「この人は、わしの古い朋友の倅どのじゃ」

と、門人たちへ引き合せた伊勢桑名の浪人・佐和口忠蔵である。

「何、先生が、お亡くなりに……さようか」
佐和口も一瞬、顔色を変えたが、狼狽してはいない。
すぐに居間へ入り、堀内源左衛門の死顔を拝し、合掌した。
堀内道場には、佐和口忠蔵よりも古い門人が何人もいたし、その中には大名家の家臣もいれば大身旗本の子弟もいる。
だが、老僕・治兵衛は、主人の最期の言葉を、先ず、佐和口忠蔵につたえ、
「いかがいたしましたら、よろしゅうございましょうか?」
と、尋ねた。
「ふうむ……」
しばらく沈思していた佐和口が、
「そのほかに、何も御遺言はなかったのだな?」
「はい」
「いい遺されようとして、間に合わず、息絶えられたのではないと申すのだな?」
「そのように、おもわれましてございますが……」
「さようか、よし」
組んだ両腕を解き、
「ならば、先生の御遺言どおりにいたすがよい」
「けれども佐和口さま。いかに何でも……」

「手文庫の金をあらためてごらん」
「百両ほどござります」
言下に治兵衛がこたえたのは、金の出し入れも、すべて治兵衛がまかされていたからだ。
「ならば、その金を持ち、お滝をつれて故郷へ帰るがよい。後の始末は、わしが引き受けよう」
たまりかねて、治兵衛が、
「そ、そんなに、このわしが、邪魔になるのでござりますか……」
いうやいなや、慟哭した。

三

「だれが邪魔にしているというた。わしは亡き先生の御遺言のままに、事を取りはかろうと申している。ちがうか?」
「は、はい……」
「よいか、聞け。お前やわしが……と、申すよりも、亡き堀内先生が好むと好まざるとにかかわらず、先生ほどの人物が亡くなられた後は、かならず、面倒な事が起るものなのだ」
咄嗟に、治兵衛には佐和口忠蔵の言葉の意味がわかりかねたようである。
「亡き先生には、これだけの道場の跡をつぐべき御子もない。また、先生は遺言状をも、したためてはおられぬ。それとも、したためておられたのか?」

「いえ、私は耳にしておりませぬし、見たこともござりませぬ」

「そうだろうな。金子や書状などが仕舞い込まれていた手文庫さえも、お前の手で自由に開閉をさせていたほどの先生ゆえ、何かあれば、お前の目にとまらぬはずはない」

「念のため、御居間の中を探しては見ましたが……ごぞんじのように、先生の身のまわりの事といっては、まったくもって……」

「簡易をきわめておられたゆえ、な……」

「裏も表もない、御方でござりました」

「その先生が、いまや息を引きとられようとするとき、何よりも先ず、お前をよんで声をおかけなされたとすれば、その御言葉のみが御遺言ではないか」

「なれど、それは、他にどなたさまも……いえ、佐和口さまもおいでにならなかったからでございますよ」

「いや、おらなんでも、いい遺されることがあれば、お前の耳へおつたえになるだろう」

息をのんだ治兵衛が、

「動転のあまり、私は、佐和口さまのことを、先生に申しあげるのを忘れてしまいました」

申しわけなさそうにいった。

「いや、わしのことを申しているのではない。勘ちがいをいたすな」

「いえ、なれど先生は、つねづね、あなたさまのことを……」

「いや、わしのことは何も彼も、堀内先生は御承知じゃ。わしなどは気随気儘に諸方を飛び

歩いている宿なし犬のようなものよ」

と、佐和口はいったが、その声には、いささかも自嘲の翳りがない。

「この道場の門人の中には、大名家の家臣もおられ、大身旗本や、その子弟も多い。いまここに先生が亡くなられた後、これらの門人衆が、この堀内道場を何とするかだ。そのことについて先生は何も書き遺されず、何もいい遺されなかったことになる」

こういわれたとき、治兵衛は、はじめて、何となく佐和口のいおうとしていることが、わかりかけてきたようである。

理屈ではない。

長年、堀内源左衛門に仕えて来た治兵衛ゆえ、一種の感覚として、佐和口の言葉がわかりかけてきた。

「な……」

と、佐和口忠蔵は、念を押すように、治兵衛を見つめて、

「となれば、この道場の後始末は、門人衆がいたしてくれよう。お前とわしは、先生の御遺体の始末をすればよい」

何年も前に、堀内源左衛門は、駒込の真光寺という寺へ墓所をもとめ、

「永代の供養」

を、たのんであり、これは佐和口も治兵衛も、源左衛門から直接に聞かされている。

いまにしておもえば、それが、堀内源左衛門の遺言の一つということにもなる。

つまり、自分の亡骸の始末以外のことについて、堀内源左衛門は、あまり関心をもたなかったと看てよいのではあるまいか。

「先生の気がかりは、お前とお滝のことのみだったのであろう。御遺金の百両は、その先生の御心のあらわれだとおもうがよい」

「さ、佐和口さま……」

治兵衛は、其処に泣き伏してしまった。

「すぐに故郷へ帰れと申しても、先生の葬儀が終ってからのことよ」

「あっ……」

よろこびの叫びをあげ、

「そ、そうでござりましたのか……」

「まさか、お前やおれが御自分の葬儀に出てはならぬとまで、先生はおっしゃるまい」

「はい、はい……」

「なれど、先生の御遺体を真光寺へ葬ったのちは、ただちに、故郷へ帰れ。二度と、この道場を振り向くな。わしもそうする」

治兵衛は、深くうなずいたが、

「それにしても、佐和口さまは?」

「さて……堀内先生がおられぬ江戸に暮してみてもはじまるまい。久しぶりに、諸方を経巡り歩きたくなってきた」

「そうなりまするど……あの、徳山様の若さまが、お気の毒でござりますなあ。堀内先生もお亡くなりになり、そして佐和口さま、あなたさまも江戸をおはなれになる……そうなりますと、徳山の若さまは、さぞ、がっかりなさることでございましょう」

「ふむ……」

佐和口忠蔵の顔へ、微かに苦笑がただよった。

しばらくして、佐和口はこういった。

「徳山権十郎も、もはや子供ではない。これしきのことに耐えられぬこともあるまい」

四

その朝。

佐和口忠蔵のつぎに、堀内道場へあらわれたのは、小沼治作を従えた徳山権十郎であった。

門を入るやいなや、権十郎は、

(はて……?)

異変を感じた。

石井戸がある裏手へ通ずる左手の両面垣につけられた木戸の向うに、老僕・治兵衛の姪のお滝が佇んでおり、袂で顔をおおっているのを見たからである。

叔父の治兵衛に叱りつけられたのか、ともおもったが、四十にもなるお滝が、日常の事の不始末や失敗をするはずもないのだ。

「これ、どうした?」
木戸のこちら側から、大声をかけると、お滝が泣きはらした赤い眼を向けて、
「先生が……あの、先生が……」
「何……」
それだけで、権十郎にはすべてがわかった。
「あのときの心もちを何というてよいか、その言葉も知らぬ」
と、権十郎は、後に語っている。
当時の権十郎にとって、堀内源左衛門は師であり、父であり、逆境をはね退けて行くちからの根元であったといえよう。
源左衛門が身をもってしめす教導に、
「おれは、忌わしいことのいっさいを、忘れることができた」
のである。
「さて、それからが大変でな。ともかくも、元禄の世より、堀内源左衛門の道場といえば、江戸屈指の名流であっただけに、亡き堀内先生と交誼があった諸方の大名家からも重臣たちがやって来るし、門人の父兄の中にも大身の旗本が多く、通夜も葬儀も、それはもう、実に盛大なものであったよ」
権十郎は、そのときのことをかえりみるとき、いつも苦い笑いをうかべたものである。
親族が一人もなく、生まれ故郷すらもわかっていないだけに、押しかけて来た人びとが葬

儀と後始末に当ることになった。
「さようさ。浪人剣客の佐和口忠蔵先生などは、そうした人びとにとって物の数ではないというわけでな。身分や肩書のある人びとが、われ先にと事に当ろうとする。いうまでもないことだが、長年、先生につきそい、肉親同様に暮しつづけて来た治兵衛やお滝などは、まるで邪魔者同然にあつかわれ、二人とも台所の片隅に身を寄せ合い、さびしげに、ぼんやりとして……ただ、あふれてくる泪を押えていたありさまを、昨日のように、おれはおぼえている……」
権十郎の述懐をまつまでもなく、とかく有名人の葬儀には、人びとの虚栄と権力と虚偽が渦を巻く。
葬儀の主導権を人びとが争いはじめた。
それをかちとることが、取りも直さず、彼らの虚栄を満足させ、面目を保つことにもなるのであろう。
ことに、これといって堀内源左衛門の遺書も遺言も無いとわかったときの、これらの人びとの昂奮ぶりは、
「言語に絶した……」
と、いってよい。
中には、亡き源左衛門の居間へ入り込み、
「それがしは、堀内先生が生前にお約束なされ、この御刀を形見にいただくことになってい

た」
　と、いい出し、刀架にあった大刀をつかみ取って行こうとした者もいる。
　この者は、某大名家の側用人をつとめていた人物で、刀の一振や二振を売り払って利益を得ようというわけではない。ただ、堀内源左衛門遺愛の品を、わがものにしたいという欲望に駆られたのであろう。
　これを見て、
「お待ちなされ!!」
　居間へ駈けこみ、制止しようとする者があった。
「いや、これは先生とのお約束でござる」
「その証拠がござるのか？」
「武士と武士との誓約に、証拠などは要り申さぬ」
「だまらっしゃい!!」
「ぶ、無礼な!!」
　双方が睨み合って、通夜の席をもわきまえぬ騒ぎとなった。
　だが、結局、この側用人は強引に堀内遺愛の大刀を持って帰ってしまったのだ。
「亡き先生が、お約束をなされた形見の御刀でござる」
　いい張るのを、あまりに制止しては、こちらが何か、その大刀を欲しがっているように見られるので、人びとは苦にがしげに見まもっているのみであった。

　多勢がつめかけている通夜の席ではあるし、あくまでも「先生とのお約束」と、いい張り、引きあげて行く某家の側用人を、ついには、あきれて見送るよりほかはなかった。
　ところが、その連中もまた、後になると、もそもそと居間へ入り込んだり、庭の土蔵を開けたりして、
「何の彼のと、きれいに持って行ってしまったのには、治兵衛もお滝も開いた口がふさがらずという態であったよ」
　と、権十郎はいう。
　そのかわり、葬儀は盛大にいとなまれ、会葬者は五百をこえた。
　権十郎は絶えず、治兵衛とお滝の傍についていてやり、小沼治作を従え、葬儀に参列をしたけれども、葬儀の次第は有力門人によって勝手に運ばれ、治兵衛やお滝の存在などは、まったく無視されている。
　権十郎がついていてやらなかったら、焼香も落ち落ちできなかったろう。
　意外に、平然としていたのは権十郎で、
「いや、まったく、ひどいものでございますなあ……」
　と、若党の小沼治作が懸命に怒りを押えつつ、つぶやいたのへ、
「なに、かまわぬ。やつどもは勝手に踊らせておけばよいのだ」
　そして、権十郎は治兵衛の耳へ、
「このような葬式を、亡き先生はおよろこびなさるまいな」

治兵衛はこたえず、両手で顔を押えた。
「よし、よし。ならば治兵衛。お前が喪主となり、葬式をやり直せばよい」
「へ……?」
「おれも出る。それに佐和口先生も、よろこんで出て下さるだろう」
治兵衛とお滝の悲しげな顔が、見る見るよろこびの色をたたえてきた。
権十郎にそういわれてみれば、なるほど、そのとおりだ。
すでに墓所が決まっている駒込の真光寺の和尚は、よろこんで、治兵衛の請いをいれてくれるにちがいない。
「若様。そ、そうでございました。そうでございましたなあ……」
「そのことよ。それで亡き先生も、はじめて成仏されよう。見よ。このような気ちがいじみた、祭り騒ぎの葬式を……おそらく先生も、あきれ果てておられよう」
「かたじけのうございました。よう、おっしゃって下さいました」
佐和口忠蔵は、すでに、通夜の途中で、台所の片隅にいる治兵衛へ、
「おもったとおりのさわぎになったから、おれは帰る。落ちついてから、また、やって来る。お前だけは、すまぬが此処(ここ)にいてくれ。それでないと、先生がさびしいおもいをなさるだろう」
ささやいて引きあげて行ったきり、今日の葬儀にも姿を見せぬ。
「怪(け)しからぬやつだ、あの佐和口め」

「野良犬のごとく、堀内先生にまとわりつき、当道場へも泊り込みなどしていたくせに、先生が亡くなられると、もう寄りつかぬ」
「いまどきの浪人などというものは、恩も義理もわきまえぬものよ」
「まさに、そのとおりじゃ」
などと、門人たちが語り合っていた。
権十郎は葬儀が終るまで辛抱をしていたが、小沼を供に帰途につくや、
「ああ。何たることだ!!」
吐き捨てるように叫び、
「屋敷へもどる前に、どこぞで酒をのもう。相手をいたせ」
小沼は、今日の葬儀に対して、権十郎が憤懣(ふんまん)をもらしたのかとおもったようだが、実はそうでない。
権十郎は、ただもう、まだ若い自分が生きてある世に、
(堀内先生は、もはや、おわさぬ……)
その悲しみに、打ちひしがれていたのであった。
両国橋をわたった本所・元町の角にある蕎麦屋(そばや)の〔原治〕は、かつて権十郎が堀部安兵衛にいざなわれて入った店で、その後も権十郎は小沼と共に数度、この店で蕎麦を口にしている。
「お供いたします」
と、小沼が憤然としてこたえた。

〔原治〕で、権十郎は酒をのみながら、
「今日の様子では、これからも大変だぞ」
「と、おおせられますのは？」
「先生亡きのちの道場のことよ。あれほどの名流の道場だ。門人衆が、これをわがものとするため、牙をむき合うて争うことになるだろうな。おれは今日、そうおもった」

五

梅雨の最中だというのに、堀内源左衛門が亡くなって十日ほどは、雨が絶えた。
最後に、老僕・治兵衛と姪のお滝がいとなむ葬送が、駒込の真光寺においておこなわれた。
二人の他に参列をした者は、浪人剣客の佐和口忠蔵と徳山権十郎。それに若党の小沼治作の三名である。
真光寺の和尚は、
「先日の、道場の方がたがいとなまれた、さわがしき葬儀では、堀内どのは安らかに冥府へ旅立つこともかなわなかったであろ。おそらくは堀内どの、今日の日を待っておられたに相違なし」
こういって、一心不乱に経をよんでくれた。
権十郎は、茫然と日々をすごしている。
いつであったか、用人の柴田宗兵衛へ、

「お前に死なれては困る。真の父親は、お前ひとりだと、おれはおもっている」
こういって、老いた宗兵衛を感動させた権十郎の言葉に偽りはない。
けれども権十郎にとって、堀内源左衛門の急死は、また別の、深く重い意味をもっていた。
少年のころから、権十郎は堀内源左衛門の〔無言の教導〕ひとつをたよりに、何とか、
（生きぬいてきた……）
のであった。
徳山家の跡をつぐべき身でありながら、実父の重俊に疎まれ、忌み嫌われ、家来たちにも軽侮の目で見られて、一時は、
（死んでくれようか……）
と、おもいきわめたことさえある。
そのうちに、堀内道場へ通うにつれ、権十郎は自分の躰が剣士としての適性をそなえていることを知った。
（いざともなれば徳山の家を出て、一個の剣客として生きてもよいのだ!!）
この希望が、権十郎の逆境を救ったともいえよう。
なればこそ、父に対しても家来たちに向っても、あれほどの強烈なふるまいがしてのけられたのであろう。
それが、いまは却って幸いの結果となり、父も家来たちも権十郎を、すくなくとも表向きには軽んじることがなくなった。

ようやくに落ちついた、ともいえるわけなのだが、それでいて堀内源左衛門の死が権十郎へあたえた衝撃は、

「徒(ただ)ならぬもの……」

であった。

「それというのも、そのころのおれには、まだまだ、これではすまぬ。このまま、おれが徳山家の当主となって、何事もなく生涯を終えるというようなわけにはまいらぬ……」

という予感を、権十郎はおぼえていた。

もしも、何か事が起って、屋敷を出るようなことがあれば、

「わが一剣をもって、世をわたる」

この気もちが、また色濃く胸の底に残っており、消えようとはしなかった。

これより先、十年も二十年も、

「生きて在(おわ)す……」

ことを、信じてうたがわなかったのだ。

武芸に心身を打ち込んでいると、勘のはたらきがするどくなるそうだが、権十郎の予感は、果して適中することになる。

いずれにせよ、これからも剣の道へすすみつづけるとして、堀内道場には二度と通わぬつもりであった。

この決意だけは、変らぬ。

早くも通夜から葬儀にかけての、あわただしい道場のあちらこちらで、今後の道場の運営についての密議がおこなわれていた。

江戸でも屈指の大道場だけに、その後継者があらわれるとすれば、非常な名誉を担うことになる。

だが、堀内源左衛門は、自分の後継者を定めぬままに世を去った。

源左衛門ほどの人物ゆえ、後継者に心当りがあれば、かならず、遺言なり遺書なりに、そのことを指示しておくはずだ。

いまにしておもうと、この正月に、めずらしく病臥(びょうが)したとき、源左衛門は自分の余命をさとっていたにちがいない。

それでなくては、治兵衛にみとられて、あれほど見事な死様(しにざま)ができるわけがない。あのときにでも、後継者の名を告げることができたのである。

「それを申されなんだのは、どういうことか、わかるかな?」

と、佐和口忠蔵が、権十郎にいった。

「この道場の跡を継ぐ者はおらぬ、と、先生が……」

「ま、そういうことだが……なれど、おれの目から看ると、相応の手練者(てだれ)がおらぬこともない」

権十郎も、そうおもった。

すくなくとも、三人はいる。

三人のうちの一人は某大名家の馬廻役(うままわりやく)武具奉行をつとめている人物で、これは、もしも堀内源左衛門の後継者になるというのなら、その大名家の後押しによって、道場を運営して行くことが可能であろう。当人もそのつもりでいて、源左衛門の遺書に自分が指名されていたときは、主家をはなれ、道場へ移る決意をかためていたらしい。

別の二人は、それぞれ大身旗本の家に生まれ、共に次男であるから自由な身の上だ。

二人の父は、堀内道場の庇護者(ひごしゃ)でもあった。

なにぶんにも、百数十名の門人を擁する堀内道場である。

道場も大きく立派であるし、敷地もひろい。

それでいて、生前の堀内源左衛門は名利をかえりみない。

しかし、道場を維持して行かねばならぬ。

もっとも、いまの道場を改築したり、屋敷を新築したりしてくれたのは、源左衛門の声望に寄りあつまって来た人びとが勝手におこなったことだ。

年々の経費についても、源左衛門は、

「人まかせ……」

であった。

そうしたことに、いささかも関心をもっていない。

道場が大きくとも小さくとも、門人が少なくとも多くとも、

「亡き先生の生きざまには、いささかも影響(かかわりあい)がないことなのだ」

と、佐和口忠蔵は、微笑をうかべて、

「つまり、おれの一代で、してのけられるだけのことをした上は、安らかに死ぬるのみということなのだろうよ。堀内源左衛門の跡をつぐ者が堀内源左衛門でないことはわかりきっている。門人それぞれに、自分(おのれ)に似合った仕方で、亡き先生の教えを受けついで行けばよいのだと、わしはおもう」

三人の後継者候補をめぐり、いま、堀内道場では百数十名の門人が三派にわかれ、それぞれに勢力を得ようとして、暗闘をつづけているらしい。

源左衛門が世を去ってから、道場では木太刀(きだち)の打ち合う音が絶えた。

「これより先、道場は、いったいどうなるのでしょう?」

「それは、わしにもわからぬさ」

五人が、真光寺の門を出たとき、ぽつりと雨が落ちて来た。

今朝あたりから、空模様があやしくなってきていたので、五人とも雨仕度をしてきている。

「わしはな、権十郎どの。明日の朝、江戸を発(た)つ」

「ええっ……」

権十郎は愕然(がくぜん)となった。

剣術に関するかぎり、これから先は、

(先(ま)ず、佐和口殿に、たよろう)

と、考えていたからだ。

「今日かぎりで、みなともお別れだ」
「さ、佐和口殿……」
「そのかわり……」
と、佐和口が立ちどまり、傘をひろげて権十郎へさしかけながら、こういったのである。
「そのかわり、亡き堀内先生の御言葉を、おぬしへつたえよう」
「わ、私に……？」
「さよう。おぬしに、いい遺された御言葉とおもってよい。そのつもりで、しっかりとお聞きなされ」

六

真光寺からも近い、駒込神明宮のあたりに、治兵衛が知り合いの〔関口屋〕という茶店がある。
本郷から中仙道へつづく往還の向うに、土地の人びとが「神明原」とよんでいる広い草原があって、これを突切ったところに神明宮の鳥居が立っていた。
関口屋は往還に面した茅ぶき屋根の鄙びた茶店で、このあたりに四、五軒ある他の茶店同様に、神明宮参詣の人びとを相手に茶と糝粉の餅を出す。
現在は、文京区駒込神明町の内だが、当時はまだ幕府が町屋をゆるしておらず、江戸郊外の上駒込村ということになる。

堀内源左衛門は、関口屋の糝粉餅が好物で、自分が真光寺へ出向くときには、かならず帰りに立ち寄るし、治兵衛も真光寺へ使いに行くときなどは、主人にいわれなくとも、糝粉餅を買って帰ったそうな。
「そのときの、にっこりとなされた先生のお顔が忘れられませぬ」
関口屋の奥の一間へ落ちついてから、治兵衛はそういって、泪ぐんだ。
関口屋では、野菜や豆腐をつかった素朴な料理に、蕎麦を打って出してくれた。むろん、酒も出た。
「佐和口殿。先程の……堀内先生が私への御遺言と申されますのは？」
たまりかねたように、権十郎が尋ねた。
「いや、御遺言として、わしは聞いたのではないのだが……このことをもし、権十郎どのが耳にしていないのなら、御遺言ということになろう」
「はい。お聞かせ下され」
治兵衛とお滝が、小沼治作と目を見合せ、席を外そうとするのへ、
「かまわぬ。ここにいるがよい」
と、権十郎。
盃の酒をのみほしてから、佐和口忠蔵が、
「いつぞや、権どのにはなしたこともある組太刀のことなのだが……」
「は、はい……」

おもわず権十郎は、膝を乗り出した。
これぞ、かねてから権十郎の胸の内にたゆたっていた一事であった。
堀内一刀流の組太刀は、亡き源左衛門が創案した三段二十八手の形である。
変転する構えと、攻撃と防御の形が、この中にすべて組み込まれているのだ。
これをつたえられるときは、木太刀などを用いず、真剣をもって伝授される。
堀内源左衛門は、剣の技がいかに進歩しても、めったに、これを門人たちへつたえようとはせぬ。
技よりも精神の成長を待ってから、組太刀をつたえる。
それでないと、組太刀の一つ一つが、誤って受けとられるおそれがあるからだ。
防御の形といっても、源左衛門にいわせると、それは、
「攻撃の形」
といってもよい。
また、攻撃の組太刀は取りも直さず防御のそれとなる。
ここのところが理屈ではなく、それぞれの肉体で理解できぬときは、組太刀をつたえても、
「却って、ためにならぬ……」
ことに、なりかねない。
百数十名におよぶ門人の内で、この組太刀をつたえられたものは何人いるだろう……。
それは、源左衛門と当の門人のみがわきまえていることだ。

佐和口忠蔵は、すでに、この組太刀を伝授されていた。
去年の十一月の或日。
一日の稽古を終え、道場を出ようとする権十郎を見て、佐和口が、
「そろそろ、組太刀を……」
と、つぶやいたのを、権十郎はおぼえている。
そのときは、
(組太刀のことを、佐和口殿は何で、いい出されたのであろう?)
その真意がわからず、いったんは尋き返したが、佐和口は「いや、なに……」と、言葉を濁したものだ。
権十郎が、父のさしむけた刺客に襲われたのは、その日の帰途であった。
「わしはな、権十郎どの。あの折、おもわず組太刀のことを口にのぼせたのは、もう、そろそろ、堀内先生がおぬしへ伝授されてもよいのではないか……と、そうおもったからだ」
「私に、組太刀を?」
「うむ」
「まさかに……?」
「いや、わしは、ちょうど伝えごろだとおもった」
「それは願うてもないことなれど……すでに、先生は御他界を……」
いいさして、権十郎はうつむいてしまった。

「いや、それは、わしが伝えてもよいのだが……」
「えっ……」
「堀内先生が直き直きに伝えられるのとは、申すまでもなく、大いにちがう。わしはまだ組太刀の真髄を会得しておらぬゆえ、な」
あくまでも佐和口忠蔵は、謙虚であった。
源左衛門は世を去ってしまったことだから、組太刀を伝えられた門人が、これを他人へ伝えることについては、その門人の判断一つによって決定せねばならない。
だが、佐和口が権十郎へ、
(伝えてもよい)
と、おもったのなら、これを亡師は押しとどめることができぬ。
(では、おれに、伝授していただけるのか……？)
権十郎の胸は躍った。
「なれど権どのよ……そこじゃ。わしはな、先生が生きてあるうちに、一度、おぬしへ組太刀をお伝えになっては、と、申しあげたことがある。つい、一月ほど前にな……」
「は、はい……」
「そのとき、堀内先生は、かように申されたのだ」
「何と、おおせに？」
「徳山権十郎へ、組太刀を伝えることは無用であると、な……」

さっと、権十郎の顔が蒼(あお)ざめた。
「まだ、伝えるには早い」
と、亡師がいったのなら、よくわかる。
自分でも、そうおもっていたからだ。
けれども、伝えることは、
「無用!!」
と、断定をされてしまったのでは、どうしようもない。
すなわち、永久に、権十郎へ組太刀を伝授してはならぬと、堀内源左衛門が、いい遺したことになるではないか。
佐和口忠蔵としては、この亡師の言葉をまもりぬかねばならぬ。
(それならば何故、わざわざ、いまここに佐和口殿は先生の御言葉を口になされたのだ。いっそ、口に出さずにいて下さればよかった……)
むしろ、権十郎はうらめしかった。
小沼治作も同じおもいらしく、これは佐和口をにらみつけている。

七

「ま、ひとつ……」
いいさして、佐和口忠蔵が盃を権十郎へ差し出した。

無言で、権十郎はかぶりを振った。

治兵衛が、お滝をうながし、そっと部屋を出て行くのを見て、小沼治作も佐和口へ鋭い視線を射つけながら、廊下へ去った。

部屋の中に、雨音がこもっている。

縁の障子は開け放たれてい、庭の向うの生垣の下に群生している酢漿草(かたばみ)が、つつましい黄色の花を咲かせている。

生垣を越して、神明原の一部がのぞまれ、そのあたりには雨が霧のように降りこめていた。

「怒られたのか?」

盃を膳の上へ置き、佐和口忠蔵が、

「組太刀を伝えることが無用ならば、何故、いまさらに、これを口にしたか……権十郎どのは、さようにおもっているのではないか?」

権十郎は、こたえず、目を伏せた。

佐和口は何も彼も承知しているのである。

「わしも、そうおもう」

「え……?」

「わしとても、このようなことを、ことさらにいわぬでもよいとおもった。なれど、やはり、いっておいたほうがよいと断じ、おぬしに、亡き先生の御言葉を申しつたえたのだ」

「それは、何ぞ、わけあってのことでありましょうか?」

「はい」

と、かたちをあらためた佐和口が、

「堀内先生は、権十郎どのにとって、この上の剣術の修行は無用だと、おもわれたそうな。組太刀のみにかぎったことではない」

「な、何と申されます……」

「この上、おぬしが修行を積まれると、いよいよ、足が抜けなくなるゆえ……」

「足が、ぬけ、なく、なる……?」

「この道へ、或る程合(ほどあい)まですすまれると、その人のこころを引きつけずにはおかぬ剣術の不思議なちからに吸い寄せられ、無我夢中となる。行けども行けどもたどりつけぬ目標(めじるし)をもとめ、熱中し、あせりぬき、または余人にはわからぬよろこびをも得て、いよいよ足が抜けなくなってしまうのだ」

「それが、何故、いけないのです?」

「人によってのことだ。剣客として身を立てるのなら、どこまでも押しすすまねばなるまい」

「では、私は……」

「おぬしは立派な剣客になれる。そうおもえばこそ、わしも先生に組太刀の伝授をおすすめした」

「さ、佐和口どの……」

「堀内先生もまた、わしと同じ意見であった」
「えっ……」
「なればこそ、おぬしへ組太刀を伝えてはならぬと、いい遺されたのだ」
権十郎が総身を震わせ、
「わ、わかりませぬ!!」
と、叫んだ。
「組太刀を伝授されれば、何としてもこの道から足が抜けなくなりましょう。わしもそうであった。権十郎どのもそうにちがいない。堀内一刀流の組太刀とは、そのように恐ろしいちからをもっているのだ。いったん、この組太刀をおぼえると、その一手一手の中にふくみこまれている無限の底深さに魅入られ、これを突きとめずにはいられなくなる……」
いいさして佐和口忠蔵は絶句した。
堀内源左衛門が創始した組太刀は、単なる剣の形ではない。
その一手一手に、大仰にいうならば、人間という生きものの、
「すべてが、ふくまれている……」
のであろう。
権十郎の血は、さわがずにはいられなかった。
蒼ざめていた顔面に、昂奮の血がのぼり、袴をつかんだ両手がわなわなとふるえはじめた。
「佐和口殿。組太刀を、なにとぞ私に、お伝え下さい」

「いや、なりませぬ。権十郎どのにとっては、剣術よりも二千二百四十石の大身の家をつぎ、立派な旗本となることに、ちからをつくさねばならぬはず。堀内先生が申されるところのものは、ここでござる。ここでござる!!」
佐和口の最後の一言は、雷が落ちたようなちからがこもっていた。
権十郎は、息をのんだ。
堀内源左衛門は、権十郎の生い立ちから、いまの徳山家における微妙な立場をも、よく、わきまえていたと、佐和口は語った。
(何故、先生は、そのようなことまで御存知なのであろう?)
それは、
「わしも知らぬ」
と、佐和口がいった。
堀内源左衛門は佐和口忠蔵へ、こういったそうな。
「権十郎の家には、よくよく、こみいった事情があると知った。なれば、あの気性ゆえ、いったん我慢がならぬときは、剣一筋に生くるつもりにて、徳山家を飛び出してしまいかねぬ。いますこし……長くとも、あと五年、六年の辛抱をいたさば、権十郎の身辺も楽々となり、あの若者のことゆえ、将軍家の立派な家臣として、世に益することの多い人物になってくれるであろう」
なればこそ、これ以上に深く、剣の道へ踏み込ませては、

「かえって、権十郎の身のためにならぬ」
と、源左衛門は佐和口へ洩らした。
「権十郎どの……」
「は……」
「堀内先生は、あれほどの立派な剣客となられましたが……若きころは、剣の道へすすむがよいか、または別の、いま一つの道へすすむがよいかと、ずいぶんと頭を悩まされたことがござる」
「………?」
「その、いま一つの別の道が何であるか、わかりますかな?」
「いいえ……」
「わかりますまいな。若きころの堀内先生は、絵師になりたいとおもわれることしきりであったそうな」
これには、権十郎もおどろいた。
意外といえば、まさに意外のことではないか。
そのような気ぶりも気配も、権十郎が知っている堀内源左衛門の身辺からは、微かにも感じられなかった。
床の間の軸は、いつも書幅であった。
堀内屋敷では一枚の絵も見たことはなかった。

「わしとても、同じことよ」
佐和口忠蔵は、あらたまった口調を変えて、
「わしにも、道が二つあったのだ。その一つを選んだがために、いま、おぬしが見ているわしが在る」
立ちあがったかとおもうと、
「別れにのぞみ、わしが権十郎どのへ申しつたえることは、これのみだ。さらば……」
とめる間もなかった。
佐和口は一陣の風のごとく廊下へすべり出たかとおもうと、たちまちに去った。
佐和口忠蔵が、江戸の何処に住み暮していたのか、それすらも知らぬ。
何度か、権十郎が問いかけたときにも、佐和口は微笑を返してよこすだけであった。
(佐和口どのは、江戸をはなれて、何処へまいられるのだろうか……?)
二度とふたたび、佐和口忠蔵の顔を見ることはあるまい、と、そのときの権十郎はおもった。
だが、この予測は、みごとに外れることになる。
「いかがなされましたので?」
廊下から治兵衛が、おそるおそる、声をかけてきた。
「いや、何でもない。さ、入れ。入れ」
権十郎は強いて笑って見せたつもりだが、その笑顔は硬直していた。

八

「さ、そのときの、佐和口忠蔵殿が申されたことは、おれもいちいちわかっていたつもりだったのだが……」
と、後になって徳山権十郎は苦笑を浮かべながら、
「それが、やはり、わかっていなかったのだな。いや、佐和口殿を通じて、おれにいい遺された御言葉の表側だけが、何やらわかったような気がしたにすぎなかったのだ。ゆえに、わかったつもりでいても、この胸の内がみち足りぬ。
さほどに、おれの剣術に見込みがあるというのなら、何故、組太刀を伝えては下さらなかったのか、と……ただもう、うらめしいおもいが先に立ち、どうしても、これを打ち消すことができなかった。まだ十八の若僧ゆえ、むりもないともいえようが、いや、まったく、かえりみて恥じるばかりなのだ。
さよう。堀内道場へは、もう二度と足を運ばなかった。堀内先生と佐和口殿がおらぬ道場なぞ、おれにとっては無きにひとしいものだからな」
堀内道場では、後継者をめぐる内紛がもめにもめて、ついに一人の後継者をえらぶことができなくなった。
そこで……。
現代（いま）でいう〔合議制〕というようなかたちで、道場が運営されることになった。

けれども、卓抜した指導者を失ってしまい、それこそ、
「団栗（どんぐり）の背くらべ……」
で、われもわれもと主導権を争う有力者が、いかに後進をみちびこうとしても、それはかなわぬことだ。
「そのうちに門人の数も減り、さすがの堀内道場も評判を落し、ついに、道場は門を閉ざすことになってしまったのだが……いや、そのときは、おれは江戸におらなかったゆえ、くわしいことは知らぬのだ」
権十郎は、そう語っている。
ともかくも、権十郎は悶々（もんもん）のうちに日々をすごしていた。
大酒をのむことをおぼえたのも、このときであった。
そのうちに、父の徳山重俊が、またしても蠢動（しゅんどう）を開始したのである。
健康を取りもどした重俊は、気力も充実してきて、
（なんとしても、権十郎めには家督をゆずりわたさぬ）
と、気負い込んだのだ。
今度こそは、
（失敗（しくじり）をしてはならぬ）
というわけで、徳山重俊は、ひそかに事前の運動をはじめた。
こういうことになると、重俊の才腕は侮りがたいものがある。

親類の諸家へも、はたらきかける。

また、幕閣の要人たちへも、

はたらきかけておいた。

「いざというときのために……」

大身旗本の家督のことだし、一般の町家のように、

「お前を勘当する……」

だけでは、事がすまぬ。

「では、何の理由で勘当するのか？」

と、問われれば、権十郎の父へ対する暴慢のふるまいを申し立てるわけだが、そうなれば権十郎も黙ってはいまい。

父が刺客を放ってまで、実の子の自分を殺害しようとした事実を明るみへ出さずにはおくまい。

徳山重俊にとっては、これが困る。

重俊は、二千二百四十石の身分をもわきまえぬ後ろ暗いことをしてしまったのだ。

先ず、このことを防ぐことからはじめなくてはならぬ。

いまは屋敷にいない大野郁太郎の代りに、重俊は、田村常助という中年の家来を引き入れ、これを使者にし、自分の密書を諸家へとどけさせることからはじめた。

後になってわかったことだが、大野郁太郎も外部にいて、重俊や田村にちからを合せていたらしい。

折しも、用人の柴田宗兵衛は、下痢を病んだのがはじまりで体調をすっかりこわしてしまい、めずらしく長期にわたっての病臥中であった。

こうしたわけで、重俊の蠢動に気づく者は、ほとんどいなかったのである。

権十郎も、部屋に閉じこもっているか、鬱積して来ると屋敷を出て、大酒をする。

酒をのむ場所といえば、例の蕎麦屋〔原治〕のみしか知らぬ権十郎なのだ。

ところが、そのうちに……。

若党の小沼治作のみが、

（どうも、妙な……？）

と、感じはじめた。

田村常助が主人の使いで、このところ頻繁に、外へ出て行くことを知ったからであった。

そこで小沼は、いちいち、田村常助の後をつけてみることにした。

そうなってみると、

（いよいよ、おかしい……）

ことになってきた。

田村が主人の手紙を届ける先は、親類の屋敷や、幕府要人の屋敷であって、いまさら重俊が、それらの人びとへ密かに手紙を届けることもないはずだ。

いや、おそらく、

（届けるものは、手紙ばかりではないはず……）

であった。

何も持たずに屋敷を出た田村は、先ず、徳山家出入りの菓子舗・笹屋勘右衛門方へおもむく。

笹屋は、浅草の並木町に店舗をかまえている。

ここへ入って、しばらくすると、田村は立派な菓子箱の包みを抱えて出て来て、これを、行先の屋敷へ主人の手紙と共に届けることが少なくない。

すなわち、菓子箱の底には、用意してきた大枚の金が忍ばせてあるにちがいない、と、小沼治作は看た。

（これは、もしや、権十郎様に関わる事なのではないか？）

小沼は、不安になってきた。

権十郎が少年のころから側につきそってきて、その苦悩もよくわかっているつもりの小沼治作だけに、徳山家の内情にも通じている。

（もしや、殿様は、またも権十郎様を御当家から追い退けようとなされているのではあるまいか……？）

小沼は数日の間、夜も眠れずに考えつくしたあげく、ついに、

「おそれながら、申しあげたいことがございます」

権十郎の部屋へ来て、そういった。

「何じゃ？」

権十郎は寝そべって、〔原治〕から仕込んできた冷酒をのんでいた。

「実は……」

おもいきって、小沼治作が語るのを、権十郎は黙念と聞いた。

小沼が見て、不思議におもうほど、権十郎は落ちついていた。眉の毛の一すじもうごかさぬ。

聞き終えて、

「よし。わかった」

と、いったのみである。

小沼は却って気落ちがしてしまい、ぼんやりと、自分が他の若党と共に寝起きしている邸内の長屋へもどって行った。

翌日の昼すぎに、徳山権十郎はひとりきりで、屋敷を出て、そのまま、屋敷へはもどらなかった。

九

その日。

屋敷を出たときから、徳山権十郎は決意していたのだ。

（二度と、父の屋敷へはもどるまい）

このことである。

では、何処へ行くつもりだったのかというと、
(佐和口忠蔵殿の傍に、置いていただこう)
そう、おもいついたのだ。
江戸をはなれた佐和口が、何処へ行ったものか、権十郎には、はっきりとわかっていない。
しかし、いつのことであったか忘れたが、
「わしも、あまり、身寄りはない男なのだが……大坂に、実の妹がひとりいましてな」
と、洩らしたのを、権十郎はおぼえていた。
大坂には、両親の墓もあるとか……たしか、そのとき、佐和口はいっていたはずだ。
(佐和口殿は、先ず、大坂へ向われたにちがいない)
権十郎の、その直感は適中していたのである。
(堀内先生も、佐和口殿もおられぬ江戸にいても仕方がない)
父に疎まれつくしての自暴自棄というよりも、その絶望のほうが、あまりにも激しく大きかったといってよい。
もとより権十郎には、二千何百石の大身などに、
「いささかの未練もない……」
わけであって、これまで、徳山屋敷に辛抱をしていたのは、強いていうなら、用人・柴田宗兵衛・千の父娘が自分へかけてくれた〔愛〕に対して、むくいなくてはならぬとおもったからである。

だが、それにも限度というものがある。
父の重俊が、これほどまで執拗に、自分の廃嫡をのぞんでいるのに、尚も屋敷へとどまることは、
(男として、はなはだ、いさぎよくないことである)
と、権十郎はおもった。
自分が徳山屋敷にいるかぎり、柴田宗兵衛や千の心労は、熄むことがないであろう。
(おれが、江戸をはなれ、行方知れずとなってしまえば、何も彼も、うまくおさまるにちがいない)
ともかくも、先ず、大坂を目ざして、佐和口忠蔵の後を追おうと考えた。
こうした目的があっての出奔なのだから、当然、そのためには何をしなくてはならぬかが胸に浮かんでくる。
先ず、金だ。大坂までの旅費をつくらなくてはならぬ。
つぎに、道中切手(身分証明書)をととのえねばならぬが、これは断念しなくてはならない。
無断で出奔するのだから、旗本・徳山重俊の息という証明を幕府からもらうわけにはまいらぬ。
上方へのぼるには、先ず、箱根の関所を越えねばならぬ。
そのときに、自分の身分を証明できなかったら、捕えられて処罰されること必至であった。
だが、権十郎は、

（金さえ、手に入れば……）

と、おもっている。

道中のことについて、不安がないわけではないが、権十郎には、いささか心積もりがあったのである。

〔原治〕で酒をのむための金は、これまで、柴田宗兵衛にねだってきて、その残りが一両ほどある。

腰には大小の刀を帯び、それから堀部安兵衛武庸が形見の蜂屋兼貞作の短刀を懐中に差し込み、短袖の帷子に夏袴をつけ、日よけの塗笠を手にもち、権十郎は屋敷を出た。

小沼治作が門のところへ駈けつけて来て、

「御供を……」

というのへ、権十郎が平常とすこしも変らぬ態度で、

「すぐにもどるゆえ、かまうな」

「はい」

このときの小沼は、権十郎が刺客に襲われた日の朝のような予感をまったくおぼえなかった。後になって小沼が、そのことを非常に口惜しがったそうな。

うす曇りの空からの日射しは鈍いものであったが、風も絶えて蒸し暑く、屋内に凝とすわっているだけでも、不快に汗ばむような午後であった。

権十郎は、昨夜の思案どおりに迷うことなく、日本橋本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方へ

向った。

いうまでもなく、権十郎は、駿河屋が生母の実家であることを知らぬ。

ただ、幼少のころから、柴田宗兵衛に連れられて駿河屋へおもむき、あるじの又兵衛をはじめ、家族の人びとから真情のこもった手厚いもてなしを受けてきている権十郎であった。

剣術へ心身を打ち込むようになってから、駿河屋を訪ねることも少なくなったし、柴田宗兵衛からも、

「以前は御屋敷へ出入りの駿河屋でございましたが、いまは、その縁も切れておりますことゆえ……」

あまり、近づかぬようにと、念を入れられている。

けれども、いま、このときとなっては、

（駿河屋をたのむよりほかに、道はない……）

と、権十郎はおもいきわめていた。

柴田宗兵衛から聞いたところによると、駿河屋又兵衛は、今年八十歳になったが、まだまだ元気でいるという。

「あっ……」

店先へあらわれた権十郎を見て、おどろきの声をあげたのは、又兵衛の養子・又太郎であった。

又太郎は、権十郎の生母・お静の姉・お文を妻にしている養子だが、このとき四十五歳に

もなっていた。

駿河屋では、現当主が世を去るまで、跡をつがぬという家風なのだ。

又太郎の長男で、又兵衛には孫に当る宗次郎は二十歳になり、駿河屋の手代として商売をおぼえているし、長女は、すでに他家へ嫁入っていた。

「これはまあ、徳山様の若様ではございませぬか」

「又太郎どの。久しゅうござる」

「さ、おあがり下さいまして……」

又太郎は顔色を変え、傍にいた手代のひとりへ、

「早く……早く、奥へお知らせしなさい」

と、叫んだ。

又太郎は駿河屋と徳山家との関係をわきまえている。

ここ三年ほど、駿河屋へあらわれなかった権十郎だけに、たくましく成長した十八歳の体躯(たいく)を見ただけでも、又太郎は瞠目(どうもく)したにちがいない。

権十郎が店の横手の通路を奥へ入って行くと、向うから駿河屋又兵衛とお文が駈けあらわれ、

「ああっ……」

「若さま……」

同時に叫んで、立ちすくむかたちになったのが、異常であった。

「おれは、このときはじめて、奇妙なおもいがした」

と、権十郎が語っている。

ついで、又兵衛が両手で老顔をおおい、たまりかねたように泣き出し、お文の面(おもて)もたちまち、泪(なみだ)にぬれつくした。

単に、屋敷へ出入りをしていた商人が、出入り先の〔若さま〕を久しぶりに見たということだけでは、これほどに異様な雰囲気(ふんいき)が醸し出されるはずもない。

権十郎も、むかしのような子供ではないだけに、二人の様子をいぶかしくおもいはしたが、だからといって、自分が駿河屋又兵衛の孫に当るということに気づいたわけではない。

泣き出した又兵衛も、すぐに、はっと気を取り直し、

「まあ、まあ……あまり御立派におなりあそばしたので、おもわず泪が出てしまいました。年をとると、だらしがなくなって困りまする」

泣き笑いの表情となり、権十郎の先へ立ち、奥へ案内をした。

お文も、あわてて権十郎へ一礼するや、大台所の方へ走り去った。

十

奥まった又兵衛の居間へ案内をされた権十郎は、

「ほう……以前と、いささかも変らぬ」

なつかしげに、あたりを見まわした。

「はい、はい。相変らず、剣術のほうに御出精でございましょうな。あまりに、御立派におなりあそばしたので、駿河屋又兵衛、びっくりいたしましてございます」
「さようか……」
「御屋敷のみなさまには、お変りもなく……？」
それには、こたえず権十郎が、
「堀内源左衛門先生が、先ごろ、亡くなられましてな」
「それは、まあ……」
いいさして又兵衛が、権十郎の顔を凝と見つめた。
権十郎は、
(われながら、落ちついている……)
と、おもった。
そして、このように平然として、これから自分がするであろうことに嫌悪をおぼえた。
お文が、茶菓を運んであらわれた。
「若さま。今日は、ゆっくりとなさいましても、かまいませぬので？」
「はい。かまわぬ。夕餉を馳走になってから、屋敷へもどります。よろしいか？」
顔を見合せた又兵衛父娘が、よろこびの声をあげた。
お文にとって権十郎は、実の甥にあたる。
「では、お文。すぐに仕度をたのみますよ」

「はい、はい……」
お文が、いそいそと去るのを見送ってから、権十郎が、
「駿河屋どの。実は、あなたに御願いのことがあって、まいったのです」
「私めに……はい、はい、何なりと、お申しつけ下さいまし」
「父上に御願いをするのも、いささか、はばかられて……」
又兵衛が眉を寄せた。
「何のことでございます？」
「まだ、年少の身をもって、分にすぎたるまねをいたすことゆえ……」
「あの、実は、刀を一振……ぜひにも、ほしい刀がありましてな」
又兵衛が、ほっとした顔つきになり、
「よく、おっしゃって下さいました。いかほど、御用立いたしましたらよろしいのでございましょう？」
「三十両、借用させていただきたいのです」
「かしこまりましてございます」
又兵衛も、いそいそと居間を出て行った。
このとき、駿河屋又兵衛が権十郎へ差し出した金は、五十両であった。
権十郎が申し出た額より、二十両も多い。
「三十両で、よいのだが……」

「何をおっしゃいます。さあさあ、御遠慮なく、お持ち帰り下さいまし」
「よろしいのか……」
「それで不足のときは、いつなんどきにても御用立いたします」
むろん、金高は多いがよいにきまっている。
ことに、道中切手を持たぬ初旅なのである。
「かたじけない。では、拝借いたす」
権十郎は、小判の包みが乗った袱紗を押しいただいた。
その大人びた仕ぐさを、又兵衛は目を細めて見まもっている。
孫が、刀を買うための金を用立ててくれといってくれたことに、又兵衛は有頂天になっていた。
徳山家の内情について、又兵衛もうすうすはわきまえている。それだけに、権十郎が不憫でならなかったのであろう。
又兵衛は、権十郎の言葉をすこしもうたがわなかった。
「御屋敷へおもどりなさる時刻が遅れては……」
と、又兵衛は気づかいをして、まだ、外が明るいうちに夕餉の膳を運ばせるよう、お文へ指図をしていたようだ。
御馳走ずくめの膳部をきれいに平らげた権十郎が、
「では、今日は、これにて……」

「お帰りでございますか……」
「また、まいります。拝借の金子は、かならず御返しいたす」
「そのような、お気づかい、無用でございます」
またしても、又兵衛が泪ぐんだ。
このときも権十郎は、妙なおもいにとらわれた。
だが、そこは何といっても十八歳の若者である。それに、これから先のことが胸の内をいっぱいにしめていたし、いまは、その他のことへおもいを振り向ける余裕もない。
「権十郎さま……」
「はい？」
「また、近いうちに、ぜひぜひ、お立ち寄り下さいますよう」
「かならず、まいります」
佐和口忠蔵を追って大坂へ行く決心の権十郎だが、又兵衛の許へは、かならず金を返しに来るつもりであった。
駿河屋又兵衛が、このときを最後に、可愛ゆい孫の顔を二度と見ることができなくなるとは、夢にもおもっていなかったろう。
「では、ごめん」
権十郎は、又兵衛や又太郎夫婦に挨拶をし、淡く夕闇がただよう本石町の通りへ出て行った。
さて……。

この日の夜がふけてからだが、駿河屋の大戸を烈しく叩くものがあるので、小僧と手代が土間へ下りて、
「どちらさまでございます？」
「本所の徳山屋敷からまいりました。お開け下さい」
「は、はい。ちょっと、お待ちを……」
うかつに開けるわけにもいかぬので、奥へ通じると、又太郎の倅の宗次郎が出て来て、
「徳山様から、何の御用でございましょう？」
すると、戸外の声が変って、
「用人の柴田宗兵衛でござる」
と、いうではないか。
それは宗次郎にも聞きおぼえがある、まぎれもない柴田用人の声だ。
「あ、柴田さま。ただいま、すぐに……」
潜戸を開けると、病中で憔悴しきった柴田宗兵衛が、若党・小沼治作を従えて入って来た。
「おお、宗次郎どの。つかぬことを尋ねるが、本日、権十郎様が此処へお見えにならなんだか？」
「はい。お見えになりましたが……」
「では、当家にお泊りになっておられる？」
「いいえ、夕刻に、御屋敷へおもどりになられましてございます」

「な、何……」
宗兵衛の声は、さらに切迫したものとなった。

十一

そこへ、駿河屋又兵衛と又太郎夫婦が、奥から駈けあらわれた。
柴田宗兵衛から事情を聞いた又兵衛老人の顔が、たちまちに蒼ざめて、
「それでは、あの金を……」
いいさしたのへ、宗兵衛が、
「金……？」
「は、はい。こうなったら、申しあげねばなりますまい。ま、ともかくも奥へ……」
「いや、そうしてはおられぬ」
苛立つ柴田用人へ、又兵衛がいった。
「柴田様。いまここで、お急きになったとて、はじまりませぬ」
又兵衛もおどろいてはいるが、柴田宗兵衛よりも言葉づかいが落ちついてきはじめた。
「まだ、御屋敷へおもどりなされぬと、決まったわけでもございますまい」
「なれど、夜もふけて、おもどりにならぬということは、これまでに一度もなかった……」
「ま、おあがり下さいまし」
奥の居間へ宗兵衛を案内した駿河屋又兵衛は、余人を遠去けた上で、権十郎へわたした金

五十両のことを語るや、
「ああ……やはり……」
と、宗兵衛が呻（うめ）くように、
「やはり、出奔なされたのじゃ」
「なれど、どうしても手に入れたい刀があると、申されておいででございましたが……」
「そりゃ、いよいよ妙じゃ」
「何と、おっしゃいます？」
「権十郎様が、こなたへ、そのようなことをおたのみなさるわけがない。刀をほしいとおもわれるなら、先ず、この宗兵衛がところへ申しつけられるはずじゃ」
又兵衛が、けわしい眼の色になり、宗兵衛を見た。
自分は、まぎれもなく、徳山権十郎の祖父である。祖父のもとへ孫が金子の調達にあらわれたのが、何でわるいのだと、又兵衛はいいたかったのであろう。
柴田宗兵衛は唇（くち）をかみしめ、
「その金は、路用にお当てなさるおつもりなのだ」
「では、江戸をはなれて、遠国にでも……？」
「どのような御様子であった？」
「落ちついて、何やら、こころたのしげにしておられました」
いちいち、宗兵衛にはおもいあたることばかりであった。

自分にも、千にも告げず、あれほどに目をかけていた若党の小沼治作へも知らさず、徳山屋敷を出奔したからには、権十郎の覚悟も相当なものにちがいない。
覚悟が決まれば、
（権十郎様は、胸の内を看すかされるようなことを、決してなさるまい）
と、宗兵衛はおもった。
おそらく権十郎は、柴田父娘にも小沼にも、
（それとなく、別れを告げたかった……）
に、相違ない。
だが、それをしたのでは、ことに、勘のはたらきのするどい小沼治作に気づかれてしまいかねない。
また、権十郎自身にとっても、徳山家にというよりも、彼らに対しての惜別の情が、隠そうとしても隠しきれなくなるやも知れぬ。それを権十郎は、何よりもおそれたのであろう。
（家を出よう。江戸をはなれよう）
と、決意したとき、権十郎は、これまでの我身を包んでいた環境のいっさいを振り捨てることにしたのだ。
「もし……もし、御用人様」
「む……？」
「では、権十郎様は、どこへまいられたのでございましょう？」

「ふうむ……」
「おこころ当りでも、ございますか?」
「それが、ござらぬ」
「どうしたら、よいのでございましょう?」
「ここへ、若党の小沼をよんでも、さしつかえござらぬか?」
「かまいませぬ、かまいませぬ」
柴田宗兵衛が沈痛になり、口数がすくなくなるのに引きかえて、今度は駿河屋又兵衛のほうが、居ても立ってもたまらぬ様子を見せはじめた。
駿河屋へ来る途々に、柴田宗兵衛は小沼治作から、徳山重俊が権十郎を廃嫡しようとして、またも暗躍しはじめたらしいことを聞いた。
「では、そのことを権十郎様のお耳へ入れたと申すのじゃな?」
「はい。この前の事件もございます。若様の御身に、またしても危害がおよぶことも考えましたので」
「何故、わしの耳へ入れてはくれなかったのだ?」
「御病気でございますゆえ、このようなことをお耳に入れては、と、考えました」
小沼治作がいうように、いまも柴田宗兵衛は発熱しているのだ。
「小沼は、権十郎様が何処へおもむかれたとおもうな?」
又兵衛の居間へ入って来た小沼へ、宗兵衛が尋いた。

「いつも、おそばにつきそっていたことゆえ、何ぞ、こころあたりがないか?」
目をあげた小沼が、
「ないこともございませぬ」
宗兵衛・又兵衛の二人が、おもわず身を乗り出した。
「これは私一人がおもいあたりましたことにて……果して、そのとおりかどうかは、しかとうけ合えませぬが……」
「申してみよ」
「堀内先生道場におられました佐和口忠蔵様と申されるお人のことを、御用人様はお聞きおよびでございましょうか?」
「おお。いつぞや、権十郎様よりうかがったことがある」
「そのお人の許へ、若様はおもむかれたのではないかと存じます」
「では、江戸におられる……?」
「いえ、おそらく佐和口様は、上方へ向われたのではないかと存じます」
「上方か……」
「御用人様。これより、私、若様の後を追います」
「そうしてくれるか」
「はい」
「よし。わしは、これより御屋敷へもどり、殿へ申しあげる。出立するというても、今夜と

いうわけにはまいるまい」

と、宗兵衛がいったのは、小沼治作の道中切手その他をととのえなくてはならぬからだ。

「小沼さま。おねがい申します」

駿河屋又兵衛が、小沼に向って両手をついた。

「はい。かならず、お探し申し、江戸へおもどりいただきます」

小沼は断固たる決意を見せた。

そのとき、駕籠屋へ問い合せに行っていた又太郎の長男・宗次郎がもどって来た。

権十郎を送っていった町駕籠は、駿河屋の近くの駕籠屋〔増出〕から出たものである。

二人の駕籠舁きは、宗次郎にこういったそうな。

「あの御武家さまは、浅草御門外まで来ると、ここまででよいとおっしゃいまして、駕籠をお下りになりました」

湯けむり

一

徳山権十郎は、この夜を寺院の境内ですごした。

常光寺という寺の境内へ、裏手から潜入し、本堂の縁の下に仮寝をしたのである。

常光寺は高輪北町にあって、芝の増上寺の属寺だが、そうしたことを知っての上で境内へ入ったわけではない。

浅草御門前で町駕籠から下りた権十郎は、そのまま身を返し、三ツ俣を経て、日本橋川沿いの道へ出た。

三ツ俣というのは、このあたりで、川のながれが三方に分れているからだ。

権十郎は、こうして、夜の道をゆっくりと東海道へ出た。

そのまま、夜道をかけて品川宿を抜けてしまおうかともおもったが、ともかくも明日からは、大坂を目ざして旅をつづけねばならぬ。道中に必要な身仕度をととのえておかなくてはならなかった。

品川宿は、江戸から東海道へ踏み出す第一の宿駅である。

旅行に必要な品物は、すべて、ととのうはずであった。

(よし、朝まで待とう)

と、権十郎は決めた。

折しも、東海道に面した常光寺の前へさしかかっていたので、

(一夜、縁の下をお借りしようか……)

無断で、境内へ入り込んだのだ。

縁の下の権十郎は、したたかに、蚊に喰われ、まんじりともせずに朝を迎えた。

だが、一夜を眠らなくとも、若い権十郎の鍛えぬかれた肉体に障りを生ずることもない。
夜明けの街道へあらわれた権十郎は、品川宿へ向った。
東海道の左側に、高輪の海が油をながしたかのように横たわっている。
朝の日は、まだ江戸湾の海へのぼっていなかった。
それでも夏のことだし、早立ちの旅人の姿が、二つ三つと街道に見える。
品川宿へ入ると、飯屋も茶店も店を開けたばかりで、権十郎は腹ごしらえをすませた飯屋のあるじにたのみ、一通りの旅装をととのえてもらった。
こころづけを、あるじの手へわたし、
「たのむぞ」
といった権十郎の物腰は、ゆったりと落ちついている。
飯屋のあるじの目には、いささかも怪しむべきところがなかったにちがいない。
旅姿の権十郎が品川宿を抜けたとき、すでに、朝の日は昇っていた。
生まれてはじめて、徳山権十郎は江戸の地をはなれたのだ。
菅笠（すげがさ）の下の、権十郎の双眸（そうぼう）が煌（きら）めいている。
形容しがたい昂奮（こうふん）が、むしろ、こころよかった。
（おれは、これまでのおれの一切から解き放たれたのだ）
このことであった。
あとはひたすら、佐和口忠蔵と共に、

「剣の道を歩む。歩みつづける」
この一事が在るのみなのだ。
品川宿で買った古着の単衣（ひとえ）は、きれいに洗われており、折目も正しく、着ていて心地よい。
実は、飯屋の裏手で、権十郎は水を浴びさせてもらっていた。こころづけをはずめば、町人たちは、
（何でもしてくれる……）
のである。
今朝まで身につけていた衣類は、他の旅行用の品物と共に布へ包み、これを背負った権十郎は菅笠に日射しを避けつつ、足取りも軽く街道を西へすすむ。
ただ、気がかりなのは道中切手を持たぬ旅だということだ。
白昼、堂々と箱根の関所を通りぬけることは、むろん、できない。
権十郎は、そのことについて、あまりにも無謀であった。
若さにまかせて、何でも仕てのけようというつもりなのだろうが、だからといって正面から関所破りを敢行するつもりはない。
無謀にはちがいなかったが、権十郎はそれなりに、一つの手がかりを得たつもりでいた。
それは、こういうことだ。
つい先ごろのことだが、堀内道場へ通うことをやめた権十郎が例の〔原治〕で酒をのみ、奥の小座敷に寝そべったまま、酔いの微睡（まどろみ）にすべてを忘れようとしていると、となりの座敷

から二人の男の声が聞こえた。

入って来たばかりの男たちは、となりに権十郎がいることを知らぬらしい。

一人は、どこかの旅へ出ていて、しばらくは江戸を留守にしていたものと見える。

「いや、一年見ぬうちに、江戸も、ずいぶん変ったのう」

などと、相手の男にはなしかけていた。

二人とも町人らしいのだが、その会話の内容が、権十郎にはよくわかりかねた。

何やら得体の知れぬ男たちのようにおもえた。

そのうちに、旅からもどって来たらしい男が、

「なあに……おれなぞに道中切手なぞは要らぬ。さようさ。箱根の関所などは素通りにしてしまうのだ」

得意げにいいはなったのが、権十郎の耳へ入った。

「といっても、箱根の関所をまともに抜けるのではないぞ。いや、箱根の抜け道もあるにはあるが、おれはいつも、豆州の熱海をぬけて、東海道を往ったり来たりしているのだ。ついでに、熱海の温泉へ入って骨やすめをしてくるのが、いつものことさ」

そして、声が低くなり、二人は何やら語り合っていたが、

「そうとも」

旅からもどった男の声で、

「何事も金しだいだ」

というのが聞こえた。

そのときの権十郎は、男たちの会話にさして興味を抱かなかった。

しかし、いざ、無断で江戸を出奔するとなったとき、権十郎の脳裡に浮かびあがったのは、そのときの男の声であった。

豆州の熱海から山越えに、三島の宿駅へ抜ければ、

（箱根の関所を避けて、東海道を行くことができるらしい……）

のである。

そして、

「何事も、金しだい……」

だという。

してみると、熱海へ行けば、金しだいで三島へ抜ける山道を知ることができるのではないだろうか。

伊豆の熱海の温泉は、上州の草津とならんで、名湯として世に知られている。

ともかくも熱海へ行き、湯宿へ泊ってから、それとなく探りをかけてみようと、権十郎はおもった。

それがだめならば、遮二無二、山道を突破するまでだと肚を決めている。

〔原治〕で、権十郎が目ざめたとき、二人の男の姿は、もう消えていたのだが、

（こうなるのだったら、あの男たちのはなすことに、もっと聞耳を立てておくのだった……）

いまにして、権十郎は悔んでいた。

ともかくも、ああした男たちが、道中切手もなしに諸国を旅して歩いていることはたしかなのだ。

(おれにも、できぬはずがない)

いま、東海道を行く権十郎は、ほとんど不安をおぼえていない。

小田原から、山道を熱海へ入る途中の根府川にも関所が設けられてい、道中切手がなくては通れぬことを、権十郎はまったく知っていなかった。

二

この日。

徳山権十郎は、東海道・戸塚の宿の旅籠〔羽沢屋九郎左衛門〕方へ泊った。

江戸を離れること十里半。

すでに相模の国へ入っている。

宿帳には、堂々と、

〔本多大隅守家来・山口権三郎〕

と、書きしたためた。

権十郎の落ちついた物腰は、到底、十八歳の若者には見えなかった。

旅籠の人びとは、すこしも怪しむことなく、二階の奥まった座敷へ案内をしてくれたのである。

初旅の昂奮が、寝床へ入っても権十郎をなかなかに眠らせてくれぬ。

(急がねばならぬ……)

そのことのみが、胸に在った。

(追うて来るやも知れぬ……)

からであった。

権十郎の身を案じてのことではない。

父の徳山重俊は、権十郎の出奔を知って、

(いまこそ、よい機会じゃ)

と、おもうにちがいない。

人数をさしむけ、権十郎を追いかけ、これを捕えて江戸へ連れもどせば、無断の出奔を咎めて、

「もはや、このような倅めに、わが家を継がすことはできぬ」

いい立てることができようというものだ。

幕府に、父親としての責任を問われても、そこは顔がきいているのだから、どのようにも始末をつけることができよう。

何とか眠ろうとするのだが、目は冴えるばかりだ。

(ああ……柴田宗兵衛父娘や、小沼治作は、おれがことを何とおもうているであろうか……

すまぬ。ゆるしてくれ）
病臥している、老いた宗兵衛の顔が瞼に浮かんだ。
どれほどの時間が過ぎたろう。
ようやくに権十郎は、眠りにひきこまれていった。そのとき、雨音が屋根を叩いてきたようにおもった。
眠りは浅かった。
ふと、目ざめると、部屋の中に薄明がただよっている。
権十郎は、飛び起きた。
前夜のうちに、明日の早立ちを告げ、旅籠代をはらっておいたので、すぐさま身仕度をし、顔を洗い、土間へ出て行くと、台所の方から飯焚きが走って来て、潜戸を開けてくれた。
外へ出ると、いちめんの朝霧が宿場にたちこめている。
雨は驟雨だったらしく、すでに熄んでいた。
道は雨にぬれていたが、難渋をするほどのものではない。
権十郎の姿は、たちまちに霧の中へ溶け込んで行った。
歩きはじめると、権十郎は、宗兵衛たちのことも忘れてしまった。
（一時も早く、大坂へ……）
このことである。
戸塚の宿をすぎて、一里ほども行くと、このあたりで〔千本松〕とよばれている松林へ出

る。東海道は松林の中を通っていた。
霧は、まだ霽れていなかった。
（や……？）
はっと、権十郎が立ちどまった。
どこかで、女の叫びがしたようにおもったからだ。
権十郎は、街道の右手の松林へ入って行った。
今度は、あきらかに女の悲鳴を耳にしたからであった。
（女が、曲者に襲われているのではないか……？）
そうだとすれば、これを見すごして立ち去るわけにはまいらぬ。権十郎も武士のひとりなのだ。
松林の中を、霧がながれている。
男たちの低い叫びが聞こえた。その声を目ざして、権十郎は突きすすんだ。そして、見た。
四十前後の旅の男が、小娘を庇いつつ、道中差を振りまわし、闘っているではないか。
相手は三人で、これも旅姿の男たちだ。三人の脇差は容赦なく襲いかかる。
「逃げろ、早く……」
と、小娘に叫んだ男の足元がもつれていた。
権十郎は物もいわずに三人の男たちの背後へ走り寄り、抜きはなった大刀の峰を返し、一人を打ち倒した。

おどろいた二人が振り向いて、
「おのれ、何をしやがるのだ!!」
喚くのへ、かまわずに権十郎は突きすすみ、刀を揮った。
また一人、くびすじを強打され、
「うわ……」
脇差をほうり出して転倒する。
「あっ、畜生、畜生、畜生……」
残った一人は、権十郎の手なみが、あまりにも鮮やかなのを見て逃げ腰となった。
「曲者!!」
と、権十郎が叱咤した。
「おのれ何者だ?」
「な、何だと……」
「畜生、畜生……」
ぱっと脇差を引いたとおもったら、そやつは身を返して霧の幕の中へ逃げ去った。
「これ、大事ないか?」
刀を鞘におさめて権十郎が、旅の男と小娘に近寄った。
男は左の股のあたりに傷を負っている。
町人ながら、しっかりとした声で、

「かたじけのうございます。危ういところを助けていただきました。御礼の申しようもございませぬ」
小娘が駈け寄って、よろめく男の躰をささえたが、ささえきれるものではない。
「よし」
と、権十郎が小娘を押しやり、男の躰を松の幹へ寄せかけた。
「いま、傷の手当をしてつかわす」
「いえ、早く、早く……」
「何?」
「追手が、まいりますゆえ、早く此処を……」
「追手が来る……?」
「はい」
と、男が顔をそむけた。
小娘が心細くなったらしく、すすり泣きをはじめた。
年齢のころは十五、六歳でもあろうか。化粧の気もない健康そうな可愛らしい顔が生色をうしなっている。
「こ、この上、おかまい下さいますな。早う、早う……」
いいながら立ちあがりかけた男が、傷の激しい痛みに堪えかねたのか、くずれるように坐り込んでしまった。

事情は知らぬ。
それを問うべき余裕もないと看て取った権十郎が小娘にいった。
「おれが背負ってやる。さ、早く」
背中を向けると、小娘が男の躰を抱え起した。
小娘の顔は、男の顔によく似ている。
親子なのであろう。

三

それからのことを、権十郎はよくおぼえていない。
あたりの地理を、まったくわきまえていなかったので、どこを通っているのか、見当もつかなかった。
三人は、東海道へ出たのではない。
権十郎が旅の男を背負うと、小娘が男に、
「父よ。小屋へ行っていいか?」
と尋き、男がうなずいた。
それから、小娘が先に立ち、松林を西の方へ抜けていったのである。
なにしろ、乳白色の霧の中なので、権十郎は小娘の後ろからついて行くよりほかに仕方もなく、また、そのことに何の疑念も抱かなかった。

小高い丘陵の裾の木立の中へ入ったり出たり、川に沿った道をすすんだりして、およそ一刻(二時間)も歩きつづけたろうか。
その間に一度、権十郎は男を背中から下し、所持していた傷薬を出し、男の股の傷の手当をしてやった。
男の腹巻をほどき、傷口の包帯をした。
男と小娘……というより、彼らは、あきらかに父娘であった。
父娘は言葉こそかわさなかったけれども、目と目で何事か語り合うのを、権十郎は気づいていた。
「お武家さまは、どちらまで、おいでになります?」
背中から、男がしずかに尋いた。
ちょっと考えたが、この父娘に洩らしたところで、別にどうということもないとおもい、
「上方まで……」
と、権十郎はこたえた。
男も強いて、それ以上のことを尋ねようとはせぬ。
また、しばらく行くと、男がこういい出た。
「もしや、お急ぎの旅ではござりませぬか?」
「ま、よい。傷は深い。とても歩けぬだろう。行先へ、送りとどけてつかわそう」
「申しわけもござりませぬ」

「なに、かまわぬ」
「なれど……」
「うむ?」
「なれど、お急ぎなれば、かえって御迷惑になりましょう。このあたりで下していただければ……むすめと二人で、何とかなりまする」
「だが、ここで、お前たちに別れても、おれは東海道へ出る道のすじをわきまえておらぬ」
「さようでござりましたか……」
小娘が振り向き、権十郎の背中にいる父親と、また、目と目を見かわしたようである。
小娘が微かに、うなずいたようだ。
しばらくして、男が、
「では、おなさけにあまえさせていただいても、よろしゅうござりましょうか?」
「うん。よいとも」
「かたじけのうござります」
「うん……」
「そのかわり、私どもの小屋へ着きましたなら、道案内をおつけいたしますゆえ……」
「そうか。それはありがたい」
「御安心下さりませ」
そのとき、はじめて権十郎が男に問いかけた。

「あの曲者どもは、野盗のたぐいか?」
男は言葉を濁したが、あわてた様子もなく、
「まあ、そんなようなものでござります」
といった。そのとき、小娘が振り向き、父親を見上げてにっと笑ったものである。
権十郎は、この父娘を奇妙におもった。
すでに、霧は霽れている。
夏の朝の光りが、野にも川にもふりそそぎ、蟬の声があたりにわき起っていた。
いつの間にか、三人は小さな狭間の中の小道を、前の方の森に向ってすすみつつあった。
森を抜けたところに、この父娘がいう〔小屋〕が在った。
〔小屋〕といっても、しっかりした造りの百姓家である。
家の背後は、深い竹藪になっていた。
小娘が〔小屋〕へ走り寄って行くと、中から六十がらみの老爺があらわれ、小娘が何やらささやくのを聞き、おどろいたように、こちらを見た。
「伊之蔵よ。このお方に助けていただいたのだ」
権十郎の背中で、旅の男がいった。
「へえ、へえ……」
蟇蛙のような顔をした伊之蔵は、それでも胡散らしく権十郎を横目に見ながら、
「とんだことでござえましたよう」

旅の男を下し、小屋の中へ抱え入れた。

小娘が、権十郎へ頭を下げ、先へ立った。小屋へ入れというのらしい。

（小屋）の中は、四坪ほどの板敷きに炉が切ってあり、その二方が土間になっている。

板敷きの板戸の向うに、いま一つ、別の部屋があるらしい。伊之蔵は旅の男を板戸の奥へ抱え入れたらしく、権十郎が入って行ったときには、二人の姿が見えなかった。

小娘は権十郎を板敷きに腰かけさせ、桶に汲み入れた水で、足を洗ってくれた。

汗ばんだ娘の濃い体臭が、権十郎の鼻腔へながれ入ってきた。

権十郎の目の下に、娘はうつむいているわけだが、

「フウ……フムフム……フウ、フウ……」

と、息づかいを荒くして、一所懸命に権十郎の足を洗ってくれている。

突然、権十郎は、四年前に本所の屋敷の文庫蔵で、十四歳の自分が手ごめにした侍女の鶴のことをおもい起した。

すでに、鶴は親もとへ引き取られていた。

（嫁に行ったと聞いたが、どこへ行ったのか……？）

あのときの鶴の喘ぎや、躰のにおいが、なまなましく権十郎の脳裡によみがえってきた。

「もし……もし……」

小娘によびかけられて、はっと気づいた権十郎の顔が、見る見るうちに赤くなった。

小娘が不審そうに、権十郎を見やって、

「おあがりなせえまし」

おそるおそるいった。

権十郎が炉端へすわると、小娘は土間で火を起しはじめた。

家の中は、おもいのほかに清潔であったが、

（妙な……？）

と、感じたのは、夏の日ざかりだというのに土間の戸をすべて閉め切ってあることで、伊之蔵とよばれた老爺も小娘の声を聞くまでは、戸を閉めていたのである。

（この暑いのに、何故、戸を……？）

だが、小屋の中は冷んやりとしていて、おもいのほかに涼しい。

どこからともなく、微風がながれ込んで来るのだ。

小娘が茶をいれて、権十郎の前へ置いた。

このような百姓家には似合わぬ上等の茶の香りがする。

そもそも、当時の農家の、平常の飲料は水か白湯にきまっていた。

そのとき、板戸が開き、のっそりと伊之蔵があらわれ、権十郎へ愛想もない一瞥をくれてから、戸を開けて外へ出て行った。

四

「お玉……お玉よ……」

奥の間で、旅の男がよんだ。
小娘が奥へ入って行き、すぐにあらわれ、
「お武家さま。父（とと）がよんでおります」
と、いう。
腰をあげた権十郎へ、お玉が笑いかけてきて、
「いま、昼餉（ひるげ）の仕度をいたしますから、もうすこし、辛抱して下され」
「なに、大丈夫だ」
こたえはしたが、実のところ、権十郎は空腹のために口をきくのも面倒になっていたのだ。
奥へ行くと、旅の男は、すっかり傷の手当をしたらしく、真新しい白布で包帯を替え、さっぱりとした夏着を身につけ、夜具の上へ横たわっている。
「傷が痛みまする。このような恰好で、おゆるし下さりませ」
「何の、かまわぬ」
この父娘の言葉づかいは百姓のものともおもわれぬし、また、町人のものともおもわれぬ。
というのは、自分たちを救ってくれた武家に対する言葉づかいが、権十郎から看ても、不自然なものであったからだ。
つまり、平常つかいなれていない言葉づかいをしているらしい。
「私は、喜平治（きへいじ）と申しまする」
「さようか……」

権十郎は名乗らなかった。
また、名乗る必要もない。
喜平治は細身の、ひきしまった躰つきの四十男で、顔つきにも下卑たところがすこしもない。
（父上の顔よりも、ずっと品がよい）
などと、権十郎はおもったりした。
喜平治の、左の頬から顎（あご）のあたりにかけて、一すじの刀痕（とうこん）がきざまれているのに、権十郎は気づいた。
いよいよ、得体が知れぬ男である。
「日暮れに近くなりましてから、伊之蔵が道案内をいたし、東海道へお送り申しあげまする」
「さようか……」
「立ち入ったことをおたずねいたしますが、上方のどちらへ？」
「大坂」
「ははあ……」
うなずいた喜平治が、いきなり、
「道中の切手を、おもちではござりませぬな」
と、いったのには、権十郎もおどろいた。
「いや、もっている……」

辛うじてこたえると、喜平治が微笑をして、
「お隠しなさらずとも、大丈夫でございます」
「いや……その……」
「おたすけいただきました御礼に、あなたさまのお役に立ちたいと、おもっているのでござりますゆえ」
「役に立つ……？」
「切手がなくば、箱根のお関所は通れませぬぞ。何となさるおつもりでございます？」
「むう……」
喜平治の問いかけは、ぬきさしならぬ呼吸で権十郎にせまった。しずかで、おだやかな口調なのだが、若い権十郎の弁口では、とても太刀打ちができぬ。
いさぎよく、権十郎は兜をぬぐことにした。
「まさに、道中切手を所持してはおらぬ」
「では、どうやって、箱根を越えるおつもりなのでございます？」
「うむ、実は……伊豆の国の熱海へぬけ、それより、山越えに三島へ出ようとおもっていた」
喜平治が笑い出し、
「途中の、根府川の裏関所を、どうやって、通りぬけるおつもりなので？」
「なに……そのようなところにも関所があるのか？」
正直なもので、権十郎の顔色が変った。

「ございますとも」
がっかりした権十郎が、
「し、知らなんだ……」
「御安心なされませ」
「え……？」
「私が、無事に、熱海へおつれいたしましょう。いえ、私のかわりに、伊之蔵が御案内いたします」
「ま、まことに？」
「はい。いまひとつ、おたずねをいたしますが、あなたさまも追われているお身ではござりませぬか？　いえ、そのことをうかがっておいたほうが、こちらにも手段がござりますゆえ……なれど、お洩らしいただけぬのなれば、それにても結構でござりますが……」
喜平治には、何の企みも邪心もない。
その顔を見つめ、その声を聞いている権十郎にはよくわかった。
また、喜平治が権十郎に邪心を抱く理由とてないわけだ。
「くわしい事情は申せぬが……追うて来る者がいるやも知れぬ」
「やはり、な……」
「喜平治どのとやら、では、おぬしの助けによって、その根府川の裏関所を、うまく通りぬけられるのだろうか？」

「切手なしで関所をぬけるわけにはまいりませぬ。なれど、おまかせ下されませ」
「よ、よいのか?」
「ようございますとも」
淡々といいきった喜平治の声には、自信がこもっている。
「ともあれ、お発ちなさるのは日暮れになってからでございます。私を此処まで背負うて来て下されまして……さぞ、お疲れでございましょう」
「いや、なに……」
「いま、むすめが仕度をいたしておりまする昼餉をおすましになりましてから、しばらく、おやすみ下されませ」
喜平治の、あたたかい微笑にさそわれて、権十郎も安堵のおもいになり、
「そうさせてもらおう」
「それにしても……」
と、喜平治は感嘆の態で、つくづくと、若い権十郎をながめやり、
「御立派な、お躰をしておいでになりますなあ……」

五

小娘のお玉は、熱い味噌汁と麦飯と瓜の漬物という昼餉の仕度をととのえ、板の間へ運んで来てくれた。

それがまた、権十郎には、
（えもいわれずに……）
うまかったのである。
味噌汁の実に、小ぶりの茄子を焼きあげて二つ割にしたものが入っているのも、権十郎にはめずらしかったし、そもそも味噌の味が、江戸の屋敷で口にしていたものとはまったくちがっている。色も赤味を帯びていて、味も舌にまつわりつくような濃厚さがあった。
その味噌汁で麦飯を食べたときのうまさというものは、これまでの権十郎の体験にないもので、
「腹も空いていたのであろうが……さようさ、飯を七、八杯はたいらげたろう。ついには、小娘がこらえかねて笑い出す始末で……いや、それにしても、いまもって、あのときの味わいを忘れかねているのだ」
と、のちに徳山権十郎は語っている。
腹がふくれると、一度に、疲れが出て来た。
お玉が板の間へ真新しい蓙敷物をのべてくれ、枕を出してくれた。
そこへ身を横たえるやいなや、たちまち権十郎は、深い眠りに落ち込んでしまった。
「もし……もし、お武家さま……」
お玉にゆり起されて、
「あ……」

権十郎が目ざめたときには、板の間の炉に火が燃えてい、燭台に大蠟燭が灯っていた。

この家のおもむきとは、いささか釣り合いがとれぬほどに立派な燭台であって、蒔絵がほどこしてある。

江戸の徳山屋敷にあるような燭台なのだ。

「そろそろ、お発ちの時刻でございます」

と、お玉がいった。

「お、そうか……」

「お腹が、空いてはいませぬか？」

「いや、まだ……」

「では、これを」

お玉が、細紐で編んだ袋のようなものを出した。中には竹の皮に包まれた握り飯が入っているらしい。

「や、すまぬ」

「父が、こちらへおいで下さるようにと……」

奥の間へ行くと、横たわっていた喜平治が半身を起しかけた。

「あ、いかぬ。むりをするな」

「さようでございますか。では、このままにさせていただきまする」

「うむ、うむ……」

「先ず、これをごらん下さりませ」

こういって、喜平治が権十郎へ手わたしたのは一通の書状であった。

その表書に、

〔大坂高麗橋一丁目　唐本和本書物所　加賀屋孫助殿〕

と、したためてある。

「あなたさまが何の御用で大坂へおいでになるのやら、それは存じませぬが……もしも、何か、お困りになるようなことが起りましたら、その加賀屋孫助方へ、私めの手紙をお持ちなされませ。悪しゅうはいたしませぬ」

「この加賀屋どのとは、知り合いなのか？」

「さようでございます」

「では、いただいておこう」

「もしも、人探しをなさるのでしたら、きっと、お役に立ちましょう」

と、喜平治は権十郎の肚の内を見とおしたようにいい、

「それから、これは、まことにさし出がましく存じますが、路用の足しにして下さりませ」

「いや、路用の金は充分に持っている」

権十郎は、喜平治がさし出した金の包みを押し返した。

すると喜平治は、強いてすすめようとせず、

「さようでございましたか。ならば安心でございますな」

そういって、金包みを手もとへ引きもどした。

それが権十郎には、こころよかった。

お玉が顔を出し、

「伊之蔵が、まいりましたよ」

と、告げた。

「おお、そうか。では、お武家さま。くれぐれも、お気をつけられまして」

深ぶかと頭を下げる喜平治へ、おもわず権十郎が、

「私は、と……」

徳山権十郎と名乗りかけて、おもい直し、昨夜、戸塚の旅籠で宿帳に書いた「山口権三郎」の偽名を名乗り、

「かえって、世話になった」

礼をのべるや、喜平治が、

「何をおっしゃいます。あなたさまにお助けいただかねば、いまごろは私めも、このむすめも、この世のものではなくなっております」

「わずかなことをしたまでだ。いや、通りかかった武士ならば、だれでもすることを、私もしたまでだ」

「山口様、と、おっしゃいましたな？」

「う……うむ、そうだ」

凝と、権十郎を見つめた喜平治が、

「何やら、いつか、どこかで、またお目にかかれるような気がいたします」

「また、いつか、会いたいものだ」

権十郎も、おもいは同じであった。

いまもって、夢でも見ているのではないかとおもうような、不思議な一日だったのである。

板の間へ出て来るときに、権十郎が振り向くと、喜平治の両眼から熱いものがふきあがってきて頬へつたわるのが、はっきりと見えた。

そのとき、権十郎は、

（ああ、おれはよいことをした。亡き堀内先生に鍛えられたこの手足が、はじめて、他人の役に立ったのだものな……）

悪い気もちではなかった。

土間に、伊之蔵が立っていた。

見たところは、権十郎につき従ってる下僕のような旅姿であった。

伊之蔵は権十郎へ頭を下げてから、戸を開け、外へ出て行った。

お玉が、新しい草鞋を権十郎の足へ履かせてくれた。

草鞋のひもをむすびつつ、お玉が権十郎へささやいた。

「伊之蔵がついていれば、大安心でございますよ」

お玉の躰から汗のにおいが消えていた。

権十郎がねむっている間に、躰を洗ったらしい。
そのかわりに、無造作にうしろへ束ねた洗い髪が、清すがしい香りをただよわせている。
権十郎も、昼餉をすます前に躰をふき、お玉が出してくれた新しい肌着を身につけていた。
外へ出た権十郎の先へ立ち、伊之蔵が歩み出した。

「さらば……」

振り向いて声をかけた権十郎へ、お玉が、

「お武家さま。また、お目にかかりましょうなあ」

大人びた声を送ってよこした。
森へ入る前に、もう一度、権十郎は振り向いた。
お玉は、まだ戸口に立ってい、手を何度も振って見せた。
夏の夕闇だけに、まだ、灯りは要らなかった。
けれども、半刻（一時間）も歩むうち、すっかり暮れきってしまったので、伊之蔵は提灯の火をつけた。
依然、伊之蔵は無口であるが、後から来る権十郎に対しては相当に気をつかい、ずんぐりとした躰を斜めにして提灯のあかりが権十郎の足許へとどくようにしてくれた。

「伊之蔵とやら、お前は、喜平治殿に仕えている者か？」

伊之蔵が、うなずく。

「あの人は、どういう人なのだ？」

伊之蔵は、こたえぬ。
権十郎も、よけいな問いをせぬことにきめた。
小川のほとりの道に、螢が飛び交っている。
ここが何処なのか、何処へ案内されるのか、権十郎にはすこしもわからなかったが、それでいて何も彼も伊之蔵にまかせきっている自分が、可笑しくてならぬ。

六

老爺・伊之蔵にみちびかれるまま、徳山権十郎は、この夜のうちに相模川をわたった。
もっとも、それが相模川だと気づいたのは、後年になり、権十郎が東海道の地理に明るくなってからのことである。
夏のことで、川の水量は減っていたが、それでも深いところは胸のあたりまであり、二人とも衣類をぬぎ、これを頭に括りつけて、川をわたった。
権十郎の荷物は、伊之蔵が持ってくれた。
相模川をわたると平地がひらけてくる。
夜ふけの闇が冷気を含んでいて、こころよい。
伊之蔵は、一言も口をきかなかった。
およそ、二里ほども歩いたろうか……。
いつの間にか、道の両側から山がせまってきた。

伊之蔵の歩みは実に鈍かったし、時に足をとどめ、凝と、あたりの気配をうかがったりする。

たしかに、いまの伊之蔵は喜平治のいいつけによって、権十郎を無事に送り届けようとしているわけだが、

（この老爺は、おれのためというだけではなく、自分のためにも気をくばっている）

と、権十郎は看て取った。

喜平治父娘といい、この伊之蔵といい、

（尋常の生活をしているのではないらしい……）

と、権十郎は感じはじめている。

しかし、彼らに対し、いまのところ権十郎は少しも警戒を抱いていない。

それは、これまでの彼らの言動から推してみて、まったく、自分に害意を抱いていないことがわかっていたからだ。

また、彼らが権十郎に害を加える原因は、

（何一つ無い）

といってよい。

それに、また、権十郎にとっては、こうした〔めぐりあわせ〕になったことが、

（おもしろい……）

のである。

（世の中には、いろいろな人が生きているものだ……）

このことであった。

夜が明けぬうちに、伊之蔵は、これも谷間の小屋へ権十郎をみちびいた。

これは、喜平治父娘の小屋のようなものではなく、それこそ木樵か炭焼きの小屋といってよい。

戸を叩くと、中から伊之蔵と同年配の老爺があらわれた。

伊之蔵の戸の叩き方を、権十郎はたしかに見とどけた。

とん、とん、とん……と、三つ叩き、間を置いて、また、これを繰り返すのだ。

伊之蔵は、小屋の老爺と何か囁き合ってから、背後に佇む権十郎の傍へ来て、

「あれへ、お入り下せえ」

と、いった。

「さようか……」

うなずいて小屋へ入る権十郎へ、小屋の老爺が丁重に頭を下げた。

それきり、この老爺は小屋へもどって来ない。

権十郎は、もう何も、伊之蔵へ尋ねなかった。

尋ねたところで、こたえはすまい。

それに、権十郎は眠くてたまらなかった。

日中に、喜平治の小屋で仮眠をとったとはいえ、権十郎は権十郎なりに江戸を発して以来、

緊張の三日をすごしてきたのであった。

　権十郎は寝床へ横たわる前に、伊之蔵にいわれて、衣類をぬぎ、着替えをさせられた。目ざめると、小屋の中には、だれもいなかった。

　二つの小窓から、そよそよと涼しい風が吹き込んでくる。真昼であった。目ざめた権十郎は、先ず、非常な空腹をおぼえた。

　それを、何処からか隙見でもしていたかのように、食事の仕度をととのえて、二人の老爺が小屋の中へ入って来た。

「お客人。水浴びをなさるか？」

　と、伊之蔵が尋いた。

「できるのか？」

「できますだよ」

「したいな」

「おいでなされ」

　小屋の裏手の木立の中を、しばらく行くと、川のながれがあった。

　木立から、小川の岸辺までは細い道がついてい、岸辺に木で造った台が張り出している。おそらく此処で、洗い物をしたりするのであろう。

　伊之蔵は、

「早う、もどりなされ」

　と、いいおき、引き返して行った。

　素裸になって、川へ飛び込んだ権十郎が、

「うわあ……」

　あまりのこころよさに歓声を発し、泳ぎはじめた。

　対岸は、深い森である。

　蟬が鳴きこめていた。

　権十郎が小屋へもどって来ると、土間と板敷きだけの小屋の中に伊之蔵だけがいて、昨日、権十郎が脱いだ衣類を出してよこした。

　江戸以来、身につけていて汗と埃にまみれていたものが、きれいに洗われ、火熨斗までかけられているではないか。

　この小屋の中でしたことではない。

　近くに、別の小屋か家があって、衣類も洗われ、食事の仕度もととのえられたにちがいない。

（そして、そこには女も住んでいる……）

　と、権十郎は看た。

「めし、食いなさったら、また、ねむるがようござります」

　伊之蔵が、椀に飯を盛って差し出しながら、そういった。

「今日も、暗くなってから歩むのか？」

「へい」
「お前は、何処まで、私を案内してくれるのだ?」
「豆州・熱海まで」
「まことか?」
「へい」
権十郎は、安心をした。
伊之蔵は、根府川の関所の脇道を、夜陰に乗じて通り抜けるつもりらしい。
江戸時代も後年になると、夜陰に脇道を抜けて、切手もなしに関所を通行することなど、いろいろな手段ができて容易(たやす)くなるのだが、まだ、このころは、関所の役人や番人の夜廻りなどもおこなわれていたし、よほどに気をつけぬと危なかった。
塩漬けの瓜と梅ぼし、味噌汁で、権十郎は腹いっぱいに食べた。
食べ終って横になると、自分でも、
(どうかしたのではないか……?)
と、おもうほどに、睡気がきざしてくるのだ。
「もし……もし、もし……」
伊之蔵に、ゆり起されて目ざめると、もう夕暮れになっている。
(このようにして一日一日が過ぎて行けば、人の一生などというものは、まことに簡短なものだ)

権十郎は伊之蔵がいうままに、我身をまかせている。
その権十郎の態度が、伊之蔵にも好感をよんだらしい。
今日の昼ごろから、権十郎に対する伊之蔵の様子が変りはじめてきたようだ。
小屋の老爺が、夕餉の膳を運んで来た。
焦げた味噌の匂いが小屋の中にただよい、権十郎の食欲も目ざめた。

七

伊之蔵の案内で、徳山権十郎が小田原城下へ入ったのは、つぎの日の未明であった。
途中までは、
(どこをどう歩いているのか……?)
まったくわからなかった権十郎だが、突然、街道に出て、しばらく行くと汐(しお)の香がただよいはじめ、左側が大きくひらけて、暗闇の中に海が横たわっていた。
そこではじめて、権十郎は、
(東海道へ出た……)
と、気づいたのである。
海は、相模湾であった。
「お客人……」
はじめて、伊之蔵が声をかけてよこした。

「わしは、お客人を小田原まで送ったら、引き返すだよ」
「そうか……小田原から、私は何処へ行けばよい？」
「心配いらねえだ。小田原には、お前さまを無事に熱海へ送りとどける者がおりますだよ」
「ほう……」
「なあに、わざわざ熱海へまわらねえでも、箱根を越えることだって、わけもねえことなのだが、お客人は、どっちにしなさる？」
「そうしたことが、できるのか？」
「ああ、できますだよ」
「それは、喜平治殿が……？」
　いいかけた権十郎へ、振り向いた伊之蔵が手を振って見せ、
「これ、お頭(かしら)のことは、何も尋きなさるなよ」
　妙に、きびしい声音でたしなめた。
「おかしら……？」
　伊之蔵は、はっとしたように猪首(いくび)をすくめ、だまって歩みつづける。
「これ、伊之蔵とやら……」
「へい」
「喜平治殿は、何のお頭なのだ？」

「何でもいいだよ」
　俄然(がぜん)、伊之蔵の口調は、寄りつきがたいものに変った。
「そうか……」
「そうだ。お武家にも、お頭はあろうがよ」
「む……それは、な」
「お頭は、どんなところにもいるものだよ」
「なるほど……」
「もうすぐに小田原だ。だまって歩きなさせえ」
「よし、よし」
　権十郎は、さからわぬ。
（なれど、喜平治殿は、たしかに、何やらの一味を束(たば)ねている……）
と、看てよい。
　では、何の一味なのかというと、権十郎には、まったく想像がつかぬ。
　ただ、彼らが、
（世を憚(はばか)って暮している……）
　らしいことを、権十郎は感じはじめていた。
　戸塚の千本松で、喜平治父娘を襲った三人の男たちも、ただの物盗(ものと)りの類いとはおもわれなかった。

喜平治たちへの好奇心は、つのるばかりになってきた権十郎であったが、いまは、そうしたことに関わり合ってはいられぬ。

海は凪ぎわたっていた。

海辺へ寄せる、ゆったりとしずかな波音も聞こえている。

右側につづいていた山肌が切れたかとおもうと、酒匂川の両岸にひらけた平地が権十郎の目に入った。

いつの間にか夜の闇が、すこしずつ、うすれかかってきていたのだ。

「お客人。すこし、急いで下せえ」

と、伊之蔵がいった。

「よし。ところで伊之蔵とやら……」

「口きかねえで。口きかねえで」

「いや、小田原へ到着すれば、もう、お前とは会えぬというではないか」

それまで、伊之蔵のうしろについていた権十郎が肩をならべ、

「いまのうちに、尋いておきたいのだが……」

伊之蔵はこたえず、手にした提灯の火を吹き消した。

「伊之蔵……」

「何だね?」

「これより先、喜平治殿に会いたいとおもうときは、どうすればよい。どこへ行けば会えるのだ?」

「聞いてねえ、聞いてねえ」

「何……?」

「そんなこと、わしは、お頭から聞いてねえだよ」

「ならば、お前が聞かせてくれ」

「困る」

「会っては、いけないのか」

「いけねえ」

「何故……?」

「いけねえといったら、いけねえだよ。うるさい客人だのう」

権十郎は、あきらめるよりほかに、仕方もなかった。

しばらくして、二人は酒匂川をわたった。

夏のころの酒匂川は、徒歩でわたれる。

わたって、岸辺をすこし行ったところに、茶店のような藁屋根の家が一つ在った。

伊之蔵は、この家の裏手へ、権十郎をみちびいた。

日は昇っていないけれども、暁闇が桔梗色に変り、すこしずつ、白い朝の光りが加わってくるかのようであった。

「小田原へは入らぬのか?」

と、権十郎が、裏の戸を叩いている伊之蔵へささやいた。

伊之蔵は、権十郎をにらみつけ、

「お前さま。よう、しゃべるようになったな。しゃべってはいけねえ」

と、いう。

権十郎は声もなく笑った。

自分がはなしかけるたびに、伊之蔵の困惑が大きくなるからだ。

戸が開いた。

痩せこけた、小さな老婆が顔を見せ、

「おお。伊之蔵か……」

「へい」

「何じゃ、いまごろ……」

いいさして、老婆が権十郎を見つけ、あごをしゃくって、伊之蔵へ何かささやく。

伊之蔵が、喜平治からの手紙を出し、老婆へわたし、

「お客人。お入りなせえ」

と、権十郎にいった。

伊之蔵と権十郎を家の中へ入れておいてから、老婆は、戸の間から顔をのぞかせ、あたりの様子をうかがっていたが、

「伊之蔵よ。嫌な知らせではあるまいのう」

振り向いて、戸を閉めた。

「婆さまよ。すんでのことに、嫌な知らせをとどけるところよ」

「何じゃと……?」

「だが、このお客人のおかげで、嫌な事にはならずにすんだ」

「え……?」

老婆が、土間に立っている権十郎をまじまじとながめやった。

しわだらけの、猿のように小さな老顔だけを見ていると、男だか女だかわからぬ。

それでいて、この老婆の人相には、いささかも下卑たところがないのである。

老婆へ対する伊之蔵の態度は、へり下ったものであった。

喜平治の手紙を読み終えた老婆の、権十郎への態度が、がらりと変った。

「これは、これは、すこしも存じませぬことで、まことに御無礼をいたしました」

老婆は深ぶかと、腰を折った。

「婆さまよ。わしはもどる」

伊之蔵は早くも戸を引き開け、

「たのみましたぞ」

「よし、よし」

「お客人、気をつけて行きなせえ」

権十郎が言葉をかける間もなく、伊之蔵は外へ消え、戸が閉まった。

八

老婆は、権十郎を奥の一間（ひとま）へ案内した。

そこは、中二階のかたちになっており、意外に清げな座敷なのだ。

そのほかに一間あり、そこが老婆の部屋なのであろう。

中二階の下が、茶店の水屋（兼）台所になっているらしい。

「いま、湯をわかしますでな」

という老婆へ、権十郎が、

「この家（や）に、井戸はあるのか？」

「へえ、ございますが……」

「ならば、井戸の水を浴びて汗をながしたい。そのほうがよい」

「へえ……」

老婆は何か考えているようであったが、

「ちょいと、お待ちを……」

外へ出て行き、また、もどって来た。

あたりの様子をうかがってきたらしい。

「さ、おいでなせえまし」

いま、伊之蔵と共に権十郎が入って来た裏口から外へ出ると、右手に石井戸があった。

その井戸水を、権十郎は存分に浴びて、

（ああ、生き返ったような……）

躰をふいていると、老婆が着替えを持ってあらわれ、権十郎の裸身をつくづくとながめ、

「まあ、まあ、さても立派な躰じゃこと」

と、いった。

あたりが、すっかり明るくなってきている。間もなく、日が昇るだろう。

権十郎が中二階へもどると、すぐに老婆が熱い茶に梅干しをそえ、運んで来てくれた。

「いま、なにか食べるものを持ってめえりますでな」

「すまぬ」

「なあに、とんでもねえことでございますよ」

老婆が下へ去ったかとおもったら、低いはなし声が聞こえた。

（老婆のほかに、だれかがいる……）

のである。

男の、それも若い男の声であった。

老婆も若い男も、低い声で語り合っているのだが、別段、権十郎を憚ってのことではない。

「早（はえ）えうちがいい。ともかくも、御城下へ行き、お指図をもらって来ておくれ」

という老婆の声が、権十郎の耳へ入った。

間もなく、若者が裏口から出て行く物音が聞こえた。

食事の仕度をしてあらわれた老婆に、
「先刻、此処を出て行ったのは？」
権十郎が尋ねると、
「あれは、わしの倅（せがれ）でござります」
「おお、さようか」
「心配なさるにはおよびませぬ。お前さまのことで、用事をいいつけましたのでござります」
「ふむ、ふむ……」
「ま、大舟に乗った気でおいでなさるがようござります」
たのもしげに、老婆がいう。
「お前さまは、わしらの……、わしらも深え御恩をうけた喜平治さまの旦那のいのちを助けて下された御方でござりますもの。何としても、無事に熱海へ送りとどけるつもりでござります」
「厄介をかける」
喜平治が、この老婆母子（おやこ）や伊之蔵にとって、どのような関わり合いをもっているのか……
尋ねてみても、満足にはこたえまいと看て、権十郎は食事をすませ、
「此処で、眠ってもよいか？」
「さあさあ、遠慮はいりませぬ。したが……」
「したが……？」

「わしは間もなく、店を開けますでな。その間、声を立てぬようにして下され」
「よし、わかった」
「そのかわり、わしのほうから、ちょいちょいと様子を見にまいりますゆえ、御用があれば、そのときに……」
「心得た」
「では、ごゆるりと……」
いったん、身を返した老婆が振り向くと、
「まあまあ、いよいよ、御立派なおさむらいさまじゃこと」
こういって含み笑いをもらし、下へ去った。
そのときの老婆の笑顔と声には、得もいわれぬ色気のようなものがただよっている。
権十郎にとっては、気味のわるい〔色気〕であったが、さりとて下卑てはいない。むしろ、童女が大人の女のまねをして、わざと、なまめいた仕ぐさをして見せるのに似ていた。
横になると権十郎は、たちまち、深い眠りに落ちていった。
茶店といっても、この家の造りは、なかなかに念が入っている。
屋根の藁も厚く葺（ふ）いて、夏の日ざしをふせぎ、どこかに〔風穴（かざあな）〕を設けてあるらしく、涼しい風が上から吹き込んでくるのだ。
いうまでもなく雨降りのときは、風穴が閉じる仕掛けになっているのであろう。
さて……。

茶店を出た老婆の倅だという若者は、さして急ぐでもなく、小田原の城下を目ざして行く。

これを、酒匂川の堤の下の草蔭(くさかげ)で見まもっている二人の男に、若者は、まったく気づかなかった。

いや、若者はそれなりに気をくばり、あたりの様子をうかがいつつ、歩んでいたのだが、身を隠して茶店を見張っていた二人の男のほうが、さらに上手(うわて)だったといえよう。

この二人の男を、徳山権十郎が見たら、何とおもったろう。

まぎれもなく、こやつどもは、戸塚の千本松で喜平治父娘を襲い、権十郎に追い散らされた三人のうちの二人なのであった。

「あれは、婆あのせがれらしいな。どうする、ともかくも、お頭へ知らせて来ようか？」

「さて、な……」

「どこへ行くのか、後をつけて見ようではねえか」

「まあ、待て」

「え……？」

「急(せ)くな」

中年のほうの男が凝(じっ)と考えながら、

「ここで、下手にうごいてもなるまい」

「だが、見すごしてもおけまいぞ。いっそのこと、茶店へ踏ん込み、婆あを引っ括(くく)り、痛めつけてみたらどうだ」

「ふうむ……」

「婆あひとりだ。いまのうちなら引っ攫(さら)うこともできようというものだ」

そういうところを見ると、この二人は、今日の払暁に、伊之蔵と権十郎が茶店へ入って行ったことを知らぬらしい。

おそらく、権十郎が井戸の水を浴びて中へもどったのちに、二人は此処へ到着し、茶店の見張りを開始したのであろう。

「やはり、茶店には手をかけねえほうがいい」

「どうしてだ？」

「それでねえと、曾我(そが)の喜平治の息ぬきの場所がなくなってしまう」

「かまうものではねえ」

「いや、息ぬきの場所があれば、そこへ、顔を見せることもある」

「なるほど……」

「それにしても、もう一息のところだったのにな」

「とんだ邪魔が入(へえ)った。妙に強いさむらいだったなあ」

「うむ……」

「あのさむらいは、やはり、曾我の一味なのだろうか？」

「さて、わからねえ」

「あっ……どうする？」

「何を?」

「婆あのせがれの姿が、見えなくなってしまったぞ」

「あわてるにはおよばねえ」

中年の男が、うすく笑って、こういった。

「あいつは、きっと、小田原の御城下へ行ったにちがいない」

「なあんだ。それなら、めずらしくもねえ」

「だが、な……おれが気にかかっているのは、こんな時刻に、婆あのせがれが小田原へ行くということよ。こいつは喜平治に関わることではねえか、どうも、そんな気がする。それに見ろ。あのせがれは、だれか見張っているものがありはせぬか、後をつけるものがいないかと、じゅうぶんに気をつかって歩いていたではねえか、どうだ」

「そういえば、まさに……」

「どうだ。お前ひとりで、このあたりから茶店を見張っていてくれぬか。おれは、小田原へ行って見る」

「いいとも」

「では、たのんだぜ」

菅の笠をかぶって堤の上へ出て行きながら、中年の男が、

「こりゃあ、今日も暑くなりそうだぞ」

晴れあがった朝空を仰ぎ、舌打ちを洩らした。

九

相模の国・小田原は、大久保加賀守十一万三千石の城下で、江戸をはなれること二十里二十町である。

小田原は、むかし、関東の覇者といわれた北条氏の本拠であった。

戦国の世を経て、徳川幕府の威令のもとに天下が治まってのち、貞享三年（一六八六年）に大久保氏が封ぜられてのち、小田原城主は変っていない。

北条氏の時代から繁栄していた小田原は、東海道の要衝である箱根山をひかえた城下町だけに、人馬の出入りもはげしい。

それだけに、大久保加賀守が幕府から担わされた責任は重いことになる。

茶店の婆の倅の名は〔寅吉〕という。

年齢のころは二十四、五歳にもなろうか。若いくせにでっぷりと肥えた躰つきの、肌の色がなめらかに白く、口もとが紅くやさしげで、老母を助け、茶店でもよくはたらく。

老母の名は〔おとき〕という。

「あの茶店の婆さんのせがれは、唖ではないだろうか……」

などというものもいるほどに、寅吉は無口なのだ。

小田原城・大手口の近くに松原大明神の社があり、道ひとつをへだてた本宿とよばれる町すじの一角に、

〔唐針・溝針・縫之針　𠆢堺屋太兵衛〕
の看板を掲げた針屋がある。

この針屋は十年ほど前に、京都から移って来たとかで、主人の太兵衛は四十前後の、人あたりのよい人物である。

主人夫婦には子供がなく、奉公人も五人ほどの小さな店だが、本店が京都にあり、そこから品物を仕入れるわけで、ちかごろでは、

「針は堺屋にかぎる」

という評判だそうな。

品質がよく、針の種類も豊富だからであった。

小田原城下へ入った寅吉は、町の中の細道をえらんで、遠まわりをしながら、本宿へあらわれた。

寅吉が、針屋の堺屋太兵衛方の裏手へ入って行くのを、見とどけた者がいる。

先刻、酒匂川の堤で茶店を見張っていた中年の旅の男は、寅吉の先まわりをして小田原城下へ入り、松原大明神の鳥居の蔭にいて、寅吉が来るのを待ちかまえていたのだ。

すると、二人の曲者は、おとき婆の茶店と堺屋の所在を、

「あらかじめ知っていた……」

ことになるではないか。

それは取りも直さず、この二つの関連を、わきまえていることになる。

ということは……。

徳山権十郎に危急を救われた喜平治父娘と、おとき婆と、堺屋太兵衛の三つが、

「むすびついている……」

ことになるのだ。

それを曲者どもが探知し、茶店と針屋を見張ってい、何とか喜平治父娘の所在をつきとめ、これを、

「亡きものに……」

しようとしている。

いま、見張ったり、襲ったり、尾行をしたりしている二、三人の曲者の背後には、彼らを使いこなしている別の者がいると看てよい。

何故なら、茶店を見張っていた一人が、このことを、

「お頭へ知らせて来ようか……」

と、いったではないか。

堺屋へ入った自分を曲者のひとりが見とどけたとは知らぬままに、寅吉が裏口から、声をかけると、太兵衛の女房・おみねがあらわれ、

「はい、ごめんなさいよ」

「あ、寅さんかえ。今日は早いこと」

と、いった。

「旦那さんへ、これをわたしてくだされ」
「何だえ、婆(ばば)さんの手紙かえ」
受け取って見て、
「こりゃ、あの……」
うなずいたおみねが、寅吉へ、
「ま、入っていておくれ」
声をかけながら、奥へ入って行った。
寅吉は台所につづいた土間へ立っている。
夏の朝の日ざしが、活(かっ)と裏の細道へ射し込んできた。
寅吉は、水へ漬かったような顔や腕の汗をぬぐいはじめた。
間もなく、あるじの太兵衛が出て来た。
太兵衛について来た女房は、台所へ下り、店先の方と裏道の方の気配に耳をすませているようだ。
「寅吉。この手紙は、たしかに読んだ」
太兵衛が女のように優しげな声で、
「こうしたわけなれば、そのお客人を根府川越えに、熱海へお送り申さねばなるまい」
「へえ……」
「けれども、いかに喜平治どののおたのみとはいえ、わしはわしの目で、そのお客人をたしかめたい……かように、婆さんへつたえておくれ」

「いつ、茶店へ来なさる。それとも、此処(ここ)へ案内してまいりますかね?」
「いや、それは……そうじゃ。日が暮れたなら、わしのほうから茶店へ行こう」
「それで、よしとなったら……?」
「そのときは、わしが、その場から熱海へお連れ申そうではないか」
「へい。わかりました。そのように、おふくろへつたえます」
「そうか、それは大変だったのだな。喜平治どのが、そのような危難に会われたとはなあ……」
「気をつけねえと、いけません」
「うむ、うむ。何というても相手は恐ろしいやつどもゆえ……」
「では、帰ります」
「ま、ひとやすみしてお行き」
「いえ、おふくろが旦那の返事を待っていますで」
「そうか、それなら仕方もない。婆さんやお前のことゆえ、ぬかりはあるまいが、くれぐれも気をつけておくれ」
「へい」
寅吉は、おみねが出してくれた茶を一杯のみ、ゆっくりと裏道へ出て行った。
堺屋太兵衛は、喜平治からおとき婆へあてた手紙を女房へわたし、こういった。

「お前が読んでから、すぐに焼き捨てておくれ」

十

堺屋太兵衛が、おとき婆の茶店へあらわれたのは、その日の夕暮れであった。

おときの案内で中二階へあらわれた太兵衛は、徳山権十郎を一目見るや、

（これならば……）

好感を抱いてしまったらしい。

そこは何といっても、二千石余の大身(たいしん)旗本の子息であるから品格も正しく、堀内源左衛門直伝の一刀流をおさめた権十郎だけに、これが十八歳の若者とは到底おもえぬ落ちつきがある。

「喜平治どのよりのお手紙にて、あなたさまのことをうけたまわりましてございます。私どもにとりまして大事のお人を、ようまあ、おたすけ下されました」

両手をつき、深ぶかと頭を垂れた堺屋太兵衛へ、権十郎が、

「いや、われらこそ、御造作になります」

あいさつをした。

こうしたときの権十郎を見たら、父の徳山重俊も、くびをひねったに相違ない。

これまでに、父である自分の前では、権十郎が一度も見せたことがない素直さとおだやかさで、目下の町人へも礼儀正しく接している姿を、

「別人のごとく……」

おもうにちがいなかった。

また、権十郎にいわせるなら、江戸を出て以来、知り合った人びとは、いずれも、

「父上のごとき傲慢(ごうまん)さがいささかもなく、おれの胸の内を、おれのすることなすことを、すぐさま、わかってくれる」

なればこそ当然、自分も素直な心で相対することができるのだというであろう。

喜平治父娘も伊之蔵も、おとき母子や堺屋太兵衛も、おもえば、

（得体の知れぬ、ふしぎな人びと……）

なのだが、それでいて権十郎はいささかの違和感もなく、彼らの中へ即座に溶けこめる自分をこそ、むしろ、ふしぎにおもったのだ。

後のちになってみると、彼らの勘のはたらきが、いかに鋭いものだったかがわかってきた。

彼らは一目で、徳山権十郎という若者の正体を看てしまったのである。

むろん、権十郎は何も語っていないからその身分も、江戸を出奔した事情も知らぬ。

それでいて、権十郎が、どのような若者であるかを見抜いてしまい、いっさいの警戒を解いてくれたのだ。

権十郎と彼らの間には、ほとんど言葉を必要としなかった。それでいて肝心のことが快適にはこばれて行くのである。

「山口権三郎さま……」

と、堺屋太兵衛が、権十郎が名乗った偽名をよびかけた。

「何でござる？」
「私めが、熱海まで御案内をいたしまする」
「さようか。まことに相すまぬ。よろしゅうお願い申す」
　すると太兵衛が、
「では、これよりすぐに出立いたしたく存じますが、よろしゅうござりましょうか？」
「かまいませぬ」
　太兵衛はすでに、万端の仕度をととのえてきたらしい。
　先（ま）ず権十郎に会って、
（このお人なら、心配はない）
　見きわめがついたなら、その場から出立するつもりでいたのであろう。
　腹ごしらえをすませた権十郎が、おとき婆の介添えで旅仕度をすませる間に、堺屋太兵衛も階下で身仕度を終った。
　おとき婆は、着替えの下着と、洗いざらしながら折目のついた帷子（かたびら）を用意し、これを布で包み、権十郎へ背負わせてくれた。
「すまぬな、お婆」
「いえいえ、何でもないこと」
「これを、な……」
　と、権十郎は一両小判を一枚、懐紙に包んでおときの手へつかませ、

「これを、取っておいてもらいたい。私のこころざしだ」
「あれ、まあ……こんなことをしなさらぬがいい」
「いや、若い者の気もちは、こころよく受けてくれるものだ」
「でもよう……」
　いいかけたおときへ、堺屋太兵衛が目顔で、
「おうけしなされ」
　と、うなずいてみせた。
「へえ、へえへえ……それでは、かたじけなく、ちょうだいをいたします」
「それでよい。では、お婆。達者でいて下され。息子どのもな」
　権十郎は、寅吉へも声をかけ、太兵衛と共に裏口から外へ出た。
　太兵衛と共に夜の闇の中へ消え去った権十郎を見送り、茶店の中へもどったおとき婆が、
「のう、寅吉よ」
「うん？」
「あの、おさむらいさまは、いくつになるのかのう？」
「二十四、五ではねえか？」
「そうよな。それほどになっているやも知れねえのう」
　しわだらけの手に、にぎりしめたままでいて、汗をかいている一枚の小判を凝と見つめながら、おとき婆は何度もためいきを吐いた。

ところで……。

茶店を出て行った堺屋太兵衛と徳山権十郎は、尾行されていた。

今朝から、茶店を見張ったり、小田原の堺屋へ出向いて行った寅吉を尾行したりした二人の曲者は、これまでの間に、

「しかるべく手くばりをした……」

ものと看てよい。

何故なら、いま、太兵衛と権十郎の後をつけて行ったうちの一人は、別の男だったからだ。

このことを、権十郎はまったく気づいていない。

堺屋太兵衛にしても、

「熱海の温泉(ゆ)は結構なものでござります。ゆるりと御逗留(ごとうりゅう)なさいましては？」

などという声に、切迫したものはいささかも感じられぬ。

「熱海は、おはじめてでござりましょうな？」

「はい。さよう」

「よいところでござります」

堺屋太兵衛は四十一歳になるが、権十郎の目には、十歳ほど若く見えた。

「喜平治どのより、大坂の高麗橋の、加賀屋孫助どのへの書状をお持ちだそうにござりますな。いえ、喜平治どのより、その由を手紙にしたためてござりましたゆえ」

「何か困ったことでも起きたときは、加賀屋殿とやらを頼るがよいと、親切にいうて下された。あなたも加賀屋殿を御存知か？」

「はい。いささかながら……」

「さようか」

「熱海へ着きましたなら、私からも、別のところへ紹介状(そえじょう)を書いてさしあげましょう」

「別の……？」

「はい。きっと、お役に立つことと存じます」

いつの間にか、二人は海に近い道へ出ていた。海は凪(な)ぎわたってい、汐(しお)の香が闇の中にただよっている。

太兵衛は、右手前方の空が赤くなっているのを指して、

「あれが、小田原城下でござります」

「御城下は通りませぬのか？」

「はい」

立ちどまった堺屋太兵衛が、細引の綱を出し、

「これを、お持ち下さいませ。これよりは、道も暗うなりますので」

と、いう。

「このように持てば、よいか？」

「はい、はい」

見ると、細引の先が太兵衛の帯の後ろへ結びつけられているではないか。

権十郎と太兵衛の間隔は、約一間ほどであったろう。
「さ、山口さま。まいりましょう」

十一

伊豆の国・熱海の温泉の由来は、天平勝宝のころ（七五〇年ごろ）にはじまるという。
そのころ、箱根の金剛院の万巻上人が此地へ来て、海中から熱湯が湧き出し、魚類が焼けただれ、浮き上ってくるのを発見し、
「かほどの霊湯を海中に散流させるのはもったいない」というので、その泉脈をさぐり、山腹に転出させたのが、熱海の温泉なのだそうな。
そう聞けば〔熱海〕の名の起りも、うなずけようというものだ。
鎌倉時代になると、北条時政が伊豆の国を支配するようになり、伊豆の韮山へ流されて来た源頼朝が、熱海の近くの伊豆山・般若院へあらわれ、時政の女・政子と知り合い、やがて政子は、天下を治めて鎌倉に幕府を興した源頼朝夫人となる。
戦国時代の熱海は、小田原に本拠をかまえていた北条氏の所領となり、その後、徳川家康の天下統一が成り、江戸幕府が興ってよりは、三島代官の支配下に置かれてきた。
熱海の町は、上・中・下の三町に、本町・さかな町・あら町・新宿を合せて七町にわかれている。
温泉は、大湯を筆頭に、清左衛門の湯・小沢の湯・風呂の湯・野中の湯・河原の湯・左治

郎の湯の七湯がある。
徳川家康も、熱海へ来て、本陣・今井半太夫方へ逗留したし、三代将軍・家光のころには、将軍家の威令をもって、熱海の温泉を江戸まで運ばせたという。
そのころの熱海へは、それほどに湯治客も来なかったろうが、いまは、内湯をそなえた七湯の宿屋のほかに八軒ほどの宿屋があり、
「秋から冬にかけましては、遠く西国（九州）の方からも湯治に来る客もいるそうでござります」
と、堺屋太兵衛が権十郎にいった。
小田原城下を後にしてからは、
（どこを、どのように歩いているのか……？）
権十郎には、まったくわからぬ。
しばらくは、左側の崖下に相模湾の海が横たわっていて、
「危のうござります。お気をつけられまして……」
と、太兵衛が、権十郎の手に自分の帯をつかませてくれた。
そのうちに二人は、山の斜面の深い木立の中へ入り込み、細い道を伝わるようにしてのぼりはじめた。
権十郎は、すべてを堺屋太兵衛にまかせ、安心しきっている。
その態度が太兵衛へも通じたらしく、

「いますこしでございます。御辛抱を……」

声をかけてくれた。

「もうすぐに、熱海でござるか?」

「いえ、熱海までは、まだまだでございます。いま、すこしまいりまして、足をおやすめに……」

「いや、大丈夫」

「お強うございますなあ」

息をはずませつつ太兵衛が、つくづくと感服の態である。

これほどのことで、息を切らせたりするような権十郎ではない。年少ながら、その躰は鍛えに鍛えてある。

「よほどに、武芸を御修行でございましたか?」

「いや、さほどのこともない」

「喜平治どの父娘をおたすけ下されましたときは、三人の相手を追いはらって下されたそうで……」

「いや、なに……」

「お若くとも、大したものでございますなあ……」

世辞ではなく、平地を歩むように山林の中を踏みのぼる権十郎を見て、堺屋太兵衛は本当におどろいている。

道が下りになった。

つまり、細くとも道らしい道があるところへ出たのである。

その道は杉林の裾をゆるやかに下っていて、途中から、また木立へ入り込み、すこし行くと、木立が切れ、闇に慣れた権十郎の目に木樵小屋のようなものが見えた。

その小屋の戸口へ立った太兵衛が、ひそやかに戸を叩き、

「私だ。起きておくれ。小田原の太兵衛だ」

と、声をかけた。

戸が開いて、五十前後の大男があらわれた。

(木樵か、猟師か……)

と、権十郎は看た。

「さ、お入り下さりませ」

「かまいませぬか?」

「さ、どうぞ。どうぞ、お入りに……」

せまい小屋だが、意外に清げである。

小屋の中に、何やら香ばしい薬湯を煎じたときのような匂いがたちこめている。何かの草を燻しておいたにちがいない。

「しばらく、これにておやすみ下さりませ」

堺屋太兵衛は権十郎を板敷きへみちびき、かがみ込んで草鞋を解いてくれ、足袋も脱がせ、

桶に水を汲み込み、その中へ権十郎の足を漬けさせた。まことに行きとどいたことで、権十郎は少なからず恐縮したほどだ。

大男は、白湯を汲んで出してくれた。

炉には、熾が残っている。

太兵衛が、何やら大男にささやいている間、権十郎は無心に白湯をのんだ。

「なあに、へい、大丈夫でございますだよ、旦那」

と、大男が太兵衛にいう声が、権十郎の耳へ入った。

「それじゃあ、旦那は、これから小田原へ帰りますかね。いや、お客人は、わし一人で大丈夫でございますよ」

「そうだろうが、ついでに私も、久しぶりで熱海へ行ってみたい。こちらのお客さまとも、まだ、はなしが残っているから……」

「へい、わかりました。それじゃ、ちょいと仕度を……」

「あ、ゆっくりでよいからね」

「へい、へい」

大男は外へ出て行った。

「あの男の名は、強右衛門と申します」

「おお、さようか」

「この向うの、山ひとつ越えたあたりが、箱根の山中になります」

「はあ、なるほど……」

「これから、あの強右衛門の案内で、根府川の裏関所の、うしろの山を越えてしまうのでござります」

「大事ないのですか？」

「強右衛門にまかせておけば、万事、安心でございます」

「さようか……」

「ところで山口さま。此処を出る前に、いささか申しあげたいことがございます」

「何でしょう？」

「途中で、不意に、私めの姿が消えてしまうやも知れませぬ」

と、急に、堺屋太兵衛が妙なことをいい出した。

「消える……？」

「はい。なれど御案じなさらず、どこまでも、強右衛門のうしろへおつきになっておすすみ下さりませ」

「…………？」

ここにいたって権十郎に、太兵衛たちを警戒するというのではなく、何か不安のおもいがきざしたのである。

「太兵衛殿。それは、いかがな……？」

「いえ、何もおっしゃいますな。私の申すとおりになされば、それでよいのでございます」

太兵衛の口もとは笑っていたが、その両眼は鋭く光っている。

十二

しばらくして、強右衛門がもどって来たとき、権十郎は板敷きへ身を横たえ、うとうととしていたようだ。

堺屋太兵衛は、いったん、強右衛門を外へ連れ出し、何やら、ささやきかわしてから、小屋へもどり、

「もし……もし、山口さま」

「あ……すまぬ。微睡(まどろ)んでいたらしい」

「そろそろ、まいりましょうかと……」

「心得た」

「先程、申しあげましたことを、お忘れになりませぬよう」

「あ……わかりました」

「それから、いま一つ……」

「何でござる?」

「口を……かまえて、口をおききなされませぬよう」

強右衛門は小屋の戸も閉ざさぬまま、先へ立った。

「山口さま……」

と、太兵衛が目顔でうながしたので、権十郎は強右衛門の背後へ、ぴたりとつきそった。

大きくて逞(たくま)しい強右衛門の躰から強烈な匂いがただよってきた。体臭というよりは、山中の樹々や土の香りがにおうといったほうがよいであろう。獣じみた体臭なのだが、香ばしい。

闇の中に強右衛門が振り向き、権十郎へ笑いかけ、何度も、うなずいて見せた。

おもいのほかに、

(人懐かしげな……)

強右衛門であった。

何処(どこ)を歩いているのだか、権十郎にはすこしもわからぬ。

強右衛門も太兵衛も、提灯(ちょうちん)一つ手にしてはいない。

歩みも、ゆっくりとしたもので、ほとんど道のないような山林の中を上ったり下ったりしているのだが、足許(あしもと)が危ないところへ来ると、かならず強右衛門が振り向き、あるときは権十郎の手を把(と)り、みちびいてくれた。

そのうちに、急な下りになって、しばらく行くと、谷川のほとりへ出た。

川巾(かわはば)はせまいが、何と、そこに橋が架かっているではないか。

(人が通らぬような、この場所に橋をかけたのは、強右衛門なのか?)

してみると、強右衛門は、このような谷底を行ったり来たりして暮しているのであろう。

橋といっても、丸木の橋で、強右衛門が手をさしのべ、権十郎へ、

「お気をつけなせえ」

小屋を出てから、はじめて、ささやいた。
丸木橋をわたって、
（太兵衛殿は……？）
ふと、振り向いて見て、権十郎が、
（や、おらぬ……）
おもわず、足をとめた。
すこし前まで、うしろについて来ている堺屋太兵衛の気配を感じていたのだが、いつの間にか、姿が消えている。
（このことだな、太兵衛殿が念を押したのは……）
そこで権十郎は、すぐさま身を返して、強右衛門の背後についた。
同時に、強右衛門の足の運びが速くなり、山道が急な上りになってきた。
強右衛門は、たしかに急いでいる。
（何か、起ったのであろうか？）
考える余裕もなかった。
権十郎も、さすがに息が切れてきて、曲がりくねる山道を上って行くのが精一杯なのだ。
そのころ……。
堺屋太兵衛は、丸木橋が架かった谷川へ下り着く手前の、山の斜面の木蔭に屈み込み、息をころしていたのである。

山中だけに、夏の夜の闇も冷気を含んでいる。
低い人の声がきこえ、近寄って来た。
「見うしなうなよ」
「だがな、あまり近くへは寄れぬぞ。なに、大丈夫だ。道は、これ一つよりほかにねえ」
「む。それはそうだが……」
「それにしても、こんな抜け道があるとはおもわなかったな」
「これはな、根府川の裏関所のうしろの山にちがいないぞ。おそらく、あの三人は熱海へ行くつもりだ」
「すると、曾我の喜平治は一足先に、熱海へ抜けていたのだな」
「そうらしい。いや、それにちがいない」
「すると、あの、若い侍も、喜平治の一味なのかよ？」
「きまっているではねえか。小田原の堺屋がいっしょにくっついて来ているのを見ても、わかることだ」
山道を下って来たのは、二人の男であった。
そのうちの一人は、おとき婆の倅の寅吉が堺屋へ手紙を届けに行くのを尾行し、行先をつきとめた男なのである。
二人とも、小さな提灯を持っていた。
道は、せまい。

いわゆる〔獣道(けものみち)〕を、強右衛門が踏みならしただけのものゆえ、二人ならんでは通れぬ。

「そろそろ、近くなる。もう、口をきくなよ」

と、一人がいい、堺屋太兵衛が隠れている杉林の前を下って行った。

すぐに、別の一人が下って来た。

そやつが、太兵衛の前を通り過ぎた一瞬、身を起した堺屋太兵衛が、物もいわずに男へ躍りかかった。

男の手から、提灯が落ちた。

早くも太兵衛の左腕が、男の頸(くび)から喉(のど)へ巻きついていた。

「う、うう……」

男がおどろき、必死に踠(もが)くのを、太兵衛はさらに引きつけておいてから、右腕を振りあげた。

その右手に短刀が光ったかとおもうと、太兵衛の躰が颯(さっ)と飛びはなれた。

「ぎゃあっ……」

男の悲鳴があがったのは、このときである。

男が頸部(けいぶ)の急所を深ぶかとはね切られ、転倒しかける、その躰を突き飛ばすようにして、堺屋太兵衛が山道を駈け下った。

先に下っていた別の男が、悲鳴を聞いて、

「や……ど、どうした?」

振り向いて、提灯をかかげるようにした。

そこへ、太兵衛が突進して来たのだ。

おそらく、男は太兵衛を人とは見なかったろう。

物(もの)の怪(け)か、または熊かと驚愕(きょうがく)し、目も眩(くら)み、手足もすくみあがってしまったにちがいない。

太兵衛の短刀が闇を切り裂き、男の喉笛を切りはらった。

「うわ……」

のめり倒れる男を見向きもせず、堺屋太兵衛は短刀をぬぐい、ふところの鞘(さや)へおさめた。

闇の中で襲いかかって、ただの一太刀で、瞬時に、二人の男の息の根をとめてしまった太兵衛を権十郎が見たら何とおもうであろうか。

たとえば徳山権十郎が、太兵衛と同様の短刀で、二人の男を山道に襲うとしても、失敗することはあるまい。

だが、太兵衛ほどのあざやかさで二人を始末することができたろうか……。

二人の男の死体を始末してから、太兵衛は丸木橋をわたって行った。

太兵衛は、息ひとつ乱れていなかった。

おだやかで、やさしげな、どう見ても商家のあるじにしかおもえぬ堺屋太兵衛の、このような凄(すさ)まじい一面は、女房のおみねでさえ、見たことも聞いたこともなかった。

太兵衛が、強右衛門と権十郎に追いついたのは、山道の上りが頂点に達し、そこから、ふたたび、下りになったあたりで、

「や……太兵衛殿か」

気づいた権十郎が振り向いたのへ、
「ちょと遅れましてござります」
太兵衛が明るい声をあげ、
「さあ、さあ、もう大丈夫。根府川の関所は越えましてござります」
と、いった。

十三

三人は、朝の日が高く昇ってから、熱海へ入った。
三方を山にかこまれ、東面に相模湾をのぞむ熱海の町は、湯けむりに包まれている。
海は銀色に光り、鬱蒼（うっそう）とした木立に蟬（せみ）が鳴きこめていた。
小田原へ通じている道へ出た三人は、高札場（こうさつば）の前をすぎ、本町と下町の境の町すじへ出た。
茅（かや）ぶき屋根か板屋根の家々が坂道の両側に立ちならび、石畳の道へも湯けむりがながれている。
それと知らずに徳山権十郎が、
「堺屋殿、この、けむりは何であろう?」
「湯けむりでござりますよ」
「湯けむり……これほどに、湯が湧いて出るのか?」
「はい、海の底からだと申しますが……」

「ふうむ……まことに、ふしぎなものだ……」
〔さかな町〕を出外れたところに、川がながれてい、
「この川は、糸川と申します」
と、堺屋太兵衛が教えてくれた。
太兵衛は先に立ち、糸川に架かった橋をわたった。
正面に、周囲に濠（ほり）をめぐらした石垣積みの立派な土塀（どべい）が見え、木の間ごしに御殿造りの屋根ものぞまれた。
これが、将軍家の別荘ということになる。
熱海の人びとが「御殿」とよんでいる、この別荘が建ったのは三代将軍のころだというが、これまでに一度も、将軍は熱海へあらわれぬという。権十郎には何も彼もめずらしかった。
「へい、あのままでは、立ち腐れになってしまいますでよ」
と、強右衛門が太兵衛にいった。
御殿の濠に沿った道を、三人は海の方へ向った。
赤銅色（しゃくどういろ）に日灼（ひや）けした男や女たちが、魚が入った籠やら、網などを担いで、道を歩んでいる。
男たちは、ほとんど下帯一つだし、女たちは腰の物に肌着だけの姿で、その肌着の胸もとから汗に濡れ光った乳房を半ば露呈させながら、平気で歩いているのだ。
権十郎は、目をまるくし、顔が赤らむのをどうすることもできぬ。
それを見て、堺屋太兵衛と強右衛門が笑顔になった。権十郎の、いかにも若者らしい初々

しさを好もしくおもったのであろう。

「山口さま。あれでございます」

と、太兵衛が指をあげた。

道の左手前方に、松林を背にした板屋根の二階建の家が見えた。

海は日射しに光り、夏の熱海の町は、意外に暑い。

「あれが、岩松の宿でございます」

「ほう……」

岩松という漁師がやっている、小さな宿屋だという。

別に屋号がついているわけでもなく、土地では〔岩松の宿〕で通っているのだそうな。

七湯とよばれ、内湯をもっている宿屋の外に、近年は〔岩松の宿〕のような小さな宿屋が増えてきているらしい。

したがって、こうした宿屋には〔内湯〕がない。

そこで泊り客は、〔大湯〕とか〔清左衛門の湯〕だとかへ、入浴しに行くことになる。

「ごめんなさいよ」

堺屋太兵衛が声をかけて〔岩松の宿〕の門口へ入って行くと、

「あれあれ、これはまあ、堺屋の旦那ではございませぬかよ」

四十がらみの肥えた女が飛び出して来て、

「まあまあ、ずいぶんと、お久しぶりで」

「岩松も達者かね?」

「へえへえ、みんな、元気にしておりますよ」

この女が、岩松の女房であった。

「今日はな、お客人を御案内して来たのじゃ。このお客人は、喜平治どのの大事なお客人ゆえ、そのつもりでな」

「はい、はい」

「岩松は?」

「海へ出ております」

権十郎は、宿の門口の百日紅が鮮紅色の花を枝に群がり咲かせているのを、ぼんやりとながめている。

「山口さま。もし、山口さま……」

「おお……」

「さ、こちらへ」

「よいのか」

「さあさあ、中へお入り下さいまして、ゆっくりとおやすみを……」

強右衛門は、のみこみ顔に宿の裏手へまわって行った。

権十郎と太兵衛が案内されたのは、二階の二間つづきの部屋であった。二階には、この二間きりである。

開けはなった窓から、海がよく見えた。

海には、漁の舟が出ている。

この宿のあるじも、その中の舟に乗っているのであろう。

太兵衛が、しきりに入湯をすすめたが、権十郎は、

「いや、後にいたそう」

すぐに裏手へ下り、下帯一つになった。

大きな石井戸の端で、裸体の強右衛門が水をかぶっていた。

「これ、私にも水をかけてくれぬか」

「ようござりますとも」

強右衛門は汲みあげた水を権十郎へ浴びせかけつつ、

「うは、ははは……」

さも、愉快げに笑い出した。

権十郎も、何やら知らず笑いがこみあげてきて、

「ああ、よいこころもちだ」

「あは、はは……」

岩松の女房が、二人の着替えを持って来てくれた。

汗をながし、さっぱりとして二階へもどると、堺屋太兵衛は、まだ帯も解かぬまま、何やら手紙のようなものをしたためている。

「太兵衛殿……」

いいさして、権十郎が口を噤んだ。

いままで気づかなかったが、太兵衛の襟もとに、血が附着しているのを見たからだ。

目をあげた太兵衛が、自分の襟もとを見つめている権十郎の視線に気づいた。

気づいて、どうしたかというと、太兵衛は気味がわるいほど落ちつきはらっている。

二人の目と目が合った。

太兵衛の目は、おだやかな笑みをたたえている。

「その血は……」

と、いいかけた権十郎だが、声にはならなかった。

権十郎は目を逸らせた。

堺屋太兵衛は何事もなかったかのように、ふたたび筆を手にしながら、

「山口さま……この手紙は、京に住む私の知人へあてたものでござります。大坂へまいられます、その前に、先ず京へおとどまりなされて、この知人をおたずねなさるがよいと存じまする」

「その知人と申されるのは、喜平治殿も存じよりのお人か？」

「さて……喜平治どのも知っておられるやも知れませぬが、私とは、ごく親しい間柄の、まことに、たよりになる人でござります」

「さようか……」

「大坂へまいられて、いかがなされますか？」

「先ず、人をたずねます」
「そのお方の居所は？」
「さ、それが……よくは、わからぬ」

十四

佐和口忠蔵の後を追って、大坂へおもむこうとしている徳山権十郎なのだが、そこはやはり、武家育ちの若者だけに、無謀なところがある。
いつであったか、
「わしも、あまり身寄りのない男だが、大坂に、実の妹がひとりいる」
と、洩らした、佐和口の言葉のみがたよりなのだ。
いま一つ、
「大坂には、私の両親の墓もござる」
と、聞いたことも、権十郎は忘れていない。
だが、それだけで、
（果して、佐和口殿を見つけることができるだろうか？）
いまの権十郎は、危惧をおぼえている。
江戸を出てから、まだ十日も経てはいなかったが、この数日のうちに、初旅へ出た権十郎が体験したことは、これまでの数年にまさるものだといってよい。

（この世の中というものには、おれの知らぬことが、たくさんにある……）
知らぬといえば、知らぬことだらけではないか。
道中で、喜平治父娘の危難を救ったことにより、権十郎は、おもいもかけぬ人びとと知り合い、異様な体験をしながら、豆州・熱海まで来たことになる。
（世の中は、ひろい……）
そのひろさを、まざまざと見たおもいがしている。
これから大坂へ行き、佐和口忠蔵の名前と風貌をたよりに、大坂の町すじを探して歩こうという計画だけでは、
（どうにもならぬ……）
おもいがしてきたのだ。
「実は……」
権十郎は素直に、堺屋太兵衛へ、すべてを語った。
「なるほど……ふむ、それだけにては、ちとおぼつかぬようにおもえますな」
太兵衛は、むずかしい顔つきになったが、
「なれど山口さま。世間はひろいようで、また、狭いものでもござりますよ」
「さようか、な……」
「ともあれ、佐和口忠蔵さまというお方は、それほどの腕前をもっておいでなのでござりますから、大坂の剣術の道場を、先ず当ってみてはいかがなものでござりましょう」

「ほう……なるほど」
世なれた大人は、うまいことを考えるものだと、十八歳の権十郎は感心してしまった。
つまり、それほどに、このときの権十郎は、幼なかったのである。
「ふむ、ふむ。そのようなわけでござりましたか」
堺屋太兵衛は、しきりにうなずいていたが、
「なれば山口さま。これはやはり、京へお立ち寄りなさるがようござります。そして、私が書きしたためまする手紙の主（ぬし）を、お訪ねなされませ。きっと、お役に立つことと存じまする」
「さようか……」
どこまでも権十郎は、素直に、
「では、そうさせていただこう」
「はい、はい」
太兵衛はうれしげに、また筆を把って手紙をしたためはじめた。
後になっておもえば、喜平治や伊之蔵、それに茶店のおとき婆や堺屋太兵衛が、われ知らず、権十郎を親身に世話することになってしまったのは、権十郎の素直さに感じ入ったからであろう。
権十郎の目にも、まさしく、
（怪しげな人びと……）
と、映ったにちがいないのに、いささかも警戒の色を見せず、何事にも身をまかせきって

いる姿が、彼らの感動をよんだにちがいない。
「堺屋殿……」
「はい？」
「では、喜平治殿がわざわざしたためてくれた、この大坂の、加賀屋孫助殿へあてた書状は、いかがしたらよい？」
「それはそれで、お持ちなさるがようござります。私は加賀屋さんにお目にかかったことはありませぬが、喜平治どのより、はなしはよう聞いておりまする。加賀屋さんも、きっとたよりになるお人だと存じますゆえ、大坂へお出向きになりましたなら、ぜひ、おたずねなさるがようござります」
「さようか。では先ず、京へ……」
「はい。はい」
「そのことを、喜平治殿へもおつたえ下さるか？」
「申すまでもござりませぬ。御安心下さいますように」
「よし、わかった。ともあれ、いろいろと面倒をかけて相すまぬ」
姿勢を正し、頭を下げた権十郎へ、
「何をおっしゃいますことか。あなたさまが喜平治殿の一命をおたすけ下さらなかったときは、いまごろ、私どもの身も、どうなっていたことか……」
おもわずいいさした堺屋太兵衛が、急に口を噤み、また、筆を走らせはじめた。

「さ、これを……」

書き終えた手紙を、太兵衛が権十郎へ差し出した。

「かたじけない」

受け取って、表書を見ると、

〔柳馬場・誓願寺通　尾張屋源右衛門殿〕

と、あり、裏には〔堺屋太兵衛〕と書いてある。

「東海道を京へお入りになって、先ず三条大橋を渡られましてな、そのあたりで尾張屋源右衛門と、お尋ねなされば、すぐに、わかりまする」

「さようか。わかりました」

権十郎は、余計なことをすこしも尋かぬ。

日が暮れた。

あらためて権十郎は、太兵衛と強右衛門の案内で、海辺にもっとも近い〔河原の湯〕へおもむいた。

十坪もある、ひろい浴場であった。

大きな浴槽から温泉があふれ出ている。

二十人ほど入っている丸裸の男も女も子供も、赤銅色に日灼けして、大声で語り合ったり、笑い合ったりしている態は、権十郎から見ると、まさに壮観であった。

いずれも漁師と、その家族なのであろう。

男たちは、いずれも引きしまった、たくましい躰つきだが、女たちも負けてはいない。

ふとやかな腕をあげて髪を洗う女たちの腋の黒ぐろとしたものを隠そうともせぬのに、権十郎は目をみはった。

女たちは股間の茂みまでも隠さぬ。

あくまでもほがらかに、たくましい腰をゆすり、豊満な乳房をふるわせて躰を洗いながら笑いさざめいている。

彼らの言葉の、ほとんどが権十郎にはわからなかった。

〔岩松の宿〕へ帰って来てから、堺屋太兵衛が、

「さぞ、おどろかれましたでしょうな」

「さよう。おどろいた……」

「は、はは……」

太兵衛が強右衛門と顔を見合せて笑い出した。

権十郎も笑った。

そこへ、この宿のあるじで、漁師でもある岩松と女房が夕餉の仕度をしてあらわれた。

肥えて大きな女房にくらべて、岩松は小柄な四十男で、猿のような顔つきであった。

これまでに見たこともない料理が、権十郎の前へならべられた。

何やら知らぬが、魚の身を細かく切り叩いたものを口に入れると、味噌の香りがして、その魚の歯ごたえもまた、権十郎がこれまでに味わったことのないものなのだ。

「ふうむ……」
おもわず、権十郎が、
「うまい」
と、いった。
「それは何よりでござります」
と、太兵衛。
「堺屋殿。この魚は何と申します?」
「鯵と申しまする」

十五

この夜、徳山権十郎は死んだように眠った。
若いし、躰は鍛えてあるしで、これまで、さほど、心身にこたえたようにもおもわなかったが、何といっても、わずかな間に初めての体験を息つく間もなくしてきたのだから、疲れが一度に出たのであろう。
深い眠りから覚める前に、権十郎は久しぶりで夢を見た。
用人の柴田宗兵衛か、乳母の千の夢だったかというと、そうではない。
なんと、父・徳山重俊が夢にあらわれた。
何処まで行っても果てしないほどの広漠たる原野を、権十郎がひとり歩んで行く。

その後から、
「待ってくれ。ま、待ってくれい……」
泣くように叫びつつ、痩せさらばえた双手をあげ、追って来る老人がいる。
それが、徳山重俊なのだ。
権十郎は振り返りもせずに歩む。歩みつづける。
父の声が遠去かり、ついに消えた。
権十郎は冷笑を浮かべ、尚も原野の中をすすむ。
すると、また、
「おおい。権十郎、待て。待ってくれい、たのむ。たのむ……」
徳山重俊の声が近寄って来るではないか。
おもわず振り向いて見て、権十郎が愕然となった。
たくましい躰つきの武士が、父を背負って追いかけて来る。
たちまちのうちに、その武士が接近して来た。
父を背負っているのは、あの堀部安兵衛武庸なのである。
安兵衛は、権十郎を睨むように見据え、追いせまって来る。
「待て。待ってくれい」
父は病みおとろえた老顔を泪で濡らし、
「もどってくれい、権十郎。帰って来てくれい」

泣声で呼びかけて来る。

　そのとき、堀部安兵衛は徳山重俊を背中から下し、無言で、権十郎の前へ押しやり、くるりと身を返し、野の道を彼方へ去って行く。

　安兵衛の姿は、たちまちに遠去かり、豆粒のようになってしまった。

「せ、せがれよ……」

　徳山重俊が権十郎へ、すがりつこうとした。

　権十郎が身を躱すと、重俊はよろめき、草の中へ倒れた。

　権十郎は存分に、父へ嘲笑を浴びせておいて、父を置き去りにしたまま、野面を歩みはじめる。

「待ってくれい。せがれよ、屋敷へもどってくれ。たのむ、たのむ……」

　父の泣声が遠去かり、また、聞こえなくなってしまった。

　脇目もふらずに、権十郎は歩む。歩みつづける。

　しばらくすると、日が落ちかかり、夕焼けの色に権十郎の顔、躰、手足までが赤く染まってきた。その赤さが徒の赤さではない。まるで血の池へ漬かってしまったように真赤なのだ。

「おおい……おおい」

　また、父の声が聞こえた。

　たちまちに追いついて来る。

　たまりかねて振り向いた権十郎の驚愕は、堀部安兵衛を見たときよりも激しかった。

　今度は堀内源左衛門が、父を背負って追いかけて来たのだ。

　源左衛門は安兵衛のように、権十郎を睨めつけてはいない。

　生きて在ったころのような、ものしずかな光りを宿した双眸が権十郎をひたと見つめている。

　権十郎は、立ちすくんだ。

　堀内源左衛門は徳山重俊を背中から下し、これを軽がると抱きかかえ、いきなり、権十郎に背負わせてしまった。

「せ、せがれ……」

　重俊は必死に、権十郎の頸へ両腕をまわした。

　茫然としている権十郎を見返りもせずに、堀内源左衛門が一陣の風のごとく疾り去った。

「たのむ。か、帰ってくれい」

　重俊の腕に、ちからが加わる。

　そして、おどろいたことには、骨と皮ばかりのような父の老体が、しだいに重味を加えてきて、ついには磐石のように権十郎を押えつけてくる。

　ついに、権十郎は父を背負ったまま、草の中へ押し潰されてしまった。

「う、うう……むうん……」

　苦しげな自分の唸り声に、権十郎は目ざめた。

　満身に、脂汗をかいている。

（ゆ、夢か……）

それにしても、父の夢などは見たくもなかったと、権十郎は忌いましげに舌打ちをした。

そのかわりに、

（堀内先生と安兵衛殿が夢に出てまいられた……）

それがうれしく、なつかしかった。

（だが、何という、ふしぎな夢なのだろう。あのような父上を見たのは、この夢の中のみであった……）

朝の日は、すでに海面をはなれ、高く昇っている。

「お目ざめでございますか？」

声をかけて、堺屋太兵衛があらわれた。

「あ……すっかり、寝すごしてしまった……」

「むりはござりませぬ」

「いま、何刻であろうか……？」

「かれこれ、四ツ（午前十時）になりましょう」

「それはいかぬ。これより、三島へ出立せねば……」

「いっそ、いま一夜、ここへお泊りなされませ」

「かまわぬのか？」

「山口さま。私は急ぎの用あって、これより小田原へ引き返さねばなりませぬ」

「え……何ぞ、変ったことでも？」

「いえいえ、御案じなされますな」

太兵衛の笑顔は、つくったものではなかった。

「強右衛門も、今朝早く発ちましてござります」

「さようか。あらためて、礼を申す所存でいたに……」

「何の何の……それで、三島までは、この家のあるじの岩松が御案内いたしまする。決して御心配はいりませぬ」

「何から何まで、世話に相なった。かたじけない」

江戸にいたころの権十郎に、これだけの挨拶ができたろうか。いや、したこともなかったろう。しかも、身分の下の者に対してである。

いまの権十郎には、無意識のうちに、すらすらと、これまで使ったこともない言葉が出てくるのであった。

やがて……。

十六

権十郎は、小田原道の高札場まで、堺屋太兵衛を見送って行った。

高札場の前まで来ると、

「もう、これで結構でござります」

堺屋太兵衛が菅笠をぬぎ、頭を下げた。

「いや、いますこし、お見送りする」

「同じことでござります。ここで、お別れを……」

仕方もなく、権十郎はうなずいた。

しかし、何となく、

（別れがたい……）

おもいがする。

喜平治・お玉の父娘や、伊之蔵。また、この堺屋太兵衛にしても、わずか三日ほど行を共にしたというだけで、

（これほどまで、親しみをおぼえるものなのか……）

であった。

「堺屋殿は、これより、先夜の山道を通って小田原へお帰りなさるのか？」

太兵衛が、かぶりを振って見せた。

「では、根府川の関所を通って行かれる……？」

「私ひとりでござりますから、大丈夫でござります」

どうやら太兵衛は、自分の道中切手を所持しているらしい。

おもうに太兵衛は、年のうち何度か、小田原と熱海を往復しているものと看てよい。

となれば、小田原城下に針屋の店を構える主人としての道中切手を受けているにちがいない。それなのに、裏山越えをしたのは、ひとえに徳山権十郎を案内するためだったのだ。

「いろいろと面倒をかけました。あらためて御礼を申す」

「何の、何の……」

手を振った堺屋太兵衛が、何をおもったのか権十郎へ顔を寄せてきて、

「かように申しては、まことにもって、不躾でござりますが……」

「何でしょう？」

「私は、あなたさまが好きになりましてござります」

と、太兵衛が上眼づかいに権十郎を見やって微笑み、そっと権十郎の手をにぎりしめてきた。

何がなしに、権十郎の胸がさわいだ。

中年男の太兵衛の、色白で端正な顔へ血がのぼって紅を掃いたようになり、両眼が妖しい光りをたたえていたからだ。

強いていうなら、おもいもかけず、堺屋太兵衛が、

（急に、女になったような……）

感じをうけた。

それが何故とも知らず、権十郎は、おどろきもし、狼狽もした。

太兵衛が、すっと手を引き、

「これはこれは、御無礼を……」

深く頭をたれて、

「なれど、このおもいは私のみではございますまい。曾我の喜平治どのにせよ、あの伊之蔵にせよ……猟師の強右衛門にせよ、いずれも、あなたさまのお人柄を、好もしゅうおもうているにちがいございませぬ」

「いや、そのような……私は、そのような男ではない」

「いえ、そうなのでございます」

きっぱりと、太兵衛がいう。

「さようかなあ……自分ではわからぬことよ」

「はい、はい。何事も、おのれのことはおのれでわからぬもの。それが人という生きものの性なのでございましょうな」

「おもしろいことを申される」

「なればこそ、人は他人のいうことに耳をかたむけねばならぬのでございます。他人の目に映る我身を忘れてはなりますまい」

「はあ……」

針屋のあるじの言葉ともおもわれぬことを太兵衛がいい出したので、権十郎は目をみはった。

「あなたさまは、他人の申すことを、まことに、素直に、お聞きいれ下さいます。これは、あなたさまの御人徳と申すものでございますよ」

権十郎は、はずかしいおもいがして顔を伏せた。

そうだとは、とてもいいきれない。江戸にいたころの自分の、子供のころから、つい先頃までの所業を振り返ってみれば、当然であったろう。

（すると、いまのおれは、江戸にいたころのおれと、まったくちがった人間になっているのか……？）

そうおもうより仕方もないではないか。

「これより先、あなたさまへ、さまざまな人びとが近づいてまいりましょう。男も、女ごも……」

と、今度は優しげな眼の色になった太兵衛が、弟にでもいいきかせるような口調で、

「お気をつけなされませ。あなたさまの御人柄が悪い奴どもに好まれてしもうては、まことにもって大変なことに相なりまする」

という太兵衛の、目にも声にも、なまめいたものがすこしも感じられなくなってきていた。

ふしぎな男ではある。

「これより先、よほどに何ぞ、お困りのことでも起きました折は、小田原へ私をお訪ね下さいますよう。いささかなりと、おちからになれるやも知れませぬ」

「かたじけない」

素直に、こころから、権十郎は頭を下げた。

「これは喜平治どのから、手紙にて念を入れられましたことでございますが……」

「何であろう？」

「あなたさまは、江戸から、この豆州・熱海までの道中、喜平治どのにも伊之蔵にも、茶店の婆にも私にも、だれとも知り合わぬことにして下されますよう」

つまり、自分たちと交渉があったことを他に洩らしてくれるな、と、堺屋太兵衛は念を押しているのである。

「それは何故か？」

などという、余計なことを尋く権十郎ではない。

「心得た」

と、ただ一言。強くうなずいて見せたのみだ。

まことの人と人との誓約は、これでよいのである。

「では、これにて……」

「はい。気をつけて行かれよ」

「あなたさまも……」

堺屋太兵衛は、道が木立へ隠れる曲り角で権十郎へ振り向き、高く菅笠をあげて打ち振った。

権十郎も手をあげ、何度も打ち振った。

その夜……。

明朝の出立をひかえて、徳山権十郎は、なかなかに寝つかれなかった。

父のことはおもい浮かばなかったけれども、柴田宗兵衛・千の父娘や、若党の小沼治作や、佐和口忠蔵の顔が、つぎつぎに脳裡に浮かんできた。

そして、喜平治父娘から堺屋太兵衛に至る人びとの奇怪な言動を、いまさらに振り返ってみると、

（あの人びとは、どのような人びとなのであろうか……？）

何やら、

（世を憚って暮している……）

そのことだけは、わかったような気がする。

だが何故、世を憚っているのかというと、若い権十郎には見当もつかなくなってくるのだ。

海岸へ寄せてくる波の音が耳について、はなれない。

ついに、権十郎は空が白むまで眠れなかった。

京の春

一

権十郎が、本所・石原町の徳山屋敷を出奔してから、約八ヶ月が過ぎ去った。

すなわち、宝永五年（一七〇八年）の春になった。

桜花の蕾も脹らみはじめた或日の夕暮れのことであったが……。

日本橋本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方に、異変が起った。

この年、八十一歳になった老主人の又兵衛が、店から奥の居間へもどろうと廊下を歩んでいて、突然、胸を押え、崩れるように倒れ伏した。

すぐさま、寝間へ運び込み、かかりつけの医者が駈けつけて来た。

医者は、養子の又太郎夫婦を別間へよんで、

「お知らせなさるところがあらば、すぐさま……」

「それほどに、いけませぬのか？」

「奇跡が生ずることも、なしとは申せぬが、何分、お年齢がお年齢ゆえな」

去年の夏に、徳山権十郎が江戸を出奔して以来、駿河屋又兵衛の心痛は徒ならぬものがあった。

徳山家の若党・小沼治作は、すぐさま東海道を上り、大坂・京都と、権十郎の行方を探しまわったが、その行方は杳として知れない。

小沼治作が、用人・柴田宗兵衛へ、

「いささか、存じよりのこともござります」

と、いい、上方へ向けて権十郎の後を追ったのは、

（若様は、佐和口忠蔵様の後を追われたにちがいない）

と、直感したからである。

権十郎につきそって堀内道場へ通いつめ、ついには堀内門下となっただけに、小沼治作は、

（いまの若様には、佐和口様をたよるほかに道はあるまい）

と、考えた。

小沼は、権十郎が佐和口を慕っていたことをわが目にたしかめていたし、江戸を去った佐和口忠蔵が、先ず、実の妹がいるという大坂へ向ったらしいと、これは権十郎同様に見きわめをつけたのだ。

大坂へ到着した小沼治作は、大坂市中の剣術道場を、

「それこそ、虱つぶしに……」

探しまわったが、佐和口忠蔵については、何の手がかりも得られなかった。

堀内源左衛門の剣名は、大坂にも知れわたっている。

だが、佐和口忠蔵の名を知るものは一人もいなかった。

あれほどの〔達者〕である佐和口の名が、大坂の剣術界に知れていないというのは、

（おそらく佐和口様は、お若いころに大坂を出られて以来、ほとんど、おもどりにならなかったのではあるまいか……？）

小沼は、そうおもった。

ともかくも、小沼治作が真に探しもとめているのは佐和口忠蔵ではなく、徳山権十郎なのだ。

そこで、大坂の剣術道場を一つ一つ廻るたびに、近ごろ、佐和口忠蔵の所在を尋ねにあらわれた若い侍はいなかったろうか、と、かならず問い質したが、

「そのような人は、見えませぬな」
どこの道場でも、返事は一つなのである。
同じ道場を二度、廻ったこともある。
小沼は行く先々の道場へ、この後、佐和口なり権十郎なりがあらわれたときは、自分が泊っている旅籠へ、
「お知らせ下されますよう」
たのんでもおいた。
（これは、おかしい……？）
佐和口が大坂へあらわれぬにしても、権十郎は自分と同じように、市中の道場を探しまわったはずである。
（してみると、若様は、上方へ向けて出奔されたのではなかったのか……？）
または、上方への道中で佐和口にめぐり合ったとも考えられる。
佐和口が江戸を離れたのは、権十郎の出奔よりも半月ほど早かったはずだから、そのまま大坂へ直行したとすれば、道中では追いつけまい。
けれども、佐和口が途中で、どこかに足をとどめていたりすれば、権十郎と出合うことも考えられる。
（もしやすると、お二人とも、別の場所を目ざしておられたのではあるまいか？）
佐和口は諸国に知り人もあろうが、権十郎の場合、江戸以外に、

（知り人はおられぬ……）
はずであった。
それでも小沼治作は、冬が来るまで大坂や京都を探しまわり、ついに、どうしようもなくなって、江戸へ帰って来た。
駿河屋又兵衛の健康が、急におとろえはじめたのも、小沼の捜索が実をむすばなかったと知ってからである。
何分、大身旗本の子息が、無断で出奔したとなれば、これは罪人なのだ。
このため、うかつに、
「表向きにすることもできぬゆえ、ほとほと、困り果て申した」
柴田宗兵衛が駿河屋又兵衛へ、そう告げたときに、又兵衛の心ノ臓の発作がはじめて起きた。
そのときの発作は、まだ軽かったのだが、年が明けて二度目の発作があり、医者は、又兵衛に絶対の安静をいいわたしたが、
「わしが寝ついてしもうては、そのまま、かならず死んでしまう。わしは何としても、権十郎さまの安否を知るまで、生きていなくてはならぬ」
と、又兵衛は病床につこうとはしなかった。
そして今度の、三度目の発作が起きた。
その知らせは、すぐさま、徳山屋敷へとどけられ、柴田宗兵衛と小沼治作が駿河屋へ駈け

つけて来た。

駿河屋又兵衛とは反対に、柴田宗兵衛は一時の病苦を忘れるほど、健康を回復している。

権十郎の安否を気づかうことに変りはないのだが、

(若様が亡くなったというわけでもないのに、気落ちしてはならぬ)

宗兵衛は、みずからの心身をはげましている。

(いま、ここで、わしが倒れてしもうては一大事じゃ)

その気魄が、老いた柴田宗兵衛を支えていた。

徳山重俊は、権十郎出奔以来、幕府当局や親類たちへ向って、しきりにはたらきかけることをやめない。

表沙汰にせず、権十郎を勘当してしまえば、

「権十郎が何をしようが、知ったことではない」

のである。

そして、別に養子を迎えて徳山の跡つぎにするつもりなのだ。

いま、徳山重俊が気に入っているのは、亡き先妻・歌子の実家・溝口又十郎の次男・伊織である。

当主の溝口又十郎は、歌子の弟にあたる。その次男なのだから、歌子が生きてあれば徳山重俊にとって義理の甥ということになる。

徳山重俊は、六千石の旗本・溝口家のむすめ・歌子を妻にしたが、歌子は一人の子も生ま

ぬうちに病歿してしまい、その後、神尾守勝のむすめ・滝子を後妻にもらった。

滝子は、重俊の長男・右近を生んだが、右近が病死したので、妾腹の権十郎を、

「やむなく……」

自分の跡つぎに据えた徳山重俊なのだ。

こうしたわけで、先妻の実家の溝口家とは、疎遠になっていた重俊なのだが、権十郎出奔の後、手をまわして交わりを復活し、溝口家の次男に目をつけはじめたらしい。

二

徳山重俊は、以前に、権十郎を追い退けようとしたとき、分家している弟の徳山重一の子を、

(もらいうけよう……)

と、考えていたらしい。

けれども、分家のほうでは、ちかごろ、

「いったん、権十郎を跡つぎに定めておきながら、これを追い退けた跡を襲うては、世の聞えもわるい」

というので、ちかごろは、重俊が何かいってよこしても取り合わぬらしい。

そこで重俊は、先妻の実家へ目をつけたのである。

徳山重俊は、権十郎出奔以来、にわかに元気づいた。たとえ妾腹ではあろうとも、自分の

血を分けた息子が行方不明となったのを、密かによろこんでいるのだ。
「わが殿ながら、つくづくと呆れ果てたわい」
柴田宗兵衛は、千や養子の勝四郎にこぼしぬいた。
宗兵衛が、いま、たよりにおもっているのは、徳山重俊の後妻・滝子の実家の神尾家であった。
神尾家の、いまの当主は五郎左衛門守親だ。
守親は、滝子の甥にあたる。
五郎左衛門守親は剛直の人物で、しかも徳山重俊については、
「あの顔を見るだけにても、虫酸が走る」
と、嫌いぬいている。
そこで柴田宗兵衛は、権十郎出奔の事実や、家督のことについても、神尾守親へ正直に打ちあけ、助力を請うていた。
守親は、
「重俊殿が幕府に対し、どのように手を打ち、はたらきかけておるか、その証拠がつかめぬと、わしも手のつくしようがない」
と、いう。
ともかくも、徳山重俊の仕様は巧妙をきわめている。
家来の田村常助を使者にして、諸方へ自分の親書を届けさせているのは、つまり、それだけの自信があるからだろう。

重俊が幕府に重用され、種々の役目に就いていたころ、さまざまなかたちで、
「恩を売っておいた……」
人びとへ、はたらきかけているにちがいないのだ。
だからといって、柴田宗兵衛が、主人の親書の内容をたしかめるわけにもまいらぬ。
千も、いまは徳山家の〔老女〕になりきってしまい、奥向きのことを一手に束ねていても、主人の秘密を探り出すようなまねをしたくはないし、また、それは不可能の事といってよい。
宗兵衛も気が気ではないのだが、却って、その緊張が老体を支えている。
駿河屋又兵衛が倒れたと聞いたとき、宗兵衛は、
（今度は、いかぬ……）
と、直感した。
駈けつけてみると、又兵衛は、意識もはっきりとしており、
「柴田さま。いよいよ、いけませぬ」
自分からいい出た。
「何を申される。大丈夫……大丈夫じゃ」
「いえ、わが躰のことゆえ、よくわかっておりまする。もはや、この上は……」
「権十郎様のお顔を見ぬうちは、どうあっても死なれぬと申されたではないか」
「はい……はい」

「さ、口をきいてはなりませぬ。しずかに、おやすみなされ」
「いえ柴田さま。いまのうちに、申しあげたいことが……」
「今夜でなくてもよいではないか」
「いえ、ぜひとも……明日になると、このいのち、絶えてしまうやも知れませぬ」
「む……」
見ると、又兵衛の顔色こそ冴えていないが、低い声にもちからがこもっているし、
(もしやすると、また、持ち直してくれるのではあるまいか……)
と、柴田宗兵衛がおもったほどである。
「柴田さま、お願いが……」
「何でござる？」
「権十郎さまの行方がわかりましたとき……いえ、かならず、権十郎さまは江戸へおもどりになりましょう」
「わしも、そうおもうている」
「そのとき……そのときは、もう、徳山様御屋敷へ、むりに連れもどすようなことは、やめて下されませ」
といった駿河屋又兵衛の声は、あきらかに、孫をおもう祖父のものであった。
「何故、そのようなことを申される？」
柴田宗兵衛としては、意外な言葉を聞いたわけだ。

「権十郎様に家督をしていただかねば、御家の大事となる」
「いいえ、柴田さま、二千何百石の御家を、だれが継ごうと、かまわぬのではございませぬか……」
「いや、そうではない。わしは権十郎様を……」
「ま、お聞き下されませ。権十郎さまは、御家の跡を継ぐことを、嫌っておいでなのでございますよ。なればこそ、出奔なされたのではございませぬか」
「なれど、それは……」
「いえ、柴田さま。どうか、もう、権十郎さまの、好きにしてあげて下され」
こういった駿河屋又兵衛の両眼から、見る見るうちに泪があふれ出て来た。
このとき、病間には二人きりであった。
柴田宗兵衛は懐紙を出して、又兵衛の泪をぬぐってやった。
その宗兵衛の手が、微かにふるえている。
「かたじけのうございます」
「いや、なに……」
「柴田さま。かように申してはいかがなものかと存じますが、あなたさまも、お千さまともども、権十郎さまを手塩にかけて育てられたお方でございます。申せば、実の親のようなものではございませぬか……」
「…………」

「私も、権十郎さまの、直の祖父でございますよ」
「うむ……」
「なれば、これは祖父と父親の談合と申すものでございます。わが子を憎む徳山様なぞの知ったことではございませぬ」
と、又兵衛の声が烈しくなった。
宗兵衛は、返す言葉もなかった。
自分が、ひそかに胸の底におもっていたことを、又兵衛が臆することなく口に出してくれたのである。
夜具の下から駿河屋又兵衛の手がのびてきて、柴田宗兵衛の手をにぎりしめ、
「な、そうではございませぬか、柴田さま……」
「う、うむ……」
宗兵衛の両眼からも、熱いものがふきこぼれてきた。
「権十郎さまが、一生を困らぬだけのものは、私めが、仕度してございます。せがれ夫婦も、このことをよくわきまえておりますゆえ……権十郎さまが気楽にお暮しなされますよう、柴田さまも……」
「いや、待て」
「いえ、権十郎さまは何よりも……二千何百石の御家なぞよりも、剣術がお好きなのでございます。それが、おわかりにならぬ、あなたさまではないはずでございます」

「うむ……」
「なれば、権十郎さまを、好きな道へすすませてあげて下さりませ、お願い申しまする、柴田さま……」
いいさした駿河屋又兵衛が、両手を合せて見せ、
「このとおり……このとおりでございます」
と、声をふるわせた。
（又兵衛どのが申すことは、もっともじゃ）
柴田宗兵衛としても、反駁の余地がなかった。
これまでの、徳山重俊の権十郎へ対する所業を振り返ってみるとき、宗兵衛にしても、
（虚しい……）
おもいに、とらわれざるを得ないのだ。
ただ、徳山重俊も駿河屋又兵衛同様に心ノ臓の持病があり、年齢も七十一歳なのだから、
（余命は、いくらもない……）
といえよう。
柴田宗兵衛としては、口には出せぬことながら、この主人が一日も早くあの世へ去ってくれることを願っている。
重俊さえ死んでしまえば、徳山家は安泰なのだ。権十郎は二千二百四十石の大身旗本の当主としてはずかしからぬ〔殿様〕になると、宗兵衛は信じていた。

だが、ちかごろの徳山重俊を見ていると、当分は、あの世へ行ってくれそうにもない。

一年の後とはいわず、おそらく半年ほどの間に、重俊は権十郎の廃嫡に成功し、溝口家の次男を養子に迎えてしまうにちがいない。

（ええ、もう、これまでじゃ）

駿河屋又兵衛の切々たる言葉が、宗兵衛を感動させると同時に、

（まさに、又兵衛どののいうとおりやも知れぬ……）

にわかに宗兵衛は、全身のちからが脱け落ちてしまい、

（なるほど……又兵衛どのの遺金で、しかるべきところに道場でも構え、そこで、おもう存分、剣の道へすすまれたほうが、権十郎さまにとっては倖せであろう）

と、おもうにいたったのである。

三

駿河屋又兵衛が息を引きとったのは、翌日の午後であった。

知らせを受けた柴田宗兵衛は、すぐさま、徳山重俊の居間へおもむき、又兵衛の死を告げた。

駿河屋又兵衛は、単なる出入りの商人ではない。

徳山重俊は、侍女として屋敷へ奉公にあがっていた又兵衛のむすめに手をつけ、権十郎を生ませたのである。

「おお、さようか」

意外にも、重俊は上機嫌で、

「八十をこえての大往生である。むしろ、めでたいと申すべきか」

などと、いうのである。

権十郎を追い退け、又兵衛が亡くなってしまえば、いまいましい妾腹の子と縁がすっかり切れてしまう。

それが、徳山重俊を上機嫌にさせているのかとおもうと、宗兵衛は憤懣にたえなかった。

だが、凝とこらえて、

「いかが、取りはからいましょうや？」

「うむ。そのほうにまかせよう。ねんごろに弔問をしてつかわせ」

「はい」

渋面のまま、柴田宗兵衛は自分の長屋へ引き下って来て、弔問の仕度に取りかかった。

そこへ、宗兵衛を訪ねて来たものがある。

表門から、

「神尾様御用人・福田平太夫様よりの御使いが見えましてござります」

と、つたえてきた。

「何……」

宗兵衛は、はっとなった。

神尾守親の用人・福田平太夫と宗兵衛とは、かねて昵懇の間柄である。

その福田用人が、手紙をさしむけたのではなしに、使いの者をよこし、口頭で用向きをつたえようというのは、

(徒ならぬこと……)

と、看てよい。

「よし。わしがまいる」

宗兵衛は、すぐに表門へ向った。

門内の腰掛けに、神尾家の家来・金子利平が待っていた。

金子は、福田用人の信頼が厚い中年の侍であった。

「おお、金子殿か……」

「わざわざ、恐れ入りましてございます」

近寄って来た金子利平が、声を低め、

「御用人様が、外で、お待ちでございます」

いよいよ、徒事ではない。

福田平太夫が、両国橋・東詰の蕎麦屋〔原治〕で、宗兵衛を待っているというのだ。

「何事であろうか?」

「さて、私は何も存じませぬが……」

「よし。すぐさままいると、福田殿へおつたえ下され」

「心得まいた」

金子が立ち去るのを見送った柴田宗兵衛は、長屋へ走りもどり、養子の勝四郎へ、

「急な用事ができて、駿河屋へまいるのが遅くなるやも知れぬ。取りあえず、おぬしがわしの代りにまいってくれい」

「承知いたしました」

「小沼治作を連れてまいれ、よいか」

「父上。いずこへまいられます?」

「ま、よい。それよりも駿河屋をたのむぞ」

大小の刀を腰にするや、宗兵衛は、あたふたと長屋を出た。

(いったい、何のはなしであろうか……?)

おそらく、徳山重俊の、幕府への運動が功を奏し、権十郎廃嫡の事が決まって、それが神尾守親の耳へ入ったのでもあろうか。

昨夜は、駿河屋又兵衛と共に、すべてをあきらめたつもりの柴田宗兵衛だが、いざとなると、やはり無念さ口惜しさが胸にこみあげてきて、歯がみをしながら表門を出た。

〔原治〕は、亡き堀部安兵衛にとっても、おもい出のふかい蕎麦屋であるが、そうしたことを、むろん宗兵衛が知るよしもない。

福田平太夫は、六年前に、堀部安兵衛が権十郎へ蕎麦をふるまった奥座敷で、宗兵衛を待っていた。

徳山屋敷から〔原治〕までは、わずかな距離だ。宗兵衛は大川(隅田川)沿いの道を急ぎ

に急ぐ。

　ちょうど、そのころ……。

　徳山重俊は、裏門から帰邸した家来・田村常助から何やら報告を受け、いよいよ上機嫌となり、

「酒の仕度をいたせ」

　と、いい出した。

　久しぶりのことではある。

　心ノ臓の発作があって以来、重俊は用心深くなり、めったなことでは酒盃を手にせぬ。

「お躰に、さわりましては……」

　と、老女の千が念を入れるや、

「かまわぬ。口をつけるだけじゃ」

「は……」

「早くいたさぬか」

「かしこまりましてござりまする」

　酒をのんで、また発作が起きて、重俊が死んでしまえば、この上なしとおもっている千であるから、あえてさからわぬ。

　ただ、自分の責任にならねばよいのである。

　若い侍女二人に酒の仕度を運ばせ、自分もつきそって、千は重俊の居間へもどった。

　ところがどうだ。

　盃を手にして、侍女の酌を受けようとした瞬間に、

「う……」

　徳山重俊が盃を取り落し、胸を押えて苦痛の叫びをあげたではないか。

　久しぶりに、発作が起ったのである。

　柴田宗兵衛が〔原治〕へ入って行ったのも、そのころであったろう。

　奥座敷へあらわれた宗兵衛を迎えて、福田平太夫が口へ運びかけた盃を置き、「おお、宗兵衛殿」と、立ちあがった。

四

「平太夫殿。何か……」

「ま、ま、そこへ……さ、そこへ、おすわりなされい」

　福田平太夫は、いささか昂奮の態であったが、その目が、あきらかに笑っている。

（悪い知らせではないような……？）

　と、柴田宗兵衛は直感した。

「およろこびなされ、宗兵衛殿……」

「え……？」

「見つかりまいたぞ」

「何がで、ござる？」
「権十郎様を、な……」
おもわず腰を浮かせた宗兵衛が、
「ま、まことでござるか？　いつ、何処にて？」
「さよう。かれこれ一月ほど前になろうか、その男は、権十郎様に、京で出合うたそうな」
「その男とは？」
「ほれ、日野屋の主人でござるよ」
日野屋は、上野の不忍池に近い、池の端仲町に暖簾をかかげている小間物屋である。
当主の文吉は、当年五十二歳になるが、二十年ほど前に京都から江戸へ出て来て、店舗を構えた。
京都には、日野屋の本店があり、このほうは文吉の兄・文右衛門が当主になっている。
小間物といえば、こまごまとした日用品やら、婦人の化粧品、化粧道具、装飾品などをあつかうわけだが、日野屋は単なる小間物屋ではない。
江戸では手に入れることができぬ高級玩具や雛人形などもあつかっているし、その他の品物も別あつらえで京都へ注文する。それもこれも兄の店が京都にあるからのことで、文吉が江戸に支店を出すについては、本店が出入りをしている諸大名の京都屋敷からの添状もあったし、たちまちに諸家へ出入りをゆるされるようになり、つい先頃には、江戸城への出入りもかなうようになったという。

日野屋が徳山屋敷へ出入りをするようになったのは、江戸へ出て間もなくのことで、当時は徳山重俊の後妻・滝子も存命であった。
滝子が病歿したのちは、贅沢な婦人向けの品物を買い入れることもなくなったけれども、徳山家が必要とする小間物は、依然、日野屋文吉が納めているのである。
年に二度ほどは文吉も徳山屋敷へ挨拶にあらわれたし、権十郎の顔も数度、見ておぼえている。
ところで、日野屋文吉は、徳山家の引き合せで、親類の神尾家へも出入りをしている。
「昨日、日野屋があらわれ、それがしのところへ挨拶にまいって、先ごろ、京へおもむいた折、権十郎様を見かけたと申すのでござる」
「すりゃ、まことで？」
「まことじゃ」
年に一度は、京都の本店へ仕入れの打ち合せなどに出かける日野屋文吉なのである。
日野屋は、権十郎出奔のことをまったく知らぬ。
ために、三条大橋の西詰で権十郎を見かけたとき、
（はて……徳山様の若様が、何で京におられるのか？）
人ちがいではないかとおもったが、まさに徳山権十郎であった。
（しばらく見ぬうちに、まあ、何と御立派におなりあそばしたものじゃ）
と、日野屋文吉は、橋のたもとから賀茂川のながれをながめている権十郎の傍へ行き、

「もしや、徳山様の若様ではございませぬか?」
声をかけると、振り向いた権十郎が、にっこりと笑って、
「おお、日野屋ではないか……」
すぐさま、わかってくれたものだから、文吉はうれしくなってしまった。この前に、文吉が権十郎と徳山屋敷・裏門の内で出合ったのは三年も前のことだったからである。
「さようでございまする。よう、お忘れもなく……」
「京へ、何の用事じゃ?」
「はい。兄の店へ年に一度はまいりますので」
「さようか」
「若様は、京へ御見物においであそばしたのでございますか?」
すると、権十郎が、あわてもせずに、
「いかにも」
と、こたえたので、日野屋文吉は少しも疑うことなく、
「なれば私めが、いろいろと、御案内をいたしましょう」
「いや、かもうてくれるな。縁類の屋敷に滞留しているのでな……」
「さようでございますか。その御屋敷は、どちらでございます?」
「いや、かまうな。かまうな。また、江戸で会おう」
明るく笑いながら打ちうなずき、権十郎は日野屋からはなれ、遠去(とおざ)かって行った。

日野屋文吉にしても、権十郎と、これだけの会話をかわしたのは、そのときがはじめてのことだし、あまり立ち入ってもいけないとおもい直し、後を追わなかった。
それで江戸へ帰り、神尾家からたのまれていた品物を届けに来て、福田平太夫の用部屋へおもむき、挨拶をしたついでに、
「京で、徳山様の若様に、お目にかかりましてございます」
と、いったものだから、平太夫がびっくりした。
しかし、日野屋は、権十郎の居所をつきとめたわけではない。
福田平太夫も、権十郎出奔の事を日野屋の耳へ入れてはならぬと考え、つとめて平静に聞き取ったのである。
「日野屋方へおもむかれて、主人の口から聞き出されてもよいが、おそらく、その上のことはわかるまいと存ずる」
福田平太夫は、そういって、
「なれど宗兵衛殿。権十郎様が京におわすことがわかったのみにても、吉報と申せよう、いかが」
「まさに……」
柴田宗兵衛の両眼が生き生きとして、
「すぐさま、京へ、小沼治作を走らせましょう。それがしが駈けつけたきところなれど、いまは、殿から目がはなせませぬ」

「御苦労に存ずる。いや、お察しいたす」
「平太夫殿。御礼は、いずれあらためてということに……」
「おお、おかまいなさるな。すぐさま、手配をなさるがよろしゅうござる」
「かたじけない」
　と、柴田宗兵衛が〔原治〕から外へ飛び出した、そのときに、小沼治作が駈けつけて来たのである。
　宗兵衛は屋敷を出るとき、小沼だけに行先を告げておいたのだ。
「ご、御用人……」
「小沼。いかがしたぞ」
　小沼の顔は朱をそそいだように赤くなり、両眼が爛々と光っている。
「何……」
「今度ばかりは、到底、おぼつかぬのではないかとおもわれます」
「殿様が、お倒れになりましてございます」
　そういった小沼治作の声が勢(はず)みきっている。
「たわけ。大きな声をたてるな」
「はっ……」
「そうか……お倒れになったか」
「は、はい」

「ふうむ……お倒れになったか……」

五

　柴田宗兵衛は、いささかも狼狽(ろうばい)していなかった。
〔原治〕の表口に立ったまま、腕を組み、沈思しはじめた。
「御用人……もし、御用人……」
　小沼治作が、たまりかねて呼びかけるのへ、
「しずかにせぬか」
　宗兵衛は、これをたしなめた。
　徳山重俊が、このまま、あの世へ去ってくれるなら、もとより宗兵衛にとって、
（のぞむところ……）
　である。
　長年の間、自分(おの)が望みをかけてきた権十郎は、まだ廃嫡の身ではないのだから、このまま、すっきりと徳山家の当主になることができる。
　しかし肝心の権十郎が、いま、江戸にいない。
　正式に幕府へ届け出ての旅ならば何のことはないのだが、権十郎は無断で江戸を出奔したのである。
　大身(たいしん)の旗本の子息として、

「なすべきことではない……」

ことを仕てのけたのだから、これが幕府の耳へ入ったら、家督をつぐことがゆるされるかどうか、知れたものではないのだ。

だが、権十郎が京都にいることだけはわかった。

わかったならば、すぐさま、これを見つけ出さねばならぬ。

そして、権十郎が帰府するまでの間を、うまく取りつくろっておかねばならぬ。これこそ徳山家の用人として柴田宗兵衛の、

「なさねばならぬ……」

ことであった。

「御用人……もし、何となされてでございます?」

「殿は、すぐにも息を引き取られるような、御様子なのか?」

「さ、それは……」

「いずれにせよ、こたびはむずかしいのう」

「はい」

「実は、な……」

「は……?」

「福田平太夫殿より、耳よりなはなしを聞いたぞ。権十郎様が、京におられたそうな」

「ええっ……」

小沼が、その場で飛びあがりそうになり、肩をゆすって、

「ま、まことでございますか?」

「まことじゃ」

宗兵衛は手短かに、日野屋文吉が三条の大橋で権十郎を見かけたことを小沼にささやいた。

「ええ、いますこし入念に、お探し申せばよかったものを……」

と、小沼治作が口惜しがった。

「なれど、京の何処におられるものか、それがわからぬ」

「いえ、何としても、お探し申さねばなりませぬ」

「行ってくれるか、小沼」

「むろんのことにございます」

「では、たのむ。わしも行きたいが、殿が倒れたとなると、尚更(なおさら)に江戸を離れるわけにはまいらぬ」

「駿河屋への弔問は、いかがいたしましょう?」

「お、そうじゃ。せがれは?」

「私が御供をして御屋敷を出ようというときに、殿様が……」

「よし。では、せがれと共に京へ行ってくれい」

一人で探すよりも、二人で手わけをして探すほうが確率は高い。

「すぐに御屋敷へ馳(は)せもどり、このことを、せがれに告げ、旅仕度を急げ」

「御用人様は？」
「福田平太夫殿が、まだ、奥にいなさる。ともかくも、平太夫殿へ告げ、神尾の殿様へもおつたえしていただこう」
「はい。では、これにて……」
「あ、待て。わきまえていようが、他の者には気取られるなよ」
小沼治作が走り去るのを見送ってから、宗兵衛は〔原治〕の奥座敷へもどって行った。
福田平太夫は、まだ、酒をのんでいた。
「や、宗兵衛殿。いかがなされた？」
「いま、若党の小沼が駈けつけてまいって……」
と、宗兵衛が始終を語るや、
「ほう、それはそれは、何よりのことでござるな」
平太夫もよろこばしげに、
「なれば、いま一度、日野屋に、そのときの様子を……」
「いや、居所が知れぬことは明白ゆえ、これよりは、こなたの手で探すよりほかに道はござらぬ」
権十郎を探すことは、どこまでも内証のうちに運ばねばならぬ。それが、もどかしい。
「このことを、ひそかに、神尾様へおつたえねがいたい」
「心得た。わが殿も、さぞかし……」

さぞ、よろこばれようといいかけて、さすがに平太夫も口を噤んだ。
「ときに、平太夫殿……」
柴田宗兵衛がすわり直すや、平太夫が手を打って小女を呼び、
「酒を……」
と、命じた。
平太夫にとっては主人の親類であり、宗兵衛にとっては主人である徳山重俊が、心ノ臓の発作に倒れ、死にかけているというのに、この二人は腰を落ちつけ、事後の相談をしようというのである。
徳山重俊も、よくよく嫌われたものではある。
「先ず……」
と、平太夫が盃を宗兵衛へわたし、酌をした。
「これは宗兵衛殿。ふしぎなことでござるな」
「何がでござる？」
「ほれ、駿河屋のあるじも、先刻、心ノ臓で亡くなったと申されたではないか。これは、駿河屋のあるじの恨みが、徳山様へかかったものではあるまいか……」
「まさかに……」
放念していたわけではないが、駿河屋へも早く行ってやらねばならぬ。
柴田宗兵衛も、さすがに気が急いてきた。

「もし、平太夫殿が、それがしであったなら、どうなさる?」

「申すまでもないこと。権十郎様が、帰府なさるまでは、殿様の御逝去を隠しておくが第一」

むずかしいことであった。

これから京都へ急行し、さいわい、すぐに権十郎を探し当てたとしても、権十郎がもどるまでには、四十日ほどの日数をみておかねばならぬ。

その間、徳山屋敷にいる多勢の奉公人が秘密をまもり通せるであろうか……。

(いや、むずかしいことじゃ)

と、宗兵衛はおもった。

大身旗本の当主が死んで、その跡つぎの子息が行方不明というのでは、どうにもならぬではないか。

「よろしゅうござる。これより立ち帰り、わが殿の御耳へこのことを入れ、殿の御分別をうかがってまいろう」

「おたのみ申す。いまは神尾様より、たのむ御方がないことゆえ……」

「おまかせ下され」

たのもしく受け合い、福田平太夫が立ちあがった。

〔原治〕の前で平太夫に別れた柴田宗兵衛は、腕を組み、大川沿いの道を屋敷へもどりはじめた。

すでに、淡く夕闇がただよっている。

さして急ぐでもなく歩みながら、いまさらに宗兵衛は、

(むずかしいことになった……)

と、おもった。

徳山重俊の死は、むしろ、よろこぶべきことだが、権十郎がもどるまでの間を、

(どのようにしてつなぎとめたらよいものか……)

一時の昂奮もさめ、むしろ宗兵衛は蒼ざめている。

六

柴田宗兵衛が徳山屋敷へもどったとき、邸内は緊迫の気配がただよい、奉公人たちは、ひっそりと、来るべきものを待っている様子だ。

来るべきものとは〔殿様の死〕なのである。

奉公人たちも、徳山家の事情をわきまえているだけに、いずれも不安の面持ちとなっていた。

徳山重俊の主治医・遊佐良仙もすでに駈けつけてい、一応の診察と投薬を終えたところであった。

宗兵衛は、用部屋へ、良仙を招いた。

「おお、いま、おもどりか……」

と、遊佐良仙が皮肉な微笑をうかべた。

良仙もいまは六十をこえた老齢となっているが、矍鑠（かくしゃく）としており、

「何となく、わしは、このごろ、百歳まで生きておられそうな気分になってまいってな」

などと、宗兵衛に洩らしたことがある。

長年、徳山家の主治医をしているだけに、良仙は内情に通じており、権十郎の身の上をいつも心配しつづけている。権十郎が幼少のころより、良仙は何かにつけて、面倒を見てくれたものだ。

「御当家では、殿様が危急とあっても、御用人が平気でおられるのじゃから……」

「遊佐先生。そのようにいわれましては……」

「だが、そのとおりじゃもの」

「いかがなものなので？」

「殿の御容態のことかな？」

「はい」

「こたびは危ない。そうおもうたがよろしい」

「は……やはり……」

「宗兵衛殿。さぞ、うれしかろう」

宗兵衛は黙って、非難の眼ざしを良仙へ向けた。

「いずれにせよ、一時も早う、権十郎様を連れもどさぬと困ることになる。それは御用人の

責任（せめ）でもある。いやはや、大変なことになったのう」

「遊佐先生……」

「案じられるな。今夜は御屋敷へ泊めていただくつもりじゃ」

「かたじけなく存じまする」

「何の……」

立ちあがった良仙へ、宗兵衛が、

「今日明日ということは……？」

「さて、わからぬ。いまにも殿様は息絶ゆるやも知れぬ」

にやりとした良仙が、真白なあごひげをしごきつつ、

「いますぐに、亡くなられては御用人も困られような」

「は……」

「ひいては徳山家の大事ともなる。ともあれ、ちからをつくしてみようわえ」

良仙が病間へもどるのを見送ってから、柴田宗兵衛は家来たちや、奥向きの老女をつとめているむすめの千などを呼び寄せ、つぎつぎに指図をあたえた。

小沼治作と、柴田勝四郎が江戸を出発するのは、種々の手続きもあって今日明日というわけにはまいるまい。早くても明後日の朝ということになる。

その手つづきのためにも、宗兵衛は手を打たねばならなかった。

養子の勝四郎を用部屋へ呼び寄せたときは、もう夜が更けていた。

「仕度は、ととのうたか？」
「はい。小沼と打ち合せまして……」
「よし。たのむぞ、勝四郎。お前と小沼のはたらき一つをたのむよりほかはない。わかっていような」
「かならず、若様を見つけ出します」
勝四郎は平然として、そういうのだ。
自信にみちているらしいが、あまりに落ちつきすぎていて、宗兵衛としては何やら、たよりない気がした。
「お、そうじゃ。忘れていた……」
「何をでございますか？」
「駿河屋の弔問を……」
「ともあれ、一応は使いの者を出しておきましたが……」
と、勝四郎がいった。
宗兵衛は目をみはった。
たよりないようでいて、こうしたときの勝四郎はおもいがけぬ気ばたらきを見せるのである。
「そうか、それは何より……」
「父上は当分、御屋敷を留守にすることもなりますまい。これより、私が駿河屋へまいりましょうか？」

「そうしてくれるか？」
「父上のお言葉をつたえまする」
「よし。いま、手紙をしたためる」
うなずいた勝四郎が、用部屋の机の硯箱（すずりばこ）を取って墨をすりつつ、
「殿様の御病間へは……？」
「まだじゃ。いまはならぬと、良仙先生が申された」
宗兵衛は筆を手にして、駿河屋の養子・又太郎へ手紙をしたためた。
文面は、徳山重俊が倒れたことを簡短にしたためたのみである。それだけで、又太郎はすべてをのみこんでくれるはずだ。
当年四十六歳になった又太郎は、いよいよ亡父の跡をつぎ〔駿河屋又兵衛〕を名乗ることになる。
若いころ、駿河屋へ養子に入ったときから、又太郎は〔しっかりもの〕であった。
「あれほどの御養子なれば、実の子よりもたのもしいではないか」
と、むかし、柴田宗兵衛が駿河屋又兵衛にささやいたこともある。
宗兵衛もまた、勝四郎という養子をもらったわけだが、その結果に、いまは満足している。
（実の男子（なんし）がなく、仕方もなしに養子を迎えたわれらがうまくいっているというに……立派な末たのもしき実の男子がありながら、何故、殿は、わざわざ事をむずかしくなさるのか

……）

であった。

勝四郎が、宗兵衛の手紙をもって出て行きかけたとき、

「あ、待て」

「何ぞ？」

「奉公人は当分の間、わしの許しを得ずして外へ出ることはならぬと、すぐさま、一同へ申しつたえよ」

「かしこまりました」

ふと、おもいついていい出たことなのだが、この柴田宗兵衛の処置は、まさに適切であった。

勝四郎が去って間もなく、若党の小沼治作が用部屋へあらわれた。

小沼は、簡単な食膳をととのえ、運んで来てくれた。

「おお……どうも何やら、腹の内がおさまらぬとおもうていたところじゃ」

宗兵衛は、今朝の食事をすませたのち、何も口へ入れてはいなかったのである。

「いまな、一同に禁足を申しわたした。裏表の門番たちへ、お前から尚も念を入れておけ」

「はい」

「旅立ちの仕度は、ととのうたか？」

「相すみました」

「それでよし。ところで小沼。京へまいって、どのようにして権十郎様を探すつもりじゃ？」

「私、考えまするに、勝四郎様には、雨ふらぬかぎり、日々に三条大橋のたもとへ立っていていただこうと……」

「ほう……」

「日野屋は、三条大橋のたもとに立たれて賀茂川のながれをながめておわす若様を見かけたと申したそうでございますな」

「いかにも……」

「若様も、たまさかには江戸の空を偲(しの)んでおられましょう」

「申すまでもない。この江戸は、権十郎様の故郷(ふるさと)じゃ」

「三条大橋は、東海道から京への入口でござります。また、京から江戸への出口でござります」

「なるほど……」

「なれば、若様が、つれづれのままに三条大橋のたもとへまいられるおこころも、何とはなしに、察しられようと申すものではございませぬか……」

「ふうむ……」

宗兵衛は、呆(あき)れたように小沼治作の顔をながめやった。

この武骨な男に、これほどの神経のはたらきがあったことを、はじめて知ったおもいがす

る。

「な、なるほど……」

小沼は、宗兵衛の食事の給仕をしながら、

「その間に私は、京の町すじを歩いて歩いて、この足が折れるまで歩きぬくつもりでおります」

「うむ、うむ……」

「京の市中と申しましても、江戸よりは狭(せも)うございます。人のあつまる場所は、およそ、知れております」

「だが、小沼。権十郎様は、その佐和口忠蔵殿と共に暮しておられるのであろうか？」

「いや、そうではございますまい」

言下に、小沼がいった。

自分が、あれほどに手をつくして、大坂を探しまわったにもかかわらず、佐和口忠蔵の消息はつかめなかった。つかむ糸口さえなかった。

権十郎も小沼同様に、大坂へ出て佐和口の行方を探したのだろうが、

（おわかりになるはずはない）

と、小沼はおもっている。

ゆえに、権十郎の身には何か別の事情が起って、京都にとどまっているのだと、小沼は推察していた。

柴田宗兵衛の食事がすむと、小沼治作は膳を下げ、

「では、門番へ念を入れてまいります」

と、用部屋から出て行った。

七

徳山重俊の腹心である、家来の田村常助が密(ひそ)かに裏門から出て行こうとしたのは、それから間もなくのことであった。

「御用人様の、おゆるしがないのに、御屋敷内から外へは出られませぬ」

と、門番は、潜門(くぐりもん)を開けようとはせぬ。

「だまれ。開けろ」

「御用人様へ、そのように申されてはいかがで」

門番たちは、権十郎贔屓(びいき)であるから、田村常助などが威張っても、平気なのだ。

「困ります」

「開けろ。よいから開けろ」

「たのむ。な、たのむから開けてくれい」

「なりませぬ」

「おのれ、殿様の御用向きにて外出(そとで)をいたすのだぞ」

「なりませぬ」

と、鰾膠もない。

「このことを、殿様へ申しあげてもよいのか。え、よいのか」

田村は、威しにかかった。

「たしかに、殿様の御指図があったのでございますか?」

「う……」

ぐっと詰まった田村常助が、

「いかにも、そのとおりだ」

胸を張った。

「ようございます。しばらく、お待ち下さい」

「な、何……」

「御用人様へ、そのことを申しあげて、おゆるしをいただいてまいります」

その門番は、同僚に後をたのみ、走って行こうとした。

「ま、待て」

「何故でございます?」

「よ、よし。わしが行く」

田村は仕方もなく表門へ向ったが、ここでも同様にはねつけられた。

その間に、裏門の門番が田村のことを小沼へ告げ、小沼は用部屋へおもむき、柴田宗兵衛へ報告した。

田村常助が、すぐに用部屋へ呼びつけられた。

「田村。おぬし、殿の御用向きにて何処へ行く?」

「は……」

「殿の御指図があったと申すが、おぬし、御病間へうかがったのか?」

「いえ、それは……」

「用人のわしでさえ、お目どおりがかなわぬほど、殿の御容態はさしせまっているというに、いったい何の御指図があったのじゃ?」

「いえ、その……」

「申せ」

「は、あの……」

「申せぬのか?」

「は……」

田村は総身に脂汗をかき、うつむいてしまった。

徳山重俊が発作を起してから、田村は、たしかに病間の次の間に詰めきり、遊佐良仙の介添えをつとめていた。けれども、重俊は口もきけぬほどで、良仙の投薬を受けてのちは、昏々と眠りつづけている。

それに、老女の千が田村から目をはなさぬものだから、田村としては指図を仰ごうにも仰げなかったのだ。

田村常助が看ても、重俊の危篤状態はわかる。
田村は田村なりに気が急いてならなかった。
今日の午後。
重俊の使者として、溝口又十郎屋敷へおもむいた田村常助は、側用人・西川勘兵衛に面会をした。
その折に、西川が、
「殿も、ようやく、御納得あそばしたようでござる」
と、いった。
つまり、先ごろより徳山重俊が希望していた溝口家の次男・伊織を養子に迎える件を、溝口又十郎が承知しかけているというのだ。
西川勘兵衛は、溝口又十郎気に入りの家来である。
田村常助も徳山重俊の腹心ということになれば、当然、西川と田村との間で下ばなしがすすめられ、双方の主人の条件を出し合ったり、交渉を重ねたりしていたものであろう。
田村がよろこんで帰邸し、徳山重俊へ報告におよんだ直後に、重俊の発作が起った。
重俊からは何の指図も出ないが、田村常助としては、この急変を、
（一時も早く、溝口様へお知らせいたさなくては……）
と、おもったにちがいない。
「これ、田村。これよりは、みだりにうごきまわると、おぬしの為にならぬぞ」

柴田宗兵衛が凄まじい眼の色になって、田村常助に、
「来い」
「は……」
「ここへまいれ。もそっと近く寄れと申しているのじゃ」
田村は、顔面蒼白となった。
柴田宗兵衛は徒の用人ではない。若いころは剣術の修行も積んでいるし、主人の徳山重俊でさえ、
「いざともなれば、宗兵衛が何を仕てのけるか知れたものではない」
と、怖れている。
なればこそ、柴田宗兵衛の目を盗み、気に入りの田村常助に密命を下したりするのである。
「寄れ。寄れと申すに」
恐る恐る近寄って来た田村の左腕を、宗兵衛がぐいとつかんだ。
そのちからの強さに、田村はおどろき、両眼は恐怖につりあがった。
（ここで、御用人に殺害される……）
と、おもった。
「よく聞け」
押しころしたような柴田宗兵衛の声が、不気味であった。
「よいか。おのれは当分、御長屋に引きこもり、一歩も出てはならぬ。これより、殿の御身

まわりへ近づくときは、この宗兵衛が一刀両断にしてくれるぞ」

田村常助は、ふるえあがった。

八

その日も、徳山権十郎は、京の三条大橋に姿をあらわした。

京へ来て、およそ半歳がすぎ、新しい年を迎えた権十郎は十九歳になった。

三条大橋を西から東へ往復すること三度びで、いつものように大橋の西詰へもどり、橋の欄干にもたれ、賀茂川のながれや、あたりの景色をながめていると、わけもなく半刻や一刻はすぎてしまう。

月代もきれいに剃り、日に一度はかならず髪をゆいあげているし、身につけている小袖も袴も真新しく折目正しい。

もとより権十郎は、生母・お静に似て目鼻立ちも美しくととのい、生誕の折には、

「女のお子か……?」

と、おもわれたほどであった。

そうした、やさしげで美しい相貌が、堀内源左衛門道場のきびしい修行によって鍛えられたのだから、さらに凛々しさが加わった。

京の都に、はじめて住み暮してより、わずか半歳の権十郎ながら、いかにも落ちつきはらって悠々と歩む態を見た京の女たちが、はっと息をつめ、おもわず立ちどまり、これを見送

ることもめずらしくない。

（それにしても、いつまで待てばよいものか……?）

賀茂川の彼方に、優美な曲線をえがいて、ちかごろは肌の色も春めいてきた東山の山なみをながめつつ、

「いささか、飽いたな……」

われにもなく、権十郎はつぶやいたものである。

去年の夏。

豆州・熱海の〔岩松の宿〕のあるじ・岩松の案内で三島へ出た権十郎は、そのまま、東海道を上り、無事に京都へ到着した。

このとき、徳山権十郎の懐中には、曾我の喜平治がくれた大坂高麗橋の書物所・加賀屋孫助へあてた紹介状と、熱海で堺屋太兵衛がしたためてくれた京都の尾張屋源右衛門への手紙が大切にしまいこまれていた。

権十郎は、

「ともかくも、先ず、京の尾張屋方をおたずねなさるがよいと存じます」

との、堺屋太兵衛の言葉にしたがうことにした。

そこで、三条大橋を西へわたるや、橋詰の茶店へ入り、

「この近くに、誓願寺という寺があろうか?」

「はい、はい。すぐ近くでござります」

「その寺の辺りに、尾張屋源右衛門殿と申される人が住んでおられると聞いたが……」
「尾張屋……あ、それは旅籠の尾張屋はんでござりましょう」
「旅籠……うむ、それであろう」
「それなら……」
と、茶店のあるじが通りへ出て、道すじを教えてくれた。
旅籠の尾張屋は、柳馬場・誓願寺通りにあった。
なるほど、たしかに旅籠であるが、その表口の狭さ小ささを見て、
（これが旅籠なのか……？）
権十郎は、意外におもった。
表の間口は三間ほどで、両側の商舗にはさまれ、そこが門のようなかたちになっていて、
〔尾州家御用宿　尾張屋〕
と、しるした小さな看板が掛かっているのみだ。
そこを入ると、両側が植え込みになっている石畳の通路が、奥の方へ真直ぐにつづいてい、突き当りが玄関であった。
そして、いざ、中へ入って見て、権十郎は瞠目した。
中はひろい。
中二階・二階にも座敷があるし、中庭や奥庭が合せて三つもある。
つまり表口だけがせまいにすぎない。表口というよりも、それは門と通路といったほうがよい。

ともかくも、このような建築を見たのは、生まれてはじめての権十郎であった。
あとになってわかったことだが、京都の民家には、このような建築が多く、尾張屋も、むかしは旅籠をしていたわけではなく、さる人の住居であったという。
権十郎が堺屋太兵衛からの手紙を奉公人らしい男にわたすと、やがて、主人の源右衛門があらわれた。
（糸瓜のような顔をしている……）
と、権十郎はおもった。
顔も長ければ、躰も長い。
とりわけ、顎が長くて喉もとが見えぬほどであった。
眸が見えぬほどに上瞼がたれ下っている両眼は細く、鼻がまた長い。
座敷へ通された権十郎へ、
「これはこれは、ようこそおいでに……」
と、尾張屋源右衛門が、にこやかに、
「山口権三郎様と申されまするか？」
「はい」
「ただいま、小田原の堺屋太兵衛よりの書状、まさに拝見いたしました」
ゆったりとした物のいいようで、しかも、どことなく侵しがたい品格が、源右衛門にはある。

（この人は、以前、武家だったのではあるまいか……？）
　ふと、権十郎はそうおもった。
「江戸から、おいでになられましたそうでござりまするな」
「さようでござる」
　堺屋太兵衛が、その手紙の中で、自分をどのように引き合せたのか、それは権十郎も知らぬ。
凝と、尾張屋源右衛門が権十郎を見つめてきた。
　といっても、眸が見えぬほどの細い両眼ゆえ、見つめられたという感じがせず、長い顎と、おだやかな笑みをふくんだ口もとのみが、権十郎の目に入っていた。
「うむ、うむ……」
　二度ほどうなずいた源右衛門が、
「ま、ゆるりと御逗留なさるがようござります」
　と、いい、
「堺屋太兵衛は、すこやかにしておりましたか？」
「はい」
「それは何より……」
　太兵衛のことを尋いた源右衛門の声には親情があふれているようにおもえた。
「それでは先ず、汗をおながしなされまして、おくつろぎを……おはなしは、のちのち、ゆるりとうけたまわりましょう」

「では、御言葉にあまえまする」
　権十郎の声も、しぜん、神妙なものとなっている。
　六十を一つ二つこえたかとおもわれる尾張屋源右衛門の品位にくらべると、江戸にいる我父・徳山重俊など、数段落ちる。
　権十郎は奥庭に面した座敷へ通され、女中たちの世話をうけて入浴し、夕餉の膳に向い、そして眠った。
　その、どれもが新しい経験であったことはいうまでもない。
　女中が、
「今夜は、ゆるりとおやすみなされますよう……」
　との、あるじの言葉をつたえてきた。
　だが、さすがに、この夜は眠れなかった。
　ともかくも、たった一人で江戸を出て、おもいがけぬ事件に巻き込まれたりしながら、無事に京都へ到着したのである。
　目を閉じると、さまざまなおもいが去来し、柴田宗兵衛や千の顔も、久しぶりで権十郎の脳裡によみがえってきた。
（宗兵衛も千も、さぞ、おどろき悲しんでいることだろう……）
　すまぬ、とおもった。
（なれど、これでよい。すべて、これでよいのだ……）

空が白みはじめてから、ようやくに権十郎は眠ることを得た。

九

権十郎が尾張屋源右衛門に、一応のはなしをしたのは、翌日の夕暮れどきになってからである。

むろん、名前も山口権三郎で通しているし、自分の身分などについては語らなかった。
亡き堀内源左衛門に剣をまなんだことをいうと、源右衛門が、
「それはそれは……江戸で名高い御方でございますな」
と、いった。
堀内源左衛門の名が、京の都にまで聞こえていることを、権十郎は誇らしくおもった。
源右衛門も、曾我の喜平治や堺屋太兵衛同様に、権十郎の身許を穿鑿したりすることがすこしもなかった。
権十郎は、同門の佐和口忠蔵と自分との関係について語り、
「いかようにしても、佐和口殿を探し出さねばならぬ事情がありまして……」
いいさして、ふと、尾張屋源右衛門を見ると、源右衛門がさもおどろいたような顔つきになり、口を開け、目をみはっているではないか。
このときばかりは、源右衛門の双眸がはっきりと見えた。
「ほう……ほう、ほう……」

と、源右衛門が梟の鳴声のような声を出し、
「ふうむ……このようなことも、あるものなのでございますなあ……」
と、いったものである。
「…………?」
権十郎には、とっさに、その言葉の意味がわからなかった。
「なるほど。ふうむ……なるほど……」
「尾張屋殿……」
「いえ、山口様。もしやすると、私は、その佐和口忠蔵様を知っておるやも知れませぬ」
「な、何と申される……」
これには、権十郎もおどろいた。おどろかざるを得ない。
「同じ名前で、まったく別人ではないかぎりは……」
「すりゃ、まことでござるか?」
「はい、はい。私の存じあげておりまする佐和口忠蔵様には、妹さまがおひとりおられましてなあ」
「そ、そのとおり……そのとおりなのでござる、尾張屋殿」
「やはり……」
「はい。佐和口殿の妹ごは、大坂におられると聞いておりましたので、それをたよりに、江戸より出てまいった」

「ほう……ほう、ほう……」
「もしや、尾張屋殿は、その妹ごの居所を御存知では？」
よもやとはおもったが、尋いてみずにはいられなかった。
すると、
「はい、存じておりまするとも」
打てばひびくように、源右衛門のこたえが返ってきた。
「ええっ……」
「これは山口様。まことにもって、奇縁と申すものでございますなあ」
こうしたことを知っての上で、堺屋太兵衛が尾張屋源右衛門へ手紙を書いたのではない。
「私の存じあげておりまするのは、佐和口忠蔵様の父御(てでご)様の佐和口彦九郎様でございますが……さよう、忠蔵様が十六か七の、まだまだお若いころに一、二度お見かけしたこともござります」
権十郎が膝(ひざ)を乗り出し、
「そ、それで……？」
「佐和口彦九郎様はな、伊勢の国の桑名の御浪人にて、一刀流の達人でございまして……」
「ふむ、ふむ……」
「のちに大坂へ出てまいられ、王仁塚(わにづか)のあたりへ小さな道場を構えておいでになりましてな。そりゃもう、まことに御立派なお方でございました。数は少のうございましたが、御門人衆もおられ、京へも年に二、三度は出てまいられましてな、そのときはかならず、てまえどもへお泊りになられました」

「さようでござったか……」
「御子息の忠蔵様を、お見かけしたのも、ごいっしょに、てまえどもへお泊りになられましたときで……その折、忠蔵様の妹さまのお幸(こう)さまも、お泊りになられましてな」
佐和口彦九郎は、京都の春秋(はるあき)が好きだったそうな。
京へ来れば三、四日ほど尾張屋へ滞在し、諸方を見物して歩き、源右衛門の案内で北山の秋色を探りに行ったこともある。
こうしたわけで、佐和口彦九郎と尾張屋源右衛門との間柄は、なかなかに親しいものであったようだ。
彦九郎は、すでに亡くなっていた。
忠蔵の妹お幸は、いま、大坂の天神橋・北詰に店舗を構える薬種舗〔長崎屋庄之助〕方へ嫁ぎ、一男二女をもうけて倖(しあわ)せに暮している。
忠蔵・お幸の兄妹の母は、早くに亡くなり、その後は佐和口彦九郎が男手ひとつに二人の子を育てあげた。
ところで佐和口忠蔵は、父亡きのち、王仁塚の道場を引きつぎ、当主となったわけだが、亡父ゆずりの一刀流が相当のものだったとしても、そこはまだ年齢(とし)も若く、先代を慕う門人たちも次第に減じていったので、

「おれも、修行をし直さねばならぬ」
と、忠蔵は決意し、妹のお幸が長崎屋へ嫁ぐのを見とどけた上で、王仁塚の道場をたたみ、飄然(ひょうぜん)と大坂を発(た)ち、旅へ出た。
以来、忠蔵は、一度も大坂へもどって来ていないらしい。
というのは、お幸と自分との交誼(こうぎ)が、いまもつづいているから、そのことを尾張屋源右衛門がわきまえているのである。
佐和口彦九郎は、亡妻が重病にかかった折に、長崎屋から薬を買い入れており、長崎屋の先代とも親しくなったらしい。
それが縁となって、
「ぜひにも、うちのせがれの嫁に……」
彦九郎亡きのちに、長崎屋から申し入れてきたのだそうな。
「では、明日、私がお供をして大坂へまいりましょう」
と、尾張屋源右衛門がいってくれた。
「そうして下さるか」
「よろしゅうございますとも」
こうして、権十郎は源右衛門の案内で大坂へおもむいたわけだが、天神橋・北詰の長崎屋へ着き、お幸を見た瞬間に、
(まぎれもなく、佐和口忠蔵殿の妹ごだ)

権十郎は、確信をした。
お幸はでっぷりと肥えた躰つき、福ぶくしい面だちであるが、兄・忠蔵の面影が目にも口もとにも看てとれた。そこは何といっても実の兄妹であった。
「まあ、まあ……そのようなことがござりましたのか。はい、一年ほど前に兄より、まだ江戸にいて、堀内先生の許に通うておると手紙で申してまいりましたが、その後は、ずっと打ち絶えておりまする」
と、お幸はいった。
「さようか……」
権十郎は、いささか気落ちしたが、しかし、忠蔵の妹の居所がわかったからには、
「ずいぶんと会いませぬので、そのうちに一度、かならず大坂へ帰ると兄も書いてよこしましたことゆえ、近いうちに姿を見せるのではございますまいか……」
お幸がそういうと、尾張屋源右衛門も、これに同感であった。
佐和口忠蔵が長崎屋へあらわれれば、すぐに京の尾張屋へ知らせようし、また、
「兄から手紙などござりましたなら、このよしをすぐさま、知らせてやりまする」
と、お幸はいった。

十

そこで、徳山権十郎が困ったのは、いまの自分が、

「山口権三郎」

の偽名で通していることであった。

いっそ、おもいきって、尾張屋源右衛門とお幸に、

(何も彼も、打ち明けてしまおうか……)

と、おもったが、

(いや、まて)

なんといっても、自分は、大身(たいしん)旗本の子息として、罪に問われるほどのことをしている身ゆえ、

(うかつなまねはできぬ)

おもい直した。

名前はちがっていても、ともに〔権〕の一字が入っている。

となれば、佐和口忠蔵は自分の家のもめ事についても、うすうすは知っていてくれているはずだし、お幸が、これこれの若い侍が訪ねて来たと知らせれば、きっと、山口権三郎の〔権〕の一字から推し量ってみても、

(あ、これは徳山権十郎が、江戸を飛び出して来たにちがいない)

直感してくれるのではないか。

(そうじゃ。佐和口殿ならば大丈夫、わかってくれよう)

ついに権十郎は、これからも山口権三郎で押し通すことに決めた。

「吉報がまいりますまで、いつまでも、私のところへ御逗留なされますよう」

尾張屋源右衛門が親切にすすめてくれるままに、権十郎は京都で秋から冬を越し、新しい年の春を迎えたのであった。

この間に……。

江戸から権十郎を追って来た若党の小沼治作が、大坂市中の剣術道場を探しまわっていたことになる。

その折、大坂の道場という道場が、王仁塚の佐和口道場のことを知らなかったというのは、佐和口彦九郎父子は、よほどに地味な道場運営をしていたものらしい。

権十郎にしてみれば、まさかに小沼治作が上方(かみがた)へ追って来ようとは、

(夢にも、おもわぬこと……)

であった。

ゆえに、

(これでいよいよ、柴田宗兵衛も、千も、おれが徳山家の跡つぎとなることをあきらめてくれよう。いや、あきらめたにちがいない)

と、おもいきわめていたのである。

尾張屋源右衛門は、よほどに権十郎が気に入ったらしく、

「どうぞ、いつまでも、おとどまり下さいますよう。御遠慮なさることは何一つございませぬ。私は、あなたさまのお世話をさせていただくのが、うれしいのでございます」

などという。
　京の尾張屋の、はじめて泊った部屋に権十郎はいまも住み暮している。
　女中たちが身のまわりの世話をしてくれるし、源右衛門の指図で衣類もととのえられたし、何の不自由もない。
「これほどの金子にては、いかようにもなるまいが……」
　と、権十郎は、江戸から腹につけてきた金を源右衛門へ差し出すと、
「いえ、そのようなつもりで、お世話しているのではございませぬ」
「ともかくも、あずかっておいていただきたい」
「さようでございますか。では、一応、おあずかりをいたしておきましょう」
　こだわることなく、源右衛門が金をあずかってくれた。
　そして、権十郎が外出をするたびに、女中が紙入れをわたしてくれるのだが、その中には小判で二両と、ほかに一分金や銭などに分けて一両ほど入っているのだ。
　この紙入れをふところにして外出をしても、権十郎は、ほとんど金をつかうこともない。
　月に二、三度は、尾張屋源右衛門が案内に立ち、京の名所を連れてまわってくれたし、自分ひとりの外出をしても、茶店へ入っての茶代とか、たまさかに酒をのむとか、四条河原の見世物へ入って見るとか、それほどの出費ですむ。
　また、たとえ一文でも紙入れの中味が減っていると、その分が、いつの間にか補充されていた。

　それにしても、尾張屋源右衛門と、小田原の堺屋太兵衛とは、
（いったい、どのような関わり合いがあるのか……？）
　そこへ考えおよぶと、権十郎の興味はつきなくなってくる。
　ともかくも、この二人は親密の間柄と見てよい。
　それでなければ堺屋太兵衛が、権十郎のための添状を源右衛門にあてて書くはずもない。
　また、たった一通の添状だけで、尾張屋源右衛門が権十郎を、それこそ、
「わが子同様……」
　の、あつかいをもって、滞留させておいてくれている。
　これは源右衛門が、太兵衛に深い信頼をおいているからにほかならぬ。
　尾張屋源右衛門は、堺屋太兵衛の正体を、
（知っての上のことなのであろうか……？）
　そこまでくると、権十郎にも、はっきりした答えが出てきてくれぬ。
　堺屋太兵衛と曾我の喜平治一味との怪しい関係が、何であるかも知らぬ権十郎だが、怪しいことにまちがいはない。彼らは世間をはばかる秘密の事をしているに相違なかった。
　となれば、
（尾張屋殿も、怪しいことになる……）
　のではないか。
　だが、京都の旅宿としての尾張屋に、いささかも怪しむべきところはない。

尾張屋という屋号がついているだけに、尾張の国、ことに名古屋城下から京都へ来る商家の人びとの宿泊が多い。

そればかりではない。

尾張屋は、徳川御三家の一である、名古屋六十一万九千石の尾張藩の〔定宿〕であった。

尾張・徳川家の祖は、徳川家康の九男・義直(よしなお)であって、紀州・水戸の徳川家と共に御三家とよばれ、徳川将軍を補佐し、諸国大名の首座に在り、いわば将軍家の〔国老〕ともいうべき家柄であるし、将軍に世嗣(よつ)ぎの絶えたときは、三家のうちから、これを立てることになっている。

この、将軍親族の大藩が、京都の〔定宿〕の資格をあたえているのだから、尾張屋は街道筋の旅籠などとは大分に異なるのだ。

尾張屋の主人(あるじ)の源右衛門には、こうした意味から、怪しむべき何物も、

「あっては、ならぬ……」

はずなのである。

十一

(はてさて……世の中はひろい。いろいろと、わからぬことばかりだ)

その日の徳山権十郎は、いつものように三条大橋のあたりで一刻(いっとき)をすごしてから、ぶらぶらと、賀茂川沿いの道を南へ歩みはじめた。

こうして日々をすごしているのに、文句があるはずもない。

だが、若い権十郎にとっては、それだけですむはずもない。

佐和口忠蔵が、

(いつ、あらわれるか……)

と、期待をこめて朝夕を送り迎えていたころは、その期待だけで、一日がわけもなく過ぎ去ってくれたものだ。

それが、約半歳を経てみると、

(待ちきれぬ……)

気もちに変ってきた。

去年の夏、堀内源左衛門が歿(ぼっ)して以来、権十郎は剣術の稽古もしていない。

若い肉体のちからが、何ものかに向って発散されなくてはやまない。毎日、ぶらぶらと京の町を歩いているだけでは、どうにもならぬ。

だからといって、佐和口忠蔵に会うためには、

(京にとどまっていて、大坂の妹ごからの吉報を待つより仕方がない……)

のである。

むろん、江戸へもどることはできぬし、考えてもみない。

(おれも佐和口殿のように、独りきりで諸国を経めぐり歩き、わが一剣を磨こうか……)

そうおもうと、明日にでもまた、京都を出奔したくなってくる。

（そうだ。いつまでも、尾張屋殿のお世話を受けているわけにもまいるまい）

歩きながら、権十郎が勃然となってきた。

（いずれにせよ、これからのおれは一介の剣客として生くるよりほかに、道はないのだから、諸国の道場をまわって修行を積むのは当然のことなのだ）

旅をすることのむずかしさは、江戸から京都へ来るだけで充分に知った権十郎だが、そこは若い。

（出て行けば、どうにでもなろう）

そこで、尾張屋には無断で出発するか、または事情を打ち明けて京都を出るか……。

（やはり、黙って出よう。そうだ。いま、これからがよい）

金は、ふところに三両ほどあるが、

（これでよい）

と、権十郎は決意した。

（だが、待てよ……出立は明日でもよいのではないか……）

ふと、おもい直した。

尾張屋源右衛門へ、ゆっくりと礼状をしたため、これを残して置きたいし、それに、江戸を出るとき持ち出してきた〔海陸行程細見〕という小型の本だけは、ぜひにも必要であった。

この一冊は、日本全国の略図に宿駅と里程を記したもので、旅なれぬ権十郎にとっては絶対に必要なものである。

この本を尾張屋の自分の部屋へ残してあるし、その他二つ三つの必要な品もないではない。

（明日だ。明日にしよう）

徳山権十郎の歩みに、ちからが加わってきた。

この日の朝。

柴田勝四郎と小沼治作が、京都へ向って、江戸の徳山屋敷を発足している。

権十郎は、間もなく四条河原へ出た。

京都も今日が最後なのだから、祇園の社（八坂神社）へ参詣し、道中の無事を祈るつもりであった。もっとも、権十郎の旅は、それこそ行先も定め得ぬ〔道中〕であったが……。

賀茂川は三条から四条へ下るにつれ、川床がひろくなり、ところどころに中洲ができ、その中洲や河原に種々の見世物小屋や、物売りの屋台、茶店などがたちならび、それは江戸の両国橋・西詰のにぎわいを権十郎におもい起させた。

四条の、賀茂川の東岸一帯には歌舞伎芝居や人形芝居、浄瑠璃などの劇場があり、これに附随する茶屋や飲食の店々が密集し、京都随一の繁華ぶりを見せている。

四条の橋を渡り、祇園の社に向って東へすすめば、両側の茶屋から、揃いの衣裳を身につけた女たちが、

「のう、もうし、札をめせ。よい桟敷でも取ってあげましょ。お羽織も、お笠も杖もあずかってあげましょ」

と、声をかけてくる。

〔札〕とは、劇場の入場券のことだ。

四条通りは、祇園の社の門前町として発達したところであるから、通りの両側には水茶屋や茶店などが軒をつらねている。

尾張屋源右衛門は二度ほど、権十郎を、このあたりの水茶屋へ案内して、

「おひとりにても、お遊びにおいでなさるがようござります」

と、いってくれた。

源右衛門がなじみの店は、四条通りの南に大伽藍をもつ建仁寺の近くにある〔桐屋〕という水茶屋であった。

店先から土間にかけて、大竈を中心に、緋毛氈におおわれた腰かけがならんでい、色とりどりの衣裳を身につけた美しい若い茶汲女たちが、客を接待する。

江戸にも、こうした女たちが寺社の門前町の水茶屋にいて、権十郎も見知らぬわけではないが、

(まるで、ちがう。江戸と京とでは、女が、こうもちがうものか……)

と、権十郎はおもった。

歯切れのよい言葉づかいと、立居ふるまいのきびきびとした江戸の茶汲女にくらべると、京のそれは、いかにも物やわらかな京言葉が優しげで、身のこなしもなよなよと、その手足や襟足の肌の白さに、権十郎は瞠目した。

水茶屋の土間から通り庭をぬけて行くと、美しい中庭に面した瀟洒な客座敷があり、常客ともなれば、そこで茶汲女の肌身を掻き抱くこともできようという……そこまでは口にしなかったが、

「今夜は、此処に、お泊りになられてはいかがでござりますな?」

と、尾張屋源右衛門にすすめられては、徳山権十郎も、いまは十九歳である。

その言葉の意味が、わからぬはずはない。

けれども、権十郎は、

「いや、共に帰ります」

いいきって、ついに一度も泊ってはいない。

〔桐屋〕ほどの水茶屋になると、茶をのみに入って、すぐさま、これを抱けるというものではない。桐屋のあるじが「このお人ならばよし」と見きわめをつけ、さらに、しかるべき紹介者がいないと、水茶屋のほうでも、なかなかに気をゆるさぬそうな。

尾張屋源右衛門が連れて来た客ゆえ、権十郎は下へもおかぬもてなしをうけ、しめつけ島田に髪をゆいあげた若い茶汲女が、つぎつぎに座敷へ入って来たのも、源右衛門のはからいで、権十郎に好みの女をえらばせるつもりだったのであろう。

いうまでもなく権十郎の胸は高鳴ったが、

(佐和口忠蔵殿を待ち、尾張屋殿の世話を受けている身でありながら、脂粉の香りに迷うてはならぬ)

と、そこは大身旗本の子息に生まれた権十郎だけに、

「なに、あのときのおれは、いうところの瘦せ我慢をしたのじゃ」

のちに、そう語っている。

「それでは、まあ、好きになされませ。この店なれば、いつにても、おひとりでお出かけ下さいましてもかまいませぬゆえ……」

源右衛門は苦笑をもらしつつ、いつまでも肩肘を張っている権十郎に、そういってくれたものだ。

さて……。

徳山権十郎は四条通りの突き当りの、祇園の社の石段をのぼって、西門から境内へ入った。

桜花は、まだひらかぬが、昼下りの日射しがいかにも暖かい。

江戸の冬は風が吹き捲って、まことに荒々しいが、京の冬は風も絶え、ただひたすらに深深と冷えわたり、その名物の底冷えをはじめて味わった権十郎は、それだけに、日いちにちと水がぬるみ、日射しがやわらぐ京の春が、ひとしお身にしみて感じられた。

江戸では、いつ来たかとおもう間もなく、

「春になっている……」

のである。

参詣を終えた権十郎は、にわかに空腹をおぼえた。

（どこぞで、何か口に入れようか……）

おもいつつ、祇園の社の南の楼門から境内を出た。

そのとき、楼門外の左手の方から、人びとのざわめきと、猛々しい男の怒声が耳へ飛び込んできた。

十二

祇園の社は、東山の山裾にある。

宏大な境内は、その山腹にまでひろがってい、これを円山という。

南は高台寺、北は知恩院に接する境内は、およそ三万坪におよぶそうな。

山腹の深い木立の中には、安養寺、双林寺、長楽寺などの寺々が、ひっそりと在る。

その長楽寺からの細い道が、祇園の社の南楼門の横手へ下ってきている。

叫び声は、その細道の上の方で聞こえた。

（はて……何であろうか？）

徳山権十郎が立ちどまったとき、夫婦者らしい二人が細道から駈け下って来た。

「これ、何ぞあったのか？」

声をかけてみると、

「へえ、もう、性のよくないお人たちが、女ご衆を虐めておりますのでございまする」

と、男のほうが、眉をひそめてこたえた。

「何……」

それと聞いては、捨ててもおけぬ。

（おれも武士の端くれ……）

なのだ。

権十郎が細道へ駈け入ってみると、彼方に五、六人の人だかりがしている。

権十郎が駈けつけてみると、細道の右側の草原で、幼女を抱いた町女房ふうの女が、三人の男に囲まれ、何やら威されているようなのだ。

ためらうことなく、草原へ踏み入った権十郎が、

「これ……これ……」

と、声をかけた。

男たちが、屹と振り向いた。

三人とも垢じみた浪人者なのである。

「お内儀。いかがなされた？」

「はい」

蒼ざめてはいたが、その女房は、しっかりとした声で、

「この人たちが、無体をなされますのでなあ……」

と、いうではないか。

「黙れ!!」

「この女、怪しからぬ女だ!!」

いきりたつ浪人たちのうしろから割って入った権十郎が、女房と幼女をうしろに庇うかたちとなった。

まことに、素早い身のこなしではある。

そして、

「お内儀。うしろへ下っていなさい」

と、いった。

「はい」

素直に、女房が身を引く。

「こやつ。よけいなまねを……」

巨漢の、四十がらみの浪人が、つかつかと近寄って来て、

「若者のくせに出しゃ張るな!!」

喚きざま、ぐいと権十郎の胸倉を摑んだ。

摑んだと見えた、その瞬間に、

「ぐわ……」

ふとい棒を喉へ詰め込まれたような呻き声を発し、両手で眼をおおい、大きな躰をくの字なりに折り曲げたものである。

接近して来たこやつの両眼の中へ、権十郎が手指を突き入れたのだ。

「むう……」

激痛のため、咄嗟には立ち直れぬ巨漢から、すっと離れた権十郎へ、
「おのれ!!」
二人の浪人が、大刀を引き抜いた。
二人とも、巨漢の浪人の背後にいたので、いったい、何がどうなったのか、よくわからぬらしい。それほどに権十郎の手指のうごきは、
「目にもとまらなかった……」
といってよい。
近年は、江戸と同様に、京都へも無頼の浪人たちがながれ込んで来て、さまざまな乱暴、無法をはたらくので、
「困ったものでございます」
尾張屋源右衛門も、そういっていた。
江戸や大坂は、それでも警吏の取締りがきびしいのだけれども、京の都の役人たちときたら、
「たよりにも何も、なるものではございませぬ」
と、いう。
京都の町奉行所は、いうまでもなく幕府の管轄なのだが、戦乱の時代はいざ知らず、徳川将軍の威光の下、天下泰平の世となってからは、血なまぐさい事件やら犯罪やらが、まことに少ない都市だけに、
「役人さんの腰がぬけている……」

というのが、市中の定見なのだそうである。
じりじりとせまる二人の浪人に相対して、権十郎は腰の刀に手もかけぬ。
「う、うう……」
唸り声をあげ、巨漢の浪人は屈み込んでしまった。
かなり深く、権十郎の指が眼中へ突き入ったらしい。
「たあっ!!」
一人が、猛然と斬りつけて来た。
体を躱すというよりも、むしろ権十郎は、こちらから飛び込んで、相手の刀が打ち込まれる前に、その肘を下から手で払った。
「あっ……」
そやつの手から離れた大刀が、きらりと早春の日射しに光って宙に飛び、落下して土に突き刺さった。
あわてて飛び退いたその浪人は差し添えの脇差の柄に手をかけはしても、抜くだけの気力をうしなってしまったようだ。
いま一人の浪人は、大刀を振りかぶったまま、茫然と立ち竦んでいる。
権十郎の背後で、女房が、さも可笑しげに笑い出した。
向うの道で、怖ごわ見物していた人びとの歓声があがった。
二人の浪人は、目を押えて苦悶している仲間をたすけ、蒼惶として逃げ去った。

「おみごとでござりましたなあ……」

と、女房が権十郎へ近寄って来た。

女房が抱いた幼女は、目をみはって権十郎を見つめている。この子は浪人どもに威されている間も、泣声ひとつ立てなかった。

「大事なかったか?」

「あい……」

見たところ、二十二、三歳のようにおもったが、あとで知れた、この女房の年齢は二十六歳であった。

女房……と見えたのも道理なのだが、実は、二年前に夫と死別していたのである。

細身の、なよなよとした京の女ともおもえなかった。

いま、流行の薄紫の、友禅染の小袖につつまれた豊熟の肉体が、まさに、女の生気をはらんでいて、化粧の気配とてなかった。

「まじまじと、この女の顔を見たときの、おれのおどろきというものは……さて、何と申したらよいか……人は好き好き、別の男が見たならば何ともおもわなんだろうが……おれにしてみれば、このような女を、これまでに見たこともなかったゆえ……」

のちに、徳山権十郎は、そう語っている。

顔の中の一つ一つを、よく見ると、決して美女というようなものではない。

だが、勝山ふうの髷や小鼻の黒子や、青々と剃りあげた眉の痕や、唇から洩れる鉄漿の黒

が、絖やかな肌の白さによって、精彩をきわめ、

「女という生きものが、化粧もなしに、かほどまでに美しく見えたことは、いまもってない……」

と、いうことになる。

権十郎も美男である。そして若い。

黒の小袖に茶宇縞の袴をつけた体軀も武術に鍛えられて凜然たるものがあり、それに何よりも、目の前で三人の荒くれ浪人を、

「手玉にとって……」

自分たちをたすけてくれたのだから、女のほうも胸がさわいだにちがいない。

「わたくしは、あの、梶と申しまする。これなるは、むすめのお百合でござります。危ういところを、よう、おたすけ下されました」

祇園の社からの帰り途に、上からやって来た浪人どもが、ふざけかかったので、たしなめたところ、たちまちに取り囲まれたのだという。

浪人どものねらいは金であったが、お梶は断固として出さなかった。そのため、草原へ連れ込まれたらしい。

「お急ぎでなくば、お立ち寄り下さりませぬか……」

「この近くにか?」

「はい。お茶など、さしあげとうござります」

ことわる理由とてない。
急いで尾張屋へ帰ることもない。
明日、ひそかに京都を発つまでは、何の用事もない権十郎であった。

十三

四歳になるという、お百合の手を引いたお梶が先へ立ち、細道を長楽寺の方へ行くと、右手に茅ぶき屋根の茶店が見えた。
お梶が、そこへ入って行くのを見て、
(この茶店で、茶をもてなそうというのか……)
と、おもった権十郎だが、その茶店こそ、お梶の住居だったのである。
お梶は、茶店の女主人であった。
このあたりを散策していたらしい老夫婦の客を、これも六十がらみの老爺がもてなしている。
竹の羽目を両側にした入口には、紺地に白く〔東林〕と染めぬいた暖簾が掛かってい、それとは別に、太い格子の脇出入り口がある。
お梶は、そこへ来て、
「こちらでござります」
と、権十郎へ振り向いた。

目の前をゆらゆらと揺れて行く、お梶の臀部のあたりに、われ知らず視線を吸いつけられていた権十郎が、はっとなり、
「おお……さようか……」
「さ、こちらへ……」
「うむ……」
権十郎の面上へ、たちまちに血の色がのぼった。
その若者の双眸を、お梶はのぞき込むように見つめた。
お百合は先に、中へ駈け入った。
「さ、こちらへ……」
「はい」
と、神妙である。
お梶にみちびかれ、権十郎は脇出入り口から中へ入った。
そこは、石畳の通り庭で、奥へつづいてい、左手に掛かっている縄暖簾をすかして、大中小とつらなった大竈が見える。
そこへ、客の相手をしていた老爺が縄暖簾の向うからあらわれ、
「お帰り」
お梶へ頭を下げ、上眼づかいに権十郎をじろりと見た。
「孫助。すこし前に、この下の道で、三人の男どもに難くせをつけられ、危ういところを、

このお方にたすけてもろうたえ」
　お梶が語るのを聞いて、孫助とよばれる小さな老爺の、権十郎への態度が一変した。
「まあまあ、さようでござりましたか。それはそれは、まことにもって、ありがとうござりまする」
　ひれ伏さんばかりに、権十郎へ頭を下げた。
「孫助。さ、もうよいわいの」
「はい、はい」
「お武家さま、こちらへおいで下されませ」
「では……」
　通り庭の突き当りは障子戸で、日射しに障子が明るんでいるのは、向うが中庭なのであろう。
　障子戸の手前に、石の沓脱ぎがあり、そこから上ると廊下であった。
　廊下を一まわりすると、中庭に面した座敷へ出た。
　茶室めいた、小さな座敷である。
　お百合は、どこへ行ったものか、姿を見せぬ。
「お武家さまを、何と、およびいたしましたら、よろしいのでござりましょうなあ」
「徳……」
　徳山と名乗りかけ、あわてて、
「いや、山口権三郎と申す」

　いい直した権十郎を、お梶は凝と見まもった。
　権十郎は、どぎまぎしてしまった。
　かつてないことではある。
「山口さま……」
「はい」
「お江戸のお方でござりますなあ？」
「さよう」
「ずっと、京に……？」
「いや。いつまでも滞留してはおられぬ身です」
「さようでござりますか……」
　息を吸い込むように、そういったお梶の双眸が、一瞬、煌めいたようであった。
「すぐに、もどってまいりまする」
　お梶が、座敷から出て行った。
　権十郎は大きく息を吐き、立って障子を開けた。
　中庭は三坪ほどのせまいものだが、土塀の向うは竹林である。
　風も絶えた、あたたかい日和で、しきりに雀が鳴き交している。
　薄茶を点じ、お梶がもどって来た。
　権十郎には、茶の味がわからなかった。

いま、酒の仕度をしているからと、お梶がいう。
「いや、おかまい下さるな」
「なれど、このままでお帰し申したのでは、わたくしの気がすみませぬゆえ……」
わずかに、お梶が躙り寄るようにして、
「いま、すこし……」
ささやくように、いった。
お梶の躰からは、何ともいえぬ香りがただよってくる。
白粉や髪油の匂いではない。
何か、特種な香料を、肌のどこかにつけているのであろうか……。
仕方なく、権十郎は、
「この……この家は……」
「あい。茶店をしておりまする」
「表口の、のれんに東林とあったようですが……」
「あい。わたくしは、もと、四条の縄手の茶問屋で東林軒へ嫁ぎましたので……」
「おお、さようか……」
「夫が亡くなりましたのち、むすめのお百合をつれて、此処へ移り住みましてなあ。東林軒は、いま、あるじの弟が主人になっておりまする」
「なるほど」

亡夫の店をゆずりわたした代りに、この茶店の権利を義弟の甚三郎に買いうけてもらったのだ。
こうしたわけで、東林軒とお梶の間は、いまも親しい。
酒が運ばれて来て、二口三口をすごした徳山権十郎は、
「もはや、これにて……」
どうしても落ちついていられなくなり、おもいきって立ちあがった。
「では、また、おいで下されまするか？」
「む……」
明日は、京都を密かに出発しなくてはならぬ。
権十郎は東林を出て、走るように細道を下って行った。

十四

さて……。
翌朝になったが、徳山権十郎は尾張屋から、
（密かに発足する……）
気配もなかった。
奥の一間で、権十郎が目ざめたのは昼近くなってからだ。
「よう、おやすみになっておいやしたので……」

と、中年の座敷女中おきさにいわれて、

「そ、そうか……」

権十郎は見る見る顔を赫(あか)らめ、目を伏せた。

このことを、おきさから聞いた尾張屋源右衛門が、

「ほう……めずらしいこともあるものじゃ」

「はい」

「昨日は、遅う、おもどりか？」

「いえ、いつもより早く……まだ、日が落ちぬうちにおもどりでござりました」

「ふうむ……」

「よほどに昨夜(ゆうべ)は、眠りが深かったと見え、目を腫(は)らしておいででござります」

「目を腫らして……」

「はい」

この日の権十郎の朝餉(あさげ)は昼餉同様となってしまった。

食事をすますと、深目の編笠を手にして、

「出てまいる」

例のごとく、権十郎は尾張屋を出て行った。

そのまま、三条大橋へ出て、京師を離れ、何処(どこ)ぞへ旅立ったのかというとそうではない。

この日の権十郎は、誓願寺前の道を真直ぐに南下し、四条の通りへ出るや、左へ曲がった。

風は絶えて、薄曇りの空の下を、権十郎はいつもより鈍(のろ)い足取りで四条河原へ向う。

賀茂川をわたり、祇園の社へ向う権十郎の歩みは、さらに遅くなり、時折は足をとめて、引き返そうとする気配を見せた。

そのうしろから、見え隠れに尾(つ)けている者がある。

この者は、尾張屋の下男をしている万平という老爺であった。

権十郎が出て行くのを物蔭(ものかげ)から見ていた尾張屋源右衛門が、微笑を浮かべながら万平に、

「山口様が何処へ行かれるか、つきとめて来ておくれ」

と、いったのである。

午後になり、万平が尾張屋へもどって来て、

「えろう長い間、祇園さまの境内を行ったり来たりしておいでござりましたが……」

「ふうむ……たれぞと待ち合せでもしておられたのか？」

万平が、かぶりを振り、

「それから、南の門を出て、長楽寺の方へ上(あが)っている道を……」

「なに、長楽寺へ……？」

「途中に、ほれ、茶店がござりましたなあ……」

「東林か」

「はい。四条の縄手の茶問屋の、東林軒の先代の後家がやっておりまする茶店で……」

「おお。聞いている。美しい後家じゃそうな」

「その前をまた、行ったり来たり、なされましてなあ……」
「ほう……それで、東林へ入られたのか?」
「いんえ、長楽寺へ上っておいでに……」
「それから?」
「しばらくすると、また、おもどりに……」
「今度は、東林へ入ったのか?」
「いんえ……」
「いったい、どうしたというのじゃ?」
「しばらく、茶店の前にお立ちなされておいででござりましたが……そのうちに、何やら、おあきらめなされた様子で、祇園さまへ引き返して……」
「それから?」
「いまは、三条大橋の欄干にもたれて、川のながれを見ておいでに……」
「そうか……」
と、源右衛門が嘆息し、
「よい。わかった」
万平を下らせた。
(はて……何のことやら?)
居間で、煙草を吸いつけながら、尾張屋源右衛門は不審の面もちであった。

先代の東林軒伊兵衛は、三十をこえたばかりで亡くなったが、島原の遊里では、
「それと聞こえた……」
遊蕩ぶりだったそうで、祇園界隈の水茶屋の女たちの間でも、それは評判のものであった。
尾張屋源右衛門も、伊兵衛については、なじみの水茶屋・桐屋方で、何度もうわさを聞かされている。
伊兵衛は、派手やかな遊蕩三昧によって、
「身を損ねた……」
などといわれているが、その女房・お梶は、貞淑そのもので、めったに外出をすることもなく、夫に代って東林軒の商いを一手に切りまわしていたそうな。
それでいて、夫が病歿すると、いさぎよく店を義弟にゆずり、自分は、ひとりむすめのお百合を連れ、円山の茶店へ引き移った。
「なかなかに、できぬことよ」
これまた、当時は評判されたものだ。
その、お梶の茶店の前を、
(山口様が行ったり来たり……とは、何のことであろう?)
源右衛門ほどの男にも、さっぱりわからぬ。
この日。
徳山権十郎は、万平が帰って来て間もなく、尾張屋へもどって来た。

「お早いお帰りでござりますな」
と、出迎えた源右衛門へ、
「はあ……」
ぼんやりとした返事をした権十郎が、足取りも重く廊下を辿って行く後姿を見送り、源右衛門はくびをかしげた。
かつてないことではある。
祇園の社から円山へ、そして三条大橋から尾張屋へもどって来たわけだから、子供の足でも疲れるはずがない。
それなのに権十郎は、顔色も冴えず、足取りも重げに、何やら、
（ぐったりと疲れ果てた……）
ように見える。
夕餉の膳に向っても、一向に食欲がないらしく、座敷女中のおきさが、
「山口さまは、どこぞ、お躰が悪いのとちがいますのでは？」
と、源右衛門に告げたほどだ。
「ま、そっとしおき」
「はい……」
翌朝も、権十郎の目ざめは遅かった。
この日は、さすがに気が咎めたらしく、はにかんだような笑いを見せ、おきさに、

「どうして、こうも、目がさめぬものか……」
と、権十郎がいった。
昼前になると、
「出てまいる」
編笠に顔を隠し、尾張屋を出て行く。
源右衛門は、またしても万平をよび、
「後を、な……」
と、いった。
いわざるを得ない気もちになってきている。
午後おそくなって、万平が帰って来た。
その報告は、略、前日と同じであった。
つぎの日。
権十郎は、尾張屋から外へ出なかった。
奥の部屋へ閉じこもり、ぼんやりと白い障子を見ている。
つぎの日も、そうなのだ。
たまりかねて、尾張屋源右衛門が権十郎の部屋へあらわれ、
「どこぞ、お躰が悪いのではござりませぬか？」
「いや、別に……」

「なれど、御食事もすすみませぬとか……」
「いや……そのようなことはありませぬ」
権十郎の両眼が赤い。血走っている。
昨夜も、よく眠れなかったにちがいない。
「御心配をかけて相すまぬ。なれど大丈夫です。別だんに、何のこともない」
「それなら、ようござりますが……」

十五

翌日は権十郎、昼前に尾張屋を出た。
万平は、源右衛門に命じられなくとも、後を尾けるつもりで待ちかまえていたようだ。
この日の権十郎の歩みぶりは、前のときのように、ためらいがちのものではなかった。
何か、決然としたものが歩調に感じられる。
祇園の社へ直行し、参詣をすませるや、南の楼門から、いつもの細道を上り、東林へ向った。
ところが、茶店〔東林〕の店先に、この日は暖簾が掛かっていず、戸という戸が閉ざされていたのである。
茶店のまわりを、権十郎は行きつもどりつした。
昨夜から急に気温があがり、権十郎は、寝苦しい一夜をすごした。
今日も、どんよりと曇っているが、急ぎ足に此処（ここ）まで、一気に歩いて来た権十郎の若い躰

には汗がにじんでいた。
あたりには人の気配もなく、東林の門口に紅（あか）い花が咲いているのに気づいたとき、我にもなく権十郎の胸がときめいた。
椿（つばき）の花である。
その紅（べに）椿の花片が、権十郎に何を想わせたのであろう……。
数日前に、お梶に案内をされて自分が入って行った脇出入り口の、閉ざされた戸の前へ権十郎は立ちつくしている。
（留守なのだ……）
戸へのばしかけた手を、引きこめた。
茶店を休業しているからには、何かの用事があって、他行中（たぎょう）にちがいないとおもった。
それでも権十郎は、尚（なお）も立ち去りかねている様子だ。
だが、ついに……。
ふといためいきを吐くや、戸口の前から身を返そうとした権十郎が、ぎくりと立ちすくむかたちになったものである。
何と、脇出入り口の戸が、音もなく三寸ほど、内側から開いたのだ。
その瞬間、権十郎は、わが眼をうたぐったが、まさに、戸は内側から開き、その隙間から人の眼が覗（のぞ）いた。
（あ……）

さらに、戸の隙間がひろげられた。
戸の内側の、ほの暗い空間に、白い顔が浮きあがり、権十郎へ笑いかけてきた。
お梶であった。
（ゆ、夢ではないのか……）
茫然と立ちすくんでいる徳山権十郎の目の前で、戸が、さらに押しひろげられた。
お梶があらわれ、権十郎の手を取り、中へ引き入れた。
脇出入り口の戸が閉ざされた。
これを、木蔭から密かに窺(うかが)っていた尾張屋の万平は目をみはり、息をのんだ。
（こりゃ、いったい、どういうことなのやろか……?）
である。
東林の中では、戸を閉め、横猿(よこざる)を押して戸締りをしたお梶が権十郎の前へ立った。
お梶の躰からただよう馥郁(ふくいく)とした香りに、権十郎は包まれている。
女の白い顔が、わずかに、こちらを見上げてい、その呼吸(いき)がはっきりとつたわってくる。
「たれも、おりませぬぞえ」
と、お梶がささやいてきた。
「む……」
うなずくというかたちにもならず、微(かす)かに権十郎の顔がうごいた……ようであった。
「やっと……来て下されましたなあ……」

喘(あえ)ぐがごとく、お梶がいう。
「う……」
「此処まで、おいでなされて、なかなかにお入りなさらぬ……」
「し、知っておられたのか……」
「あい……」
うつむいたお梶が、権十郎の胸へ顔を押しつけるようにした。
豊満な女体の感触があきらかに、権十郎の胸へつたわってきた。
「お梶どの……」
「あい……」
うろたえながら、権十郎が、
「か、かまいませぬのか、此処へ来て……」
と、いった。
なんとも、まずい台詞(せりふ)ではないか。
お梶の返事はない。
そのかわりに、またしても権十郎の手を引き、先へ立った。
権十郎は、目が眩(くら)むおもいであった。
これまでに、女とのまじわりをもったというのは、十四歳の折に、侍女の鶴を文庫蔵で犯したこと以外には、一度もない。

柴田宗兵衛のむすめで、いまは徳山屋敷の老女をつとめている千との特殊な関係は、

「別のもの……」

と、しなくてはなるまい。

鶴のときのことは、いまも、よくおぼえていない。

得体の知れぬ激情と本能のおもむくままに、暴力を揮ったわけだが、むろん、その後では自分自身を嫌悪し、やりきれぬおもいにさいなまれた権十郎である。

そのときの、自分の躰への嫌悪は、取りも直さず、女という生きものへの嫌悪となる。

無我夢中で、何も彼も忘れようとして、剣術の修行ひとすじに打ち込んでいたこともあろうが、これまでに権十郎は、自分の性欲をもてあましたこともなかったといえよう。

若者は、ひたすらにおのれを没入させることができる対象をもっているかぎり、さして、性欲に悩むことはないものなのだ。

これこそ、若者の〔特権〕といってもよいだろう。

まして、権十郎のように、乳母の千との間に、幼少のうちから異常といってもよい肉感の交流があった若者にとっては、真の女体とのまじわりがなくとも、女のことを何も彼も知ったようなおもいにとらわれてしまい、

（女なぞ、ばかばかしいもの……）

おもいこみかねぬところがある。

それが、お梶に出合ったときから、

（このような女が、この世にいたものか……これが、まことの女というものなのであろう……）

権十郎は、たちまち〔男〕に目ざめた。

しかし、たしかに、お梶は美しかったけれども、男という男のすべてが、一目見たとたん、権十郎同様に魅了されたかどうか、それはうたがわしい。

のちになって、徳山権十郎は、こういっている。

「あのころの、人びとがいう美しい女というのとは、いささか違うていた……」

十六

そもそも、その当時の女の美しさというものは、細身の、腰のまわりの引きしまった躰つきで、目鼻だちもちんまりと整っているような、つまり権十郎にいわせると、

「人形のような……」

美しさが好まれたのである。

江戸時代も、初代将軍・家康のころから、二代秀忠・三代家光のあたりまでは、女たちが身にまとう衣裳も寛闊なものであって、むしろ、男の衣裳よりも躰を圧迫していなかった。

戦国の世には、婦人のちからを男が無視できなかった。

女も男同様に、身をもってはたらきぬかねばならなかったからである。

その名残りが、徳川幕府の天下統一成ったのちも濃厚に痕をとどめていた。

何しろ、天下を治める将軍とて、初代・家康のころは、寒中、足袋もはかずに日常をすごしており、足は皹にひび割れ、血がにじんでいたほどだというから、世の中の上から下までが質素な生活に徹していたのだ。

ゆえに、男も女も、先ず健康でなくてはならぬ。

したがって、健康に都合のよい衣裳を女も身にまとっていたことになる。

化粧品の種類も少なかったし、町家の女房などは、さして化粧を必要としなかったのだ。

婦人の躰も、見るからにすこやかな、乳房も腰も充分に脹り、ふくらんだのが、

「よい」

と、されたのである。

それが、元禄の世にいたって、豪勢華美な時代の到来となった。

将軍・徳川綱吉の政治の影響もあったろうが、何よりも、戦乱が絶えてより七十余年も経過し、この間、天下泰平の世が打ちつづいたのだから、当然、商業・工業が目ざましく発展し、経済の規模が大きくひろがり、それまでは人びとが必要としなかった、さまざまな商品が生まれ、むかしは夢にもおもわなかったような嗜好品が、

「氾濫する……」

ことになってきた。

農村や地方の町は別として、都会の人びとは、いきおい、贅沢となる。

男も女も、格別に強健な体力を必要とせぬ平和な世の中となった。

これは、太平洋戦争以後、三十年を経た現代の人びとにおもいをいたせば、たちどころにわかることだ。

現代女性は、自分が生み落した赤子に乳房をふくませようともせず、抱きもせず、背負いもせず、背負いながら家事にはたらくようなこともせず、多くの電化製品の助けを借りて日々を送っているわけだから、肉体のちからをあまり必要としない。

ちからのない肉体は、細く小さい。

たとえ背丈は高くとも、風浪ひとたび襲えば、たちまちに折れ曲がってしまうことになる。

こうしたわけで……。

〔東林〕の女主人お梶の美しさというものは、そのころにあって、

「特殊なもの……」

と、なりつつあった。

権十郎が、こころをひかれたのは、何よりも先ず、お梶の全身にみなぎっている生気である。

京の東林軒の先代未亡人といえば、女としても市中に名を知られたほどなのだから、身につけるものはもちろんのこと、まだ三十前の顔に薄化粧をほどこしていないはずはない。

もっともお梶は、若いころから、ほとんど化粧をしていなかったそうだ。

で、白粉や紅のたすけを借りることもない素肌の顔が露呈されているわけなのだが、天性の肌の白さに血の色が浮かぶときの生なましさは、お梶の健康のあらわれといってよい。

お梶が発散するかおりは、その躰のにおいと衣裳にたきこめてある香とが綯いまざったものであった。

くびすじは細いが、肩から腕へかけての肉置きなど、いかにもむっちりとして、大仰にいうならば、

「身にまとうているものから弾け出て来そうな……」

おもいがする。

ところで……。

徳山権十郎が、このような女に胸をさわがせたのは、そのときの権十郎自身がいささかも気づかぬことであったけれども、

（似ている……）

のである。

だれに似ているかというと、乳母の千の若いころに似ていないこともないのだ。

むろん、容貌の点において、千はお梶に一歩も二歩もゆずらなくてはなるまい。

しかし、若いころの千も、やはり精気にみちみちていた。

少年の権十郎の顔へ押しつけられてきた乳房の量感も、湿り気をおびて、しかもあたたかい肌身も、健康そのものの女しか所有できぬものであった。

ゆえに、権十郎がお梶にひきつけられたことは、女への、こうした潜在意識が、

「なきにしもあらず……」

だったのではあるまいか。

それにひきかえ、文庫蔵で犯した侍女の鶴の躰の、たよりなさはどうだ。

なるほど、乳房もふくらんでいたし、肌も白かったけれども、お梶や千にくらべると、

「味気もないほど……」

に、鶴の躰はまずしかった。

むかし、幼年のころ、寒夜に千が添い寝をしてくれ、

「今夜は寒うござりますなあ。千が、若様をあたためて進ぜましょう」

ささやいてきて、権十郎の脚を自分が太股で巻きしめてくれた、そのときの感触をいまもって忘れぬ。

幼時の記憶というものは、

「まことにもって、おそろしきもの……」

と、いわざるを得ない。

あたたかくて、ふとやかで、なめらかな弾力を秘めた千の太股……それにくらべて、権十郎がのしかかって行き、強引に左右へ押しひろげたときの、鶴の太股の細さはどうだ。

といって、あのとき十七歳だった鶴の肉体は、病弱でもなく、他のむすめにくらべて遜色があったわけでもない。

すでに人妻となった経験をもつ女体と、男の指もふれぬ十七のむすめの躰とのちがいなど、権十郎がわきまえているはずもない。

十七

この日、徳山権十郎が通された場所は、この前の、中庭に面した座敷ではない。
前の茶室めいた座敷も小さかったが、この座敷もせまい。
この家は、こうした小間のみなのであろう。
権十郎は、頭に血がのぼってい、薄暗い土間や小廊下をどう辿ったのか、よくおぼえていなかった。
意外に肉の厚い、しっとりと湿った、お梶の掌の感触に、ただもう身ぶるいをしていたのだ。
箱段というのは、側面が引き出しになっている階段で、京の町家にはこれが多い。
尾張屋にも、箱段がいくつもある。
その箱段をあがって来たおぼえがあるので、
（ここは、二階座敷なのであろう……）
と、権十郎はおもった。
床の間の、小さな花入れの紅椿だけが、権十郎の目に入った。
外は曇っているにせよ、まるで夕闇がたちこめているかのように薄暗い小間なのである。
坐った権十郎の背後で、衣ずれの音が廊下へ消えて行き、すぐにまた、もどって来た。
お梶は、権十郎の背へ寄り添い、
「すぐに、もどってまいりまする」

と、ささやいた。
女の唇が耳のあたりをかすめ、熱い息吹きが感じられた。
権十郎は、だまってうなずくのみだ。
やがて、お梶が酒の仕度をして、もどって来た。
真向いにではなく、権十郎の左脇へ坐ったお梶が、無言で酌をする。
権十郎が受けて、のむ。
お梶が盃を手にして、権十郎をうながすように見やる。
酌をしてもらいたいらしい。
権十郎が酌をする。
お梶が、のむ。
そのときの、お梶の白い喉もとが、権十郎には仰け反るように見えた。
一息に、お梶は盃の酒をのみほしたらしい。
おのれの心ノ臓の鼓動が聞こえるようで、お梶の盃へ酌をする権十郎の手が、わなわなとふるえていた。
江戸にいたころの権十郎を知っているものが、この、可憐ともいうべき姿を見たら、何とおもうであろうか……。
お梶は、たてつづけに盃を重ね、そのたびに権十郎が酌をした。
酌をすることが胸苦しくなり、堪えきれず、権十郎は自分の盃を手にして、お梶を見た。

お梶は権十郎を見据えるようにし、ゆるやかにかぶりを振り、またしても盃を出す。
仕方なく、酌をした。
お梶が、しずかに酒を口にふくんだかと見る間に擦り寄って来て、権十郎の膝へ腰を乗せるようなかたちとなった。
お梶の顔が近づいてきて、唇が権十郎のそれへ押しあてられた。
お梶の舌の先が、権十郎の口中へ入り込み、同時に、酒がながれ入ってきたのである。
ごくりと、権十郎の喉が鳴った。
まだ、夕暮れには間もあるというのに、座敷の中は、いよいよ暗くなっている。
口移しに権十郎へ酒をのませたあとも、お梶の唇がはなれぬ。
権十郎は、惑乱の極に達していた。
外で、何か、ひそやかな音が聞こえる。
顔をはなしたお梶は、権十郎の顎のあたりを軽く噛みしめ、おのれの昂ぶりに堪えかねたかのごとく、男の膝へ崩れ落ちて、
「雨が……」
と、いった。
「む……」
「京は、雨が多いところでござりましょう?」
「なれど、京の雨は風をともなわぬ。まことに……まことに、しずかな雨でござる」

途切れ途切れにいいながらも、権十郎の目は、お梶の襟足の白さに吸い寄せられていた。
腰まわりの量感が、人のものとはおもわれぬほどの迫力で、すぐ目の前にある。
(こ、これから、おれは、どうなるのだ……?)
そのとき、お梶がうごきはじめた。
お梶の手指が、うごきはじめた。
音が起った。
雨音ではない。
権十郎の袴の紐が、ほどける音であった。
お梶が、ほどいているのである。
「お梶どの……」
「あの……ゆるりと、なされませ」
袴が、権十郎の身からはなれた。
突然、権十郎がお梶を抱きすくめた。
「ああ……」
お梶の双腕が差しのばされ、ひしと、権十郎の頸を巻きしめてきた。
雨になってから、しばらくして、万平が尾張屋へもどり、すべてを告げるや、
「ふうむ……」

唸り声を発した源右衛門が、
「これ、万平」
「はい？」
「このことを、だれにも口外してはならぬぞ」
「はい。はい」
「これよりは、もはや、山口様の後を尾けるにはおよばぬ。よいな」
「はい」
「御苦労であったな」
と、尾張屋源右衛門が、紙に包んだ金を万平へわたした。
中味は、金一両であった。
主人が下男へやる〔こころづけ〕ともおもわれぬ金額である。
源右衛門は、それから所用があって外出をした。
町駕籠で帰って来たのは、夜更けであったが、女中のおきさが待ちうけていて、
「旦那さま。まだ、おもどりがないのでございます」
と、いうではないか。
「だれが、もどらぬ……？」
「あの、山口さまが……」
「何と……」

「何やら、お身に間ちがいでもあったのとちがいましょうか？」
「ま、よい」
源右衛門の顔に苦笑が浮いた。
立派な顔だちも、また言葉づかいも、徒の旅宿の主人とはちがう貫禄と品格をそなえている尾張屋源右衛門であった。
「かまわぬから、戸締りをして、もう、やすむがよい」
この夜……。
東海道を上りつつある柴田勝四郎と小沼治作は、すでに箱根を越え、遠州・掛川の城下の旅籠・松屋又右衛門方へ泊っていた。
掛川は、江戸から五十六里二十町。
掛川から京都までは六十八里余である。
「なあ、小沼……」
と、枕をならべて寝ている柴田勝四郎が、
「今度は、どうも、権十郎様を見つけ出すことができるような気がしているのだ、私は……」
「私も、さようにおもいます」
「大丈夫だ。きっと見つけ出せる」
「はい」

「だが、小沼……」
「何でございます?」
「権十郎様を見つけ出したとして……われらの申すことを、素直にお聞きいれになり、江戸へお帰り下さるだろうか?」
「…………」
「私は、それが案じられてならぬ。あの御気性ゆえ、殿様が御重態と聞かれても、果して江戸へおもどりになられようか、どうか……」
「…………」
「小沼。どうした?」
返事がないので勝四郎は半身を起し、小沼を見やった。
小沼治作は仰向いて寝たまま、天井を凝視していた。
「これ、小沼……」
「勝四郎様。私には、いささか、おもうところがございます。かならず若様を説きふせます」
断固として、小沼がいい切った。

十八

柴田勝四郎と小沼治作が江戸を出発し京都へ向ったのち、徳山重俊の容態が、さらに悪化した。

主治医の遊佐良仙も、
「これは……?」
と、くびをかしげている。
食欲は、まったく失せ、脈搏(みゃくはく)の様子もよくないらしい。
何よりも、当の重俊が、
(今度は、もはやいかぬ……)
と、おもいはじめたようだ。
重俊は、しきりに、
「田村を、よんでまいれ」
と、つきそっている侍女にいう。
しかし、重俊の腹心として暗躍をしていた家来・田村常助は邸内の自分の長屋へ閉じ込められ、きびしく監視されている。
すべては、用人・柴田宗兵衛の指図によるものであった。
同時に宗兵衛は、徳山重俊の亡妻・滝子の実家である神尾守親へはたらきかけた。
神尾家の用人・福田平太夫が、ちからをそえてくれたことはいうまでもない。
神尾五郎左衛門守親は、滝子の甥(おい)にあたる。
人柄は剛直で、徳山重俊を嫌いぬいているのだが、福田平太夫を通じて、柴田宗兵衛の切切たるうったえを聞き、

「なれば、ともかくも、徳山家へ出向いてつかわそう」
ついに、承知をしてくれた。
その日の午後、駕籠で徳山家へあらわれた五郎左衛門守親は、
「わざわざのお越し、かたじけなく存じまする」
出仰えて、平伏をした柴田宗兵衛へ、
「これ、宗兵衛……」
「はっ」
「よう聞けよ」
「はい……？」
「ともあれ、これより、徳山重俊殿を説得してみようが、そのことについては、すべてをわしにまかせてくれるであろうな？」
「申すまでもござりませぬ」
「なれど宗兵衛、もしやすると、これはその方の一命にかかわることに相なるやも知れぬぞ」
「はい」
「まかりまちがえば、徳山家を取り潰す覚悟でおれ」
「はっ……」
宗兵衛は、いささかも動じなかった。

神尾守親が、どのように主人を説得するのかを尋ねてみようともしなかった。
その、いかにもいさぎよい態度を看てとった神尾守親が、
「よし」
これも、決意を眉のあたりに見せて、強くうなずき、徳山重俊の病間へ入って行った。
主治医・遊佐良仙立ち合いの上での見舞いであるが、良仙は柴田宗兵衛の意を充分にふくんでいてくれようから、五郎左衛門守親が説得にかかる途中で、これを阻止することは、
(先ず、あるまい)
と、宗兵衛はおもった。
果して、神尾守親が病間へ入って来るのを見るや、徳山重俊が遊佐良仙へ、
「出て行ってもらうように……」
目顔でしめしたけれども、良仙は知らぬ顔をしている。
「突然に、まかり出でまいた。御病状はいかがでござる？」
いきなり、神尾守親がいった。
徳山重俊は苦にがしげにうなずいて見せ、目を閉じた。
「今日は五郎左衛門、御願いの儀あって参上つかまつった」
「…………」
「お見うけいたすところ、かなりの御重態でござるな」
重俊は目を閉じたままだが、怒りのために、口のあたりがふるえはじめた。

このような見舞い客など、あるものではない。

「よう、お聞き下され。御当家を出奔いたした権十郎が見つかりましてござる」

重俊が、おどろいて目をひらいた。

「およろこびなされ。京におりましたぞ」

「京に……」

「いま、柴田勝四郎が若党を従え、迎えにまいったそうでござる」

「う……」

信じられぬという顔つきになり、徳山重俊が遊佐良仙を見やった。

良仙は、にやりとして、

「それがしも先刻、たしかに用人どのよりうけたまわりました」

といった。

「ご、権十郎を、江戸へ、よびもどして、何とする……」

つぶやくように、重俊がいうのへ、五郎左衛門守親が押しかぶせるように、

「申すまでもないこと。明日にも御臨終あるとき、跡つぎの権十郎がおらぬでは困りまするぞ」

「あ……」

重俊は、喘（あえ）いだ。

良仙が擦り寄って、吸（すい）のみから薬をのませた。

徳山重俊も、あきらめかけていたようである。

腹心の田村常助が、いくらよんでも病間へあらわれぬのは、

（宗兵衛めが監禁したに相違ない……）

と、重俊にも察しがつく。

しかも、傍につきそっている主治医や、老女の千は、いずれも権十郎擁立派なのだ。

これでは、寝たきりの重俊が、どうすることもできぬではないか……。

しかも、病状はよろしくない。

日に日に、老い果てた自分の心身がおとろえて行くのを、重俊は、はっきりとさとった。

もとより重俊は愚鈍の老人ではない。いまこのときにあたって、徳山の家名の存続が、もっとも大事であることをわきまえている。

ただ、自分の血を分けた男子であるにかかわらず、権十郎を嫌いぬいたあまりに、溝口家の次男・伊織を養子に迎えようとしたのだ。

その交渉が、まとまりかけている。

溝口家の用人・西川勘兵衛と、自分の使者・田村常助との間で下工作がすすめられ、溝口又十郎も、ようやく納得しかけてくれているのだ。

溝口又十郎としては、自分の次男をよこすわけだから、その前に、権十郎の件を、きちんと、

「片づけてもらわねばならぬ」

というのが、第一の条件であった。

それは、徳山重俊も承知しており、溝口又十郎の承諾がありしだいに、幕閣へはたらきかけ、権十郎の廃嫡運動に取りかかるつもり……いや、すでに取りかかっていたのだ。

だが、自分の手足となり耳目となってはたらいてくれる田村常助が監禁されてしまったのでは、

（もはや、どうにもならぬ……）

のである。

柴田宗兵衛は、他の家来たちも一切病間へ近づけぬ。

また、老女の千は侍女たちを督励し、父・宗兵衛と共に、病間を女たちの手で取り仕きっている。

侍女たちは、すべて、権十郎擁立なのだから、徳山重俊が、いくら「田村をよべ」といいつけても、知らぬ顔をしているのだ。

女たちも、みな、

（殿さまのおいのちも、さほど長くは保たぬ）

と、おもいきわめ、嬉々として重俊の看病に立ちはたらいているのだから、たまったものではない。

溝口家の用人・西川勘兵衛が、一度だけ、

「御当家の田村常助殿に、お目にかかりたい」

と、訪ねて来たけれども、門内へ入れずに、柴田宗兵衛が、

「田村は先日、病死いたした。御用向きがあらば、私がうけたまわりましょう」

といったものだから、西川用人は蒼惶として引きあげて行った。

溝口家でも、徳山家に異常事態が起ったことは、およそ察知したろうが、だからといって強引に乗り込んで来るわけもない。

溝口家にも、弱味がある。

それは、歴とした跡つぎの権十郎を押しのけて、自分の家から養子に入れようと密かに交渉をつづけていた弱味であった。

十九

神尾五郎左衛門守親が、徳山重俊の病間から出て来たのは一刻ほど後である。

この間に、五郎左衛門守親は、徳山重俊を、ついに説きふせてしまった。

重俊も、いまは、すべてをあきらめたのであろうか……。

そればかりではない。

神尾守親は、

「権十郎に家督をさせる証拠……」

として、徳山家の家宝を、

「自分が預かっておきたい」

と、いい出て、これを徳山重俊に承諾させてしまったのだ。

その家宝とは、武蔵の国の住人・下原与五郎康重が鍛えた一尺二寸七分の脇差であった。

徳山家は、加賀の国の豪族・土岐氏の分れで、美濃の国の揖斐郡・徳之山谷一帯を治めていたが、慶長十一年（一六〇六年）、徳山直政の代に、徳川家康に帰属した。

その折、徳川初代将軍・家康から拝領したのが、康重の脇差である。

以来、徳山家は、幕府から旧邑をあたえられ、代々世襲して、旗本に列してきた。

徳川の旗本と一口にいっても、上から下まで三万に近い中で、徳山家は身分も知行も、どうやら、

「申し分のない……」

家柄といってよい。

徳山重俊にいわせるなら、その、

「名誉ある家柄……」

の、象徴というべきものが、神君（家康）から拝領した康重の脇差ということになる。

この脇差を、神尾守親へ預けたというのは、重俊も権十郎をもって家督をさせ、

（我家の安泰をはかるより、道はなし）

と、おもいきわめたからであろう。

この康重の脇差は大板目鍛えの優刀であって、刀身に〔南無妙法蓮華経〕の七字が彫ってある。

いずれにせよ、この日の神尾守親の気魄は凄まじいもので、気力がおとろえつくした徳山重俊は圧倒されてしまった。

五郎左衛門守親は、柴田宗兵衛に康重の脇差を運ばせ、

「たしかに、お預かり申す」

と、重俊にいった。

重俊は言葉もなく、弱々しげにうなずくのみであった。

見送りについて来た柴田宗兵衛へ、神尾守親がいった。

「この脇差を預かった上からは、この五郎左衛門も責任を負うことになる。わかっていような」

「ははっ……」

「もしも、重俊殿が他界なされ、尚も権十郎を探し出せぬとあっては、わしもその方も、徒事では相すまぬぞ」

「恐れ入りたてまつる」

「そのつもりで、しっかりとやれ」

「はっ……」

「うむ」

大きくうなずいた神尾守親が、急に笑い出して、

「なれど、今日は、まことに快かった。徳山重俊殿を、さんざんにやりこめることができた

ゆえ、な……」

「かたじけのうございまいた」

両手をついた柴田宗兵衛が、さすがにこのときは、男泣きに泣いた。

神尾守親が帰った後、宗兵衛は、すぐさま、一通の書状をしたためた。

養子の勝四郎と小沼治作は、まだ京都へ到着をしていないが、旅宿は、この前に小沼が泊った五条橋の東詰にある万屋(よろずや)新九郎方と決まっている。

柴田宗兵衛は、中小姓(ちゅうごしょう)をつとめている佐々木伝七をよびよせ、

「この手紙を、京へ向った勝四郎へ届けてくれい。途中で追いつかずとも、泊り先は知れてある」

「心得ました」

佐々木伝七は、かねてから柴田宗兵衛が信頼をよせている家来の一人であった。

手紙の内容は、今日の出来事のすべてを認(したた)めたものだ。

権十郎を探し出したとき、勝四郎と小沼の説得に対して、

「おれは嫌だ。二度と父上の許(もと)へは帰らぬ」

と、権十郎がいったときに、この手紙を、

「権十郎様のごらんに入れよ」

と、宗兵衛は書きしたためたのである。

佐々木伝七は、早くも翌朝に江戸を発(た)ち、京都へ向った。

柴田宗兵衛は、このような事態にそなえ、先の二人が京都へ出発するための手続きの際に、佐々木伝七の道中切手もととのえておいたのだ。

大身旗本の用人であるからには、これほどの用意がなくて、

「つとまるものではない」

のである。

「父上。ようございましたなあ……」

と、その夜、ひそかに柴田宗兵衛の長屋を訪れた千が、うれし泣きをしながら、

「これにて、大安心でございます」

「よろこぶには、早いわい」

「え……？」

「権十郎様が、江戸へおもどりになるまでは、いささかも気はゆるせぬ」

「はあ……」

千も、急に不安をおぼえはじめたらしい。

あの権十郎の激しい気性からすれば、むしろ、

（お帰りにはなるまい……）

とさえ、おもわれる。

「殿様の御様子は、いかがじゃ？」

「すやすやと、おねむりあそばしておいでに……」

「おかげんが、悪くなったのではあるまいな？」
「はい、それは大丈夫じゃと、遊佐先生が申しておられます」
「ならばよい。権十郎様御帰府の日までは、何ともして生きていただかねばならぬ」
「はい」
「尚も油断するな。もはや当屋敷には、田村常助や、以前の大野郁太郎のごとき奸物はおるまいとおもわれるが……なれど、千。御病間をまもるは老女たるお前の重い御役目じゃ。かまえて気をゆるすなよ」
「はい」
「さ、いつまでも此処にいてはならぬ。奥へもどれ。もどれ」

二十

いつの間にか、桜花も散ってしまった。
その京の桜花を、徳山権十郎は、
（ほとんど、わが目にとめていなかった……）
ようなおもいがしている。
あの日以来、権十郎は、お梶の茶店〔東林〕から滅多に外へ出ることもなく、お梶の女体に溺れきっていたのだ。
尾張屋へは、一度も帰らぬ。

「ええ、こうなれば、どうなとなれ」
であった。
いずれにせよ、尾張屋源右衛門には無断で京都をはなれ、放浪の旅へ出るところだったのである。
（女とは、女の躰というものは、こうしたものであったのか……）
目が眩むままに、お梶にいざなわれて過す時間は、権十郎にとって不思議な量感をともなっている。
（一刻も過ぎたか……）
と、おもっていたのに、それが、いつの間にか半日にもおよんでいるのだ。
夜も昼もなかった。
〔東林〕の二階の小間の障子に春の陽光が明るく射しているときなど、お梶は権十郎を抱きしめているうちに、一糸も絡わぬ姿となり、うす汗に光った肌身の、腋や陰の柔毛を存分に露呈させて、
「はじることもない……」
のである。
「権さま。こうなされて……」
とか、
「もそっと、腰を……」

とか、お梶がいざなうままに躰をうごかすうち、お梶の顔が権十郎のそれへ押しかぶさってきたり、重たげな乳房が、権十郎のおもいもかけぬ箇所へ押しつけられたりする。

そうかとおもうと、背骨の両側に白く肉置きのもりあがった、お梶の背中が眼前にゆらいでいる。

日毎夜毎に、お梶の肉体の秘奥を、わが五官に味わううち、女の躰というものが、これほど美しく、これほど自分という男の躰によろこびをあたえてくれるのかとおもうと、

（あれだけの長い歳月をかけ、必死に修行をした剣術などは、取るに足らぬ……）

ものに、おもえてくるほどであった。

「もっとも、女にも、さまざまあるゆえ……」

と、後年、徳山権十郎は深刻な微苦笑を洩らしている。

お梶の肌身は、隅から隅まで芳香をはなっていた。

「汗さえも甘やかであった……」

というのだ。

権十郎は子供のころ、乳母だった千の熱い肌身をおもうさま知らされていたわけだが、そうしたとき、

「若さま……若さま……」

喘ぎながら、おのが乳房を権十郎の顔へ押しつけたりする千の口から吐き出される呼吸は生ぐさくて、子供ごころにも、権十郎は閉口したものだ。

千の体臭は濃かったけれども、お梶のそれにくらべては、

「妙に埃くさい……」

のである。

「江戸と京の女のちがいよ」

権十郎は、お梶をなつかしむたびに、

「化粧の仕様がちがうのだ。お梶どのなどは、ほとんど白粉もつけず、紅もつけなんだが、肌身の隅ずみまで、よう手入れをしてあってな……それに、何と申すのか、京の女は、香料をつかうのじゃ。その香料にも、そりゃ、いろいろあってな」

たとえば、お梶が、

「権さま。唇吸うて……」

と、おのが唇をさしよせるとき、むろん、熱い吐息が権十郎の顔へ洩れてくるのだが、その吐息の甘く、芳しいことといったら、何と表現をしてよいか、

「わからぬほど……」

なのだ。

これはつまり、情事の最中の女の口臭は、一種特別なもので、これをふせぐための手段がある。

それは、たとえば〔金盞丸〕などという丸薬があって、これを口にふくむと口臭は全く消え、そのかわりに花の香りが口中からただよう。

一事が万事で、閨房の女体の魅力を高めるための、実におどろくべき品物が、京の都にはあるらしい。

ところで……。

京の町女房が、みな、お梶のように自分の躰の手入れをおこなっているかというと、そうではない。

このように、おのれの肌身を大切にあつかうのは、いうまでもなく、男を相手の生業をしている女たちなのである。

そうしたことを何故、茶問屋の女房だったお梶が身につけたのかというと、当時はわからなかったが、のちになって、

（それはみな、亡き亭主どのの仕込みであったのではないか……）

と、権十郎はおもいあたった。

すなわち、お梶の亡夫・東林軒の主・伊兵衛は、島原の遊里でそれと知られた……遊蕩児であったそうな。

伊兵衛は、

「おのが命をちぢめるまでに……」

打ち込んだ遊蕩の経験を、女房・お梶の肌身へまで、丹念に植えつけたのであろう。

権十郎が〔東林〕の二階へ滞留している間、階下の茶店は三日に一度ほどしか、客を入れなかったようだ。

お梶のむすめのお百合を背負い、老爺の孫助は、何処かへ出かけて行き、めったに顔を見せなかった。

それでも、三日に一度ほどは、お梶が店を開け、客をもてなした。

そうしたときのお梶は、

「身もちの堅い東林軒の後家……」

そのものであったという。

そうしたとき、権十郎は祇園から円山のあたりを、ぶらぶらと歩んだり、二階の小間で昼寝をむさぼったりしていたのである。

「いまにしておもえば、あのときこそ、おれの生涯の極楽であった……」

権十郎の述懐は、まことにもって切なげであったそうな。

そうしてまた、権十郎は、こうもいっている。

「おれが、あの若い年ごろに、お梶という女の、身も心も知ったことは……さようさ。おれの不幸であったともいえるのだ」

この巻は「おとこの秘図㈠襲撃」（昭和五十二年七月）、「おとこの秘図㈡京の春」（昭和五十二年八月）として新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

新潮文庫最新刊

熊谷徹著　住まなきゃわからないドイツ

理屈っぽくて合理的で知られるドイツ人。しかしその素顔は多彩なものだった！　ミュンヘン在住ジャーナリストの当世ドイツ事情。

六嶋由岐子著　ロンドン骨董街の人びと

欧州屈指の古美術商に職を得た著者が、人と美術品を巡るドラマを描きつつ、英国人気質を明らかにする。極上の自伝的エッセイ。

斎藤貴男著　梶原一騎伝

スポ根ドラマ、格闘技劇画の大ブームを巻き起こした天才漫画原作者の栄光と挫折。漫画ファン待望の名著が、ついに復刊・文庫化。

佐藤昭子著　決定版　私の田中角栄日記

田中角栄は金権政治家だったのか、それとも平民宰相なのか。最も信頼された秘書が日記を元に、元首相の素顔を綴った決定版回想録。

内田康夫著　皇女の霊柩

東京と木曾の殺人事件を結ぶ、悲劇の皇女和宮の柩。その発掘が呪いの封印を解いたのか。血に染まる木曾路に浅見光彦が謎を追う。

赤川次郎著　不幸、買います　—一億円もらったらII—

ある日あなたに、一億円をくれる人が現れたとしたら——。天使か悪魔か、大富豪と青年秘書の名コンビの活躍を描く、好評の第二弾！

新潮文庫最新刊

T・クランシー　S・ピチェニック　伏見威蕃訳　欧米掃滅（上・下）

ドイツでネオナチの暴動が頻発。ネット上には人種差別を煽るゲームが……邪悪な陰謀に挑むオプ・センター・チームの活躍第三弾！

S・ブラウン　吉澤康子訳　殺意は誰ゆえに（上・下）

殺人事件を追う孤独な検事の前に現れた謎の美女。一夜の甘美な情事は巧妙な罠だったのか？　愛と憎悪が渦巻くラヴ・サスペンス！

B・ドハティ　中川千尋訳　蛇の石（スネークストーン）　秘密の谷

養子として育った15歳のジェームズ。自分の誕生の秘密を強く知りたくなった彼は、蛇の形の小さな石をお守りに母親探しの旅に出る。

D・L・ロビンズ　村上和久訳　鼠たちの戦争（上・下）

戦火のなか、たがいの命を賭して競い合う独ソ最強の狙撃手二人……。史実に秘められた悲劇をみごとに描出した人間ドラマの傑作！

B・ネイピア　土屋晃訳　天空の劫罰（ごうばつ）（上・下）

人為的に軌道を変更された小惑星が合衆国に衝突する——。招集された天文学者は、異端とされた17世紀の稿本に最後の望みを託す。

K・チャペック　伴田良輔監訳　ダーシェンカ　小犬の生活

チャペック自筆のイラストと写真で、世界一いたずらな小犬のダーシェンカの毎日が生き生きとよみがえります。パラパラ漫画付き。

おとこの秘図(ひず)(上)

新潮文庫　い－16－16

昭和五十八年九月二十五日　発行
平成十三年三月二十日　三十八刷

著者　池波(いけなみ)正太郎(しょうたろう)

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社大進堂

ISBN4-10-115616-6 C0193